

京都大学蹴球部

創部七十周年記念誌

京都大学蹴球部 部歌

I 知るや友 知るや友

茲^{こゝ}落陽の水清く 正大の気の湧く所

命を秘めし大地の 我が影しるき誇をば

銀の小笛^{おびえ}のきらめきて たぎる血汐に胸燃ゆる

II いざや友 いざや友

輝く瞳に仰ぎ見る 紫こむる大比叡

不断の雲の色にだに 久遠の^{はえ}栄光を思うかな

あゝ秀麗の気に負いて 雄叫び立ちし我が集い

III 遥かなる 遥かなる

帰らぬ夢を顧みて 栄光と涙の^{あき}歴史の跡

淀むひまなき青春を 今宵かたみに宴して

覇業の^と鯨波のどよめけば 見よ満天の星ゆらぐ

GO KIU, GO KIU, GO KIU, GO KIU,

GO KIU, GO KIU, GO KIU, KI GO

京都大学蹴球部 部歌

作詞 溝口 治
作譜 林 典子
監修 朝比奈 隆



し る や と も し る や と も こ こ ら く よ う の み ず き よ く



せ い だ い の き の わ ー く ー と こ ろ い の ち を ひ め し お お づ ち の



わ が か げ し る き ほ こ り を ば ぎ ん の お ー ぶ え の き



ら め ー き て た ぎ る ち し お に む ー ね も ゆ ー る



Go ___ K I U Go ___ K I U Go ___ K I U Go ___ K I U



Go ___ K I U Go ___ K I U Go ___ K I U K I Go



我らが集いー京都大学蹴球部70周年記念試合

平成6年7月10日(日) 農学部グラウンド

6 安永 良	6 井沢 寛	6 川上英治	6 藤原 拓	6 樋谷 聡	6 岩田通明	6 酒井映浩	6 鎌田康治	5 豊島太朗	5 高山裕之	4 衣川 剛	3 武岡一満	4 角谷明臣	3 石田 隆	2 佐々木一隆	4 森 茂紀	4 梅田 亮
5 水野史規	58 安積欣志	4 西沢賢太郎	55 藤井慶治郎	6 杉田憲彦	53 吉村玄浩	6 高田理紀	52 藤原裕也	6 下山素成	51 田路厚洋	60 洲崎章弘	53 北原有機夫	49 広部康治	52 芝田健二	52 西田哲郎	39 井坪武彦	42 林 和俊
					50 荒木 茂	58 藤原徳久	57 谷村耕一	52 藤多英夫	57 香川尚史	35 大木岩根	38 岩城 元	59 広瀬憲嗣	57 丸山哲二	57 山本達志	57 中谷充宏	56 水倉泰治
							58 高嶋章行	53 中村英一	58 桑江 茂	51 和田 伸	52 田中徹也	51 永井利明	53 宮本 彰	49 久松啓次	46 鈴木俊郎	37 東川 昇



5 田中敏之	5 宮下正弘	3 松下直幹	2 浜本勝弘	1 伊勢昌司	1 齊藤義行	4 波辺雅彦	63 安藤正史	2 浅井田康浩	63 末永敦康	3 藪田尚志	62 土岐忠文	1 島 正樹	61 村田伸治	4 列目
30 広野好彦	40 小田晋作	31 木村 博	25 深山莊二郎	29 平岡昌彦	19 竹山幹夫	25 恒藤 武	16 今井 薫	28 長井 茂	25 岡本彰郎	30 武居誠之	39 影山孝夫	2 幸 康一郎		3 列目
47 安岡 健	41 真田早敏	36 塩路正信	38 中村 壮	46 前田順也	40 倉内 実	47 森岡繁男	38 根本紀夫	40 原田圭吾	1 前田 洋	61 成瀬英治				2 列目
38 児玉利恒	32 長井 博	35 浅川皓司	39 留岡 寛	37 清水太三郎	39 川野眞治	37 小林一三	45 久下雅裕	39 大家暁雄	62 加藤晋央	59 堀尾知三	57 山田昌弘			1 列目

氏名の上の数字は卒業年次
 数字1ケタ……平成 数字2ケタ……昭和

目次

京都大学蹴球部部歌	
(歌詞)	2
(楽譜)	3
我がが集いー京都大学蹴球部70周年記念試合 平成6年7月10日	4

目次	7
----	---

I. 挨拶と祝辞

創部70周年を迎えて	山口 興一	京都大学蹴球部OBクラブ会長	16
不易のスポーツマンシップ	井村 裕夫	京都大学総長	18
知・徳・体の蹴球部	宮崎 昭	京都大学体育会会長	19
先輩たちの活力の再現を	藤田 静夫	(財)日本サッカー協会顧問	20
両校サッカー部の益々の発展を	南 忠夫	東京大学ア式蹴球部部長	21
常に新しい歴史を	田中 渥夫	京都大学蹴球部部長	22

II. 歴代部長は語る

歴代部長系譜		23	
創立70周年に寄せて	竹山 幹夫	第5代蹴球部長 (昭和40～58年度)	24
11年ぶりの1部復帰	武居 有恒	第6代蹴球部長 (昭和59～平成元年度)	25
サッカー部とともに35年	根本 紀夫	第7代蹴球部長 (平成2～5年度)	26

III. 歴代監督は語る

歴代監督系譜		33	
安居 律先輩を訪ねて		昭和24年度監督、昭和27～33年度総監督	34
余録 三地域対抗戦のこと			37
腹が減っては試合に勝てぬ	唐原 友三郎	昭和27～33年度監督	38
戦後の最盛期	石光 顕吾	昭和39～40年度監督	39
海外勤務のため監督在勤一年の弁	若井 尚	昭和41年度監督	40
基本練習に時間を	本田 見吉郎	昭和42年度監督	40
悔いのない部生活を	恒藤 武	昭和43～54年度監督	41
余録 伝統を守り育てる心	恒藤 武		44
13年間を振り返って	長井 博	昭和55年度～平成4年度監督 平成5年度～ 総監督	45
コーチングスクールへの派遣を	小田 晋作	平成5～8年度監督	51
戦う若武者頭脳集団よ、翔け!	久松 啓次	平成9年度～ 監督	52
4F Bと攻めの一つの武器	瀬戸 進	昭和36～42年度コーチ	53

IV. 外から見た京大サッカー

日本しかやれないサッカーの創出を！

西本 晃二 前東京大学ア式蹴球部部长 64

定期戦を通して見た京大サッカー

古川 克巳 同志社大学体育会サッカー部監督 65

宿敵京大蹴球部

熊谷 貞俊 大阪大学サッカー部部长 66

京大サッカー部ますますのご発展を！

上田 亮三郎 大阪商業大学サッカー部監督 67

基本を忠実にやることのできるチーム

阿部 洋夫 関西学院大学サッカー部監督 67

個性派ぞろいの、野武士集団

大歳 和法 (旧姓 岡田)

大阪体育大学サッカー部OB

元関西学生サッカー連盟幹事長 68

ますますの隆盛と健闘を祈る

市口 順亮 京都大学ラグビー部監督 69

V. 我々が集い

1. 朝比奈 隆先輩直撃インタビュー 72

余録 朝比奈 隆先輩と山口興一OBクラブ会長のこと 76

2. 創部から昭和20年度までの足跡 — 概説 77

余録 山口興一OBクラブ会長による「京大蹴球部70年の足跡」 83

3. OBの手記、各年度年代記(*)

現役の皆様にご挨拶

森 正夫 昭和12年度主将 84

「花園」でのゴール

横山 慶一 昭和18年卒業 85

*戦中派の思い出

貫戸 幸夫 昭和19年卒業 85

特別寄稿 幽界でのサッカー

浦松 史郎 三洋証券会長 87

*戦後サッカー部の再出発

向井 清之 昭和21年9月卒業 88

敗戦後のサッカー部の思い出

松山 宏 昭和22年卒業 90

*戦前戦後の事

多々 頼志 昭和22年度主将 90

終戦直後の京大での私の球歴

酒井 重通 昭和23年卒業 91

思い出のゴールゲット

藤本 典秀 昭和23年卒業 92

*昭和20年代前半の時代背景と思い出

恒藤 武 昭和23年度主将 92

戦後の初合宿

岡本 彰郎 昭和25年卒業 94

*70分の3の回顧録

小山 啓二 昭和25年度主将 94

あの頃のこと

河村 篤彦 昭和27年卒業 100

*旧制から新制へ — 1粒の麦 —

近江 達 昭和27年度主将 101

*苦しかった昭和28年度

大羽 夔 昭和28年度主将 103

*体育会の本旨は知育・体育の両立

武居 誠之 昭和29年度主務 104

一言いわせてください

大友 満 昭和30年卒業 105

思い出の二つの傷あと

松尾 徹朗 昭和30年度主将 105

*志を高く持ち輝かしい思い出を

須藤 一夫 昭和30年度副将 105

忘れ得ぬ「ゴオオール」

木村 博 昭和31年卒業 107

* 学制改革の影響とI部復帰への橋渡しの時代	長井 博	昭和31年度主将	107
70周年記念試合第一戦の第1号ゴール	長井 博		109
サッカー部生活4年間の思い出	宮本 敏 継 (旧姓 日比)	昭和32年卒業	109
* 蹴球部に情熱を傾けて	若井 尚	昭和32年度主将	110
* 幸せの日々	今永 俊 明	昭和33年度主将	111
迷マネジャー	川越 信 哉	昭和34年卒業	112
* 反省の弁	大木 岩 根	昭和34年度主将	113
サッカー部の仲間は大切な宝	市山 新	昭和35年卒業	114
* 入替戦の王者	塩路 正 信	昭和35年度主将	114
たとえ痴呆症になっても忘れない“G O K I U”	平尾 敏 朗	昭和36年卒業	115
* 満天の星仰ぐ	清水 太三郎	昭和36年度主将	116
茫漠たる記憶 スナップ写真のような思い出	東川 昇	昭和37年卒業	117
忘れられない試合	浅野 洋	昭和37年度主将	117
* ポールコントロールをシンプルに	東 宣 孔	昭和37年度副将	118
忘れえぬ「ゴオオール」	市山 徹	昭和38年卒業	119
サッカー部の思い出	丸島 護	昭和38年卒業	120
蹴球、いや蹴足!?	岩城 元	昭和38年卒業	120
娘は“J”のサポーター	中村 壮	昭和38年卒業	121
* 「大荒れの日曜日」「京大、関学を降す」	時森 日出二	昭和38年度主将	121
俺には年齢はいらない	影山 孝 夫	昭和39年卒業	122
I部リーグ3位の年の思い出	川野 眞 治	昭和39年卒業	123
忘れられないゴール	川野 眞 治		123
今でもひきずる“くやしい”	難波 寿太郎	昭和39年卒業	124
舞台裏から	留岡 寛	昭和39年卒業	124
* 京大独自の戦術の確立	唐津 徹 男	昭和39年度主将	128
忘れ得ぬゴール	唐津 徹 男		129
思い出のゴール	小田 晋 作	昭和40年卒業	129
I部リーグ4年連続3位	伊藤 庸 夫	昭和40年度主将	130
一言いいたい	伊藤 庸 夫		131
* 考えるサッカーを	今井 哲 男	昭和41年度主将	131
* 徹底して「これしかない」をやり通す	林 和 俊	昭和41年度副将	132
忘れえぬゴオオール	林 和 俊		133
部の名残	高橋 靖 典	昭和42年卒業	134
サッカー部で学んだこと	中野 昭 一	昭和42年卒業	134
30年前の思い出-I部リーグと学連委員長-	野田 雅 昭	昭和42年卒業	135
思い出-憧れの京大サッカー部に入部して-	塚本 大 三	昭和42年度主将	136
* 8年間維持した一部から二部に落ちて	梅田 幹 雄	昭和43年卒業	137
私とサッカー-上海東華足球队元老隊の外人隊員は私一人-	青木 功 一	昭和43年卒業	138
* 当時の日記より	藤田 正 次	昭和43年度主将	140
芝生	上本 憲 嗣	昭和44年卒業	141

*与えられた条件下で最高を目指す	鈴木俊郎	昭和44年度主将	141
がんばれJリーガー	久下雅裕	昭和45年卒業	142
挫けなかったからこそ	福島正和	昭和45年卒業	143
*4年ぶりの1部復帰	二谷則彦	昭和45年度主将	143
ランニングコースと叡電跨線橋	丹羽彰	昭和46年卒業	145
*まだ5分あるぞ	安岡健	昭和46年度主将	145
忘れられない大商大戦	相京重信	昭和47年卒業	146
ゴールの周辺-'70秋2部リーグ 対京都工大戦-棚井和義	棚井和義	昭和47年卒業	147
*ベストを尽くす	山田哲治	昭和47年度主将	149
*サッカー議論に明け暮れた4年間	久松啓次(旧姓 森)	昭和48年度主将	150
*守備力強化は絶対命題	荒木茂	昭和50年卒業	151
*昭和50年度年間実施スケジュール	永井利明	昭和50年度主将	152
*得点力と1部リーグへのこだわり	梅田邦夫	昭和51年度主将	155
*常に1部を目指せ!	田中徹也	昭和51年度副将	156
忘れられない勝利「幻の全国大会出場」	田中徹也		158
体で覚えたスライディング	西田哲郎	昭和52年卒業	158
身の程知らずの評論家	藤多英夫	昭和52年卒業	159
*夕日は涙の向こうに	吉村玄浩	昭和52年度主務	160
もう一つの昭和52年度年代記	中村英一	昭和53年卒業	161
*やっぱり1部リーグがええで!	田尻守	昭和53年度副将	164
戦術の成功と戦略の失敗	石原孝	昭和54年卒業	165
*決め手としてのインテリジェンスを	藤井慶治郎	昭和54年度主将	165
忘れ得ぬゴール	西浦優	昭和55年卒業	166
*メンバーに合ったシステム・戦略と意識の高揚	大石雄一	昭和55年度主将	166
現役諸君に対する私のアドバイス	安達智美	昭和56年卒業	168
1981年卒業同期紹介	山下和久	昭和56年卒業	169
恐怖の宇治合宿	須山千秋	昭和56年卒業	170
「アホー」	水倉泰治	昭和56年卒業	171
*理想と現実の狭間	谷村耕一	昭和56年度主将	171
4年間のプレーの思い出	谷村耕一		172
4回生時代の思い出	丸山哲二	昭和57年卒業	174
私の忘れられないゴール	山本達志	昭和57年卒業	175
*反省から得た教訓	藤原徳久	昭和57年度主将	175
4年間の思い出	遠藤健夫	昭和58年卒業	176
京大蹴球部の4年間	桑江茂	昭和58年卒業	177
初ゴールの思い出	堀川健一	昭和58年卒業	178
現役時代の反省	野口哲史	昭和58年卒業	179
*2部ブロック優勝と1部への壁	小村稔郎	昭和58年度主将	180
京都大学の夕焼けの中で	広瀬憲嗣	昭和59年卒業	181
*再び1部への厚い壁	根岸正人	昭和59年度主将	181
*やるだけやった2年連続入替戦出場	瀧下靖春	昭和59年度主務	182

東大戦の思い出	山田 実	昭和60年卒業	183
大学4年目の初得点	洲崎 章弘	昭和60年卒業	184
京都大学サッカー部に思うこと	木下 政人	昭和60年卒業	184
*眠れない1年	村田 伸治	昭和60年度主将	185
卒業10年後	成瀬 英治	昭和61年卒業	186
*次年度以降に向けたチームづくり	加藤 晋央	昭和61年度主将	187
近況報告—現在のサッカーとの関わり—	中村 陽介	昭和62年卒業	188
*転機、3部転落と松本郁夫氏の講演会	河原崎 隆一郎	昭和62年度主将	189
甦れ、われらが29ers!!	安藤 正史	昭和63年卒業	190
明るく楽しくそして1部定着を	末永 敦康	昭和63年卒業	191
*3部から1部への道程	前田 洋	昭和63年度主将	192
「何をするか」より「如何にするか」	伊勢 昌司	平成元年卒業	193
「いいプレー」の追求を	大目 裕千	平成元年卒業	194
私のサッカー人生の中間まとめ	島 正樹	平成元年卒業	195
*全員一丸、11年振り1部復帰	佐々木 一隆	平成元年度主将	196
忘れられないPK	佐藤 克文	平成2年卒業	197
一部復帰の年のチームづくりに取り組んで	阪下 昭二郎	平成2年卒業	198
相手のオウンゴールとPKを誘って1部昇格	中小路 徹	平成2年卒業	199
*1部で通用するチームづくり	前田 敦	平成2年度主将	200
忘れ得ぬゴール	石田 隆	平成3年卒業	202
*風通しの良いチームづくりと成果	衣川 剛	平成3年度主将	203
Field of Dreams	松本 浩	平成4年卒業	204
大学初ゴール	森 茂紀	平成4年卒業	205
想い出の東京遠征	西澤 賢太郎	平成4年卒業	205
*「1部リーグ復帰」の目標を掲げて	行方 一也	平成4年度副将	207
東大定期戦の思い出	宮下 正弘	平成5年卒業	208
濃紺の思い出	木村 崇博	平成5年卒業	208
*春も秋も阪南大と死闘	岩田 通明	平成5年度主将	210
我々のサッカーを変えたビデオミーティング	安永 良	平成6年卒業	211
サッカーと仕事と	吉田 和洋	平成6年卒業	212
対立命館大入替戦での1点	高田 理紀	平成6年卒業	213
*我々の代を教訓に	林 高弘	平成6年度主将	214
私たちの代は個性派揃い	林 高弘		215
*100パーセントの力を出すために	加藤 寛	平成7年度主将	216

VI. 活躍するOB達

正和会のこと	小山 啓二	昭和25年度主将	218
地方に生きて	渋谷 亮治	昭和27年卒業	219
回顧からパイオニアへ	近江 達	昭和27年度主将	220
石原守一氏の論文「Information Theory in Soccer」の紹介			222
	長井 博	昭和31年度主将	

海外から見た京大サッカー	伊藤庸夫 昭和40年度主将	224
竹内 至著「日本蹴球外史」の紹介		225
京大OBチームの発足（1982年4月）	田中徹也 昭和52年卒業	226
大文字杯に乾杯!!	高嶋章行 昭和58年卒業	227
29ersと京大OBチーム	島正樹 平成元年卒業	228
余録 生涯現役の竹山先生		229
VII. 支えてくれた人々		
グラウンド管理入氏江喜久子さん小野美智子さんに聞く		232
わが青春のサッカー部 山本睦子 初代女子マネジャー		236
夏の宇治合宿 田中明美（旧姓山本） 昭和53～55年度女子マネジャー		237
たくさんの感動を与えてくれた京大サッカー部	大野知子 昭和63～平成3年度女子マネジャー	238
酒場にて 奥田寿一		239
VIII. 京都大学蹴球部部歌のこと		
部歌が出来た経緯と散逸した楽譜の再現を求めて		242
IX. アンケートからみたOBの期待		
アンケートの結果		246
アンケート結果を読む	留岡寛 昭和39年卒業	250
X. 公式戦等主要戦績記録		
256		
XI. 新聞記事、「大社サッカー」寄稿文より		
京大覇権を握る	S.7.11.28.大阪毎日新聞	286
東西学生蹴球リーグ戦争覇	S.8.11.27.大阪毎日新聞	287
京大遂に優勝	S.9.11.26.大阪毎日新聞	288
京大蹴球部OB一行 38年ぶりに合宿	「大社サッカー」第3号寄稿文転載	289
40年前の合宿	恒藤武 昭和23年度主将	289
思い出の「日の出館」	河村篤彦 昭和27年卒業	290
過ぎし青春を偲んで	岡本彰郎 昭和25年卒業	291
京大合宿思い出の大社を訪ねて	片山栄三 昭和28年卒業	291
京大は同大を倒し一勝	S.37.11.12.新聞記事	292
京大、みごと関学倒す	S.38.11.18.京都新聞記事	293
京大、大体大に惜敗	S.51.5.31.新聞記事	293
関学を破り京大3位	S.51.6.7.新聞記事	294
京大イレブン快進撃の秘密	S.58.10.18.新大阪新聞記事	294
60周年記念試合	S.59.4.9.新聞記事	295
京大、11年ぶりの一部昇格	H.1.11.16.毎日新聞記事	296
京大が12年ぶり白星（平成2年秋季リーグ 朝日新聞記事）		297

		13
わずか1年京大転落	(平成2年秋季リーグ 朝日新聞記事)	298
XII. 京都大学蹴球部OBクラブ規約とOBクラブ会費および後援基金規定		
OBクラブ規約		300
OBクラブ会費および後援基金規定		302
XIII. 70周年記念行事あれこれ		
祝賀会と紅白試合のことなど	恒藤 武	306
記念植樹		308
編集後記		310

表紙題字 留岡 寛

I. 挨拶と祝辞

創部70周年を迎えて

京都大学蹴球部OBクラブ

会長 山口 興一



京都大学蹴球部は大正14年5月に創設され、平成7年5月に創部満70周年を迎えました。

京都大学蹴球部の歴史の中で、創部満50周年は昭和50年でありましたが、数え年の50歳に当たる昭和49年5月に京大楽友会館において記念祝賀会が開催され、併せて記念諸事業の一つとして昭和52年4月に京都大学蹴球部50年史が刊行されました。

以来20年、創部70周年の節目の年を迎え、来し方を顧み、将来のさらなる発展の契機とするために、創部70周年記念事業を行うことにいたしました。即ち、平成6年7月9日(土)に、京大会館において70周年記念祝賀会を開催し、翌7月10日(日)には農学部グラウンドにおいて、OBおよび現役の多数の参加を得て、記念試合を挙行いたしました。さらに平成7年5月6日(土)、農学部グラウンド構内に記念植樹を行いました。

そして、残るもう一つの記念事業が、この京都大学蹴球部70年史『創部70周年記念誌』の刊行でありまして、当初は創部満70周年に当たる平成7年度中の刊行を予定しておりました。しかし、平成7年1月17日の阪神淡路大震災により、一年有余にわたって編集活動の中断を余儀なくされたのでありますが、今般ここに、京都大学蹴球部70年史を刊行することが出来ますことは、誠に同慶の至りであります。

顧みますと、大正も終わりの14年より昭和年代64年を経て、平成7年に至る70年の間、時には比較的静穏な年月もあったのですが、太平洋戦争と進駐軍による占領時代を含めた昭和20年の前後それぞれ数年間は筆舌を絶する酷しい時代でありました。我々日本人はそれぞれに時代の波に巻き込まれ、極限のうちにやっと生き延びた人々も多数あったであります。明治生まれの筆者にとっては“よくぞここまで生きてきたもの”という感慨のみが入っております。

かくして戦後50年を経た今日、京都大学が昔日にも増して健在であることは何よりも喜ばしいことであり、心からの祝意を捧げるものであります。蹴球部も戦前のような強いチームとは言えなくなって居りますが、創部70周年を迎えて、尚それなりの健闘を続けて居りますことは誠にありがたいことと存じて居ります。

これも偏に京都大学ご当局と体育会のご後援の賜物であり、また、日本サッカー協会のご指導のお陰と存じ、共々に厚く御礼申し上げます。また、部創設当初から関係の深い東京大学ア式蹴球部を始め、関西学生サッカー連盟および京都学生サッカー連盟、ならびに同加盟諸校のサッカー部、さらに定期戦を行っている東京大学、同志社大学、大阪大学などの各サッカー部の、長年に亘るご友誼に対し、京都大学蹴球部OBクラブのメンバーおよび現役学生一同と共に心から御礼申し上げる次第であります。

さて、京都大学蹴球部のOBは現在約550人(内、死亡者120人)、これに現役を加えると約600人となります。そして、京都大学OBクラブは現役チームの活動があってこそそのOBクラブであります。つきましては、この機会にこの紙面を借りて、現役諸君に日ごろ私が思い感じているところを申し述べたいと存じます。

京都大学在学の春秋は学生生活最後の期間で、学生諸君にとっては将来を託する専門的

な学問を身につけねばならぬ重要な歳月であります。学業と運動部との時間配分の問題は大学なるが故に無視できないテーマであります。しかし、具体的には学部によって状況が違おうし、また個人によっても事情が異なっていますので、各人の判断に任せるよりほかはありません。

大方のスポーツは勝^{かち}と負^{まけ}とによって成り立っています。スポーツをする以上、当面の目標は勝つことにあります。少なくともグラウンドに出ている時間は勝負の鬼になってほしい。勝つためには不屈の錬磨が必要であり、生やさしい遊びのための運動では何の役にも立たないものと思ひ定めてほしいのです。シーズンの始めに「実現の可能性ある目標」を定め、必死の練習を積み重ね、成功すればその次のシーズンに目標を一ランクずつ上げていってはどうでしょうか。

勝つために行う不断の錬磨は年を重ねることによって、目標としていた試合結果の勝の数とは関係なく、プレーヤー自身の風貌を逞しいものに変えていく。ベテランとは明朗なスポーツマンらしさと共に鍛え抜かれた強靱さが滲み出ている人達であります。

京都大学の卒業生を評して、「学問は出来るが、どことなく青白く神経質な感じのする人が多い」とは言われたくありません。「学問も出来るし、明るくて、鍛え抜かれた強靱さが滲み出ている若者達」と言われたいと思っているのです。

現在の京大サッカーの環境は往時とは異なり、現役諸君にとって関西学生サッカー1部リーグ復帰への壁は高いかも知れません。そして、今述べた私の思いについても、同じ考えで日々取り組んでくれていることも、聞き及んでいます。どうか今後ともこうした京都大学蹴球部の伝統を後進に引き継ぎ、地味でよい、しかし明朗にして健全なこの伝統をさらに発展させてくれることを期待しています。

以上、斯界ご関係の皆様にご感謝しつつ、京都大学蹴球部70年史を発行するに当たってのご挨拶といたします。

不易のスポーツマンシップ



京 都 大 学

総 長 井 村 裕 夫

京都大学サッカー部が、創部70周年を迎えられたことは大変おめでたいこと
であります。京都大学の歴史の三分の二以上を共有して今日まで歩いて来られ
たサッカー部の、苦難と栄光を振り返り、関係者の皆様に心からのお慶びを申し上げます。

スポーツにも「不易と流行」があるように思います。サッカーは比較的最近まで、地味
なスポーツでありました。わが国では第二次大戦後、何と言っても野球がスポーツの王者
であっただけに、サッカーの選手の努力は報われることが少なかったと思います。しかし
ここ数年の間に、状況は大きく変わりました。Jリーグが発足し、大変スピーディーな、
その意味では現代感覚に溢れたサッカーに、急速に人気が集まってきました。サッカーが
わが国においても、漸く陽の当たる場所へ出てきたと言えましょう。もちろん野球は依然
として、イチローの登場や野茂のアメリカでの活躍で、少し人気を回復しているように思
います。しかし価値観が多様化した現在、サッカーのファンはまだ増えるでありまし
ょう。京都大学サッカー部の人気が高まっていることも、こうした時代の流れの影響があ
るかも知れませんが、嬉しいことであります。

このようにスポーツにも流行がありますが、一方では不易の面も存在します。それはど
のようなスポーツであれ、いわゆるスポーツマンシップが大切であるということでありま
しょう。もしこれが失われたら、そのスポーツは衰退するでありましょう。とくに学生ス
ポーツでは、スポーツマンシップは何より重要であります。一生懸命練習し、そしてフェ
アに勝負することによって、学生スポーツは常に観戦する人に感動を呼び起こしてしま
したし、今後も呼び起こし続けるでありましょう。

70年の歴史を刻んで、京都大学サッカー部にも強固な伝統が生まれたことでありまし
ょう。大学のように、常に人が交代していく組織にあって何よりも大切なことは、この伝統
であります。それは短期間に作られるものではなく、人から人へと長い間に受け継がれて
育ってくるものでありましょう。この伝統の上に立って、京都大学サッカー部はまた新し
い歴史のページを開いてほしいと思います。

知・徳・体の蹴球部

京都大学体育会

会 長 宮 崎 昭



創部70周年、おめでとうございます。

70年も前に蹴り始められたボールが、その後、多くの部員によって、途絶えることなく追いつけられた伝統に、頭が下がる思いがいたします。

私の勤務する農学部は、一昨年に70周年を迎えました。グラウンドは当初、農作物の乾燥場として設けられたと聞いております。しかし、それはあくまでも表向きで、実は大学が文部省に対して、トリック作戦を立てて、初めからスポーツ施設を作る目的であったようです。

運動部の古いOBは、このグラウンドは乾草の匂いと、練習で落ちた若者の汗の匂いが染み付いている、と言われます。蹴球部のOBの汗はその中で、最も多いものだったと思います。

蹴球部は昔から厳しい練習でよく知られていました。私は学生時代、スキーのクロスカントリー種目の練習でシーズンオフは陸トレを続けていましたので、よくそれを目にしたものです。グラウンドで準備運動をした後で、大文字山や比叡山へ駆け上ってから、再びグラウンドに戻ると、蹴球部は相変わらず激しい練習をしておられたことを覚えています。過日、朝日新聞を読んでいますと、蹴球部OBの朝比奈 隆氏が運動部時代を語っておられました。同氏は、体力がついたのは、そこで鍛えられたためであるし、チームプレーをしていたことが後になって、オーケストラの指揮者として大いに役立ったと話しておられました。

このように、京都大学で学生スポーツに熱中した若者が、卒業後、バランス感覚をもった社会人に成長し、わが国の社会の発展を支えていることは大変嬉しいことです。今日、京都大学は、いくぶん知に片寄った学生を社会に送りがちですが、その中であって、知・徳・体に優れた学生をコンスタントに送り出しているのが、課外体育としての体育会運動部のよい点だと思います。それを長年続けてこられた蹴球部に対し、深く感謝申し上げます。

どうか今後も、新しい学生が多く入り、厳しい練習と試合で鍛えられ、体力と知力を備えた優れた人材として巣立って行く運動部として、蹴球部がますます発展することを祈念いたします。

先輩たちの活力の再現を



財団法人 日本サッカー協会

顧問 藤田 静夫

70年という長い歴史の中で、京都大学蹴球部は他に見ることの出来ない大きな足跡を残してまいりました。私はその立派な活躍ぶりを存じあげているだけに、これからの若い京大サッカー部の方々に何か参考になればと、一言申し上げてご祝辞に致したいと思います。

ご承知のように京都大学蹴球部は、昭和の初め頃、つまり全盛を誇った時は、部員は少なく練習時間も少なく、文科系の学生よりも殆どが理科系や工学系の学生で、実習が終わってグラウンドにやって来てもやっと二時間位の練習をするのが精一杯ではなかったかと思う。しかも、旧制高校時代には荒削りでプレーに力強さはあっても、柔らかい中にスピードのある華麗なプレーが出来る選手達ではなかったと思う。その中で、それぞれの能力を遺憾なく発揮する強力チームを創造し、全国に冠たる偉大な業績をあげたのであった。私の記憶の中で今も鮮明に残っている選手では、HBの赤川君、GKでは金沢君、DFでは持地君や栗原君（いずれも故人）など、容易に破れない強い守備陣を配していた。卒業後は、持地君を除いて、関西に残って関西の若いサッカー選手を育ててくれた。いずれにしても学生時代に練習に恵まれない中で、自分で研究し、自分の能力を大きく伸ばして、全国のトップに引き上げた意欲と能力は他の追随を許さないものを持っておった。今日の若い選手が学ばねばならないものがあつたと思う。最近は少しく低迷しているのではないかと私なりに心配している。苦しい時代に全国に覇を競ったあの先輩たちの活力を、何とか今日の京都大学蹴球部に再現してはくれないかと、私なりに念願して止まないのである。失言の点があれば年寄りの故をもってお許しいただきたい。

70年という素晴らしい伝統と輝かしい業績を持った京都大学蹴球部の大いなる躍進を祈って祝辞といたします。

両校サッカー部の益々の発展を

東京大学ア式蹴球部

部長 南 忠 夫



京都大学蹴球部が今年めでたく創立70周年を迎えられましたことに、東京大学ア式蹴球部を代表いたしまして心よりお慶び申し上げます。またこの度は、70年史を編纂されると伺い、重ねておめでたく、半ば羨ましい気持ちで刊行を心待ちにしております。と申しますのも、私はたまたま数年前から東京大学ア式蹴球部の部長を仰せつかっておりますが、蹴球部の歴史に関してはまったくの無知でして、自分が現役として在籍していた前後のこと以外は何も知りません。ちなみに我がア式蹴球部がいつ創設されたのかを、先日、大先輩のお一人に恐る恐るお尋ねしましたところ、「僕もよく知らないが、部室の入り口に飾ってあるシールに1918と書いてあるからその頃なんでしょう」と教えられ、赤面したものでした。これから換算すると、東大ア式蹴球部は今年で創立77年になるはずで、ここ20～30年の間に何らかの記念行事があってもおかしくないのですが、そのような記憶はまったくありません。京大蹴球部を見習って、次の機会には忘れずに何か有意義な記念行事を考えなくては、と思うこのごろです。

孝か不孝か、サッカーには七帝戦がなく、その代わりというわけでもないでしょうが、京都大学—東京大学定期戦が今年で既に46回を数えます。このように、京都大学と東京大学のサッカー部は、共に、日本でも最も古い伝統を持ち、長期にわたって特別な関係を築いて参りました。この定期戦は、年間の部活動の丁度折り返し点に当たる7月初めに設定されており、秋のリーグ戦に向けて格好の腕試しの場を提供すると共に、前半の練習成果を反省する絶好の機会となっております。最近のサッカーブームにより、リーグ戦における両校の地位は多少低迷傾向にあるものの、長い歴史を通じてその実力はほぼ拮抗していて、この点からしても大変有意義な定期戦であると思います。記念すべき第50回定期戦も間近に迫っており、さらには両校サッカー部の創立100周年も控えております。これまでの良き伝統に則り、互いに切磋琢磨して、さらに実りある部活動を展開しようではありませんか。

京都大学蹴球部の創立70周年をお祝いすると共に、これを機に両校サッカー部の益々の発展を祈念いたします。

常に新しい歴史を

京都大学蹴球部

部長 田中渥夫



京都大学蹴球部が創立70周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。この時期に当たって、多くの先達の汗と涙で支えられてきたこの伝統ある蹴球部の部長を務めさせていただきますことは、名誉であると同時に責任の重さをひしひしと感じる次第です。私自身といたしましては、この永い歴史の丁度中頃、わずかの期間ではありましたが部員として在籍し、農学部グラウンドで青春を謳歌したことを懐かしく思い出しております。また、東京や九州への遠征、夏の合宿など、先輩や同輩、さらに後輩と汗にまみれ、泥にまみれて過ごした日々は、何ものにも代え難い思い出となって残っています。

昨今、日本におきましてもサッカーは何かにつけ社会現象の一つとして捉えられ、その明暗が論じられております。多くの少年達がサッカー選手を夢見てボールを蹴っている姿を見るにつけ、学生サッカー界は常に明であってほしいと念じております。当然ながら、京都大学蹴球部は、一つの模範として、リーダーシップを発揮していかねばならないでしょう。

伝統とは、単に過去の歴史を引き継ぎそこに滞まるのではなく、その歴史に常に新しい何かを付け加えてゆくことを意味する、と言われております。京都大学蹴球部がさらに歴史を積み重ね、伝統の重みを増してゆくためには、現部員の努力が何よりも求められます。しかしながら、同時に、これら部員を支える大きな力も必要でしょう。諸先輩には、今までにもまして彼等を支えて下さいますようお願いしつつ、70年史に寄せるご挨拶とさせていただきます。

II. 歴代部長は語る

歴代部長系譜

- 初代蹴球部長 *末広重雄（大正14年度～ ）
- 第2代蹴球部長 *竹崎喜穂（ ～昭和8年度）
- 第3代蹴球部長 *原 隨園（昭和9年度～昭和31年度）
- 第4代蹴球部長 *木村康一（昭和32年度～昭和39年度）
- 第5代蹴球部長 竹山幹夫（昭和40年度～昭和58年度）
- 第6代蹴球部長 武居有恒（昭和59年度～平成元年度）
- 第7代蹴球部長 根本紀夫（平成2年度～平成5年度）
- 第8代蹴球部長 田中渥夫（平成6年度～ ）

（注）*印は物故者。

創立70周年に寄せて

第5代蹴球部長

竹山 幹夫



70周年記念の事業に際し、長井さん始め実行委員の方々誠にご苦勞に存じます。ついこの間行われた50周年が思い出され、京大サッカー部の組織がより盛大になりつつあると感慨を新たにいたします。

昭和40年に木村先生より部長を引き継ぎましたとき、監督は石光先輩、主将は伊藤君で、京大は1部上位に定着しておりました。これは4年ほど前からコーチを瀬戸さんをお願いしており大変熱心に部員を指導されたお陰でした。その後2部に落ちましたが、恒藤監督のとき、昭和45年に1年間根本先輩（第7代蹴球部長）に貴重な時間を割いてコーチをしていただき1部に昇格しました。現在のJリーグなどでもそうですが、選手の努力のほか監督・コーチの役割が大きいことが伺われます。

私どもの時代の学制は旧制度で、高校3年、大学3年、計6年在学いたします。中には7年8年と学生生活を楽しむものもおります。入学試験は高校に入るときは難しいのですが、大学は簡単に入れます。全国の高校からプレーヤーが集まるので、京大としては全国にファームチームを持っているようなものです。サッカーに限らず京大の各運動部は強く、社会人の活動の低調のせいもあり、現在のアメリカンフットボールのように、全国のトップレベルに行く部がかなりありました。現在は京大に入るのが難しく、これを越えて次々と入学して来る部員もせつかく上達したかと思うと4年間で去って行きます。もう少し大学の在学年数が長ければ良いのにと思います。

数年前からのサッカーブームでサッカーが盛んになり、少年チームでも野球よりサッカーの方が多くなっていると聞いております。Jリーグの影響もあり、高校も含めて全体にレベルが上がってきており、大学リーグでも今や1部から3部上位までそれほどの実力差がなくなっているように感じられます。大学の数も多くまさに群雄割拠というところですか。それだけ勝つためには現役部員を指導される方々の苦勞も大変なことと思います。

私は現在でもボールを蹴ってママさんチームなどと試合をしたりしております。京大在職中もボールを蹴りたくて出来るだけ合宿などに顔を出しましたので、多くの方の知遇を得ることが出来ました。お陰で私自身の生活を豊かにしていただき感謝しますとともに、京大サッカー部の長く輝かしい伝統が続くよう現役諸君のご健闘を期待いたします。

11年ぶりの1部復帰

第6代蹴球部長

武居有恒



昭和59年度から竹山先生の後を承けて6年間蹴球部長を務めたのですが、どうしてこういう羽目になったのか私自身よくわかりません。ただ結果的には、大変楽しい素晴らしい時間を与えられたことを、心から感謝しております。

学生時代の悪友に蹴球部の連中が多く、彼らにとってグラウンドへの行き帰りの時間つぶしには、私の研究室がちょうど格好の溜り場として利用されたり、また弟が蹴球部に居たりしたのが縁で、京大の教官に蹴球部OB不在の時期にその穴埋めを務めたということのようです。

したがってサッカーについてはずぶの素人で、部長が何をしたらよいのやら一向にわからぬまま、最初の挨拶で「中身はともかくツキだけには恵まれてきたという自信がありますので、実力の方は皆にお任せしてツキで成績を上げるということで貢献したいと思います」といったのは良かったのですが、途中でずいぶん冷汗三斗の思いもしました。

最初の年は、とくに目立った選手はいないがセットプレーに強く、クレバーなサッカーをするよくまとまったチームで、1部昇格とまではゆかなかったものの、とにかく善戦したという印象でした。次の年になると、前年に4回生が大量に抜けた穴が埋めきれず、勝運にも恵まれなまま思いもかけぬ3部転落の憂き目を見ることになってしまいました。OBの悪友から早速「お前サンもいよいよウンのツキか！」とからかわれる始末でした。3年目にはとにかく1年で3部を脱出し2部に復帰しましたが、部員諸君にとっては試練の年だったのでしょう、この2年間の苦労が1部復帰につながる原動力になったように思います。4年目になると力のある新人が育ってきたことと、新しいフォーメーションが身についてきたことなど、少し明るい見通しが出てきたように思いましたが、1部との入替戦に出場できるところまではゆきませんでした。5年目にはいよいよ京大の実力が高く評価されるようになり、同志社大学定期戦には27年ぶりで勝ち、東大定期戦にも引き分けて大いに意気上がったのですが、リーグ戦では勝運に恵まれず入替戦にも出場できませんでした。

いよいよ私にとって最後の6年目、実は前年ほどは期待していなかったのですが、リーグ戦では4勝2敗1分ながら辛うじてブロック2位にすぎりつき、順位決定戦で入替戦の出場権を手に入れるということになりました。入替戦の相手は1部6位の天理大で、まず第一戦は接戦の末0-0で引き分け、最後の第2戦が草津のヤンマー・ジーゼルのグラウンドで行われました。初めのうちは形勢ほぼ互角だったのですが、突進した我が方のFWと相手GKの際どい接触プレーになりホイッスル、やれやれキーパーチャージかとがっかりしたのですが、レフェリーの判定は何と当方のPK。これに成功して形勢は一気にこちらに傾き、さらに2点を加え結局3-1で押し切ってしまいました。この瞬間、薄暮の空を仰ぎまさに「満天の星ゆらぐ」思いで、勝利の喜びに浸りました。53年から11年ぶりの1部復帰も結局は滞在1年に終わりましたが、私にとっては大学紛争以来もやもやした気分を一気に吹っ切り、青春が再び甦ってきたような楽しさを味わわせていただいたことを心から喜んでおります。最後に、この間懇切なご指導をいただいた竹山先生・唐原先輩・恒藤兄・

長井監督ほか、多くのOBの方々ならびに当時の部員諸君に厚くお礼申し上げますと共に、京都大学蹴球部の今後ますますの発展を心からお祈り申し上げます。

サッカー部とともに35年

第7代蹴球部長

根本紀夫



私、昭和34年4月（1959）に京都大学サッカー部並びに工学部へ入学して以来、平成6年3月（1994）にやっと卒業のお許しを頂いた者です。現在九州大学にありますが、出身校はと聞かれたら、京大サッカー部卒と答えることにしております。

さて、この35年間、現役、若手OB兼コーチ手伝い、コーチ（助監督）、部長と色々やらせて頂きました。従って、京大サッカー部卒で私の名前を知らない奴はもぐりだとえらそうに言ったこともあります。但し、現役時代の私のあだ名‘マメダ’を本当の名前、多分「豆田」ぐらいに思っていた後輩もいたようなので、本名を知らなくとも当然のヨタ話です。（ヨタさんと言えば、1年後輩の名マネジャーで関西学生蹴球協会にその名を轟かせ、グラウンドでは他校の連中にペコペコ頭を下げさせた留岡氏のあだ名です）。今から、過去35年間を振り返ってみたいのですが、自慢話めいたものもどンドン出てくるかと存じます。編集者から好きなように書いて良いとの感触を得ておりますので、年に免じてお許しのほどお願いします。

最初に個人的サッカー歴から申しますと、現役の4年間、当時はWMフォーメーションだったので、一回生ではセンターフォワード、二回生で左のインナー、三回生で左のウイングと段々押し出され、四回生ではぐるっと廻って右のウイングとポジションが変わりました。中高校時代と合わせると、ゴールキーパーとセンターバック背が低いのでダメー以外はすべてのポジションをやり、ずいぶん楽しんだと同時にサッカーについていろいろと考えました。

高一の時は、体は小さい、ボールは遠くまで蹴れない、ボールコントロールはできないのがないづくしで、足の速いのだけが取り柄でした。「これではいかん、なんとかしなくちゃー」と考え、頭脳で勝負と、まずサッカールールブックを読み、ルールの範囲で何ができるか考えました。当時、キックオフは間接フリーキックであることなどを知っている人はほとんどいない状況でしたので、左のサイドバックをやってオフサイドトラップをかけると面白いように相手チームは引っかかったものです。またサッカーの教科書としては竹腰さんの本が唯一冊あっただけなので、デパートへ行き洋書を買ひこみ、サッカー技術・戦術を考えました。そのころは、プスカスの率いるハンガリーチームの4-2-4が最先端の戦術で、これが後に京大で使われます。個人技術では、フェイントモーションを自分なりに考察し、大学入学後もこの手を使って相手を抜くことを喜びとしたものです。しかしながらも、私のこの技術は一年上の先輩清水氏（ター坊）にはすぐ通じなくなりました。彼曰く、「お前のフェイントは結局もとに戻ってくる」でした。これから得られた教訓①は：(1)フェイントをかけながら、相手の重心が乗った足の方向へ抜いていく；(2)相手が必ず反応せざるを得ないほど、腰、膝、足、首を柔軟に俊敏かつ深くかけ、速い反転動作を行う；イギリスのアーセナルで右のウイングをつとめ、数々の国際試合に出場してサーにまでな

ったマシューズという名選手はたった一つのフェイント・モーションしかもたなかったのです。写真を見ると、腰から上の上半身は突っ立ったまま膝が地面につきそうになるほど大きく深く曲げており、とんでもない技術の持ち主でした。ペレもそうですね。(3)なにも考えず、浦和レッズの岡野のようにスピードで勝負の三つが、ボールをキープしてからやれることと結論したものです。

私が一年のとき、京大は一部昇格を果たし大変な勢いで春の京都リーグを勝ち、東大戦は負けましたが一部でも何とかなるといった感じでした。ちなみに東大戦ではOBの異常な熱気のおかげですっかりあがってしまい散々な出来でした。これに懲りて後年コーチとなったときには、試合の一週間前から強力なプレッシャーを選手にかけてその緊張に耐えられなくなりリラックスしてしまうようにしてから、試合に臨ませることにしました。

さて、一部リーグ戦の結果は結局最下位、入替戦に辛くも勝ち残留となります。夏合宿の前は自主トレで、現地集合の翌日の朝、OBの期待に任せたトレーニングにより半分がゲージ又は日射病で倒れる有り様でしたから、上の結果も後から考えるととってもな事でした。教訓②：まともなトレーニングをしていないチームが勝つことはない。二年生のときも、努力?の甲斐もなく同じ結果で終わりました。どうも練習方法が悪い、先を見通しチームをどう育てるかの一貫性がないとの結論がでできます。それではどうしたらよいかですが、当時も現在と同じく「京大サッカー部は現役部員の自主性を尊重する」の憲法があって、OBの助言は「聞くふりをする」という習慣でした。これではどうもならんと考えたのが新主将となったター坊で、突然、今年度からは教養部の体育の非常勤講師の瀬戸さんにコーチをお願いすることにしたとのお達しが来ました。ター坊は無口な振りをするのがじょうずな人で、このお達し以外は、「練習を休んでよいのは骨折と腸捻転だけ」の言葉+黙ってボールごと相手の足を蹴る行為で名キャプテンとなりました。当時の三回生は、次年度主将となるバーサル(浅野)、トン(東)以下10名程度がチームの主力であり、瀬戸さんのコーチングに猛烈に抵抗したものです。瀬戸さんも必死で、グラウンドが殺気だったのは当然でした。フォワードが弱く、ハーフは大きなキックのみができるものですから、ただ左右に大きく蹴って、走れ!走れ!の単純なサッカーでリーグ戦に臨んだものです。このときの夏の10日間の合宿はとんでもないもので今でも語り草です。朝5:30から朝飯を食べずに3時間、11:00からの第2部は教会の12時の鐘が鳴ってから試合、そして4~7時の第3部というやつで、最後は全員コーチに根負けして、良いチームになったまでは良かったのですが、最後の日の夕方から吉田山に登って打ち上げをやり、大騒ぎ・大暴れの揚げ句、酒を途中で買いに行った2~3人を除き——後で怒っていました——全員酔い潰れ、山からかつがれて合宿所に舞い戻り一晩明かすことになってしまいました。合宿の成果が零となってしまったのです。

そんなわけでこの年も最下位になりそうだったのですが、最終戦の大経大戦に浅野のファインゴールで1-0で勝ち4位となりました。この試合、チーム内での憎まれ役の私が負傷欠場していたのも良かったのですが、もっと大事なことは、チームが作戦を立て徹底的に実行し始めたのが勝因と思われます。相手チームのエース、ゲームメーカーに一人がついてボールを自由にコントロールさせないという単純なものです。実はもう少し狙いがありました。マークするのがガンちゃん(岩城)で、意図しなくて遅れて激しいタックルをするという恐怖技を持つため、審判が警告する前に、多分やられたほうが先に「カッカッ」とくるだろうと考えたわけです。この作戦はまんまと図に当たり、前半15分で相

手は警告を受け、その試合をつぶしたのです。同じ作戦はその前の関大戦では通用せず、エースの柴北は落ち着き払ってこう言ったそうです。「けったいなマークが付いているから、俺にボールを出すな。俺が動いた後の穴に入りこめばフリーポジションが簡単にできる」教訓③：相手チームと自分チームをよく比較して作戦はたてよ。

さて四年になると瀬戸コーチの方針はがらりと変わり、攻撃は最大の防御なりで、きちんと球を廻して攻めよということになりました。DFが素人集団であったため、最終的には3-4-3に近いフォーメーションになりましたが、結構上手く行って結局3位となりました。この年での記憶に残る良い試合は、小田氏（前監督）の決勝シュートによる4年振りの東大戦勝利、最悪の試合はリーグ戦での同志社大戦でした。このころ同志社と京大とは、S34、S35の2年連続の入替戦、京都リーグでの優勝争いなどで、宿敵のような関係となっており、とんでもない試合となりました。後半GKの榊が同志社FWと激突退場した後益々険悪な雰囲気へとエスカレートし、最後は相手ハーフが進路を手を使って妨害したので、あの温厚な東がポカリとやりまったくの喧嘩試合に終わりました。翌日の新聞ではずいぶんと叩かれたものです。個人的には最終の大経大戦で、自分達のほうが強いと自惚れていたため後半15分過ぎには0-2とリードされ敗色濃厚となりました。それでトンに「俺を真ん中に入れろ、何とかするから」といって無理矢理CFへとポジションチェンジしました。すると彼は何を思ったか、私のもとウイングポジションに入り、CFをやっていた唐津にインサイドをさせたのです。後で聞くと、我々の卒業後は彼が攻めのリーダーになるのだから、今のうちに鍛えておこうと考えたそうです——事実彼が後の2年間がんばります——この冷静さがゲームメーカーに要求される資質とだけいっておきます。さて、試合は2-2となり、後半44分トンからの縦パスをもらい相手DFをかわしてゴール間近まで迫り、角度がなかったのでゴールキーパーをひきつけてセンタリングをゴール前1メートルの伊藤（サンフレッチェ広島国際部長）にあげこれで逆転勝利と思った瞬間が、私にとって現役最後のシーンとなりました。後年、伊藤に聞いたら、てっきりシュートすると思いきやゴール前に詰めてこぼれ球をねらっていたそうで、まさかセンタリングでヘディングボールがくるとはとの、なつかしい思い出話となっております。

そんなこんなで4年間をサッカー+・・・等で青春を過ごし、学問をいっさいしなかったのが大学院に進学し、瀬戸コーチのお手伝いをするということになりました。肋骨を数本折っても復活してきた名DFのムリモリ（樋口）等四回生が大量に卒業し弱体化したチームの一部残留には、新しい戦法が必要なのはわかっていました。そこで東の提案、「DFには人が残っているし、守りの4-2-4でいこう」を採用し、新システムの模索が始まりました。当時、関西の一多分関東でもこのシステムをこなしているチームはなく、我々も最終ラインの形成・引き方、真ん中の二人の連携・ポジション取り等はずいぶん苦労しましたが、相手チームもずいぶん戸惑ったようです。興味深いことは、サッカーらしい前年度のボール廻しを止め、攻め方をとてつもなく単純な、バックパス・前方へのフィードに徹したことです。瀬戸コーチのこの発案は、京大サッカー部員の技術・体力が他の一部チームのレギュラーに比べて劣っている不利をカバーし、一部残留を果たすための最善の方法でした。考え方としては、(1)ボールがすぐタッチラインを割り、ゲームの連続性が断ち切れ、その間に守備ラインの整備ができる；(2)味方ゴールからできるだけボールを遠ざけることができる；(3)この単純な方法を繰り返すことにより、後半過ぎまで0-0でいければ相手チームに焦りが生じ、相手DFラインの乱れについて得点のチャンスが必ずやって来る

等です。要するに、1プレーごとに作戦を立てられる頭脳重視のアメリカンフットボール的発想であり、おかげで3年間一部3位の座を守ります。教訓④：常に新しいシステムの開発を行え。

とは言うもののこれだけでは駄目で、更に各相手チームの攻め方は十分に研究し、対策を立てて試合には臨みました。孫子の兵法で言う「敵を知り己を知れば、百戦危うからず」です。最大の成果は、当時リーグ戦を連覇し続け、常勝を誇っていた関学に勝った試合に見られます。高い個人技に支えられ、中盤で軽快に球廻しをして相手DFを崩すのを関学は特徴としていたのですが、この攻めを打ち破る方法は只一つ、現在日本代表監督の加茂さんが提唱するプレスディフェンスと類似した方法のみと考えました。前線FWへのパスをできればインターセプト、できなくても相手がボールコントロールする前にタックルし周りがこぼれ球を拾えるよう、前で前での積極的ディフェンスを指導し、背中へのパスは真ん中の二人でカバーするという現在では当たり前のサッカーをやったところ、中盤の激しい攻防とはなりましたが、関学は横パスのみで攻めのリズムを失い、1-0の勝利となりました。DFの野田氏が相手ウイングと衝突し血だらけとなるきつい試合でしたが、終了後足洗い場で関学の選手に詰め寄られ、「何て汚いプレーをするんだ」と言われたとき、この作戦が相手チームにどれほど強い衝撃を与えたかを知り、又翌日の朝日新聞の「関学はサッカーの原点を追求した京大のプレーに学べ」との評に、「やっと勝てた」との思いが胸の中をよぎりました。この想いには、私が故継谷氏率いる関学に、高校時代、兵庫県の決勝戦で5回、大学時代の関西リーグ戦で4回、一度も勝てなかった個人的な口惜しさをやっと晴らせたという怨念が絡んでいます。ちなみに関学はこの後立ち直り、リーグ戦で優勝しております。本当に当時は強かったですね。

国立大学としては上出来であった昭和37年よりの4年間3位を続けた良き時代は終わり、二部転落へと次年度はなります。これは現役諸君の技術の問題ではなく、私自身のミス—もう一度最後にやりますが—のためです。つまり、一部残留を目標にやっておれば良いものを、欲を出して、1位、2位を狙うチームを作ろうじゃないですかと瀬戸コーチに進言し、コーチもその気になって指導されたのが裏目となったのです。リーグ戦の最後には、チームは空中分解し、納会では現役の一人とあわやの喧嘩というところまでいきました。教訓⑤：身のほどをわきまえて謙虚になれ。これ以降、私は3年間ほどサッカー部から足を遠ざけ、チーム立て直しに尽力された瀬戸コーチもしばらくしてからコーチをやめられ、京大サッカー部の二部時代となります。

しかしながら、当時監督であった恒藤現副会長からの「もうすぐ創部50年だから、一部昇格を目指して努力してくれんか」—唐原大先輩とご相談されたともれ聞きますが—との要請と、新キャプテンとなった鈴木氏（大日本土木）との話し合いの結果、助監督名でサッカー部復帰となります。その頃は博士号を取るのに忙しかったせいもあり、夏前まではあまり練習も見に行かず、現役諸君の自主性に任せていましたが、段々首を突っ込みだし、言いたい放題言うようになり鈴木氏を困らせた記憶があります。その一つに、ヨーロッパへ遊びに行き夏合宿に参加しなかった黒田氏（住友商事）を秋の試合には出すなと主張したことです。部員から猛烈にブーブー言われ、秋の二部リーグでの戦績もあまり芳しくなく、最終的に彼を起用することになるのですが、その試合で彼が骨折したときは、しまったなあ！という複雑な心境でした。運よく入替戦には出ることはできましたが、結局は予想通り負けとなります。しかし、彼が松葉杖をつきながらチームの応援に駆けつけ

たのを見て、「あいつはサッカーが好きなんだな。よし、彼を攻めの柱としたチームを来年作ろう」と考えました。

とは言っても、冬から5月の京都リーグまでは練習は相変わらずほったらかしにし、試合だけ見にいました。これは、「学生スポーツの本分、特に京都大学でのサッカーとは何か」という命題からきています。即ち、サッカーという運動技よりもそれ以外での分野の才能に、より恵まれた若者が、何のため、何を目的として、レギュラーであれサブであれ4年間毎日3時間の練習、土日の試合に汗水を流し青春を過ごすのか、です。サッカーが好きだから、ではすませる問題ではなく、サッカー部を卒業したとき何を獲て出て行けるのかということになります。結果が全てのコーチの指導下であれば勝敗のみにこだわるようになり、結果として4年間サブでチームを支えた人達を冷遇してしまってそれでよいのだろうか。競技人口も多く、戦前のように関西一部リーグでの優勝は夢又夢という国立大学チームの現実も直視しなければいけません。従って、OBとしては、サッカー部憲法「部の管理運営は学生部員の自主性を尊重する」を遵守するのが本当ではないか、一人一人の部員が一生懸命頑張ってやったなら、結果はどうであれ、京大サッカー部卒の誇りはずっと一生持ち続けられる、それでよいのではないかと思います。

そんなことをぐずぐず考えていたのですが、春の京都リーグが不成績に終わった後、二谷（クマ）主将以下四回生が何とかしてくださいと言いに来たので決心し、練習方法以下全てを任せるという条件でチーム作りに乗りました。瞬間的な独創性が点を生み、ちょっとした油断から点を許す羽目になる連続性が全てであるサッカーという競技では、コーチとしてはまずサッカー技術、次に体力、最後に90分間緊張を持続できる精神力を養わせることが必要と考え、(1)体全体を使わせ、徹底的にボールコントロールを身につけさせる、(2)一人一人に課題を与え、各人の特性を伸ばす、(3)伸びた各個人の能力限界でのチームプレーの編成と、それ以上に何ができるか、チームにどんな貢献ができるか、連続プレーでの練習過程で発見・検討を行わせました。一方コーチの役目として、毎年人が変わる大学チームの宿命を考え、新人を重視し自信をつけさせると同時に上級生にはきつく、奮起を促してチームの層を厚くするよう心掛け、また、コーチの持つ最終的チームの青写真は決して示さず、結果を見てコーチを信頼させるようにしました。この時、私の裏方として、意を汲んで全てを取り仕切ってくれたのがマネジャーの稲垣氏（コケ）です。優れたチームが出来る時には、必ず良いマネジャーがいます。又、川野一円満な人格のためあだ名は無しーには、同業のよしみでずいぶん手伝ってもらいました。

秋のリーグ開幕時にはほぼメドがつき、7勝全勝、得失点28-3の目標で戦いを進め、6勝1分得失点21-4で優勝し入替戦へと臨みました。相手チームも視察し、必ず勝てるチームに仕上がったので、恒藤監督さんに思わず「必ず勝ちます」と試合の一週間前に言っしまい、当日たくさんのOB諸氏が宇治グラウンドに来られました。3-0と完勝しましたのでホッとしましたが、内心では4-0以上じゃないとなーと思ったりもしました。最終的チーム力は、当時の一部の3位ぐらいの力はあったと思います。

京大サッカー部への恩返しもすんだので、次年度からはコーチ稼業からはさっさと足を洗わせていただきました。サッカー部憲法を守りたかったというのも理由ですし、又優勝は不可能にしても私がコーチしてもしなくても一部に残れるから、選手には自分達の力でやり遂げたという事実が最終的には大事なのではないかと考えたわけです。夏合宿と秋のリーグ戦最中の2回だけ意見を述べ、攻め方、守り方の変更をしてもらいました。前年度

はクマ、メシ、黒田の中心線を大事にし、真ん中で一度ボールをためて相手DFを中央に引きつけてから、両アウトサイドからの速い攻撃を基本としたのですが、これをやめて、中盤でグラウンドの片半分に味方FWを密集させ相手DFも片側に寄せてしまい、できたオープンスペースへのMF、DFの攻め上がりより得点を狙う方式に変えたわけです。これは、層の薄い京大のようなチームでは、毎年、毎年、選手の特徴を最大限に生かせる異なったフォーメーションを組むことが必要であるということです。サッカーは1、2点勝負ですから、どんな形にせよしっかりとしたフォーメーションを作りチームとして必要性のある点の入れ方を持ったチームは、ちゃんと守りさえすれば—これは簡単です—、あまり負けない。しかしこれだけでは、互角の相手には簡単には勝てない。そこで意外性のあるプレーが必須となりますが、そのためには偶然ではなく、やはり独創性のあるプレーが試合中どこかに出てくるよう日ごろから練習指導し、又周りの連中がその意外性を生み出すようなサポート体制を常に作るような練習方法を考えるのがコーチの役目と考えますが、如何でしょうか？ サッカーにしろ、野球にしろ、過去の名選手が名監督になれないのは、柔軟な思想でスポーツの本質を見極めることをせず、自分の型でしか考えられないためと思われる。

良い選手が数名残っていたので、後2年ほどは一部チームらしい試合をしたそうですが、私はアメリカ留学で2年間日本を離れ、それ以降48歳になるまで京大サッカー部とは御無沙汰となります。一部昇格、二部転落と色々あり、長井監督がたいへん苦勞されたと聞いております。

ずっと長い間京都にいた関係で、ついに部長の座が廻って参りました。唐原大先輩からの直々のお電話ではいたしかたなく、またもや農学部グラウンドに行き、年が倍以上違う若い人々と接することになりました。驚いたことが2つありました。部員が70名以上もいて、みんなそれぞれ一生懸命頑張っている事と、可愛い女性マネジャーの存在でした。20年程前のサッカー部は最大でも部員数が40名以下でしたので、いろんなスポーツができるこの時代、サークルとしての活動を好む時代に「何故？」と感じました。いまだに良くわかりませんが、部長としてこれは大変だな—と思いました。練習を別々にする、20名程度の部員には京都社会人リーグに加盟して試合をしてもらうなどで、多人数となった部の自主的管理・運営上での困難さをしのいでいるようですが、本当に上手くやっているのかな—と言う危惧は持ちました。しかし、試合を見に行き、一、二回生の真摯な応援でこの疑問は氷解しました。サッカー用応援楽器を用い、出場選手一人一人の名を連呼し、90分間精一杯応援し続ける彼らの姿は、京大サッカー部の精神が未だに健在であるとの確信を持たせてくれました。又、女子マネジャーも授業などで平日忙しいのに、土日遠いところまでやってきて選手達のため色々手伝っている姿には感動を覚えました。昔話ですが、我々の現役時代は女子マネジャーはもってのほかで、部活資金のため11月祭でダンスパーティーをやろうとしたら、OBからの「伝統ある部がそんなはしたない事をするな」の一言で禁止されたものです。この後、OBがそれでは現役を助けようと、「OB基金」を設立されたとの由、瓢箪から駒です。

現役諸君がみなさん上手くなっているのにも感心しました。しかし他大学、特に新興のいくつかの私立大学チームの連中はもっと上手く、やはり技術では勝てない京大サッカー部かというところに落ち着きました。DFは体を張った激しい守りでありながら、フェアプレーであり、FWにも人材がおり、MFにも守備的或いは広い範囲で精力的に動ける諸君が

いたので、チームとしてのまとまりは良く、試合をよく見に行った3年間、かなりの強さでした。特に神戸大との入替戦は3-4の大接戦で惜しくもという敗戦でした。半面、ゲームメーカーがいなかったせいか、専属コーチがおらず育てられなかったせいなのか、よくわかりませんが、チームとしての基本的攻めが確立していないのが最終的なチームの弱点となっていたようです。ここで私は2度目で最後のミスをおかします。70周年記念も近づいた平成5年の秋のリーグで阪南大にさえ勝てればという頃、どうにもたまらなくなって農学部グラウンドへおもむき阪南大への攻め形を作ろうとして愕然としたのです。彼らはチームとしてのフォーメーションを練習ではやらず、試合を通じてチームの組み立てを行うようになっていたのです。従って、一つのプレーを起点として6人程度が一斉に動くというのは異次元の世界であり、結局試合では何の役にも立たなかった練習に終わり、現役諸君に迷惑をかけたただけでした。教訓⑥：コーチをするなら、最初の基本練習から組み立てをやりなさい。

部長は卒業生のために色紙を一枚一枚丁寧に書いて、前途を祝福するのが役目だったかなーと今は思っています。只一つ、これは夢ですが、京大がもう少し強くなって、海外例えば英国のケンブリッジ大学などと交歓試合を行うという案は、100周年記念にはぜひ検討をお願いしたいものです。

今後京大サッカー部の現役諸君が自由に伸び伸びとサッカーを楽しまれ、また互いに切磋琢磨して自己鍛練に励まれ、関西一部リーグにおいてGO KIU, GO KIUの部歌と共に再び京大の旗が掲げられん事を切に希望いたしております。

Ⅲ. 歴代監督は語る

歴代監督系譜

昭和23年度	監督	*小野礼年
昭和24年度	監督	安居 律
昭和27～33年度	総監督 監督	安居 律 *唐原友三郎
昭和34年度	監督	*伊藤 虔次
昭和35～38年度	監督	*皆木 忠夫
昭和39～40年度	監督	石光 顕吾
昭和41年度	監督	若井 尚
昭和42年度	監督	本田見吉郎
昭和43～54年度	監督	恒藤 武
昭和55年度～平成4年度	監督	長井 博
平成5年度～7年度	総監督 監督	長井 博 小田 晋作
平成8年度～	総監督 監督	長井 博 久松 啓次
昭和36～42年度	コーチ	瀬戸 進

(注) *印は物故者



安居 律先輩を訪ねて

50年史によると、京大蹴球部に蹴球部OBが監督についた最初は昭和23年度のことである。京大蹴球部は、選手による自主的活動の上に成り立っており、それが部の伝統となっている。従って、戦前には監督制度はなかった。しかし、戦後、現役強化のため、一時期監督がつけられた。その最初が昭和23年度の小野礼年監督（昭和14年卒業、平成3年11月死亡）、次いで翌24年度の安居 律監督（昭和14年卒業）であった。

そして、OBによる監督が制度としてスタートした昭和27年度は総監督・安居 律先輩、監督は唐原友三郎先輩（昭和15年卒業）であり、この2先輩による体制は昭和33年度まで続いた。監督は、勿論技術指導やアドバイスをしたが、このほか、リーグ戦や定期戦など公式の場に、OBを代表して顔を出すという大きな役割を果たしてきた。

選手による自主活動と監督のこうした役割は、京大サッカー部の伝統となっている。

そこで、平成8年3月9日（土）、阪神淡路大震災の爪痕がまだそこかしこに残っている須磨の安居先輩宅を訪れ、安居先輩から現役時代および監督、総監督時代のお話を伺うことにした。訪ねたのは長井 博（代表幹事）と70年史編集委員・林 和俊の兩名である。

（安居）監督とか総監督とか、えッ、50年史にそう記録されてる？
そう？ ウーン。監督としての記憶がないんだなァ。昔は登録の必要上マネージャーが監督として名を連ねていたんでね。まあ、昭和20年代の半ばから30年前後にかけては、OBの立場で、時々グラウンドに行ったり、試合の応援に出かけたりした記憶はあるけれど、それが監督とか総監督とかという意識は全くなかったなァ。50年史に載っているというのも気が付かなかった。それ以上のことになると、トーゲン（昭和15年卒業、唐原友三郎氏）に聞かないと分からない。

安居 律先輩（ご自宅にて）



——安居先輩は、現役時代には関西学生リーグで優勝されたり、戦後になると第1回天皇杯（東西対抗）で西軍のキャプテンを務めたりされましたが、先輩はいつ頃からサッカーを始められたのですか。

（安居）神戸はサッカーの盛んなところで、中でも御影師範は全国に名を馳せ、その付属小学校は大変サッカーが盛んだった。私は町立御影小学校だけれど、小学校でも中学校でもサッカーはしていなかった。中学ではバレーボールをやっていた。ところが、金沢の四高（旧制第四高等学校）に行くと、神戸から来た、御影から来たというだけで、どうしてもやれ、で、やらされた。その年一緒に入ったのに中学校全国制覇の経験を持つ小野礼年（前出）がいた。当時、北陸のサッカーはまだまだでね。インターハイでは1、2年とも1回戦で水戸に負け、3年の時は2回戦で広島と引き分けたけれど抽選負けをした。

——ポジションは？

（安居）四高ではFW。サッカーは小さい時からやらないとね。栗原 正氏（昭和12年卒業、平成3年12月死亡）は松山（旧制松山高等学校）に入ってからサッカーを始めてFBとして

名手になった。バックはある程度出来ても、FWは速成出来ない。だから私のはごまかしのサッカーだよ。

——先輩は名CHという印象なのですが、50年史によると、京大でも最初FWで出ておられますね。

(安居) 四高ではCFかLWをやっている、京大では初め1回だけLWで出たけれど、2年はFB、3年の時はCHだった。

——CHということは、戦前はまだ2バックシステムだったのですね。

(安居) これは聞きかじりの話だけれど、私が大学1年の時(昭和11年)にベルリンオリンピックがあって、日本代表がドイツへ行ってみると、ヨーロッパはみな3バックでやっている。そこで日本も3バックで行こうということで、急遽、東大のCH氏が3バックのCBを器用にこなして、初戦のスウェーデンに3-2で勝った。2回戦はイタリアに大敗したが、これが日本における3バックシステムの最初だということになるらしい。

——世界が3Bシステムに変わりつつあったという昭和10年代の初め、日本はまだまだ2Bシステムで、これが戦後になっても永く続くわけですが、それはさておき、大学時代の先輩のサッカーの忘れられない思い出を聞かせてください。

(安居) そりゃ、何というても昭和12年のリーグ優勝だな。夏の合宿を広島高校でやったんだが、その時期に広島文理大が主催する大会があったので、これに参加した。ちょうど合宿で疲れがピークに達している頃で、決勝で関学と対戦し1-7で大敗してしまった。そのあと先輩から物凄く叱られたな。秋のリーグ戦では先のことは考えずに、とにかく初戦に全力を集中してまず一つ勝とう、ということで試合に臨んだら、相手はどこやったかなあ、まず勝った。「おお勝ったぞ」ということで京都へ帰り、四条河原町近くの小料理屋「鳴門」へ直行して祝杯を上げた。こうして皆の気持ちが一つに結集されて、次も勝った、また祝杯、そして次も勝った、また祝杯。その積み重ねでとうとう全勝優勝。これが一番の思い出だね。しかし、東西リーグ優勝チームの対決では、残念ながら慶応に勝てなかったけれどね。

——話がそれて恐縮ですが、今も、特に勝った試合の後には、部員全員で祝杯を上げるということをやっていますが、お話を伺ってますとこれも伝統として受け継がれているように思います。その時代ごとに集まる場所や店も変わっていますが。

(安居) 僕らの頃は、飲む時はよく「鳴門」に行った。四条河原町を上がって二筋目を東に入ったところの小料理屋で、近年までその店があって、京都に行ったときには寄っていたんだが、先年主人が亡くなって店も無くなってしまった。ミーティングは農学部から今出川に出た三角地の角のミルクホールで、よく図上作戦をやったし、百万遍西北のうどん屋「柏軒」は部員の溜まり場だった。お茶漬けを食べさせていたので、我々はその溜まり場を「茶漬け」と呼んでいた。もう4、5年も前になるかな。栗原先輩とトーゲンとで88歳になるその店の主人に会いに行った。オヤジさんが喜んでくれてね。でもその2、3年後に亡くなったと聞いた。

——ところでJリーグが発足して4年目。日本のサッカーもプロ化され、選手の意識も技術も以前に比べて各段に向上したと思いますが、先輩は最近試合などご覧になりますか。(安居)テレビで見るくらいでグラウンドへは余り出かけないが、しかし、今のサッカーを見て、昔の連中の中で、昔我々がやっていたのはA式蹴球であって、サッカーとは言えんな、などと言っているが、……勿論昔も名手は少なくなかったが。

——監督、総監督の覚えがないということでしたが、いろいろと参考になる思い出話を聞かせていただいてありがとうございました。そのついでに、と言っては申し訳ありませんが、この機会に少し教えていただきたいことがあります。

今回70年史を作るに当たって、そもそものところを50年史などで調べますと、京大蹴球部の創設は前田純一先輩抜きでは語れないと思います。ついては、前田純一先輩についてお聞かせいただくことはありませんか。

(安居)これは古い話や。蹴球部創設の中心人物で、現役時代はマネジャーだった由。蹴球部には情熱を傾けて取り組んでいただいた。我々の現役時代の試合はいつも見に来られた。一番上が北村春吉先生(大正13年卒業、ご健在)、次いで前田純一先輩(大正15年卒業、昭和49年6月死亡)。初代OBクラブ会長を務められ、50周年記念事業の時は、すでに病床にあられたので、ご自分では動くことが出来なかったが、その成功を心から祈念していただいていた。50周年記念事業に際し、お宅へ伺った時はずっと臥せておられた。そういう状態で、50年史の記事に関して話を聞かせていただいた。お目にかかったのはそれが最後で、それから暫くして亡くなられた。

——次に「^{さんしゅんかい}三春会」について。

(安居)戦後、古い先輩達の中から、年に一度くらい京都で一泊の会合をやろうじゃないか、という話が持ち上がり、それが具体化して三春会となった。第一回の会場は南禅寺近くの「菊水」で、次回以降もここでやった。メンバーには年齢制限があり、はじめは昭和15年卒業までということで、東京～九州間の20名程が集まった。その時、内海先輩(故内海武尾氏、昭和2年卒業)の発案で、三春会という名が決まった。

その後、年齢制限が昭和19年卒業まで緩和されたりしたが、メンバーの高齢化などで隔年になったりして、余り長続きしなかった。八坂の塔の近くの「磯田」という山本先輩(故山本達治氏、昭和9年医学部卒業、昭和20年7月戦死)の奥さんがやっておられる料亭での会合が最後だったと思う。昭和50年後半だったかなア。こうして話していると、先輩は皆懐かしいなア。

——今日は、お聞きして初めて分かった話や、あるいは日ごろ滅多にお聞きすることの出来ない話などを聞かせていただいて、アツという間に時間が経ってしまいました。それでは最後になりますが、安居先輩はととも傘寿を迎えられる方には見えないのですが、まず、サッカーは何歳までプレーされましたか。それからゴルフの腕前の方はかねてからお聞きしていますが、最近はどのような運動をされていますか。そして、最後に現役に一言お願いしたいと思います。

(安居)試合らしい試合の最後は、昭和24年の朝日招待サッカーかな。その後も神戸クラブに籍を置きサッカーを楽しんでいたが、60歳の時、ドクターストップとなり、それからボ

ールが蹴れなくなった。その頃から始まった年2回の旧制高校OBサッカー大会も応援専門になっている。ゴルフはもともと我流で腕力任せ、年と共に全然駄目。運動と言えば付近の公園を犬のお伴をして毎日30～40分歩くくらい。だが、お陰で元気でいる。現役に対しては、ウーン、やはり頑張っけて勝って貰いたい、ということか。OBは皆それを期待していると思う。

——どうも今日は長時間ありがとうございました。

余録 三地域対抗戦のこと

「歴代監督は語る」に収録した「安居 律先輩を訪ねて」のインタビュー記事の中に載せなかった話の一つに、「三地域対抗戦」がある。これは戦前の不幸な日韓関係の時代の、日本のサッカーの歴史の1ページである。ここに余録として記録する。

安居 律先輩から伺った話のあらまきは次のとおりである。

昭和初期にはシーズンの総まとめとして全関東対全関西の対抗戦があり、これが当時の日本サッカー最高の権威であった。

昭和10年頃から、これに朝鮮地区が加えられ、三地域対抗となった。1, 2回は、一位全関東、二位全関西、三位朝鮮という順序に変化は起こらなかった。

昭和13年の夏、幻に終わった東京オリンピック（昭和15年開催予定）の強化合宿が山中湖の慶応のグラウンドで行われ、京大からは小野礼年、岡本純一、安居 律の三氏が参加された。その合宿には朝鮮からも5, 6名が参加していたが、その中には早稲田の選手も1, 2名入っていた。連日酷しい練習が続いたが、合宿10日目頃に東京オリンピック中止の決定があって、合宿は即解散となった。その際、朝鮮の選手2, 3名から「我々は日頃キックとシュートの練習位しかやっていないが、内地ではこんなに組織的な練習をやっているのか」との声が出、大変感動した様子だったという。この話を聞いて、早稲田の選手も居るのに、と思ったが、彼等は各地から選抜されて来ているからこうした練習をしていることを知らなかったのだろうと思われた。

その年の第3回(?)三地域対抗戦では、一位朝鮮（対全関東3-0、対全関西3-1）で、全関東も全関西も全く顔色がなかったのであるが、これも朝鮮が夏の強化合宿に参加した効果であろうか、短期間の内に組織プレーをしっかりと身に付けチームを作り替えて来る朝鮮は大したものだ、と思ったという。

日本の敗戦により、戦後、朝鮮は独立。

なお、参考までに、戦後に復活した東西対抗戦（昭和22年春）は、天皇、皇太子のご臨席を得て、第1回天皇杯となるのである。ただし、この天皇杯は、その後東西対抗戦の中止に伴い、昭和26年より全日本選手権大会に移行したということである。

こうした歴史を知り、そして2002年のワールドカップ日韓共同開催を5年後に控えている現在に思いをいたす時、相携えて世紀の大事業が成功裡に開催されるよう、切に祈るものである。

(編)

腹が減っては試合に勝てぬ



昭和27年度～33年度

監督 唐原友三郎

昭和26年度、京大は二部に落ちた。戦前一部で上位を続けてきた京大である。二部落ちなど考えもしない。戦前は旧制高校で鍛えられた選手ばかりである。部に入ってまでやるのは少なく、少しの予備はあるものの何時もぎりぎりの人数であるが粒揃いで何人かの名選手が居たものだった。その少ない人達が全員揃って密度の濃い長い練習など出来なかった。少ない練習量でありながらリーグ戦では悪くても3位、それ以下に下がることはなかった。一週間置きの試合なればこそ出来たことで、連日試合のトーナメントでは最後は体力が続かずガタガタになる欠点を持っていた。それは別にして戦後の食糧難が痛かった。体力保存が主で練習どころではない。出て来ても身が入らないし、誰もが心得ている。何とかなる自信があったわけである。人材が居たからである。が、腹が減っては差で負ける。考えられぬ大差で負ける。一方で大差で勝つ相手も居たから安心しておれた。昭和26年度は殆ど前年のままだから、まだまだと思える人材が揃っていた。ところが終わって見れば全敗、そして挑戦試合でもアウト。全く予想もしないことだった。京大始まって以来の二部転落である。誰に監督を頼むわけにもいかない。監督よりも後援会費を集めて後援するのが第一だ。それを私がやる。安居と二人で相談した結果である。

二部に落ちてでも人材が居る内に返り咲けば世話ないのだが、後援会費がたっぷり集まって十分に後援できるようにすぐなるわけでもなく、一方で二部の内に在って一部を狙っているのが力をつけて来ており、これに先を越されて京大はあと一踏ん張りが出来ずに7年間二部に在籍してしまった。旧制高校の鍛えられた選手が居なくなり、少ないながらも新制のサッカー有名校の人材がまだ活躍するに至らない昭和29年度は最悪の状態だった。

昭和28年度、名張で合宿した時、途中で資金不足のSOSの報が届いた。後援会費の集金を待っておれぬので安居と小生が1万円ずつ出してそれを持って名張へ出掛けた。金があれば米でも肉でもという状態ではないし、そんなに金がある筈がなく、せいぜい卵と牛乳が手に入った程度、それも最小限度でしかなかった。2万円位では足りぬとは言わなかったから、それで足りたのか辛抱したのか確かめてない。大学生の初任給は8,700円、昭和15年頃の65円前後から見れば物価は134倍程度、卵なら1ケ2、3円、牛乳1合13円位でなかったかと想像されるから、それで足りたかも知れない。

昭和29年度を境にして新制の人達と入れ替わるのだが、京大に入る前3年間ミッチリ鍛えられた完成品は殆ど居ない。サッカーが好きで素質のある人が各学年に何人か居る。この人達が力をつけて来てだんだんとチームが充実して来るのだが、二部に落ちて3年目を最低にして上向いて来、5年目6年目にはもうかれこれ大丈夫に近付いて居たが成功しなかった。何時も100%の力を出し切れるものでないからだ。70%、80%の力でも勝ち抜く力をつけなくては、二部で優勝しても挑戦試合に勝って復帰し、翌年もすぐにダウンすることなく居続けることは出来ない。それが出来たのが7年目だった。

7年目の夏の合宿は丹後の網野だったが、昭和12年卒業の麻野隆平が会社を休んで何日か参加してくれた。彼と入れ替わりで小生が一泊どまりで参加した。麻野は張り切り過ぎ

て足に身が入り、帰っても会社に出られぬ日が出てしまった。大変迷惑を掛けてしまったわけで、頼んだのが悔やまれてならなかった。

後援会費もすんなりと集まらず、取りに来る位熱を入れなくては駄目だ、というOBも何人か居て、マネジャーが資金集めのため大阪へ出て来る時は先ず小生の所へ来させた。そしてOBに電話して無駄足にならぬように図ったものでした。

OB会費を集めて回るのも大変だから、東大の組織を教えて貰って後援基金制を敷いた。開始したのは昭和34年4月1日、一部復帰の翌年からである。初めは1万円だったと思うが後々は5万円までになった。その頃は利息が高く一割近くあったから、1,000円の年会費に相当する利息が1万円得られたからである。年会費が上がるにつれてこの割合で増加した。基金5万円になっても利率が半減して居たから基金のメリットはなくデメリットになって居たので、基金を歓迎しないように指導していた。今は利息が最低だから基金制度は成立しない。

戦前は同学会から多額の援助金が出ていた。ボール1ヶ5円の時代に年に500円、1,000円とか出ていた模様である。ところが戦後同学会が廃止になり、部には金が入らなくなった。部員は何から何まで自弁ということになった。食うに困る時代に、ボール、ユニホームどころではない。それでも部をやっていくという人が絶えなかったので、OBから年会費を出して貰うということになったわけであるが、戦前にはなかったことである。最初幾らで始まったか覚えてないが、基金が出来た時には年会費は1,000円になっていた。(唐原友三郎氏は平成9年11月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。)

戦後の最盛期



昭和39年度～40年度

監督 石光 顕 吾

皆木の後を継いで昭和39年度の監督になりました。前年度は優勝の関学に勝っており、戦後京大の最盛期でした。唐津主将の時で瀬戸コーチが就いているので気楽に見ておれば良かった。昭和33年、二部で優勝し挑戦試合にも勝って一部に復帰できたのも優秀な選手が沢山に集まり実力がついてきたからです。その人達が集まって居ても一部に入って一年目二年目は最下位の成績でした。しかし、実力があつたから挑戦試合では相手を退けて一部に残留して居る。昭和36年度、瀬戸コーチが就いてから集まっている人材の力がついて来て、良い成績が出るようになり、戦後の最盛期の実現となったわけです。そして昭和39年度は卒業生の後を埋める選手が育って居て、優勝の関大と引き分け、二位の関学に再び勝つという最高の記録を作ったのですが、下位に敗れる落ちこぼれを出して二位にもなれなかったのです。この年は対甲南大を除いて、勝っても負けても1対0、0対1という記録を作りました。対関学戦では二年連続1対0で勝っており、勝てるはずの京大に終わって見れば一点に泣いたと関学を嘆かせたのです。翌40年度は戦力低下激しいと新聞に書かれ、事実関学には0対6で敗れる低下ぶりでしたが、成績は3位で前年と同じでした。ということはよく頑張ったこととなります。

東大戦では、小生の甥が相手チームのキャプテンで、小説ででもなければ出て来ない前

代未聞の対決となりました。そして叔父さん側は負けました。前年とは反対の0対1で、そのわりによくやったということでしょう。接戦をしているから。

海外勤務のため監督在勤一年の弁



昭和41年度

監督 若井 尚

現役時代の私にはベストをつくし、京都大学蹴球部の再建にいささか貢献した、という自負がある。しかし、監督時代ということになると、話は逆で、蹴球部には全く申し訳ないことをして、未だに大きな借金を背負っている身分である。大阪勤務をしていた昭和41年春。石光顕吾監督の後任を命じられて、軽い気持ちで引き受けたのが失敗のもとであった。

三十年代の後半の京都大学は、瀬戸コーチの力もあって、私達が現役の三十年代前半に比べれば格段に戦力も充実し、復帰した一部でも毎年上位の成績を重ねていた。ただ監督に就任して直ぐ、「どうも考え方がよろしくない」と感じた。個々にはレベルの高い選手もいたが、どうも試合に勝つことよりも、何とか負けずに終わらせる事だけを考えているようで、消極的で暗い空気だった。そこで、「君達もこれでは面白くないだろう。負けてもいいから勝ちをねらって楽しくやろうや」とけしかけた。今でも私の考えは正しかったと思っているが、正直な所、実力もあるように見えたのでタカをくくっていた部分もある。ところが結果は最下位。入替戦も神戸大学に負けて二部転落。何のことはない。せっかく一部に復帰したものを、私自身の手でまた二部に落としてしまったのである。責任を感じて、一部復帰まで会社業務より監督業を優先することと、ついでに禁煙を決心した。しかし、である。翌年の春、海外勤務を命じられて転勤。監督在勤一年。二部に落とすだけで終わってしまった。

誠に恥ずかしくも申し訳ないことで、それ以来、サラリーマンの限度では責任を取り切れない役柄には、一切つかないことにしている。

基本練習に時間を



昭和42年度

監督 本田見吉郎

昭和42年から2年間という短い京都在勤中の、またごく一部分の生活でしかありませんでしたが、OBとして責任重大な監督生活を送らせて貰いました事は大変光栄と思っております。

何しろ銀行業務の合間にグラウンドに出掛けていった程度で、まことに好ましからざる監督であったのではないかと反省しております。

我々の時代にはなかったナイター設備も出来て時間的には十分な練習が出来ると感じま

した。練習も終始熱心に、かつ自主的に行われ結構だと思えます。然しながら楷書を知らずして草書を満足に書き得ない如く、今少し基本練習に時間をかけるべきではないでしょうか。左右同じように蹴れない人、インステップかサイドキックか判然としない蹴り方をしている人、浮き球の処理の下手な人、ヘディングにしても前だけしか球を落とせない人、スライディングにしても球に足のさわらない人等々が試合中に見られました。基本が出来てなければ、フォーメーションは中断されて得点につながらないと思えます。

試合中に感じられた事は、時々中途半端なプレーが見られる事です。何の意図を持って蹴ったのか判らないような場面があります。各人の動作には夫々意図が判然としなければチームワークも崩れると思えます。

最後に、「私はメソッド（流派）を信じない。基本だけがあるんだ」と言ったジャック・ニクラウスの言葉を、現役諸君へお伝えください。 (50年史からの再録)

悔いのない部生活を

昭和43年度～54年度

監督 恒 藤 武



70年史の企画の一つとして、歴代監督の担当時代の回顧の記事を掲載することによって依頼を受けた。たまたま、私が監督を務めていた昭和49年に創部50周年記念行事が行われ、唐原友三郎先輩（S.15.卒業）のご尽力で50年史が発行され一文を草したので、一部重複するところがあると思うが、思いつくままを記して責を果たしたい。

今回はもう一つの企画として歴代主将の時代検証の記事が計画されているので、各年代のことはそこに詳述されるであろうから、ここでは私が監督として現役の諸君と接して感じたことや、意見を述べたことを想い起こしてまとめてみることにする。

1. 監督就任の経緯

監督のご指名を受けたのは昭和43年春、勤務先の田辺製薬東京支店から大阪本社に転勤となって間もなく、唐原先輩から電話があり、当時監督であった本田見吉郎先輩（S.18.卒業、第一銀行百万遍支店長）が転勤されることになったので、後を引き受けてほしいとの急なご依頼であった。私も勤め人の身であり、新しい仕事に就いたばかりで戸惑いがあったが、7月の東大戦に監督不在では困るので、後のことはいずれ相談するからとのお話で、ともかくお引き受けして、指定された日に農学部グラウンドの合宿所食堂での部会に出向いた。

会場に入って目を疑った。部屋に満杯の50～60人の部員が集合していた。私の現役時代は戦後の混乱期ということもあったが、メンバー編成もままならない10数人の部員であったから、まさに隔世の感を深くしたものである。同時に私の時代とは違った意味でメンバー編成や練習方法に関係者は苦労が多いのではないかと感じた。

監督1年目、一部復帰のチャンスを逸した。昭和44年からリーグ戦の各部のチーム数が6から8に増えることになり、1位、2位は一部に自動昇格することになっていたが、岐路となった阪大戦が悔やまれる試合となった。リードしながら同点に迫いつかれ引き分けた結果、昇格の夢が消えたのであった。この試合で故障気味の主力選手の動きが後半鈍く

なってきたので交代をさせるべきだと思ったが、平素練習に顔を出していないので誰に代えてよいかためらっている内に得点を許したのである。

2. 根本紀夫君に助監督を要請

公式戦をはじめ対外試合には必ず立ち会うよう心掛けていたが、仕事の関係もあって平日の練習を見に行くことは困難であったので、監督として果たすべき任務の限界を感じていた。そこで、当時大学の研究室に残っていて時々グラウンドに顔を出していた根本紀夫君（S.38.卒業）に声を掛け、現役の面倒を見て貰うよう頼んだ。元来京大のサッカー部は手づくりのチームというか、主将を中心に部員が自分達の手でチームづくりをするのが伝統とされていたが、後に大谷大学に移られた瀬戸 進氏が教官でおられた頃コーチとして面倒を見て下さった時にしっかりしたチームづくりが出来ていたと聞いていたので、その様な適任者が居ればそうすることが望ましいと考えていた。根本君はその瀬戸氏の薫陶を受けた一人で、「死の山中越え」を経験しており、科学者らしい体系的な説明と、身を以て示す実践的な教え方が出来るので適任と考えた。可能ならば後を継いで貰うことも含めて説得に乗り出した。グラウンドや会合の帰りに居酒屋やおでん屋に立ち寄り長談義を繰り返した後、昭和44年冬、団栗橋のたもとの「蛸長」で応諾の回答を得た。但し、研究活動と留学のことがあって三年を限度とする条件付きであったが、一部で通用するチームづくりをするとの力強い約束をしてくれた。

その約束どおり、根本助監督のもとで44年は二部で優勝し入替戦で阪大に1-2で惜敗し一部復帰を持ち越したが、翌45年に入替戦で阪大を3-0と一方的に下し念願の一部復帰を果たした。この間の彼の自己犠牲は大変なことだったと思うが、目標どおりの結果が出たので、延ばしていた留学のこともあり助監督を辞任したいとの申し出があった。初めの約束ではもう一年やって貰う筈であったが、止むを得ない事情と判断し了承した。

3. 監督としての自戒・遺言

身近な指導者を失った現役は再び手づくりのチームに戻る訳だが、大学に残っている若いOBがグラウンドに顔を出して指導に当たってくれ、46年から48年まで3年共6位ながら一部定着を果たしてきたが、49年に最下位となり、当時昇龍のいきおいで台頭してきた天理大に入替戦で完敗、二部に陥落の憂き目を見ることになった。

この時、ふと顧みて監督としての私が部員に何を教え、何を遺したのかと自戒の念にかられた。

技術的なことを言えば、現役の諸君の方がボール扱いやキックがはるかに上手く見える。一般論としてのフォーメーションも私の現役時代とはすっかり変わってきている。ポジションの呼称は変わっており、下手なことを言うとアナクロニズムと映るだろう。現役の諸君の手づくりのチームづくりに役立つこととなると概念論、精神論になってしまうが、それも止むを得ないと考えてミーティング等では専ら心構えを説くことにした。頭に浮かんでくることを列記してみる。

(1) 新入部員の歓迎コンパで

貴重な青春時代の時間を学業と共にサッカーに使うのだから、すなわち「文武両道」によって人格形成の大事な場となるのだから、やる以上は悔いのない部生活を送ること。サッカー部の生活に生きがいを感じなかったら止めた方が良い。

(2) 練習について

サッカーはつきつめてみると反射神経が決め手となる競技だから、瞬間の判断、瞬時の

動き、プレーが適切であることが肝要で、それに対応できる身体を作り、身体が覚えなければならない。それには一定の条件下で一定のプレーが出来るよう、同じことを反復して練習することが大切である。

サッカーをやるための練習はグラウンドが全てではない。日常生活の中でサッカーをやるための身体を鍛えることが必要で、住居の近くでランニング、縄跳びなどをやって足、腰、特に足首と膝の弾力性を養うことを心掛けると上達する。平素から足腰を鍛えるという意味では、グラウンドへは足で通ってくる心構えが大切で、バイクに乗ってグラウンドへ来る、機械に体を運んで貰うというのはもつての他である。

ボールは蹴るというより、腰で押し出す感じを覚えると良い。強いボールを蹴るためには身体の捻りと腰で押し出す力が加わることが重要であるが、それを練習で繰り返して身体に覚えさせることである。

ゴールを狙う時は、身体ごとボールと一緒にゴールに飛び込む気持ちで身体をボールにぶつける。野球では「一球入魂」と言うが、サッカーでは「一蹴入魂」ということであろう。

(3) チームワークについて

サッカーはチームゲームであるから、コンビネーションが重要であることはいうまでもない。練習でフォーメーションなどを研究するのだが、チームメイトの平素からの心の繋がりがなければ成果は得られない。私はチームプレーの極致はめくらパスが通ることだと考えている。サッカーは相手の裏をかくことが戦術として要求されるが、めくらパスはその点で効果的であって、プレーヤー同士の平素の意思疎通がうまくいっているかどうかが決手となる。つまり古来言われる「以心伝心」をプレーの中で具現することなのである。

合宿時、便所のスリッパを次に来た者が履き易いよう前に向けて脱いでくるよう言ったことがある。パスを出す時、パスを受ける時、相手のことを考えて行動する心を平素から養ってほしいと考えてのことである。

(4) フェアプレーについて

スポーツマンシップの神髄はフェアプレーの精神であろう。競り合いに負けたり、タイミングが悪くて相手に足を蹴られたりしてカットして食ってかかる光景をよく見掛けるが、闘争心はプレーの中で発揮すべきものであって、プレーヤーに遺恨をぶつけるのは好ましくない。その様なことに遭遇したら自分の技術が未熟なのだと反省し、自らの技術の向上を目指すべきである。

リーグ戦で相手のラフプレーに怒った京大選手が相手の足を故意に蹴ったので、試合終了後その選手を連れて相手ベンチに謝りに行ったことがある。京大はフェアプレーを基本理念としていることを自軍にも相手にも示したかったからである。

4. おわりに

監督生活12年間、その間に多くの部員諸君と接した。中には媒酌人を依頼されたり、結婚式に招いて下さったりした方々もいる。これも人生の巡り合わせであろうが、彼等が果たして監督である私から何を学ぶことがあったであろうか。各人の評価に待たねばならないが、京大サッカー部が手づくりの部活動を通じてチームを編成し、公式戦はじめ対外試合に臨み、精一杯の働きをしてくれることを願って見守ってきた。誰がみても良かったなという時もあり、又期待に反して不本意な結果を招いたこともあったが、毎年毎年現役諸君の熱意と意欲に励まされながら時が経過した。

10年目を迎えた昭和52年、丁度「50年史」が発行された年であるが、会社の仕事の関係もあって後進にバトンタッチせねばと考えた。卒業後も大阪ガスでサッカーを続け京都在住ということで長井 博君 (S.32.卒業)に白羽の矢を立て話を持ち込んだが、会社の中堅幹部として重要な仕事を担当していて折り合いをつけるのに時間を要した。そして昭和54年度のシーズン初めに応諾の返事を得た。従って54年度は監督としての私と行動を共にして貰い、翌昭和55年度から監督を引き継いで貰うことになって、私も肩の荷をおろした。この間大阪ガスの社内調整等に横山慶一先輩 (S.18.卒業)にお骨折りいただいたことも忘れてはならない。その後の長井君の活躍は誰もが認めるところであり、私の12年を超えて13年間監督生活を続け、平成5年に小田晋作君 (S.40.卒業)にバトンを渡した後、総監督、OB会代表幹事としてご苦勞の多い役割を担って頑張ってくれている。心から感謝申し上げる次第である。

余禄 伝統を守り育てる心

恒 藤 武

伝統というのは、美しいものであると同時に重苦しいものである。自由を求める若い世代の人達にとっては窮屈なものだと感じる面があろう。しかし京大蹴球部員たるものは、部には50有余年（注：末尾参照）に亘る歴史と伝統が厳然とあることを心に銘じて戴きたい。私が経験した事例を挙げて後々の参考に供する次第である。

昭和50年6月29日、東大定期戦が東大御殿下グラウンドで行われた日、私は超OB戦に出場の着替えをするため、山上御殿の控室に入った。現役も着替えを始めている者がおり、何人かがグリーンユニホームを着ているのが目についた。私は練習用のユニホームなのだと思って特に聞くこともせずに超OB戦に臨み、懐かしい連中と一緒にボールを蹴る楽しさを味わいつつ試合は仲良く1-1の引き分けに終わった。気持ち良く引き上げてきて、さて現役戦が始まる段になって驚いた。練習用とばかり思っていたグリーンユニホーム、ストッキングが試合用と分かったからである。そんなものを作るという相談も受けなかったし、話を全く聞いていなかった。しかし、試合前にそのような問題を出すのは士気に影響すると考え、口には出さなかったが、東大がライトブルーの基調を守っているのに、これは失礼なことになると心の中で思った。

試合は前半、攻撃の要である田中が東大BK小野田君に完全に押えられて、思うような展開が出来ない。後半はやや持ち直したが結局1-2で負けた。試合後の講評で私は「試合に負けたことより、君達が今着ているユニホームで試合したことの方が余程悔しい。京大の伝統のスクールカラーであるダークブルーのユニホームを何故着ないのか、私は監督としての責任上帰阪して進退伺いを申し出るから、君達もそのつもりでいてほしい」と言った。

事情は後で分かったが、ユニホームを新調するに当たって、部員の中から今のものと違うものを作ったらどうかとの意見が出て、多数決の結果グリーンユニホームを作ることになったのだそうである。民主的な世の中であり、新しいものを求める若い世代の集団で

あるから、自然の成り行きであったのであろうし、誰が悪いというものでもない。監督である私の心、意志が現役の諸君に通じていなかったことがその様な結果をもたらしたのであるから、私がOB会に陳謝し、善後処置をお願いするしかないのであった。帰阪して早速唐原先輩に事情を説明し、進退につき佐藤会長にお諮り戴きたい旨伝えると共に、グリーンユニホームをOB会で買い取り、改めてダークブルーのユニホームを新調する資金を現役に交付して下さるようお願いした。結果、進退については不問とされ、ユニホームは提案通りOB会で買い上げ、現在OB用のユニホームとしてOB戦に使用されている。

京大時代、農学部のグラウンド（現在では宇治も使っているが）の部室で練習着に着替え、ボールを蹴ったこと、ダークブルーのユニホームを着てリーグ戦をはじめ対外試合を戦ったことが、蹴球部に籍を置いた者の共通の人生経験である。そこに共通の意識があり、愛着があり、一体感を生み出す根源がある。

京大体育会の機関誌の誌名は「濃青」であり、その解説に次のように記されている。「濃青とは大正15年以来体育会を象徴してきたカラーで、英国オックスフォード、ケンブリッジのダークブルー、ライトブルーにならぬ、本学が前者を、東京大学が後者をとったものである」

京大蹴球部は単なるサッカー同好会ではない。大正14年創部以来、代々の部員によって築き、育まれてきた伝統が脈々と生きていくところの一大共同体である。昭和49年5月の創部50周年大会に150名もの大勢の関係者が参集し、盛大な行事を催すことの出来たことが、その何よりの証拠である。そして又、年々の現役の活動に対して、OB会が物心両面に亘って積極的な支援活動を行っていることもそれを物語っている。

私が本稿を50年史の記録に止めておきたいと考えたのは、これからの現役諸君が、先輩達が残してきた京大蹴球部の歴史と伝統をよく理解し、伝統に生きる精神の中から各自の個性を思う存分生かしたサッカーをやり、京大には他にない良さがあるというチームが常に形成されることを念願するからであり、又OBになったら今度は先輩として京大蹴球部の伝統を大事に守り育てるために力を注いでくれることを期待する気持ちからである。

当時の永井キャプテンをはじめ部員の諸君にはマナイタの鯉にしたことをお宥し願いたい。
(50年史補稿からの再録)

13年間を振り返って



昭和55年度～平成4年度

監督 長井 博

1. 監督を仰せつかった頃の思い出

往年の全日本級の名プレイヤーであり、また嚇々の実績を残された大先輩・恒藤監督の後を受けたのは昭和55年度からである。実は、監督生活10年を一つの区切りと考えておられた恒藤先輩の後任の人事が、当の本人である私が知らない間に進んでいた。そして、外堀がすべて埋められたような状況の中で、昭和54年度は監督12年目の恒藤先輩と行動を共にし、昭和55年度から監督を仰せつかることとなった。

京大サッカー部の監督なんて考えたこともなかった私は、私の現役時代の監督であった

唐原大先輩がやってこられたことや恒藤先輩のお話を参考にしながら、監督と言うよりはむしろサッカー部の一OBとして、練習や試合に顔を出して現状を知り、その上で現役の活動がスムーズにいくよう、良きアドバイザーになることがまず第一と考えて、監督1年目のスタートを切ったように記憶している。

ところで、京大サッカー部の長い歴史の中で、京大の非常勤講師として京大に在籍しコーチとして現役を指導していただいた東京教育大OBの瀬戸 進氏と、当時、大学院生や助手の立場でコーチ、助監督を務めていただいた根本紀夫氏（第7代蹴球部長）の時代（詳しくは両氏の本誌に寄せられた手記参照）を除くと、現役活動を支援してきてくださった先輩OBや監督はすべて企業に籍を置くサラリーマンであり、勤務上平日の練習に顔を出して指導したりアドバイスしたりすることができる状況になかったのであるが、それは昔も今も変わりがない。

それでは、京大サッカー部の監督は如何にあるべきか。

私が監督を受けることになったころ、「監督の人選に必要な条件」なるものを唐原先輩からお聞きした。これは唐原先輩の長年にわたるご経験によるものと理解しているが、思い出すままに、書き出してみよう。

条件1. 京大サッカー部の監督（以下、監督という）は京大サッカー部のOBであること。監督は、京都市またはその近郊に在住するOBが望ましいこと。

条件2. 監督は、現役時代にチームの中核として活躍した実績があるOBであること。

条件3. 監督は、自分なりのサッカー理論を持ち、できれば社会人チームなどのコーチあるいは監督としてチーム指導の経験があれば、なお望ましいこと。

条件4. 監督は、企業にあっては課長以上の役職に就いているOBであること。

以上であるが、この条件4の意味は、具体的には次のような内容であった。即ち、

(1)監督は、現役に対する技術指導やアドバイスのほか、リーグ戦や定期戦など公式の場に、OBの代表として顔を出すという大きな役割があるので、それなりの年齢と社会的な地位にあるOBであることが望ましい。

(2)勤務中に、もし監督として時間を割かなければならない必要が生じた場合、自分の判断で行動できる役職にあるのが望ましい。

(3)監督はボランティアであるので、時により多少の出費を伴うことがあるが、ポケットマネーに余裕ができる年代・社会的地位を考えると、それは課長以上の役職者ということになる。

私は、勤務先である大阪ガスのサッカー部の事情により、37歳まで社会人チームの現役選手としてプレーし、その後、監督として幸いにも選手に恵まれ、関西リーグ入りの目途をつけて（その後、関西リーグから日本リーグ2部に昇格した）、後進に監督をバトンタッチした。それまでは、休日には試合などで家を空け、家族からは母子家庭と言われていたので、少しサッカーから離れて、家庭サービスと自分自身の時間確保を、と考えていた40歳代半ばのことであった。

結局は、半ば諦めもあっただろうが、監督を受けることに理解を示してくれた家族のバックアップのお陰で、当初4年間1サイクルのつもりでスタートしたのであるが、まさか13年間、会社定年の年まで監督を務めることになるとは思ひもしないことであった。

私は、恒藤前監督との覆い難い較差を思い、また、現役が強くならなければそれは現役時代2部リーグしか知らない監督だからと言われはしないかと気にしたりもしたが、どう

なるものでもなかった。ただ行動面で自分自身に課することにしたのは、(1)監督を受けることによって会社の仕事に影響が及ぶことがないよう、公私の別を明らかにする。但し、原則として、休日は京大サッカー部のスケジュールを優先する。(2)そのために、休日は社内の立場上どうしても出席しなければならない会社（職場）行事を除き、一般の付き合いは大方の理解を得て失礼する。(3)監督としての出費に関しては、社内交際の減少もあるので、自分の可処分範囲内にとどめるよう努める、の三点であった。

2. 関西学生サッカー連盟の運営委員に名を連ねて

新人監督として、いずれ他大学のリーダーの方々に挨拶を、と考えていた矢先の6月8日(日)、同志社大学との定期戦当日に、同志社大学サッカー部監督である古川克巳先生から「それなら、近く関西の主なリーダーが集まる会合がありますから、ちょっと顔を出されたらどうですか。瀬戸先生もお見えになると思いますよ」という話を聞き、6月16日(月)に、所用があるからと定時で退社し、当時茨木市にあった大阪体育大学へ、ほんの挨拶のつもりで出掛けた。そして、そこで初めて知ったのであるが、当日そこで開催されていたのは関西学生サッカー連盟の運営委員会（現、理事会）であった。実は、その日がきっかけとなり、それから約7年間一部実務を分担することになった。そして実務を離れた後も今日に至るまで、名ばかりではあるが、学連の役員として名簿に名を連ねさせていただいている。

関西学生サッカー連盟（以下、学連）は学生が主体である。本史に「舞台裏から」と題して手記を寄せている留岡 寛氏（S.39.卒業、70年史編集委員会リーダー）が昭和38年度の学連の名幹事長であったことが、今も学連の当時を知る先生方の語り草になっている。

さらに、各大学の監督など指導者達は自チームの利害を超えて、関西学生サッカーのレベルアップを図り、ひいては関東に追い付き追い越すために、相提携して真摯な努力を続けておられるのを目の当たりに見た。私が学連の役員に名を連ね、一部実務を分担することになったのは、実は大変な事だったのであるが、こうした実態を知って感銘を受けたことによるのである。

当時の運営委員会の主なメンバーは、井田国敬運営委員長(大体大サッカー部長)、大商大・上田亮三郎監督、神戸大・五島祐治郎監督、同志社大・古川克巳監督、大体大・坂本康博監督、大谷大・瀬戸 進監督、京外大・辻 浅夫監督、大産大・塩谷武男監督、大教大・入口 豊監督、大市大・後藤幸弘監督（以上、大学教授、助教授）のほか、実業界からは甲南大・佐伯良平監督、大経大・野路 晋コーチであったと記憶している。そして、関西学生サッカーが将来大輪の花を咲かせる夢を膨らませ、井田運営委員長の元で、全日本Bチームを率い、中央に太いパイプを持つ大商大の上田先生からの情報に加え、その柔軟な思考から発案されるアイデアを中心に活発な議論と検討がなされていたのを懐かしく思い出す。その後、学連の諸先生の努力と各チームの指導者の理解を得た結果、今では諸大学の部長、監督、コーチなど多数のリーダーが現在の学連に名を連ね、広範な役割を分担して学連の活発な活動を推進し、ひいては関西学生サッカー界の発展に貢献しておられる。

関西学連は、以前から関東の諸大学が個々別々に活動しているのとは異なり、特筆すべきは大同団結して、1部および2、3部の選抜選手の強化練習や、関西選抜チームによる国際親善試合、海外遠征等を実施するなど、関西学生サッカーのレベルアップのために計画的に推進して来ていることである。

こうした学連活動に参加する中で、幸いにも私は日頃一流の指導者達の知識、経験や選手の育成に関する考え方などを直接聞く機会を持つことが出来た。それまでは自分なりのサッカー経験の域を出なかった私にとって、学連での経験は、同質者の集団ではまず得られなかったのではないかと思えるほど貴重なものであった。そこで得たものは基本的な事柄が多かったが、それはこれまで自分で考えていたことを裏打ちしてくれるものも多く、現役へのアドバイスに大いに役立ったものである。

3. 1部復帰を目標に毎年努力を続ける現役

私が恒藤監督と行動を共にした昭和54年度の第30回東大定期戦は、東大御殿下グラウンドで行われ、京大が4-0で勝利した。この4得点というのは京大が定期戦で東大から取った最多得点であり、4得失点差の勝利というのも京大にとっては初めてのことであった。しかし、それ以上に意義があるのは、京大にとっては定期戦史上初のアウェイゲームにおける勝利であった、ということであろう。しかも、全得点をゲットした主将の藤井慶治郎君は、試合後のレセプションの席上で、岡野俊一郎氏に、「今日は藤井君の優れたスピードのある反転力にやられた。これは藤井君の上半身がしっかりと鍛えられているということである。サッカーのトレーニングが現在も下半身重視で行われているのは誤りで、上半身が強くなければスピードの早い反転は出来ない。これからはもっと上半身を強化し、反転力のある選手を育てないと、いつまで経っても日本のサッカーは国際的に通用しないだろう」と、言わしめた。

東大戦は定期戦のみならず、秋季リーグを占う上からも極めて重要な位置にある。即1部復帰を狙う京大にとっては東大戦勝利は好材料であった。恒藤監督は監督最後の年を1部復帰で飾ると共に、それを私へのバトンタッチの最大の贈り物と考えておられたに違いないと思うのだが、9月からの秋季リーグ2部Aブロックでは京教大と近畿大とに敗れ、1部復帰はならなかった。

監督初年度、昭和55年度の主将は大石雄一君（静岡選抜で国体優勝の経験を持ち、関西選抜の名GK）であった。大石主将を中心に4、3回生に優秀な選手が多い好チームであった、私は練習や試合を見ていて気付いた基本的な事をアドバイスすることはあるが、場合によってはそれも要らないほど、現役だけで自発的に高い目標を掲げ、自主的に規律正しく活動する、見ていて安心できるチームであった。

しかし、考えて見ると、それは今に始まったことではなく、毎年先輩が後輩へ申し送り、引き継がれてきたことが、部員一人一人の、ひいてはチームの血となり肉となっている。言わばこれが京大サッカー部の伝統である、というものを見る思いがした。

当初、試合中に監督として選手交代を指示する必要があるか、と思ったこともあったが、試合前日の調整練習日である土曜日の練習を見た印象だけで出来る筈もなく、その必要もなかった。

この年は東大に3-1で勝ち、つづいて秋季リーグも順調に勝ち進んだ。そして1部復帰の夢が大きく膨らんだが、リーグ後半大教大と京産大に引き分けたのが響き、負けなしにも拘らず2部Aブロック2位、順位決定戦で関大に3-0で勝って1部への挑戦券を手に入れたものの、大経大との入替戦に敗れ、1部復帰はならなかった。

監督2年目からは、新チームの発足直後にその年度の目標や練習計画などについて、新チームの主将等から考えを聞き、それに私や一時期5年にわたってコーチを務めてくれた

田中徹也君 (S.52.卒業、大阪ガス) の意見、要望を加えて、具体的な年間計画を作成し実行に移してもらった。後は練習や試合を見てのアドバイスと、精神面や行動面を含む注意と課題の指摘などであり、すべてはそれらを参考にした現役による自主活動であった。

その後、関西学生の2部チームの実力差は毎年縮まって来ていた。私は昭和50年代の終わり頃から、現役に「リーグでは、チームの状態如何で、全勝もあり得れば全敗もあり得る」と、言ってきた。これは気持ちを引き締めるための口実だけでは決してなかった。いろんな私立大学が、新入学生の採用戦略の一つとして、サッカー部の強化を図っていたから、過去の実績でそのチームの実力レベルを予見することは段々難しくなっていたのである。

そうした中で、2部のブロック優勝1度を含め、1部への挑戦権を決める順位決定戦には昭和55、58、59、62、63、平成1、3、4年度の8度出場し、その結果として1、2部入替戦への出場は5度、しかし、そのうち念願の1部復帰を果たせたのは平成元年度にチャンスをもたして天理大を破った唯1度だけにとどまった。しかし、この間、昭和60年度には思いも掛けぬ初の3部転落という苦難も経験したが、むしろこれを再起のバネとして、「即2部復帰、続いて1部昇格へ！」を合い言葉に、原点からの再スタートを切った。そして、平成2年度、京大は実に昭和53年度以来11年振りに、1部に返り咲いた。しかし、その年、優勝候補の一角であった京産大を破ったものの、2部に落ちた。

その2年後、私の監督最後の年になる平成4年度は、3回生を主体としたチームであった。優秀な選手を多数擁し、秋季リーグは2部Bブロックで優勝し、1部への復帰が期待された。しかし何としたことか。4チームによる2部順位決定戦で、まさかの敗退、入替戦出場権を手にも出来なかった。平成5年度から監督をバトンタッチすることになっていた小田晋作氏 (S.40.卒業) に、1部復帰をプレゼントして、と思っていたが、恒藤監督から私への場合もそうであったように、今回もそれはならなかった。

平成5年度、唐原先輩から「先例があるから、お前、総監督をやれ」と、命ぜられ、僭越ながら総監督を仰せつかることになった。

小田監督初年度の春季リーグ。先年より年2シーズン制となっていたために巡って来た2部順位決定戦は、京大、近畿大、阪南大、桃山大の熾烈な戦いとなったが、延長戦に入ってから2-1と逆転して阪南大を退けた京大が入替戦出場の最後の切符を手に入れた。しかし、入替戦では立命館大に1勝1敗ながら得失点差で及ばなかった。それから4年経った今、関西学生サッカー1部リーグで覇を競っているのが、阪南大と桃山大である現状を見ると、感慨を禁じ得ない。

4. 幻の京大OB第1号Jリーガー

京大には、かつて極東オリンピックの日本代表に選ばれた名GK・金沢 宏氏 (S.10.卒業、故人) を始め、極めて能力の高い名GKが数名出ている。私の監督時代にその内の2名がいる。その一人は前述の大石雄一君であり、もう一人は平成元年度の副主将であった阪下昭二郎君である。大石君も阪下君も、関西学生リーグの2部にありながら、2回生の時から関西選抜のGKとして活躍して来た。そして、二人とも選抜選手の強化練習に参加して、そこで学んだ事や練習法などを持ち帰って自チームに採り入れ、個人の、そしてチームのレベルアップ、強化に貢献してくれた。

前述の11年振りの1部復帰を決めてくれたのは、阪下君が4回生の年の平成元年度である。そして、就職は特に請われて住友金属工業に決まり、鹿島に勤務するかたわら、当時の日本リーグで活躍した。入社2年目の春、Jリーグ入りを決めていた住友金属ではサッカー部員の一人一人に、雇用関係をプロフェッショナル選手として切り換えてサッカーを続けるかどうかの意思確認を進めていた。阪下君はプロ選手になろうと考えて入社したのではないのでかなり悩んでいたが、ブラジルより世界のジーコ選手を迎えることが決定したのを機に、ジーコ選手と一緒にプレーできるのであればと決心し、平成3年6月22日(土)プロ契約にサインした。

そして、その日の練習で事故は起こった。後方からの縦パスを、走りこんで来たFWがシュートするという練習中、少し深い目の縦パスにGK阪下君が反応してスライディングでセーブに入った時、お互いに避け切れず、阪下君はFWの膝を頭部で受けて昏倒。会社側の素早い対応と、その時地元の鹿島労災病院に必要な医師が揃っていたことが幸いしたが、結果は脳内出血。直ちに緊急手術。一時生死の境をさ迷い退院するまでの半年間、医師団の的確な判断と適切な治療および会社の誠意あるご配慮とサッカー部挙げての献身的な介抱を受け、九死に一生を得た。この紙面を借りて、住友金属工業様とサッカー部を始めご関係の皆様は厚く御礼申し上げる次第である。

それにしても、見通しが極めて厳しく難しかった状態からの回生は、彼の強靱な精神力と肉体があったればこそと思う。それから約1年後、会社を円満退職して帰省。今も定期的にフォロー検診を受けながら、新しいスタートに向かって充電中である。漏れ聞くとところによると、漸く進路も定まったようである。

Jリーグの発足と共に誕生する予定であった京大サッカー部第1号Jリーガーは、こうして幻と消えたが、これからの阪下君の新しいスタートが一日も早からんことを切に願うものである。

5. 最近の若者の気質と京大サッカーの今後

毎年大勢の新入部員が入部し、夏合宿が終わる頃までにかかなりの新人が退部するという図式はいつ頃までだったのだろうか。最近も20名を上回る新入部員がいるが、纏まって目だって減少するという、そういう図式はない。

昭和が終わり、平成に入ってからには特に退部者が極端に少なくなって、部員数は一時80名に達するまでになり、部の運営にも支障を来すことが懸念された。現役の中で希望者を募って社会人チームに登録するようになったのはこの時期である。

また、変化の早い若者言葉は、最近では1学年違うと通じないとか、1年違いでもう価値観が違うなどの現象が見られる。しかし、体育会のクラブに入部したいと考えている学生は、一つには個人主義が進行している現在、クラブ内に友人をつくり苦楽を共にして友情を育み、充実した学生生活を送りたいと願っているからだ、という向きもある。それもあるだろう。もしそうであれば体育会でなくても、学内には結構楽しみながらサッカーをやっている同好会チームがいくつもあり、その中には京都社会人リーグ1部で活躍している同好会もある。そういう同好会チームには、強制されるのも身体を痛めるほど鍛えるのも嫌いだ、サッカーは人一倍好きで、非常にうまい選手が何人も見受けられる。

まだある。以前は大事な試合で負けると、黙って歯を食いしばり、身体全体でその悔しさを表していたが、涙は滅多に見せなかった。10年程前頃からは、そういう時に涙を見せ

ることがあった。その後、年を経るごとに、だんだん悔しさも涙も表面に見せることは少なくなってきたように思う。人によってはケロッとしているように見える者もいる。しかし、だからといって悔しくないのではない。表現の仕方が変わってきているので、見た目だけで評価してはならない。

また最近も、同好会に飽きたらず、途中で体育会に変わってくる選手も見受けられる。これらは、それだけ若者の多様化が進んでいる、ということを示しているのであろう。

往年、諸先輩は輝かしい金字塔を打ち立ててこられたが、その時代と現在の京大サッカーのおかれている環境は全く異なっている。そうした中で、部の中では全員の意思統一を図って、部の伝統を守りつつ、1部復帰、1部定着を目標に努力している。しかし、今一步のところでは目的は達せられないことが多かった。それならば、技術、システム、さらには戦略戦術の考え方を含め、現在学生だけでやっていることの限界を越えるために、コーチ制の導入を図ろう、という声がある。私は決して反対ではない。

既に3年前から、関西学生リーグの2部は3ブロック制になり、2部の各チームは各ブロックで優勝しなければ、1部へのチャンスはつかめないことになっている。OBが念願する1部への壁は、残念ながら現状のままでは、極めて厚く高い。

現役が良くやっていると言うに止まることなく、本当に皆が望む目的を達成させるために、OBは何ができるか、また何をすべきか、を具体的に考える時期に来たと思う。13年間の監督に続く5年目の総監督として、大したことは出来なかったという思いと共に、この機会に、これからの京大サッカー部のあるべき姿について、OBの皆様のご真摯なご討議と引き続きの具体的なご支援を、切にお願い申し上げます。

コーチングスクールへの派遣を



平成5年度～8年度

監督 小田 晋作

長井前監督のご要請に対して、“2年間のショートリリーフなら…”と監督の座を受けましたが、結局は4年間、監督を務めました。

この間「1部への入替戦」「3部陥落」「2部復帰」といろいろのことがありましたが、学生諸君の懸命な挑戦を見るにつけ、“何とか手助けしてやりたい”という思いが募ると同時に、何もしてやれない自分の微力に歯がゆさを感じています。

現在の学生サッカーはまさに「下剋上の戦国時代」の感があり、1部上位の座も1、2、3部の地位も目まぐるしく代わっています。2年前まで王座を争っていた大商大・大体大等が入替戦に登場したり、2部へ入って来たり、典型的には京大と1部挑戦を争っていた阪南大が1部リーグで優勝したり、と枚挙に暇がありません。これは全国各地の高校のサッカーレベルが上がり、大量の優秀選手が各大学へ供給される様になったことによるものですし、今後この傾向は益々強くなるものと予想されます。

京大は94年秋リーグで主力選手の怪我が重なって3部へ自動降格となりましたが、95年春には（当然の事ながら）圧勝して2部へ自動復帰しました。改めて1部への挑戦を行う訳で、恐らく2部上位を争うチームにはなると思っています。しかし、“1部チームに伍し

て戦えるか”ということになると“？”を感じざるを得ません。他大学に比して、入部する素材のレベル不足は今に始まったことではありませんし、如何ともし難い所、対策があるとすればその後の育成方法です。

現在の日本サッカーは、その“人気上昇”と“世界トップレベルの導入”によって急激に底上げが進んでいます。これは個人技術のみならず、コーチングにも言えることで、あらゆる面で科学的な手法が導入されているものと思います。

京大蹴球部は、学生諸君の自主運営でチームづくりを行っていますし、これが良い所でもあります。他大学の監督から、“選手はコーチにいわれる通りやるだけで何も考えていない”という様な話を聞きますと、毎週ミーティングを持ち自分達で考えながらチームづくりを進めている京大生諸君を誇りに思います。又、この自主運営を補強する為、卒業後間もない院生達がコーチとして貴重な時間を提供してくれています。しかし、「強くするには」という観点で他大学と比較する時、現在のチーム強化策は“機関銃に対抗する竹槍作戦”の感は否めません。

私のような者が見ても、ここ2、3年のチームはその技術・戦術等々において早急に解決すべき問題点が多々あります。余りにも多くの欠点があるだけに、たくさんの問題点を指摘してその解決に右往左往させることだけは避けたいと肝に命じてきたところです。最も基本的なことから一つ一つ解決に取り組んで、一年一年それがチームの財産として積み重なっていけば…という思いでコーチにもお願いしてきました。

最後に私が“実現可能な夢”として期待していることを述べたいと思います。それは卒業生（もしくは現役生）の「コーチングスクールへの派遣」です。短期のスクール実習だけでも、外部のトレーニング方法を学ぶことは出来ると思いますし、これを積み重ねていけば学生の練習方法也大い変わるものと思います。何をするにも費用の問題が絡むことで簡単ではありませんが、OB会の支援でこれを実現したい、というのが私の願いです。

戦う若武者頭脳集団よ、翔け！



平成9年度～

監督 久松啓次
(旧姓、森)

70周年の記念すべきこの時期に、現役強化のための監督を拝命することになった。サッカー人生30年で男泣きしたのは、'70年1回生、関西リーグ入替戦で勝利し、悲願の1部復帰を成し遂げた時以外、いまだ経験はない。今回、監督を拝命したのも、今一度感動のドラマ・美酒に酔うべく、他意はない。以下、KIU蹴球部艦隊の進路を再確認させて頂く。

1. 大前提：常時関西リーグ1部でプレーできる体制づくり。
2. 共通テーマ：①ツータッチ & パス アンド ゴー
(攻撃の速さ・正確さ)
②アイコンタクト & オープンスペース
(状況判断力、サイドチェンジ)
③コンパクト & トータルディフェンス

(中盤からのプレス、攻撃的全員守備)

3. その他： 基礎技術・体力のレベルアップ →戦術トレーニングの相乗効果
闘う意志の高揚、精神集中力（モラルの高さ）
全員共通の目的意識を持ったプレー

→楽しいサッカープレー →(結果的に) リーグ1部常在

以上、小生が現役当時、特に根本コーチ（昭和38年卒業、第7代蹴球部長）より指導頂いたエッセンスは、現在でも立派に通用するもので、現役諸君の粉骨砕身、切磋琢磨およびハッスル、チャレンジを大いに期待したい。新スタッフ陣 荒木 茂(S.50.)、永井利明(S.51.)、田中徹也(S.52.)の三氏には多大な犠牲を払ってもらうが、現役諸君と共に一致団結、目標に向かって前進しよう。最後に、諸先輩、OBの方々の各方面からの絶大なるバックアップを、何とぞ宜しくお願い致します。

4 FBと攻めの一つの武器

昭和36年度～42年度

コーチ 瀬戸 進



京都大学蹴球部70周年おめでとうございます。心から御慶び申し上げます。また、70周年記念祝賀会には御招宴をたまわり、身に余る光栄と感激しています。しかも、戦前から西の雄としてばかりか、日本サッカー界への輝かしい貢献には畏敬の念で一杯です。

さらに、この度は留岡さん（S39年卒）より、コーチを担当した時期（S36～42年）における「フォーメーションと京大の戦法」即ち「当時の一般的戦法と京大の戦法とのレベルの関係及び練習方法の工夫」などについて記せとの仰せである。

コーチをお受けしたのが29歳終わりの若造であったが、早30有余年が過ぎてしまった。昭和43年からは大谷大学監督（現在、総監督）として、最近では京大とも関西学生II部で、時に同じゾーンで鎬を削りあっている（長井監督、根本部長、小田監督など）仲である。

果たして、経過した歳月とともに、また、老化の癖ともいふべき、強い思い込み、都合の良い正当化だけが浮き彫りされはしないかと不安である。青春の全エネルギーを注ぎ込み、精魂をぶっつけてきただけに、「あのシュートが、あのタックルが」と、それこそ時空を越えて今体感したかのように鮮明に蘇り、場面が彷彿としてイメージアップしてくる。それだけに、整合性に欠けたものにならなければと思いつつ、「京都大学蹴球部五十年史」（以下50年史という）の確かさに助けを借りて、これからの京大蹴球部のお役に立てるかどうかが疑問であるが、思いつくままに記してお許しを願いたい。

1、京都大学蹴球部との体感的出会い

昭和30年春（東京教育大＝現筑波大卒）に茨木市の府立春日丘高に奉職したが、住まいは初めから京都であった。10年先輩に京都学芸大（現京教大）監督の竹内先生（京教大名誉教授・現奈良産大部長）がおられ、よく紫野の自宅を訪ね時には泊まりこんでのサッカー談義で頭の体操ならぬ「サッカー考察？」をいただいたりして鍛えられた。昭和33年春

から私自身が紫光教員の選手としてプレーするようになり、翌年から竹内監督指名の私設アシスタントコーチとして京学大とも関わるようにもなった。これらから、京大とは、京都及び関西学生リーグの間接的体験ばかりか、自分自身が選手（FB、HB）として公式戦（天皇杯予選）や練習試合などでの直接的な体感からの出会いであった。試合の終わった後など、時に雑談などもした。

その他、昭和35年より京大体育教室に研究で出入りし、翌36年からは体育の非常勤講師になったこともあって、留岡さんから気配り豊かな再三のお誘いを受けている中で、直感的に波長が合うようなので、厚かましくも、押しかけコーチとなった。また、住まいも農学部グラウンド北側の西平井町のアパートであったこともプラスしたと思う（以下、当時、選手であった方々の敬称は君付けとさせていただきます）。

当時の京大蹴球部から直接的に体感し得たものは、いみじくも、浅野君（昭和37年度主将）が50年史の「京都大学蹴球部の想い出」の中で昭和36年度（清水主将）のチームを「～私の経験では最強チームであったと確信している。～」(P,187下4)と述べているように、個々人のベーシックテクニック及びフィジカルフィットネスでは、お節介屋の教え魔にとっては最高に魅力ある集団であった。

2、近藤邸は京大サッカーのアカデミア

昭和36年度（清水主将）からコーチするに当たり、かつて対戦しての体感的な受け止めに素直に表現すれば、一つ一つの場面では「当たって、蹴って、走って」という点で、個々人の能力や闘争心は抜群であり、力の出し惜しみをしないことに感服した。それだけに、90分間の長丁場でのスタミナの養成ばかりか、配分が課題であったろう。

しかし、それが、個人のベーシックテクニック及びフィジカルフィットネスのレベルで終わっていて、チーム機能、ゲーム機能に練り上げられていない。「つい、勿体ないなあ！競技場の戦術的領域及びポジションに適ったゲーム戦術？を身につけたらなあ」と。

失礼な言い方であるが、自分の思いのたけでタックルし、思いのたけで蹴っている（ほとんどがインステップキック）から、BKラインからならばHBの頭越して前線へ（ボールコントロールに手数がかかる）、HBからならばゴールラインを突き抜けんばかりの、前へ流れる生きたボールだけにFWはスピード豊かであっても追いつくのが精一杯で、周囲の状況に合わすなど及びもつかないほど。（決して、そんな状況だけでI部リーグを維持できたわけではないが）そして、単純に、俺と同じ国立育ち、キット俺以上に「しつっこく」しかも「自己探求型の頭脳集団」であろう、と思った。

野球でも最近では「打って、投げて、走る」だけでは「ゲームは作れない」と言われている。毎日新聞の岩谷俊夫氏は「大学サッカー部めぐり」(50年史P,202～203)の中で、「～私はサッカーで京大が孤軍奮闘しているのに声援を送りたい。サッカーは小手先の器用さとか、一人や二人の名選手がいてもどうにもならないスポーツと強調するためのよい材料と思って（つまり頭腦的なものが多分に支配する）自慢し、誇りにしたい」と結んでいる。

北白川別当町角の近藤邸2階は主人不明の「京大サッカーの頭脳訓練とイメージトレーニングのアカデミア」であった。私にとっては住まいに近く、幸いであった。昭和36年度（清水主将）チームの近藤邸での初めての幹部会だったと思う。清水主将、東川、中丸副将を囲んで主力メンバー全員での話の中で、リーグ戦（6チームで秋季のみの最下位入替戦制）での勝負の仕方ということで、「引き分け」をどう評価するか、と問うた時に誰も

考えていなかったことに驚くとともに、勝ち・負けに潔かった。

「リーグ戦の引き分けは勝ちに等しい」ことから、ターゲットチームを絞り、その実現にシステムを、ポジションの人材の構成をどうするか?から議論した。

清水君のセンターハーフ (CH) を軸としたディフェンスシステムと資質・役割；①CHは守備のリーダーで、頭脳の回転が早く(判断と決断)、戦術的指示力及び信頼がある。②システム的にはCHの両脇・背後を最短距離でカバーリングできるHBがもう一人必要である。③技術的には両者とも真ん中を自陣ゴール前に抜け出した選手にとどめの潰し(タックル)、或いはコペレ球をクリアフィードできる。④自陣ゴール前の高いボールに競り合える背の高い選手(180cmぐらい)が2枚欲しい。⑤HBの一人はCHの前で左右に振られてゾーンディフェンス(ワイパー的)ができ、コース限定(現ポランチ・ソコの)できる。⑥両者が相互にカバーリングし合えるなど。結論的には東川君が適任である。しかし彼は「FBしかしたことがない。時に外からも攻められる手がある」として固執していた。そこで、ゲーム戦術とシステムの戦術的特徴の二つを指摘した。

一つにはFBもCHもHBもバック、即ちディフェンスに重みがあり、他のポジションの選手に補ってもらうことはできない。二つにはFBもWFも単純に平面的に考えても、自陣ゴール(FB)または相手ゴール(WF)に対して共に最も長い距離を動かなければならない。となると、いくら有能な東川君でもFBでは自陣ゴール前に対して最短距離にあるCH清水君をカバーリングすることは、わかっていても物理的に不可能ではないか、の2点であった。これらの基本的考え方の原則が、後に、毎日新聞岩谷氏が「大学サッカー部めぐり」(50年史P,202下)の中で指摘している「～選手自身が自分の力を過大評価しない。毎年守備力の強化から再スタートするという基本方針に貫かれている。守備陣は味方同士の走力、足技などの力量の確認から、相互の位置関係、距離方向の結びつきを基本線とし、～」と言われている原点であったのかもしれない。

昭和36年度のリーグ戦の内容については浅野君(37年度主将)の「京都大学蹴球部の思い出」(50年史P,187～188)に詳細に記されているが、1分3敗を受けての最終戦対大経大では左インナー浅野君のヘディングシュートによる虎の子の1点で勝ち、しかも5試合で唯一の得点であり、1勝1分3敗で第4位が何よりも如実に物語っている(サンケイ新聞賀川 浩氏のリーグ総括の記事に「京大5試合で1点の4位」とあったような気がする)。

3、4 FBと4シーズン連続の3位

標題に掲げたことを後から屁理屈つければ、I部で辛酸を嘗め尽くした戦士の4回生が最も多かった昭和37年度組がその土台を作りあげたといえよう。攻めに関しては「したたかな知恵者」の浅野主将、東・根本副将を中心に「一つの武器をもって徹底的に攻め抜くことに主眼を置いた」(50年史岩谷氏P,202以下)。浅野主将に言わせれば「馬鹿の一つ覚えの片肺飛行」(50年史P,189中)となる(攻め詳細後述)。守りについての最後の砦はクールなGK榊君、ポーカーフェイスの巖窟男両FB岩城君・樋口君トリオなどの面々であった。

朝日新聞戦評大谷氏(50年史P,186)の記事に「戦前3連勝の記録を残しただけでなく、常に関学のライバルであった京大は、戦後23年に3位を占めたのが最高だった。以来14シーズン目に得たる3位である。4回生が多く、大いに頑張った。守備陣の闘志に満ちたプレー、攻めては東がつないで唐津の軽快なさばきを根本等が生かした。～」とある。先に挙げたことをよく説明していると思う。

手探り状態の昭和36年度であったが、以後の京大ディフェンスラインの真ん中は同じシステムを踏襲した。年次による選手の個性差で、多少の味の違いはあったと思うが。昭和40年度（伊藤主将、水谷・橋本副将）のときに朝日新聞戦評大谷氏の記事（50年史P,199）に「～塚本を中心とした4FBは深いタックルでよく守り～」とある。私の知る限りでは当時の記事としては初めて「4FB」という新しいディフェンスシステムの用語で戦評している。

手前味噌な見方であるが、昭和37年～40年の4シーズン連続の3位。その間にあって、38、39年と関学を2連破し、関大とは39、40年と2年続けて引き分けた。当時の関西学生リーグは関関の全盛時代とあれば、朝日新聞大谷氏は「～リーグの番狂わせの筆頭である。～」(50年史P,196左下、39年)と戦評し、毎日新聞岩谷氏は「～ついに関関のコーチ連をして『どういう教え方をしているのか。どうしても京大だけは苦手だ』と言わしめた。～」(50年史P,202下「大学サッカー部めぐり」)とある。

以上のことからわかるように、ここ数年来の京大ディフェンス・システムが専門家の目にも「スーパースystem」でも、「ボルトシステム」でもなく、ましてや「3FB」とも違う、と目新しく映ったのかもしれない。大谷氏は戦術やシステムの時代的推移の研究者でもあっただけに、新しい用語の「4FB」という表現にも首肯させられる。(S39年東京オリンピックを中心に日本でもスーパースystem的4-2-4型のチームが多くなっている)。その過程を少しくみると、36年度はCH清水主将・LH東川副将。37年はCH時森君とLH川野君。38年はCH時森君(主将)、LH川野君(副将)、39年はCH水谷君が最も完成度も高く、左サイドのFBの背後への突破パスやスルーパスは川野君がカバーリングし、右サイドは時森君がカバーリングするという実に熟度の高い見事なまでの分担であり、コンビネーションであった。朝日新聞戦評大谷氏の記事(S39、50年史P,193下)に「～今年の関西学生リーグでの京大は勝っても負けても1点だけ点を入れた。そして1点も取れない時は負けている珍しい記録を作った」。39年はCH塚本君(42年主将)・LH水谷(40年副将)。40年もCH塚本君・LH今井君(41年主将)と水谷君が軸であった。39年度(唐津主将、小田・西副将)の朝日新聞戦評大谷氏の記事に「京大は関学に引き分け、～前年に次ぐ対関学は連勝だが、関学を悩ませたのは塚本を軸とした守備陣の密着マークの成功、守備陣の出足のよさ、それにあの粘り強さにあったと言えるだろう」(50年史P,196左下～右上)。さらに「今年の3位は昨年に続いてであった。しかも対甲南を除いて1点しかとれず、1点以上を許さなかった。ところが上位に負けなくて、下位に敗れるという珍しい記録を作った」(50年史P,196右下、対甲南大0:3)とあり、40年については先に述べた通りである。

以上のことからあえてディフェンスの軸になった2人のコンビネーションのタイプを分類すれば、36年の清水君・東川君と39、40年の塚本君・今井君と水谷君らは同じタイプで、現在の「ダブルセンターバック型」といえよう。37、38年の時森君・川野君は現在の「ダブルボランチ型」を最終ディフェンスラインで、GKも含んでコンビを採った。

こう書いていて驚いたことの一つに、ディフェンスの軸となったものはいずれも主将と副将という、歴代チームの首脳であり、HBはいずれも左であるが、私はまったくと言っていいほど意識はしていなかった。現役幹部のチーム構築の判断とそのポジションを背負う選手の資質の的確な診断を信じて尊重したように思う。

これらの判断基準は36年度の近藤邸での初幹部会の①～⑥の内容が主軸であったと思う。竹内氏(当時京学大監督)は「コーチ学(サッカー編)」(逍遙書院 瀬戸共著P,8)の

中で実例として京大チームを挙げている。「普通4-2-4型は1人を最後に残すスイーパーを置く場合とそうでない場合があるが、少なくとも2名の活動的なメンバーがいるときに機能を発揮する」とし、「京大チームは個々のメンバーの能力を見た場合には、とても4-2-4のシステムをとるだけの技術は持っていなかった。しかし、チームの狙いは1部在位にあったから、方法として防御に重点をおいていた。それゆえに4-2-4型（当時の瀬戸コーチは京大式という）が必要且つ必然的にとらねばならなかったシステムで、それが成功したよい例である」と指摘している。

なお、中盤で一番活動量を要求される縁の下を支えた面々を思いつくままに挙げると（俺が抜けてるぞ！という方々に許しを乞いつつ）、36年は浅野君、東君、川野君、岩城君らで、37年になると、浅野君を軸に、小田君、時森君、大家君らとなり、東君がIRとして攻めにかかれるようになった。38年は小田君、水谷君、今井君とほぼ固定されつつあったように思う。39、40年は、今井・中野・林君の41年首脳トリオであった。39年は小田君（副将）が怪我で第2節以後残念であった。

以上のように、中盤の支え役は概ね若手ではあっても後に首脳部になる面々が多かった。チーム構成の基本は期せずして最終のディフェンスラインは、ほぼその年次の幹部で固め、中盤は将来の幹部候補生を鍛えるという構図になっていた。

4、賢明な反復練習と攻めの一つの武器

サッカーの本家、英国では、「フットボール」といい、中国ではサッカーチームを「足球队」というように、「ボールを足で扱う技」である。ところが日本では「蹴球」となり、残念ながら「蹴っ飛ばしボール」となった。京大を「試合でのプレーに必要な足の技」の視点で見たとき、「スローダウンした状況でのボール処理は然るべき水準」にあった。しかし「動きの流れの中でボールタッチし、タッチした所から移動した地点でボールコントロールを終わる」さらに、「動きの流れの中でパス、クリアフィールド、シュートなどへの連動」がギクシャクして、流動性とリズムを欠いていた。

失礼な言い方だが、立ち止まってボールを止め、ボールを止めたままで周りを見回し（ニラメッコ、コココーラボーイ）次への展開やドリブル移行する。これではクラマー氏流のルックアラウンド、シンキングピフォアにはならない。

以上のことをディフェンス側から見ると、ファーストボールタッチではディフェンスカバーゾーンの中であるが、タッチした所から移動することで初めのカバーゾーンを崩され（だからトラップする瞬間をタックルせよとなる）、あらためてディフェンスがカバーゾーンを作り直さなければならない。

私の現役時代の監督の口癖は「フライシュテレンせよ（立ち止まるな、流れよ）」であり、「スペースにファーストタッチで出よ」であった。これは一人抜いたら余裕のあるうちに次のことをせよ（パス、シュートなど、捏ねるな）であった。

要はスピードに乗ったままの身の周りのボール処理の速さ（ランニングタッチ、ランニングキック、パスなど）とボールの自然の流れを生かしたボールタッチの手数の省略である。

クラマー氏は「ハイスピードランニングとスローダウンのタイミング」を強調した。これはマークメンやボールには素早く寄れ！だが、マークメンとすれ違いをしない間合で追い込み、ボールをコントロール（引いたり、衝突しない）できる間合でスローダウンすることである。

岩谷氏（毎日新聞）は「サッカーはインサイドキックに始まってインサイドキックで終わる」と言った（小田原中学2年末の春合宿で、当時早大主将IL^⑩岩谷氏に御指導を受けて以来の師弟関係）。

インサイドキックの効用はいろいろあるが、腰の座った膝の低い安定感のあるバランス。ルックアップして周囲がよく見える。正確で丁寧なパス・シュート・クリアなど。スタンディングタックルに強い。密集の中で足下の競り合いに強く、怪我が少ないなどであろう。華麗さやトリッキィさはないが、鈍臭くても力強く逞しいサッカーを目指して、インサイドキックをベースにしたいろいろのバリエーションを徹底して反復した。

（以下練習内容については項目名だけで具体的要領は省略する。現役にはお許しを乞う）

1) 賢明な反復練習のベーシック

単純で何の変哲もない退屈なことを、根よく徹底して反復できた基盤は何か？ 最も感服したことの一つに、当時スポーツ会館はグラウンド入口の左側で、クラブボックスは右側（現在地）にあり、距離的には僅かであった。合宿でモーニングトレや練習に出るときには合宿所で普段着に着替え、クラブボックスで練習着に着替えることを全員が平然として行い、誰一人としてパジャマ姿でうろつくものがいなかったことである。

これをヒトの脳の3段階の発進区分からみると、第1段階はヒトとしての基本的生活習慣＝躰は0～3歳で備わり、しかも保育者のよいお手本によるといわれている。闘争心の原形（たくましさ）＝noble-minded及びself-controlの原風景を見た思いであった。

二つめは「お互いが良い鏡になり合った」ことである。よいフォーム、及び要領のポイント、最高の技術・戦術・システムなどの場面（ピークパフォーマンス）をイメージアップして、自分でも十分にできないが、練習中に学年を越えて指示し、指摘し合ったことが徹底した反復練習を支えたのかも知れない。例えば、①マークメンへの対応の構えで、両手を後ろ手に組んでの前進斜走・バック斜走では足はクロスステップでも、胸の面は相手に正体（上体と下肢の捻り）させてのピッチ走である。「上体を捻れ、胸を横に向け過ぎるな」とか方向転換のステップで「鋭く踏み出せ（前進）、バックでは大回りするな、膝を落としてワンステップで引け」などと誰ともなしに指摘する。②2人組のバックパス－リターンパスでも、バックパスの後、レシーバーは例えば右斜めへ走れば首も右後ろへ回し、パスナーの自分の背後へのタテパスにタイミングを合わせて、左足から右斜め前へ鋭角的に踏み出して方向転換し（ボールに背中を向けたまま前回り）ボールをコントロールする。「タテパスはダイレクトだ・止めるな」とか、「タテのスペースへ出せ・レシーバーの背中側だ、足下に出すな」などと声が飛ぶ（FBとWFのコンビなど）。

最近のスポーツ界はメンタル・タフネストレーニングが花盛りである。かつては他者催眠が中心であった。最近では自律訓練や自己催眠でピークパフォーマンス（自分の最高の記録・フォームや最高技術・場面など）を如何にイメージアップしてイメージーションを高めるかであり、サイキングアップ（興奮を高め、闘争心を高めるなど）するかであるという。浅野君（37年主将）は50年史の「想い出」の中で36年対大経大戦の虎の子の1点（5試合で1点4位）について「～バーに当たりはね返ったところに走り込んでいた私の前にボールが突然あらわれた感じで、決勝のヘディングシュートとなった～今になって思えばあの走り込みがイメージーションであったのかと～」（P,188）。

38年関学との練習試合で2対4で負けたが、取られた4点は「チームの約束ミスの失点

で、2ヶ月でそれを消せば怖くない。こちらの点はわかっているでも守れない崩した得点だ」と、暗示とイメージアップした。結果は関学に昭和16年以来の勝利となった。

以上のことから分かるように、京大サッカー部員のメンタル・タフネスは既に備わり、優れていた。

それが試合中にも「後ろからの声は神（天）の声」と言われるように、的確な指示・コーチング（現在流行）が既になされていた。毎日新聞岩谷氏をして「～相手が攻め疲れたときに押し上げるように一つの武器をもって徹底的に攻め抜くことに主眼を置いた。この反復練習は賢明な京大生の頭を通じて入り込み、～」と表現させている（50年史P,202下）。

2) スピードのスタミナとインサイドキック

「走り勝つ」ということで東川君（36年副将、50年史P,185）は「～走るサッカー～要は試合開始後15分間に発揮できる走力を90分間持続させるだけの体力があれば、少々技術的にまずくても倒せると思います。～」と述べている。

事例1、3人組フリーグラウンドの2対1 ボール回し（1回1～3分休憩1分）；オフエンスの間隔7～8mでツウタッチまで、DFは同一人が所定時間続け、3人とも交替してDFをする。インターバルトレーニングで3分×3回がある水準でクリアできたらI部リーグに通用する目安である（当時の京大）。（私事で恐縮だが、現大谷大では2分が限度で、通常1分である。残念ながら3分の2レベルであり、II部3位が限界で呻吟している）。

このためのプログラムとして、①2人組アコーディオンのインサイドキック（1～3分）；2人の間隔は10～15mからで3拍子のステップを使って首を回してルックアラウンドし、左右交互に1歩ずつ近寄り、1mぐらいになったら再び開く。②2人組振り子の足踏み替えインサイドキック（1～3分）；間隔7～8mで左右に振り、右へ行けば右立ち脚である。③2人組ボックスのパス（左右回り各1～3分）；身辺のボールをスピードを落とさないうで、ステップによりボールタッチの手数を省いてボールコントロールする。パスは直角に出し、ボールは正方形に回る。パッサーは対角線を走り、ボールの前を通り抜けて前回り（ボールは一瞬背後）か、ボールの上を斜め前は飛び越してのダイレクトパスの連続（実戦場面ではWFのセンタリング時などで、例えばLWが左タッチライン側へのボールを内側から外へ追って右側へセンタリングするなどである）。④3人組トライアングルインサイドバックパス（左右回り各1～3分）；間隔は7～8mで例えば左回りで3角形を保って緩走しながら、後ろ向きに右回りジャンプターンで左立ち脚で右脚でバックパスする。ボールは右回りで後ろへ、パスコースは後者の外側に合わず。以上の①～④の足踏み替えのダイレクトパスの後に2：1のボール回しをした。

事例2、7人組スライディングワンダーリング（タライ回し）；隣との間隔7～8mで6人が円を作り、周囲の者は1個のボールを左（右）回りで順にパスをし、円の中に入った1人はボールを持っている足下に順に連続してスライディング（後足内股にボールを当てる）、6回滑って1周したら逆回りする。12回のスライディングの所要タイムが45～55秒をクリアしたら、I部で通用する目安である。水谷君（40年副将）は最も速い1人でほとんど45秒をクリアしていた。

事例3、2人組の四つん這い股ぐり8の字（フィジカルトレーニング・1分）；1人は両足を開いて立ち、片方は四つん這い（膝をつかない）で股の間を8の字型にくぐる。1

分間で15回以上をクリアすればI部で通用する目安である（現大谷大では大部分が12～13回ではII部の中位でもいたし方ない）。

事例4、ゴールからゴールのドリブルダッシュのシュート（10往復）；自分のポジションの領域をドリブルし、相手ゴール前で疲れても正確に蹴れる、シュートはゴールとの距離よりもリズム・タイミングの良さで蹴る。

以上の事例1～4などをベースに、東川君の指摘したスピードの持続性を高めた。

3) 不器用な足技をカバーするパスの省略法

事例1、2人組のバックパス・リターンパス（前出②）；実戦場面ではWFとFB（HB）とのタッチライン沿いの飛ばしの突破パスである。例えば①BKからタッチライン沿いに引いてきたWF（ハーフライン辺）へフィードし②FBは間合のためを作って後ろへヘルプする。③WFは斜め前の内側へドリブルしながらバックパスし④FBはダイレクトでタッチライン沿いへ突破パスを出す。⑤WFはバックパス後もFBを斜め内側へ引っ張ってDFの背後のタテヘスペースを作り⑥リターンパスのタイミングを見ながら再び方向転換して斜め外側へ走ってボールコントロールする。即ち⑦WFは2辺を走ってFBを崩す。なお、ボールコントロールは先に述べた事例1・③のボックスのパスのステップの要領でボールタッチの手数を省く。

事例2、WFとIFとのトライアングルパス（2等辺三角形の長め）。

事例3、CFへのタテパスから相手FBの背後への長めの振りのパス（CFはボールに寄りながらダイレクトで振ることもあるが、足下へタメるかバックストラップからの振り）。

4) 一つの武器で徹底的に攻め抜く

以上に述べたスピードの持続性の事例1～4やパスの省略法の事例1～3を総合した実戦場面の姿を専門家の戦評の年次的推移から見る（概ね50年史朝日新聞大谷氏による）。

37年（浅野主将）「～4回生が多く、大いに頑張った。～攻めては東（IR）がつかないで唐津（CF）の軽快なさばきを根本（RW）等が生かした。ゲームの感（勘）どころを掴んでいた。～」(()内は補足)。浅野主将は50年史の中で「～右サイドから東-根本のコンビで攻め込み、センタリングを上げ、左サイドから伊藤-浅野及びセンターの唐津が突っ込み得点を狙うという片肺飛行というのか、馬鹿の一つ覚えというのか、～」とある。

38年（時森主将）「3位を守った京大は7人が卒業して大痛手を受けていたのだが対関学戦では、CF唐津を軸に、LW伊藤が活躍するなどチーム全体が積極的、～」(関学に勝つ)。左サイドからの徹底した突破であった。

39年（唐津主将）「～唐津（CF）のキープとさばきはなかなか侮れぬものだった。対大経大にはそれのみにたよって0-1で負ける結果を招いたが、OL伊藤の突進が加わった対関学戦は貴重な1点をものにすることができた。～」38年と同様に左サイドからの突破であった。

40年（伊藤主将）「京大はFWから唐津の抜けたのは響いていたが～OL伊藤のドリブルを押し立てて林、今井らも活躍してよく3位を保った」。さらに「京学大とは本年に入って3戦してどうしても勝てなかった相手であるが、リーグ戦では少ないチャンスを生かして勝った。中盤では京学が優勢だったが～京大は伊藤（LW）がいい所で好パスを送りこれがすべて得点に結びついた。（2:0）」(()内は補足)。38～40年は左タッチライン沿いの突

破である。

5) 相互の位置関係・距離方向の結びつき

事例1、6人組T字4対2

オフェンス4人とディフェンス2人で、オフェンスはボール保持の両横に水平のヘルプの手を作り、1人はタテパスを受けられる手を作り間隔は7～8m。ディフェンスの1人はボール保持者をワンサイドカットし、受けの后者はタテパスとワンサイドの空いているヨコパスをゾーンでマークする。ディフェンスはワンサイドの空いている方へボールがパスされたら後がマークに出て、前はバックアップして出入りを忠実にする。ワンサイドカットされている方へパスされ逆を取られたら前が振られてマークするが、後がコーチングする。

事例2、ゾーンの3対2

グラウンドを3領域にタテ割りし、ゴールを使つての攻防で、オフェンスは門にボールを通すことからシュートまで。ディフェンスはGKとのコンビも含めて、マークの3原則と事例1と同じくマーカージェンジの出入りか、前が振られるかのコーチングをする。

以上のことを基本にディフェンス相互の距離感、マークのスピード、方向の基本線をトレーニングした。

最後に、現役に役立つ内容には程遠く恐縮しています。

紙面をお借りして唐原さんを始め歴代監督さんに我侭一杯やらせていただきましたことを感謝しています。また、練習に合宿にお力添えいただきました深山さん、小山さん、長井さん、塩路さん、大木さんありがとうございました。「幻のゴールキーパー」といわれた金沢さんがヒョッコリ練習にみえられた時、無理を言ってゴールキーパーをお願いした。噂にたがわず、左上角のシュートに文字通り幻かと思える華麗なフィステイニングを実演して下さいました。その鮮やかな幻映は私の指導者としての財産です。

自分が現役時代に庭とした神宮競技場（現国立競技場）へ濃青のユニホームの現役が乱舞する日の近いことを念じています。

全京都大学蹴球部の限りない恩愛に心から厚く御礼申し上げます。

IV. 外から見た京大サッカー

ヘディング以外にも頭を使って

日本しかやれないサッカーの創出を！



ローマ日本文化会館館長 西本 晃二
(東京大学ア式蹴球部 前部長)

京都大学蹴球部、創設70周年おめでとうございます。

私共、東京大学ア式蹴球部でも、数年前、本拠地を御殿下グラウンドから農学部グラウンドに移すに当たって、創部以来すでに70余年を経過していることに思い至り、時の流れの速さに驚いた事がございました。京大と東大、おたがいに日本サッカーの歴史の中で、共に長く生き抜いてきたなど、感慨なきを得ません。ことに近年のサッカー・ブームの増大は、我々がグラウンドを走り回っていた頃と比べると、まさに隔世の感があり、Jリーグの誕生とも併せて、サッカーの主流が、学生スポーツから、プロの時代へと移りゆく潮流を、ひしひしと感じさせます。

これはまた自分が、たまたま仕事の関係で、ローマの日本文化会館長を押し付けられ、サッカー大国イタリアに住んでいることで、一際強く感じるところであります。なにせイタリアは、目下ドイツと並んで、ヨーロッパで一、二を争うサッカー大国であり、セリエAの試合を見に行くと、その旨さに、思わず唖ったり、溜息が出るほどだからです。これに比べて日本のサッカー、特に学生サッカー、その中でも京大や東大のプレーは、技術面で比較したところで意味があるわけではありませんが、全体的なプレーの仕方や、試合運びの中で、想像力（ファンタジー）がやはり欠けているように思われます。

どうしてそうなるかには、いくつかの理由があるでしょうが、やはりいちばん大きいのは、わが国のスポーツが、「体育」として、学校で指導され、教えられてきたことと、無関係でないように思われます。個々の選手が、自分で考えて、オリジナルなプレーを展開し、それが他のチーム・メイトにも伝わり、型に嵌らない、一瞬の状況に即した試合運びになって行くべきなのに、一から手取り足取りで教えてしまうので、プレーが受け身になり、意外性のあるゲームが生まれないのではないのでしょうか。ただこの事は、現状では、選手が大学に入ってくる以前の、小・中・高の段階で、学校ごとのコマ切れ指導の結果であって、大学でとやかくいっても始まらないという面もあるのですが、それでもこの基本を意識して、毎年のチームづくりをするか否かで、手遅れながらも、可能な限り面白いサッカーをする方向に持って行けるかどうか決まると思います。その点、京大のチームづくりは、伝統的に専任の監督をおかず、選手同士の話し合いの中からゲームの組み立てを編み出しておられるようで、好ましく思いました。ただし、日本の伝統的な部活動の型を、今一つ脱けておられず、それが僕が東大の部長をやっていた10年間、我々の側には平林君、吉田君という、上記の事情を十分心得た、東大には過ぎた監督がいたこともあって、体力や球捌きの点では京大が東大を上回っていたこともしばしばだったにも拘らず、最後の年に一敗しただけという、分不相応な戦績を残す事に繋がりました。

京大が、そして東大も、さらには日本のサッカー全体が強くなるためには、ヘディング以外にも頭を使う事と、もう一つ、これだけ情報社会になったのですから、国外の試合を楽しんで観て、国際的にも通用する、それでいて日本しかやれないサッカーを創り出すのが肝要と考えますが、いかがでしょうか。

(ローマにて、1995年6月)

定期戦を通して見た京大サッカー



同志社大学体育会サッカー部

監督 古川 克巳

大正14年に創部されて、70周年を迎えられた京都大学蹴球部に心よりお喜びを申し上げます。また、長年に亘って伝統ある部活動を支えてこられた、歴代部長先生をはじめ卒業生や在学学生部員の皆様に敬意を表します。

私達、同志社大学体育会サッカー部と貴部との定期戦は50回を数える迄になり、我が部の歴史においても、1年に1回のイベントとはいえ、重要なものになっています。正直申し上げて大学在学中選手として定期戦に出場した頃は、単に勝利や試合内容の質を求め、勝負にこだわったものでした。当時(昭和36年～40年)、2部リーグの同志社にとって1部リーグ上位校の強い京大に良い試合をすることが、その年の秋のリーグ戦を闘う上に大きな励みにもなりました。

京大サッカーは国立大学特有の徹底したマンツーマンマーキングで、私達はヘビに睨まれたカエル状態でした。一度相手からボールを奪うと前線への速いパス出し、その後のすばやいサポート、歯切れのよいダイレクトパス、不成功に終わるやまた執拗なディフェンスにと、まさにサッカーの原点とも言うべき運動量の多い攻守の切り替えの速いサッカーでした。特に私の学生時代にはその傾向が強く、加えて必ずといっていい程、根本氏、唐津氏、伊藤氏、小田氏等々の毎年1・2名旨い選手が中盤あるいは前線に位置し、バランスのとれたすばらしいチームでした。このようなチームを年々つくってこられることに、強さの秘密や伝統の深さを見た思いをしました。

私が同志社大学卒業後間もなく監督に任じられて30年を超えますが、最初の10年間位は、無我夢中で強化に追われ、やはり学生時代と同様の意識で勝敗にこだわっていたように思います。しかし、京大のコーチングスタッフや須藤一夫氏(S.31. 卒業・YTV勤務)や長井博氏(S.32. 卒業)をはじめとするOBの皆様方が、自主的な活動としてサッカーをしている学生を、熱い眼差しで見守られている様子を見て、私の指導観も徐々に変化して来たような気がします。

定期戦のルーツはイギリスのパブリック・スクールでのハウスマッチ(寄宿舍対抗の試合)に求めることができます。19世紀初頭以降、イギリスのスポーツを代表するサッカーにおいては、プレーヤーはもちろんのこと観衆も含めた関係者が敵味方を超えて「よい試合」の実現に共同で協力することが、むしろ勝敗を争うことよりも大切なものでありました。また、周知のこととは思いますが、当時の各パブリック・スクールでのフットボールは、自治を尊重し自主的に制定し、それぞれ異なったルールで行われ、プライドの高いものでした。

このような中で育まれた「社交の精神」「自主・自治」は、Jリーグ色の強い現在の日本において、今や学生サッカー、とりわけ各大学間の定期戦のみに存在するものではないでしょうか。京大 vs. 同大定期戦は学生サッカーの競技レベル向上はもちろんのこと、人格形成を図る上で大いに寄与したことを思うと同時に、今後100周年を目指してお互いに努力したいものです。

宿敵京大蹴球部



大阪大学サッカー部

部長 熊谷 貞俊

東大ア式蹴球部の現役時代から、阪大サッカー部部長としての現在に至るまで京大は常に打倒の目標とする宿敵である。70年史に寄稿させて頂く機会を得て、このような立場の人間から見た京大サッカー部の印象などを書かせて頂く。

現役時代に戦った京大は、昭和30年代からの栄光の時代に築かれた組織プレーと個人の強さがうまくバランスした典型的なヨーロッパ型のチーム（もっとも南米型のサッカーなど当時の日本にはなかったが）であり、パス・アンド・ゴールの忠実な繰り返しと、その速さにはさんざん悩まされた。現在でいうオフENSIVのポジションであったが、ボックスの上がりの速さとマークのきつさは印象的で、なかなかシュートレンジでフリーにはさせてもらえず、京大戦は点の入らない消耗戦であった記憶が残っている。試合前のアップがまた猛烈で、真黒な瀬戸コーチの号令のもとで真黒な連中が果てしなくターンを繰り返すのを横目で見て、少々うんざりさせられたことも思い出す。昨年の東大定期戦で、両軍の比較的のんびりしたアップとスマートな選手達を見て、我々の頃との違いを強く印象づけられたが、これも時代の流れか。

当時の京大のようなサッカーが、筑波大学は別として、国立大学サッカーの一つの見本というか手本として、現在に復活できないものかという思いが強い。

さて、ここ数年来、関西2部ブロックで京大と戦っているが、昨年の引き分けを除いて、勝星はない。好調時の京大は、バックラインが強固であり、中盤の前線への進出が果敢である。これにボックスのサイドラインへのオーバーラップが絡むと相当な破壊力を発揮する。一昨年のリーグ戦で、タイムアップ寸前に阪大の2点のリードをはね返し引き分けに持ち込んだ試合など、京大サッカーの伝統を思い起こさせるものであった。敵ゴールへの殺到とバランスを崩しながらの執念のシュートなど、オックスフォードブルーの伝統のユニホームにふさわしいプレーは今も健在である。

時代は変わり、サッカーにまつわる情報や知識は氾濫していても、このようなプレーを可能にするには、やはり基本練習の繰り返しが一番大事であると思う。個人の強さ、速さ、正確さを少しでも向上させることを措いて他に、組織プレーの有効で、相手ゴールを割る最終目的を達成する破壊力の発揮はあり得ない。京大蹴球部創立70周年をお祝いするとともに益々のご発展を祈念し、あわせて国立大学サッカーの隆盛を夢みつつ寄稿文といたします。

京大サッカー部ますますのご発展を！



大阪商業大学サッカー部

監督 上田 亮三郎

京都大学サッカー部70年史に寄稿させていただくことを大変光栄に思っております。

大阪商大サッカー部の監督として36年目を迎えています。関西学生サッカーの歴史を振り返ってみます時、京大サッカー部の存在感の大きさと伝統の重さをひしひしと感じます。今更申し上げるまでもないのですが、サッカーというスポーツは、個々の持つ技術や精神力や体力を組織の中で有機的に活かし組織力としてまとめて行く創造性のスポーツであり、これがワールドスポーツである所以かと思えます。

即ち、何時、誰が、何を、どこで、どうするか、という判断がもっとも大切なポイントになります。従って、私は「サッカーは人生の縮図」だと思っています。

我々はサッカーから人生の様々な生き方を体験学習していると思えます。例えば、「簡単な事、僅かな事の積み重ねの重要性」、「常に感謝の精神で行動する事の大切さ」、「人間の価値は苦境に直面した時に決定する」、「正しい状況分析からの勇気ある決断と行動が勝負を決定する」等々、全て人生の勉強かと思えます。

まさに京都大学サッカー部の精神と伝統はここにあり、関学、関大とは異なった意味で共に関西学生サッカーを、日本のサッカーを支えて来ていただいていると確信しています。

欧州や南米と異なって、日本のサッカーは教育の中で支えられ発展して来たということに我々は良い意味でのプライドを持って、大いに将来を期待したいものです。

サッカー界から政財界を始め各界の素晴らしいリーダーを輩出して来た京大サッカー部の歴史と伝統に敬意と感謝の念を表し、今後益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

基本を忠実に行うことができるチーム



関西学院大学サッカー部

監督 阿部 洋夫

この度、京都大学サッカー部が創部70周年を迎えられましたことに、心からお祝い申し上げます。また、厳しき条件のなか、素晴らしい歴史と伝統を築いてこられましたOB・選手の皆様に深く敬意を表します。

“サッカーにとって最も大切な要素 90分間戦い抜く強い意思を持ち、ボールを取られたらすぐ取り返すという基本を忠実に行うことができるチーム”これが現役時代から現在に至るまで私が持っている京都大学サッカー部のイメージです。私が現場に戻った1988年頃から暫くよくゲームをしましたが、チーム力が上であっても楽に勝ったことは一度もなく、本当に嫌なチームでした。

現在、2部で苦勞されておられますが、この伝統はいまだ引き継がれていると思えます。

ただ、長年1部から遠ざかっているためか、目標を低いところに置いている選手が多いのではないのでしょうか。戦術の理解力とか集中力という点では他のチームに比べても勝っていると思います。それに、いい素材が集まっているといっても相手も学生ですから、選手としての経験とか、サッカーに対する考え方にそんなに差はないでしょう。工夫とか努力次第では限りなく近づいていくことはできるはずです。

いい訓練をして、一日も早く京都大学サッカー部が復活し、関西学生サッカーを盛り上げてくださいますよう切に願っております。

この輝かしい歴史を綴る70年史に寄稿させていただきましたことに感謝し、京都大学サッカー部そしてOB会が、今後とも発展されることを願って、お祝いの言葉とさせていただきます。

個性派ぞろいの、野武士集団

大阪体育大学サッカー部OB

元関西学生サッカー連盟幹事長

大 歳 和 法 (旧姓・岡田)

日本サッカー協会が先頃70周年記念パーティーを開いたというニュースを耳にしました。その話題と相前後して、京大サッカー部が創部70周年を迎えるということを知り、改めて京大サッカー部の歴史と伝統を感じさせられた次第です。

私は、学生時代(昭和49年～)関西学生サッカー連盟の理事長を務め、その後も学連のお手伝いや審判活動をしながらか、京大サッカー部を外から見せてもらう機会がありました。

私の知っている時代の京大サッカー部は、戦績で言えば、最後の黄金期ということがができるのではないかと思います。つまり、関西学生の1部リーグで大商大、大体大、同志社という当時の強豪を相手に、芝のグラウンドの上であばれまわり、敵に一泡も二泡もふかしていたのです。私の個人的印象を加えさせてもらうならば、『個性派ぞろいの、野武士集団』であったように記憶しています。また、京大を相手に得点をあげることができず、0-0の引き分けに持ち込まれたチームの選手が「我々のゴールは小さいけれど、京大の選手はそれ以外のところどこに蹴ってもいいんだから」と言っていたのを覚えています。

粘り強い・身体を張った・徹底した守備と、快速ウイングを軸にしたカウンターアタックを小人数の個性派が得点に結び付けるといった戦い振りだったように思い出します。

1部8チーム全てを私学が占めることが多くなった中で、国公立のチームが1部に定着することは極めて難しいことであると思います。失礼かもしれませんが、私は京大サッカー部にそれを期待しようとは思いません。むしろ、優れた人材とサッカーを愛することで他に類を見ない京大サッカー部のメンバーの中から、サッカー界をリードしていつくれる人たちが出てくれることを期待しています。

ますますの隆盛と健闘を祈る



京都大学ラグビー部

監督 市口 順 亮

創部70周年を迎えられ、京都大学ラグビー部の関係者として、心からお祝い申し上げます。京都大学ラグビー部も、平成4年に一足先に70周年を迎えましたが、その時の先輩諸氏の喜びを思い出しますと、京都大学サッカー部の関係者の皆様方の喜びが目に見えます。

さて、京都大学サッカー部とは、私が大学に入学しました昭和35年から4年間、農学部グラウンドで、隣り合わせの練習をしてきました。当時、サッカー部・ラグビー部がグラウンドの真ん中を占め、アメリカンフットボール部が東の端で、西の端ではハンドボール部やホッケー部が練習していました。今では陸上競技場としては認められないため、国内は勿論海外でも見られない1周500mトラックの中では、5つのボール競技の練習が行われていました。その上に、グラウンド回りでは陸上競技部の練習も行われる賑やかさでした。

その中で、サッカー部とラグビー部がグラウンドの練習の中心を占め、ボールが転がりこんでくれば、サッカーボールを蹴り返し、反対にラグビーボールをサッカーの練習場に蹴りこんでは、蹴り返されることを繰り返していました。その中で、今、時めくアメリカンフットボール部は東端で細々と練習していたのを思い出します。

しかし、ラグビー部としては、グラウンドの半分しか練習に使えないデメリットを重視し、専用グラウンドへの移転を決心し、昭和42年、現在の宇治グラウンドに移りました。それ以来、宇治グラウンドを練習・試合に使用しています。

そのラグビー場の上には立派なサッカー場があります。ラグビー部の監督を引き受けてから、宇治のラグビー場へ行くことが多くなりましたが、京大のユニホームを着たサッカー選手を見ることはまれで、休日にも、試合をしているのは、少年サッカーの選手であることが多いようです。

たまに行く農学部グラウンドを横に区切り、以前ラグビー部が練習していた場所にはサッカー部・ホッケー部が練習し、その西では、アメリカンフットボール部の器具が所狭しと置かれています。周りには照明設備が設置され、夕方にもなると昼間と見間違える光景が出現します。アメリカンフットボール部の部員の多さに圧倒され、サッカー部の細々とした練習が寂しく見える程です。

サッカー部の部室の位置は昭和38年当時と変わらないと思われませんが、ラグビーの部室はアメリカンフットボールに使われており、私個人としては、この頃度々訪れる農学部グラウンドは、懐かしく感じるよりも、寂しく感じています。

こうして、サッカー部は、私が学生時代に農学部グラウンドに通っていた頃と同じように、グラウンドの位置は変われど、ラグビー部と好対照に活動の中心は農学部グラウンドです。これは、サッカーとラグビーの文化の違いを感じます。それは、ラグビーが個人で競技練習を行う習慣が根付いていないのに比較し、サッカーはボール一つあれば、路地でも蹴り合うことが、世界のどこに行っても見られることです。すなわち、農学部に与えられた場所はラグビーにとっては、非常に狭い空間でしょうが、サッカーにとっては、最適

の空間になっているのでしょうか。

話は変わりますが、日本のサッカーはラグビーより一足も、二足も速く、プロ化が進み、サッカー人気が上がると同時に、サッカー人口も爆発的に伸びています。これは、京大サッカー部にとっては、ありがたいことである半面、部運営等に難しい面が出ていることが想像されます。京大ラグビー部を例にしますと、ラグビー人気が上がると共に、新しい大学が体力ある素質にも恵まれた選手を集め、強くなっていく傾向に我々京大ラグビー部が取り残された感じがするのです。最後になりましたが、京大サッカー部を取り巻く環境は、京大ラグビー部以上に、厳しい状況にあるようですが、京大サッカー部のますますの隆盛と健闘をお祈りしています。

V. 我らが集い

1. 朝比奈 隆先輩直撃インタビュー

本稿は、平成7年9月8日（金）、恒藤OB会副会長と長井（代表幹事）が大阪中之島の「クラブ関西」に朝比奈先輩を訪ね、その時に伺った話をまとめたものである。

——今日は、朝比奈先輩には何かとお忙しいところ、お時間をお割きいただき誠にありがとうございます。本年、京大蹴球部は創立70周年の節目の年を迎えましたが、この機会に70年史を編集し、将来に残したいと計画しています。朝比奈先輩とサッカーの関わりについては知る人ぞ知るところですが、今日は、先輩のサッカーに関するお話を中心に、併せて若い後輩や現役に対するアドバイス等をいただけたら、と思っています。

（朝比奈）この間は、文化勲章受章の記念にと、京大の紺のユニホームを贈ってもらってね、いっぺん着てみて写真とらないかんとってるんですが。ピアノの上にユニホームと現役が寄せ書きをして贈ってくれたボールと、あるんですよ。あれが一番いいですよ、イキで。

二人とも長い間後輩の面倒見てきたんですか。ご苦労さんですな。僕らのころ、卒業生の監督はなかったですからね。上級生が先輩監督というのか、アレ人柄なんですよ。赤川（S.6.卒業、故赤川 清氏、旧姓西村）などはプレーはするけどあとは知らん顔してるんですな。あのころは奥野だったかな、面倒見の良いのがいましてね。予算だとか、ボールがないとか、何がないとか。でも、いつでも、やっぱり代々世話人がいるもんだなあ。本当にご苦労ですな。

——朝比奈先輩がサッカーを始められたのはいつですか。また、その動機は？

（朝比奈）小学校の時は体が弱くてね。運動やらなくて良い、遠足休み、というのがあったでしょ。アレだったんですよ。だから小学校の低学年の時は田舎にいて、東京へ出て来た最初は市立麻布尋常小学校の3年。そして4年のときに青山師範付属小学校が欠員募集で2名とるという話があって、そのころは渋谷に住んでましたから、オヤジが受けてみろって言うんで受けたら合格した。すると大きなゴールがありましてね、師範では先生がサッカーやってますし、皆マネゴトでサッカーやりましたから。私とサッカーのそもそものは、それが縁ですな。

東京高等学校尋常科へ入ると、大学まで無試験という保証がつきましたからね。それじゃ運動でもやって体を丈夫にしようと思ひましてね。それにはまあスポーツで、ということで。サッカー部では最初は球拾いから始めて、そして走って。登山部へも入りましたよ。とにかく勉強する暇がなくて、お陰で東京高等学校尋常科3～4年のあいだに本当に丈夫になりましたね。

——サッカーに登山、それに陸上もやっておられたのですか？

（朝比奈）東京高校の1回生は何でもやらないかんのですよ。東京高校は学生数が少なく普通高校の半分位しかいないんですよ。だから校長は一つの運動ばかりやってはいかん、みんなやれって言うんですよ。すると掛け持ちでやらないかんのですよ。校長は、その後で勉強しろッ。だからけっこう遊んでばかりいましたね。瀬藤（東京高校 S.13.卒業、北

大・理、瀬藤進一氏) 位の頃までは皆そういう教育受けてましたね。だからサッカーの練習終わってから陸上の練習やるんですが、あんなの一人で走るしかしようないんですよ。靴だけ履き替えてね。そんなことしてるから勉強してないスね。寮へ帰ったらメシ食って寝る。全く良い時代だったスね。

山の方は、そう、日本アルプスは大体行った。ヤセガマンで行ったんですよ。当時は地下タビわらじ履きで、山形高校にいる友人の兄のグループに入れてもらって。みんなはスキーが下駄みたいな連中ばかりですから、ヤセガマンで付いていくしかなかった。烏帽子岳から硫黄岳を経て槍ヶ岳へ登ったりしたが、このルートは沢登りもあって本当に山登りをした気分になった。昔は新米は荷物持ちだった。テントに米に燃料。重いものばかりで総重量は20kgくらい。山小屋へヘリコプターで食糧や必要な物資を運ぶ今の時代と違って本当に大変だったけれど、いい思い出ですよ。

——50年史に掲載されている天橋立でのチームメイトとの写真、それに東京高校サッカー部時代の写真を見せていただいたりしてますと、当時は坊主頭が多いにも拘らず、先輩は長髪で長身、ハンサム（実はちょっと不良っぽい）ですから、よくもてたんでしょね。（朝比奈）ハ、ハ、ハ、……。スラッとして、長髪で、京大のハチマキ締めて…。今だったら、スタンドで女の子がキャーって言うんだろうな。ハ、ハ、ハ。東京高校と言えば服部君（東京高校 S.8.卒業、東大・工、服部正策氏）。湯浅にいましたね。今でもやってる。東京OB会でね。それから、瀬藤とかね。しょっちゅうやっていると70位まではやれるんですね。僕はもともとFBしかやっていない、ポカンと蹴るやつやってみました。昔の友達と会って話すと、ポカンと蹴ってくれるけど朝比奈のボールはどこへ来るかわからん、と言うので、その話はもうよそうやって言ってるんですよ。

でも、あの時代は面白かったですよ。旧制松山高等学校で僕らより2年くらい上の一藤さん（S.8.卒業、故一藤敏男氏）が、僕が2回生の時の新入部員歓迎会でチョココンと座っていてね、「一藤さん、どうしたんですか」って聞いたら、「3年すべった」。実に痛快な選手だった。ああいう人は今はいないでしょうね。それから、高山さん（神戸一中～八高～東大の高山忠男氏。戦後、神戸高校初代校長）もそうだったなあ。ワザと落第するんですよ。落第するのはいとも簡単で、試験受けなけりゃいいんですよ。何故って？ インターハイに出たいんですよ。先生もよくそれを知っていてね、「もう1年やるか？」。

陸上の織田さん、南部さんの時代でね。あの二人はタイプが違うんですよ。南部さんは強かった。年がたってからでも一緒に飲むと、バーのカウンターを片手でポンと飛び越えて。これが特技なんですよ。店の子に代わってサービスをする。実に愉快な人だった。一方、織田さんはね、真面目一方で、何かお尋ねすると、畳の上に指をつけてフォームの説明をなさる。そして「ありがとうございます」と言わんならん。ちょっと難しい人だった。

——ところで現役時代はいかがだったんですか。

（朝比奈）今は部員も多いようですね。旧制の高校がなくなってシンドクなりましたね。よい選手が入って来なくなったから。

あの時分は、高等学校が25か26あってインターハイやってたでしょ。そんな奴がだいたい東大か京大に入って来るんですから。ときどき九州や北海道とかへ行くけど、優秀な選

手が余っているみたいな、ね。

京大では僕はサッカー短いですよ。いくつか試合出ましたけどね。東大の強いところで、鈴木さん(鈴木駿一郎氏、八校出身、S.6.東大・理、卒業、駿足のLW)、高山さんなど強敵だった。でも相手について、走って、そして東大に勝った。関学ともやりましたよ。神戸一中の卒業生が多くてね。昔は神戸一中卒だったら誰彼なしにサッカーやれっていわれたもんですよ。神戸一中ともやった。相手は本気でね。やっと1-0か2-1で勝つには勝ったが、いい学校なんスね。だから僕なんか余り京大のサッカーで貢献していないんですよ。左膝を蹴られてケガをして、治りはしたけれど走力が落ちて、赤川には怒られてばかり、チームには迷惑かけるし、それで2回生の時に引退を志願したんですよ。

農学部のグラウンドでのサッカーでは大きな思い出が手のひらに残ってるんですよ。大きな傷跡でしょ。グラウンドの東の端のフェンスを越えて出たボールを取りに、有刺鉄線のフェンスを登っていたら、通行人がボールを拾って投げ入れてくれたので、礼を言って飛び下りようとした時に、有刺鉄線に手のひらを引っ掛けてしまったんですよ。練習後に医学部の先輩にこっぴどく叱られたけれど、メスを入れ、良い処置をしてもらったお陰で助かったが、思い出に残る一生傷ですよ。

——いま子供達は野球よりサッカーで、その人口は野球を大きく上回っています。京大のサッカー部に入ってくる部員も、一時期と違って、ほとんどが経験者です。そして、現在のサッカーブームを反映して、サッカーを大学の看板スポーツにしようと強化を図っている私学が数多くあります。厳しい入学試験を乗り越えて京大に入った学生の中には、サッカーは楽しみたいけれども体育会には入らず、同好会でやるという者も多いのですが、一方、本当にサッカーが好きで、厳しいけれども大学を代表する体育会でサッカーをやり、充実した学生生活を過ごしたいと考えている部員が、いま頑張ってくれています。

ところで、時代はすっかり違うのですが、先輩の学生時代はどんな時代だったのですか。思い出などお聞かせください。

(朝比奈)僕が大学に進む時に、東京高校では進学希望大学の調査があって、僕は調査表の京大に○印をつけた。15~16人の仲間のうち秀才連中が東大に行くという。東大はちょっと形式的な入学試験による選抜がある。京都は教科の試験があるのかなと思っていたら、後で聞いた話なんですけれど、憲法の佐々木惣一先生が「高校卒業生が帝大を志願した時に選抜するというのは、創立の精神に反する。帝国大学は高等学校の卒業生を収容するために設立したものであるから、希望者は全部入れろ」と、教授会でおっしゃった、その鶴の一声で、間際になって試験なし、ということになった。だから京大には何百人って大勢入ったんです。考えてみたら、そうですよね。社会に出たらチャンと選抜してくれますから。法学部や経済学部では教室さえあつたら、学生は座ってたらいいのですから。そんな訳でね、あまり立派なキャリアじゃないですけどね、京都で良かったんですよ。北海道へ行った奴はそこで教授になった奴もいますけれども、北海道ってところは行ったら住み着きたくなる所らしいですね。北大に行くと皆助手になり教授になる。仙台、九州に行った奴もいる。

僕が文学部にいた時は、井上 靖君と一緒にだったんですけどね。「あのころは良かった。本当の青春だったなァ」って、彼は小説家だから、いい表現でそう言っていましたけど…。僕は卒業して阪急百貨店に入って2年程して、また文学部に入りましたけど、その時に井

上 靖君と一緒にね。京大名簿では僕は「S.6.法、S.12.文(哲)」となっておりますが、哲学はやってないけど、美術史は哲学の中に入ってるんですよ。井上は一日も学校に出てこなかったみたいです。卒業のとき、論文提出でギリギリの時間に文学部の窓口に行って、3時迄ですって言われて、急いでキリで穴あけて綴じて出したのが井上 靖だったって。そして卒業してみたら、それどころじゃない、文豪になりましたからな。だから学校の成績なんか、どうでもいいんですな。

卒業式の日ね、井上も卒業式に出ると言うので、僕も制服借りてね、二度目ですから。背広から制服に着替えて帽子被って、卒業式に出たんですよ。すると、あいつも制服着て出てるんですよ。井上も制服持ってないので、2回生位のに、お前制服脱がって、借りてね。そのあと、あいつは教授に挨拶すると言うんですよ。一日も授業に出てないのに、やっぱり俺は植田教授(故植田寿蔵教授、西洋美術史)に挨拶せないかん言うて。それで、一緒に研究室に参上して「井上君です」と申し上げると、先生は「君が井上君ですか」と言ってとても喜ばれた。学生5人位しかないクラスで、いつもは3~4人。あのころは入試はない、試験は通してくれる、いい大学ですな。駄目かと思われた井上 靖はあれだけの文豪になりましたからな。

僕は大阪の音楽学校に勤めて月給もらいながらアルバイトしてましたから、授業のある日には向こうを休んで、少し遅れて大学へ行くと、植田先生が本を抱えて階段を降りてこられるんです。「遅くなりまして申し訳ございません」と言うて、「20分ほど待ってたけれど誰も来ないものですから」。先生が待ってて、学生は皆お互いに誰かが出るだろうと思ってるから、そういうことになるんですね。「誰も来ないから、僕の部屋へいらっしゃい」って言われるのが、それがまた何となくごやかでね。学士入学した時、この植田先生に、先生の講座を受けさせていただきたいと挨拶に行ったんですよ。すると一番最初に「就職の世話は出来ませんよ」と言われたんです。文学部哲学科じゃ教師位しかない。中学校教師の資格はくれますからね。戦後、私立の学校から案内がきてね。教員には教員免許が必要になっても誰も持ってないから。私は中等学校の教員免許を持っていますからね。役に立ちましたよ。

——減多にお伺い出来ない思い出やエピソードを聞かせていただきありがとうございます。それでは予定の時間も近付いて参りましたので、現役に対して、一言お言葉をいただけませんかでしょうか。

(朝比奈) 今でも農学部のグラウンドに行くと、皆やってるから懐かしいですな。

僕は高校時代、陸上をやっていたと言いましたが、ジャンプなどの名選手を見てみると素質があり特別の才能をもっているようですね。僕は山でもヤセガマンだったけど、陸上の1,500mでもトップについて行き最後に抜けたら抜けと指示されていたので、記録は覚えていないけれど、ヤセガマンのおかげで1位にこそなれなかったが、いつも2位でチーム得点2点は取っていた。サッカーでも走って走って頑張っていると、相手の技量にもよるけれど、そう点は取られなかった。

プロは見せる要素が必要だけれど、アマスポーツは、努力し、我慢し、頑張る。これで結構効果があるし、諦めたら負け。プロじゃないんだから、勝ちもすりゃ、負けもする、頑張るんですな。頑張るポイントは基本。山なら、荷物を担いでしっかりと登る。サッカーなら、走るんですな。基本を大切にして頑張れば、必ず思い出に残る。

音楽でも、2時間の指揮は長いし、シンドイ。あとどれ位、最後20分、もうちょっと、と思って頑張る。ヤセガマンが役に立っている。今も頑張れるのはサッカーはじめ若い時の体づくりのお陰だと思ってる。でも、シンドイ。でも、シンドイ時にこそ、頑張るんですな。

——今日はお忙しい中、貴重なお話をお聞かせいただき、本当にありがとうございました。 京大サッカー部から現役と同じユニホームを贈られて笑顔の朝比奈 隆さん。
大阪市西成区岸里の大フィル会館で（平成7年6月13日）。



余録 朝比奈 隆先輩と 山口興一OBクラブ会長のこと

山口興一OB会長が京都大学を卒業して阪急電鉄に入社されたのは昭和8年4月のことである。

その阪急電鉄には2年先輩の朝比奈 隆先輩がすでに入社されていた。社会人ともなると学生時代と違って2年の差は大きい上に、特に朝比奈先輩はその風貌と態度から、学生時代は同じクラブのメンバーだったといっても、後輩はキチッと敬意を表し挨拶しなければならない存在だったようだ。

朝比奈先輩は、その後阪急電鉄を退社され、京都大学文学部哲学科へ学士入学されて後、いよいよプロフェッショナルな音楽活動に入って行かれるのであるが、以上の経歴から分かるように、お二人は学生時代からの友人であり、その交友関係は60有余年、お互いに「アサヒナサン」「ヤッチャン」と呼ぶ間柄である。そうした関係から、山口先輩は朝比奈先輩の社団法人大阪フィルハーモニー協会の理事の一人として名を連ねておられる。

朝比奈先輩の文化勲章のご受賞をお祝いして、OBクラブからは記念ユニホームにゴールドパンツ、ストッキングとサッカーシューズを添えて、また現役からは寄せ書きをしたサッカーボールをお贈りした。平成7年6月13日（火）のことである。贈呈後、朝比奈先輩はシューズを履かれ、「ヤッチャン、蹴るか？」と、大阪フィルハーモニーのホールで、現役が寄せ書きしたボールをサイドキックで蹴りあわれたことがあった。本史に収録した「朝比奈 隆先輩 直撃インタビュー」で、話をうかがった時に、インタビュー記事には収めていないが、「ヤッチャンもちょっと下手になったなア。あの時せっかくいいパスを出してやったのに、よう受け止めよらんで…」と言って、ニヤッと笑われた。

実は、この記念品贈呈の様子は、さるテレビ番組企画会社が取材しており、後日「大河は海に～朝比奈 隆音楽と人生」と題する番組の中で、少し放映された。それを見ると、ヤッチャンの全くのトラップミスでもなく、アサヒナサンのパスも悪くはなかったが満点

でもなかったように見受けられた。それにしても、お二人ともゴールドパンツの80歳代。当時の合計年齢は172歳、実に豊饒たるご様子を拝見して心強く頼もしく感じた。両先輩のますますのご健勝をお祈り申し上げる次第である。

(長井 博)

2. 創部からの昭和20年度までの足跡 — 概説

[大正14年]

京大でサッカーが始まったのは大正13年である。そして、大学当局から正式に部の承認を受け、京都大学蹴球部が創設されたのは大正14年5月のことである。

当時すでに京大と東大との間では各運動部の対抗戦が行われていた。しかし、京大にはラグビー部は既にあったが、サッカー部はまだなかった。部設立の前年の大正13年の秋に、東大のア式蹴球部の杉野 薫氏（松江高校出身）から松江高校で共にボールを蹴っていた入江右三郎、内海武尾両氏（昭和2年卒）に、京大も蹴球部を設立し、東西両大学の対抗戦をやらないかと、働きかけてきたのが、京大蹴球部設立の動機となったのである。



(故前田純一初代OB会会長)

大正12年から始まった東大主催の旧制高校インターハイが隆盛で、京大にも各高校の有名選手が入学し、部設立への素地が出来てきていたところへ東大からの働き掛けがあり、これがきっかけとなったのである。大正14年春早々、前田純一氏（大正15年卒、初代OB会長）、入江右三郎氏（昭和2年卒、第二代OB会長）および高松茂雄氏（昭和2年卒）が相計り、ア式蹴球部の創立を計画した。山口高校出身の前田純一氏は情熱を込めて有志・選手を集め、御影師範に合宿しそのグラウンドで練習を開始した。一方、新学年が始まり、大学評議員選挙が始まるや、前田純一氏を候補者に立て、猛運動を展開して当選させた。

その後、前田氏と入江氏が中心となって、連日学友会に対する工作が行われた。しかし、学友会事務局は、新部の設立に関しては消極的であった。なぜなら学友会には既に蹴球部なるもの、つまり現在のラグビー部が存在していたからである。学友会の規約を変更してまで新部を設けることは種々の事情で極めて困難であったため、蹴球部というからにはラグビー式もアソシエーション式もあっていい筈であると、粘り強い折衝をしたが、学友会事務局では官吏特有の「その内に考えましょう」で、進展しなかったため、名総長と言われた荒木虎三郎総長の所まで説明に行き、事務局を動かせるように努めた。

大正14年3月、御影師範で合宿した入江、内海、高松、西郡、杉原（以上昭和2年卒）、香川（昭和4年卒）、末久（昭和5年卒）等同好の各氏が中心になってチームを編成した京大は、大正14年4月12日、東大を農学部グラウンドに迎え、2-1で勝った。当時の東大には竹腰重丸氏がおられ、関東に覇を唱えていた強豪であった。この東大を倒したことは、学友会の中の蹴球部として認められるための大きな実績となった。

また、東京大学ア式蹴球部長末広巖太郎教授は京大ラグビー部長・末広重雄教授のご令

弟であったので、サッカーなるものを大学当局に理解させるのに、末広重雄教授が預かって力があつた。こうした経過を経て、大正14年5月、大学当局の承認を得、学友会の蹴球部としてのスタートを切つたのである。

そして、初代蹴球部長には、ラグビー部長の末広教授に兼務就任していただくことになつた。

京大ラグビー部の発足は大正10年である。当時ラグビー部は全国制覇を果たし、既に全国 No.1.の強豪として活躍していた。従つて蹴球部が正式に発足することは、グラウンド使用上ラグビー部から歓迎されるものでは決してなかつた。部になるまでは、鞍馬の京都師範のグラウンドを借りて練習し、試合をしたということである。

しかし、ラグビー部長末広重雄教授の蹴球部長兼務により、ラグビー部とは協調を保ちつつ農学部グラウンドを二分しながら練習出来るようになった。

当時の関西蹴球界は神戸高商(現神戸大)、関学、関大が競つていたものの、実力的には旧制高校程度で、京大蹴球部としては発足早々から怖いもの知らずの勢いであつた。

第2回東大戦は、大正14年10月18日、東京小石川の高等師範のグラウンドで行われ、1-1の引き分けに終わった。この年、東大は関東リーグで優勝しており、新聞は「京大恐るべし、東大と引き分け」と評した。

日本一を誇るラグビー部に伍しての、設立早々のわが蹴球部は、関東の覇者・東大と1勝1分であつたことにより、その実力が評価されることとなり、学友会においてもその地歩を固めることが出来た。

一方、関西学生サッカーリーグは、大正12年に、関学、関大、神戸高商3チームにより発足しているが、京大が関西学生サッカーリーグに加盟したのは大正14年、そして、リーグに初めて出場したのは大正15年のことである。初出場の大正15年は参加7チーム中4位に終わっているが、翌昭和2年には関学と同率ながら初優勝を果たしている。

京大蹴球部が呱呱の声を上げ、揺籃期の3年間に早くも赫赫の実績を上げ、将来の発展を予感させる部の基礎固めをした最大の功労者は、前田純一氏である。ここに故前田純一氏をはじめ部創設に携われた諸先輩に深甚なる敬意を表するものである。

大正15年～昭和20年までの概況

[大正15年(昭和元年)度]

大正15年度の京大・東大サッカー対抗戦は、10月18日に京大グラウンドで行われる予定であつた。東大は既に京都に入洛していたが、直前になって、試合時間、使用ボール、オフサイドルールなどの試合新規定について、既に採用している関東と来年度から採用する関西の立場の違いから話し合いが行われたが調整できず、これでは両校の名誉を掛けての対抗試合は出来ないということになり、両校運動部対抗戦の内サッカーのみが遂に取り止めとなつた。これにより京大・東大の定期対抗戦は、戦後の昭和24年から行われることになつた定期戦まで、中断されることになつたのである。

先に記したとおり、京大は関西学生サッカーリーグに大正15年から出場した。この年は、

力のある選手が集まっていたもののチームとしての纏まりに欠け、リーグ参加7チーム中4位に終わった。

[昭和2年度]

この年から関西学生サッカーリーグは一部・二部に分かれた。

関西学生サッカーリーグにおける京大の初優勝はこの年、昭和2年であった。リーグ初参加の昨年は関学に1-3で敗れたが、この年は0-0と相譲らず引き分け、京大、関学の同率優勝となった。

[昭和3年度]

第8回全日本ア式蹴球選手権大会に京阪代表として出場し、準優勝。準決勝戦で東北大を5-0で撃破したが、決勝戦では早稲田WMWに前半1-0とリードしながら、後半に大量6点を献上し、一敗地にまみれた。

当時の大日本蹴球協会の千野正人氏の評によると、「優勝した早稲田WMWには、さすがに色々な長所があった。ハーフの活躍は見事なもので、その体格、そのキック、そのポジション及びスタート、バックのカバー、フォワードのフォロー等凡てにおいて一際目立っていた。滑らかなコンビネーション、合理的確実味あるプレイ、変化の多いスローイン等、これ等は凡て昨夏極東大会における尊い教訓の具体化したものであろう。又限られた時間に対する精力の使い方も、頗る巧妙で、その後半戦における強味が有力にこれを物語っている。要するに有機的に結合した11人が1個のプレイヤーとして活躍したことが、覇権を握る唯一の原因だったのである」「京大の弱点は、チームに纏りなく、チームそのものの統制に遺憾な点があるのではあるまいか。二、三の個人的なプレイの目立っていたことは、鮮やかではあるが、チーム全体の強味に左程の影響がないように思う。プレイヤー各個人の素質がよかっただけになおさらそれを遺憾に思う」とある（竹内 至氏=京大蹴球部OB、昭和8年卒業=の「日本蹴球外史」より）。

この年の関西学生リーグは関学に敗れ、不覚にも神戸高商戦を落とし、3位に止まった。

[昭和4年度]

昭和4年に、当時「七つの海を支配する大英帝国のイギリス本国東洋艦隊」が我が国を訪れた。その艦隊の旗艦で、英皇室のグロスター公殿下が搭乗されている御召艦サフオーク号が神戸に寄港する機会に、京大蹴球部を選んで国際親善試合の申し入れがあった。

京大は、関西学生サッカーリーグの期間中であつたが、同艦隊のケント号、ヘルメス号およびサフオーク号の各チームと対戦することとなった。

10月15日、ケント号チームには身長差、体格差で苦戦を強いられて2-7で敗れ、続く10月23日のヘルメス号チームにも善戦空しく0-2と敗れたが、10月25日のサフオーク号チームとは互角に戦い、勝機は十分あつたものの結局3-3の引き分けに終わった。

この試合を後援した朝日新聞は、その予告記事の中に「蹴球の母国英本国のチームに接することは我が蹴球界にとって長年の懸案であつた……我がサッカー界の国際的進出の好試金石であらねばならぬ……」と書いている。サフオーク号チームは、オックスフォード、ケンブリッジその他の優秀な選手によって編成され、本場英国サッカーのレベルを遺憾なく示した。これに対し、英艦隊チームとの試合にも慣れた京大は、メイン試合である

サフオーク号チームとの試合では、技術的にも体力的にも互角以上の戦いで、試合終了直前まで3-2とリードしていながら追いつかれ、引き分けたのであって、京大の健闘が光った。顧みると、第1回ワールドカップが開催されたのが1930年(昭和5年)であるから、その1年前のこの国際親善試合は、京大にとっても日本のサッカーにとっても大きな意義をもつものであった。

この直後の10月28日には、第9回全日本ア式蹴球選手権大会に出場。神宮球技場において慶応と対戦したが0-2で初戦敗退。慶応は関東予選で前年度優勝の早稲田WMWを破って優勝候補の呼び声が高かったが2回戦で姿を消し、この年は兵庫代表の関学が優勝した。

関西学生リーグの優勝をかけた関学との最終戦は、11月24日、神戸東遊園地において行われたが1-3で破れ、リーグ2位であった。

この年の12月25日、朝日新聞社の後援により、東西学生リーグの優勝チームである東大と関学とのあいだで、第1回東西学生優勝校争覇試合が神宮競技場で行われた。これは初の事実上日本一を決める試合となったが、東大が3-2で関学を破り、初の覇権を手にした。これから以後、年中行事として東西学生リーグ戦優勝校対抗試合が開催されるようになった。

[昭和5年度]

昭和5年は、京大が関西学生リーグにおいて、初の単独優勝に輝いた記念すべき年である。リーグ第4戦で関学と1-1で引き分け、関学と同率でリーグを終了した京大は12月14日、関学との優勝決定戦に臨み、3-0で関学を撃破し、関西の覇者となった。甲子園南運動場で行われた優勝決定戦における観衆約6,000人は、当時の記録である。学業との関係で練習時間に制約され、全員揃って練習することの出来ない京大がこうしたハンディキャップを克服し、悲願達成のために並々ならぬ団結心とファイトをもって試合に臨んで得た関西制覇の意義は大きい。

第2回東西学生優勝校争覇試合は、年の瀬も迫った12月28日、甲子園南運動場において観衆約5,000人が見守る中で挙行された。関東代表は昨年度優勝の東大。大正15年来、定期戦を中止していた両者がここに相見えることになったが、結果は、東大2-1京大で、東大に連覇を許した。因みに、そのメンバーは次のとおりである。

[第2回東西学生蹴球争覇試合メンバー表]

京大

GK	FB	HB	FW
竹	武小	有西山	加沢水一松
内	村幡	賀村本	茂 下野野藤江

東大

GK	FB	HB	FW
阿	船竹	野斎	三篠手内鈴
部	岡内	林 沢藤	宅島島藤木

[昭和6年度]

この年の京大は得点力が高く、関西学生リーグにおいても、関大、大商大、神高商および大工大の4チームから合計48得点を奪っている(失点は5点)。しかし、リーグ優勝をかけた関学戦では大接戦のすえ、3-4で敗れ、リーグ優勝を果たすことは出来なかった。

なお、第1回全関東対全関西選抜試合が開催されたのはこの年である。

[昭和7年度]

関西学生リーグでは、関大と引き分けたものの、関学に4-3で勝って昨年の雪辱を果たして優勝した。

東西学生優勝校対抗戦は、甲子園南運動場で慶応大と対戦したが、終了2分前にGKのクリアミスで押し込まれ、1-2で敗れた。

[昭和8年度]

関西学生リーグでは、関学を3-2で破り、5戦全勝で優勝した。

東西学生優勝校対抗戦は、神宮競技場において早稲田と対戦したが、前日の雨とラグビー戦によって荒れたグラウンドに京大の技術は封じられ、身体的耐久力に勝る早稲田に後半差を付けられ、2-5で敗れた。

[昭和9年度]

関西学生リーグは、関大、関学ともに2-1で退け、昭和7年来3年連続、通算5度目の優勝をなし遂げた。

東西学生優勝校対抗戦は、結果的に昨年と同じ京大と早稲田との間で行われることになった。結果的に、と言うのは、関東リーグにおける早慶二校による優勝決定戦は二度にわたって同点試合となったが、慶大が期末試験のため関東学生の代表権を早大に譲ったことによる。

試合会場は京大に有利な甲子園南運動場であったが、早稲田の一方的な試合となり、0-6で完敗した。

振り返って見ると、昭和7年から昭和9年までの3年間は、関西学生リーグにおいて連続優勝を果たし、京大蹴球部の黄金時代を築いた。しかし、関東リーグ1位と対戦する東西優勝校対抗戦では遂に関東に1度も勝つことが出来なかった。

[昭和10年度、11年度]

昭和10、11年は、関西学生リーグにおいて2年連続3位に終わった。昭和10年優勝校は関学、そして11年は神戸商大であった。

[昭和12年度]

2年間雌伏していた京大は、関西学生リーグで関学を2-0で破り、3年振り6度目の優勝を果たした。リーグ開始前の下馬評によると、関大と神戸商大が首位争いをするものと考えられていたが、「京大はリーグに入ると一試合、一試合と適当な相手と戦い、次第に自信と戦闘力を蓄積した。何等取り立てるほどの威力を持たない京大は対関学戦に於いてもただ各自が忠実に早い潰しに出ることにより、また全試合を通じて全員がファイトを燃やし精神的にリードすることで勝ったに過ぎない」(アサヒスポーツに寄せられた田辺治太郎氏の戦評の要約)と評された。

続いて関学に対する批評は「動きの不足は恐らくは練習方法の欠陥による。どんな足技も、パスワークも、動きを伴わないならば無力に等しい。一つ一つの球に対して敵より早く球を取ることが万事を解決する。球を持たない者の動きが次の展開を導きもし、また駄目にもする。要は、より多い労働力である」(同上)というものであった。

この年の関東は慶応大が制した。神宮で行われた東西学生優勝校対抗戦では、またもや慶応に0-3で破れ、涙を飲んだ。

朝日招待サッカーは昭和12年に始まったが、京大は昭和13年1月10日に開催された第2回朝日招待サッカーに出場し、東大（関東学生リーグ第2位）と対戦した。通算4度目の対戦は、慶応大に劣らず強力と予想されていた東大を5-2で下し、京大に凱歌があがった。

[昭和13年度、14年度、15年度]

昭和13年は、前年の貴重な優勝経験を持ち、また優秀な逸材を擁しながら、関西学生リーグでは関学に0-2と敗れ、関学にリーグ優勝を奪回された。

しかし、第3回朝日招待サッカーでは関西の2位チームとして出場し、関東1位の慶応大と対戦したが0-2で敗れ、前年度の東西学生優勝校対抗戦の雪辱はならなかった。

昭和14年、15年は、ともにリーグ第3位に終わった。

[昭和16年度]

昭和16年は、12月に日本がアメリカに宣戦布告し、太平洋戦争に突入した年である。昭和6年の満州事変以来、世界的に国際的対立が激化しつつあったが、昭和14年9月にはナチスドイツがポーランドに侵入、イギリス、フランスのドイツに対する宣戦で第二次世界戦争は既に始まっていた。

このような状況の中で、戦況も急迫したため、昭和16年には対外試合禁止の動きが見られ始めた。そして関西学生リーグも影響を受け、今迄の一・二・三部制から地区リーグ制に変更され、全体としては京阪神の優勝チームにより決勝リーグのみが行われることとなった。

京都地区で優勝した京大は、決勝リーグで大阪代表の昭和商と4-4で引き分けたが神戸地区代表の関学を3-2で下して、昭和13年以来3年振り7度目の関西学生サッカーの覇者となった。

[昭和17年度]

戦況急迫のため、学生の卒業時期が、昭和16年は12月に繰り上げられていたが、昭和17年は更に繰り上げられて9月卒業となった。このため、関西学生リーグは春季に、しかも地区制ではなく、従来の一・二・三部制に戻して実施された。春季は京大は4位に止まった。戦時下のことであり昭和17年の秋季リーグは中止された。

昭和18年1月3日、西宮球技場が落成し、開場記念招待試合が計画された。これは従来の朝日招待サッカーに代わる、関東、関西4大学対抗試合として実施された。京大は宿敵慶応大と当たったが、前半1点、後半には3点を奪い、4-0で快勝した。慶応大に勝ったのはこの時が初めてである。

[昭和18年度]

昭和18年の秋のリーグは昨年に続いて中止された。そして関西学生サッカーリーグが復活するのは戦後の昭和21年秋まで待たねばならないことになる。

昭和18年はリーグに代わる関西学生サッカートーナメントが15チームの参加を得、阪神

間の数か所のグラウンドを使用して開催されている。このトーナメントの準決勝で京大は関学に2-3で敗れている。

[昭和19年度]

昭和18年度の卒業式が昭和18年9月に行われたため、昭和19年度の部の実質的活動は昭和18年10月から始まった。しかし、その後戦雲急を告げる中で行われた公式試合は「大日本学徒体育会関西支部主催、京阪神学徒壮行蹴球大会」だけであった。これは、京阪神で代表チームを互選し、リーグ戦方式で、昭和18年11月14日、嵐山において行われた。出場した代表チームは京都代表・京大、大阪代表・阪大、神戸代表・神戸商大であった。

その2日後の11月16日、学徒として戦線に赴く部員を送る京都大学蹴球部壮行会を、鞍馬口の木船料理店で開催。

昭和19年12月学徒出陣。

以降公式試合、公式行事なし。

[昭和20年度]

昭和20年8月15日、終戦。

出陣した部員、復員。

10月頃、元部員を中心に、困難な食糧事情と混乱した世相を克服して練習再開。

余録 山口興一OBクラブ会長による 「京大蹴球部70年の足跡」

山口興一OBクラブ会長は、蹴球部が創部70周年を迎えたこの機会に、50年史およびその後の年報を丹念に読まれ「京大蹴球部70年の足跡」を時代別にまとめておられます。ここに山口OB会長の「70年の足跡」の記録をご紹介します。

[第1期] 大正14年5月（創部）～昭和17年前半までの17年。

- * プロはなく、社会人サッカーも未だ成熟せず、大学現役チームがわが国最高の水準を維持していた時代。
- * 京大蹴球部は代表的な強豪チームとして存在。
 - ・ 関西学生リーグ優勝、7回。
 - ・ 関東学生リーグ優勝校と全日本の覇を争うこと、5回。

[休止期] 昭和17年後半～昭和20年（終戦の年）年度末までの4年。

- * 戦況が急迫し、昭和17年の秋季リーグ中止。
- * 昭和18年、19年は、リーグに代わる試合や学徒壮行試合が少し行われたが、実質的な活動は停止。
- * 昭和20年は活動一切なし。

[第2期] 昭和21年～平成6年度末（創部70周年の年）までの49年。

- * 関西学生リーグにおいても一部の中位または下位、あるいは数度に及ぶ二部転落など苦難の繰り返し。
 - ・ 昭和21～26年 （6年間） 1部の下位。

・昭和27～33年	(7年間)	2部。
・昭和34～36年	(3年間)	1部の下位。
・昭和37～40年	(4年間)	1部の3位。
・昭和41年	(1年間)	1部の下位。
・昭和42～45年	(4年間)	2部。
・昭和46～49年	(4年間)	1部の下位
・昭和50～51年	(2年間)	2部
・昭和52～53年	(2年間)	1部の下位
・昭和54～60年	(7年間)	2部
・昭和61年	(1年間)	3部
・昭和62～平成元年	(3年間)	2部
・平成2年	(1年間)	1部の下位
・平成3～6年	(4年間)	2部

3. OBの手記、各年度年代記

現役の皆様に物申す

昭和12年度主将 森 正 夫

昨今の京大が二部や三部を出たり入ったりの低迷が続けている状況を見て、かつて関西リーグで優勝し、翌年東大に勝った時の主将の私としては誠に嘆かわしく胸が痛みます。恐らくその当時の皆さんも同じ思いでおられるでしょう。

あれから半世紀以上もたった今日、状況も変わったし、また皆さんの試合を見ないで言うのもおこがましいが、只好き者同士が集まって同好会が試合をして楽しんでおられるよう思えて仕方ありません。こんな相手に戦って負けるのか、ほんとに情けなくなります。80の齢を越す老人の繰り言でしょうか。

皆さんに大志あれば私の苦言を咄しゃくし、今後どういう型で蹴球するのか考え直して下さい。過去は過去として、クラブレベルで蹴球するのか、京大蹴球部の名において試合するのかのいずれか、それが出発点となるのでしょうか。

皆さんが後者の道を選ぶなら若干私見もあります。それはここでは長々述べられません。その概要は五十年史に掲載されている「優勝を勝ち取るまで」「想い出」「現役のころ」を読めば、皆さんの今後とるべき新機軸が見つかるものと確信しています。そして皆さんがその気になって精進すれば、道は開かれるでしょう。

「花園」でのゴール



昭和18年卒業 横山 慶一

私は昭和16年4月に入学した。その頃まで関西学生サッカーは、秋にはリーグ戦があり、春はトーナメントの大会が花園ラグビー場で行われていた。私はその年、L.W.として出場したが、一、二回戦（第2グラウンド）を勝って準決勝に進み、優勝候補の関学と、場所も本グラウンドで対戦することとなった。花園はラグビー専用のグラウンドだったが、いつ頃からか、この大会ではサッカーに使用されていた。私のゴールはこの試合のたしか前半だった。右サイドからのセンタリングに、合わせるようにゴールに近付いていったと思うのだが、目の前にボールがきたと思った瞬間、ヘディングしたボールはゴールを割っていた。まことに呆気ないような一点だった。この試合は残念ながら一、二点差で負けてしまったが、その後はボックスに転じ、得点チャンスの少なくなった私にとって、この花園での一点は、五十年余りたった今でも忘れ得ない思い出のゴールである。

戦中派の思い出

昭和19年卒業 貫戸 幸男

私達同期生は大東亜戦争緒戦の昭和17年3月及び9月に入部した者達で、旧制高校で一応部生活を送りインターハイで夫々顔を合せた連中であって、高校時代学問よりサッカーを優先させた猛者ばかりの集まりと見られます。私達が入部する数年前より、先輩の活躍によって京大の黄金時代が築かれ、東大と共に強さを誇っていた頃です。当時の旧制高校のサッカーの水準は可成り高く、両大学の強さもここに温床があったと思われま

す。当時部員のいわゆる「溜り」は農学部電停前の近藤ミルクホールとその裏側にあった乙女食堂（おやじさんが亡くなって家族は播磨の加古川へ帰った由）、このどちらかに行けば必ず部員の行方が解る仕組みになっていて、また食糧の集積場所でもありました。

グラウンドの主と言われた我々の敬愛する故高橋彦也主将など、いつ行っても乙女の奥座敷に笑顔で鎮座していたのも印象的です。入部1年間位は高校時代の延長として楽しくボールを蹴っていたようですが、戦争も次第に激しくなり、授業時間の短縮、休暇返上等のため練習時間も自ら制約され、その上食糧事情も苦しくなりましたが、それでも関西学生リーグ、京都学生リーグは現在と大差なく行われていましたし、戦前の最大のビッグゲームである朝日招待サッカーの出場権を得て慶応と対戦することが決まった時など、なけなしの食糧を持ち寄って、京大の馬場近くの旅館「ことぶき」（現在は廃業）で合宿し、見事快勝したことは忘れ得ぬ最後の思い出となりました。然し戦況日々が悪化、戦時体制は更に強化され、ついに昭和18年6月学徒動員令に全員徴兵検査を受けました。当時農学部のグラウンドを使っていたのは所謂本ちゃんのサッカー、ラグビー、陸上、ホッケーとそれに教練課のみでそれ以外は猫の子一匹入れなかった時代で、グラウンドが整備されてい

たことは現在以上で、これは常に我々に味方し協力してくれた人、あの氏江のおやじに負うところ大でありました。その運動部も次第に教練課に冷視されつつグラウンドを使うという状況の時でありました。

ところで当時の配属将校であった佐藤大佐（間もなく南方へ転属戦死）が我々運動部員数名を銃器庫（今のスポーツ会館）の前に集め、先に受けた徴兵検査について色々質問し、我々甲種合格の者が京大全体の平均値より非常に高かったことに驚愕、ラグビー部員の1人をとらえ、「ラグビーか、あくびか知らんが、君達こそ国家存亡のとき本当に役に立つ若人である」と、真面目な態度で我々スポーツ選手を絶賛されたことは、当時の軍人としては異例であり、一方我々は一矢を報い溜飲を下げた次第でした。

その後間もなく12月1日を期して学徒出陣令が下り、我々サッカー部も一部理科系の学生を残し殆ど全員出征が決まりました。最後のコンパは円山公園内にあった中華料理店「仙楽園」で行い、数日後夫々の任地へ出発して行きました。その後残された理科系の部員も漸次応召されて行くのですが、なんとか伝統ある蹴球部の命脈を保つべく、少しでもボールの蹴れる者を集め、阪大、府立医大等の残留組に呼びかけて試合をしたこともありました。然し17年組の最後の一人として、主将、マネジャー、連絡係等々努めて参りました私も、予定の陸軍々医学校入校の日も近づきましたので、総てを後輩に託し、京都を去りました。

以上、戦中派として甚だ断片的で杜撰な事を書きましたが、この度創立50周年記念史発刊（注；末尾参照）に当たり、献身的に編集に当たっておられる唐原先輩より、最も大切な戦中から戦後にかけての記録の行方を尋ねられました。実は当時名キーパー兼マネジャーの向井君から、彼が海軍予備学生として出征する数日前、百万辺の本屋の前で、試合記録その他を確かに受け取り、また私が出発の前に、後輩に確実に託したのですが、終に今日に至るも見当たりません。お互いに生きて帰らぬ冷厳な気持ちで授受したつもりでしたが、明日の生命も知れぬあの当時、まさか50年史が編集されるとは誰が考え及んだでしょうか。伝記なくして歴史は語れませんが、当時は国の行方も定まらぬ混迷の時期であり、敗戦後の日本民族大移動の光景を想起していただいて、この頃のブランクに対しては何とぞ御寛容ください。

最後に、戦死その他、故人となられた同期の桜の御冥福を衷心よりお祈り申し上げます。
(50年史より再録)

(筆者・貫戸幸男氏は昭和56年1月4日に他界されました。50年史の故人の記事を転載させていただくに当たり、ここに改めて故人のご冥福をお祈り申し上げます。)

特別寄稿

幽界でのサッカー

三洋証券会長 浦松史郎

先日、サッカーOB大会に出てアキレス筋を断裂し、三週間余の入院をした。早寝のためか、夜半目を覚まし、展転するうちに夢をみるが多かった。そのうちの一つをメモしてみた。

某日、神戸の安居 律（関西油脂）を団長として極星会（旧制四高蹴球部）で物故先輩を訪問することとなった。熊谷 清（川崎汽船）提供の船で出発、三途の川も小池義人（須磨寺管長）の通訳で無事入国。出迎えた懐かしい顔ぶれと挨拶もそこそこ。さいの河原球場でキックオフ。

往年の日本代表小野礼年監督のもと相手方はさすがに強い。在学中急逝した西川正義（全日本候補）をトップに、鬼頭寿郎（清水建設）、堀本 清（外科医）、北尾直明（沖縄で戦死）、両翼に相変わらず端麗な可知守孝（三菱京都病院長）、威勢のいい貫戸幸男（産婦人科医）らのフォワードにかき回される。

当方のエース桜井 修（宝塚市立病院長）の突っ込みも、日置象一郎（京都府立大教授）、田代 棟（硫黄島玉砕）、岩崎博司（クラレ）、最近移住したマッキンノン（ワシントン大教授）らのバックスに抑えられ、たまのシュートも名ゴールキーパーの稲上 実（公認会計士）の好守に阻まれる始末。地の利もさることながら、不思議と年をとらぬ相手方の圧勝。

応援の田中五郎（労働省）、磯野国徳（同和火災）らも加わって、大コンパは地酒「黄泉桜」、延命直松（アサヒビール）提供のビール飲み放題の大騒ぎ。「Jリーグも盛んで結構だが、やかましくて眠れん」「サッカーくじなどケシカラン」「クルマの送迎でふんぞりかえているからケガをするんだ」と、先輩の口は辛らつ。二次会は重兼暢夫（建設省）邸。芳子夫人（芥川賞作家）の手料理とつきるところを知らず。「早くこっちへこい」の声が多かったが、「憂き世に未練はないが、大事な仕事を片付けてから」と宴はお開きとなった。極星会も老いつつある。「彼岸」は確かに近づいている。医師団もそろっていて、ライフケアも万全と見受けた。記念に撮った写真はすべて不鮮明だった。残念なことに……。

（注）平成7年1月17日付、日本経済新聞「交遊抄」より。この手記の中の、

・安居 律(S.14.卒業)、熊谷 清(S.16.卒業)の2氏

・既に幽界におられる

小野礼年(S.14.卒業)、日置象一郎(S.17.卒業)、田中五郎(S.18.卒業)、

貫戸幸男(S.19.卒業)の4氏

の合計6氏は、京都大学蹴球部のOBです。

（編）

浦松史郎氏のこの記事を70年史に掲載させていただくことにした、という話がOBの間で一部口伝てに伝わったところ、「浦松氏が三洋証券の専務時代に、やはり日経の交遊抄に書かれた「室友 球友」（昭和52年9月14日付）というのがあって、そこにも旧制第四高等学校出身の京大サッカー部OB数人の名前が出ているよ」と、さる先輩からそのコピーをいた

だいた。

その「室友 球友」の前半は省略させていただき、京大サッカー部OBの名前が出てくる後半の記事を、追加紹介することにしよう。

『蹴球部OBの極星会というのがある。北陸独特のみぞれのなかで、乾く間のないユニホームをつけ、濡れた重い球を蹴り合った仲間である。学校はサボっても、練習には必ず集まったものである。高月東一（興論科学協会理事）、湯浅隆義（湯浅コンサルタント社長）という名幹事のおかげで、これまた息の長い会である。貫戸幸男（病院長）、加藤三野雄（朝日企業顧問）、斉藤 仁（トンボ鉛筆監査役）、小山啓二（日本コロンビア楽器営業部長）など千里の道をはせ参ずる常連である。

「引導はまかしておけ」という須磨寺の小池執行長に励まされ、貫戸主将以下スローピデオさながらの試合展開となるが、現役時代見せたこともない美技もあって楽しい。太り過ぎてパンツも合わぬ和田労働福祉事業団理事長、熊谷川崎近海汽船社長の奮闘もあって、往年の名プレイヤーをそろえた早稲田高等学院に1点も許さず引き分けたOBインターハイの一戦は近来の快事であった。駿馬もいささか老いたりの感も深いが、ひたすら、参加する事に意義を求めつつ、驚（ど）馬にむちうつ今日このごろである。』

（注）前出の、熊谷 清（S.16.卒業）、貫戸幸男（S.19.卒業）の2氏のほかに、湯浅隆義（S.22.卒業）、小山啓二（S.26.卒業）2氏のお名前が出ている。 （編）

戦後サッカー部の再出発



昭和21年9月卒業 向井清之

第二次大戦のさなかに、私共が学徒出陣の名のもとに学窓を去ったのは、昭和18年12月のことであった。当時私は経済学部の2回生であったが、文化系の2, 3回生が同時に兵役に服したことで、戦争の様相が一段と熾烈となったため、大学の各運動部の活動は事実上停止せざるを得なくなった。したがって戦前の蹴球部の歴史もこの年をもって閉じられることとなる。

20年8月、終戦と共に学徒出陣組が続々と学舎に復帰してきたが、私共の1期上、即ち出陣時の3回生は既に仮卒業の措置がとられていたため、私共は自動的に最上級生となっていた。私が10月末に復員した時には既に大学の講義が始まっていた。終戦事務にかり出されていたので帰郷が遅れたが、横須賀を出て超満員の東海道線のデッキの上で丸1日立ち続けて神戸に着いたことが昨日の事のように思い起こされる。2年間別れていた学友達とお互いにその無事を祝福しあっても、終戦後の混乱した世相の中で再びボールを蹴ることが出来るとは夢にも考えていなかった。しかし乍ら、数日後に秋色濃い北白川のグラウンドに立ち寄り、そこに2年前そのままのグラウンド、ゴールポスト、部庫、氏江管理人宅等を見出だした時、やっと古巣に戻ってきたという感慨とともに、もう一度ボールを蹴るチャンスが必ずあると強い自信を抱いたのを覚えている。

かくして昭和20年も暮れようとする12月になって、当時既に復員していた友貞兄等と語り、部の再出発を図ることとし、戦争中の部の運営と、残留部員の調査から始めた。幸

いにして、当時我々と同期の医学部の多々信二君が、貫戸、竹山、皆木等の諸先輩と共に学徒出陣後の蹴球部を守ってくれたことを聞き、早速友貞兄と共に同君の下宿を訪れて部の再建につき協力をお願いした。ユニホーム、ボール等多少の資材も残っているし、無疵のグラウンドが残っていることは何にもまして我々にとってありがたいことであった。年明けと共に部員の勧誘に専心すると共に、永らく途絶えていた諸先輩との連絡にとりかかった。文科系では、野本、前田、菅、平佐、坂本、本田、松山。理科系では鶴見、大池、高砂、宗田、湯浅等、かつてのインターハイで活躍した諸兄が続々と参加され、これを機に主将として友貞兄、副将兼庶務委員として私、会計委員に多々兄を21年度の役員として同学会に登録した。又マネジャーとして新たに入部した恒藤君に部のお世話を願うこととした。

21年2月11日には当時の西宮球技場において東西対抗戦が一般の部と学生選抜の部に分れて開催され、私も関西学生選抜の一員として出場する機会を得た。これが蹴球界では戦後初の公式試合であり、勿論私にとっても最初の試合出場であった。この試合の入場料税共1円98銭という記録が残っているのも懐かしい。

この前後から京大蹴球部としての活躍が徐々に始動し、北白川のグラウンドでの練習も随時行われるようになった。しかし唯生きるのに精一杯という食糧、諸資材の極端な不足の中であって、十二分な練習を行う余裕などはなく、本当にボールを愛した者のみが、グラウンドに集まって練習をするというのが実情であった。ニューボールの配給もなく、僅かに残っていたボールの破れに“つぎ”を当てながら使用し、“ぼろ”に近いシャツ、パンツ、ストッキングを着用し、破れ靴をはきながらの練習も我々にとっては暗い世相を忘れる最も楽しい一時であった。私は食糧事情のため、京都での下宿を断念し、神戸から国鉄で毎日通学し乍ら、午後はグラウンド通いに精を出した。そして練習後は戦前と同じように、農学部前の近藤ミルクホール店に立ち寄るのが日課となっていた。

3月に入って全日本選手権の関西予選に出場した。これが京大として戦後初の公式試合出場であったが残念乍ら敗退したので私共の中、数名が改めて赤川先輩を主将とする学士クラブに臨時加入した処、何とこのチームが優勝してしまった。メンバーの大半が京大OBであったと記憶している。正しく二重出場ということになるが、当時の状況からして大目に見てもらったのであろう。但し東京行きを神戸商大に譲ったところ、商大は東大LBに敗れてしまった。

5～6月には関西学生選手権試合に出場、京大、関学、関大三者による決勝リーグ戦で惜しくも関学に敗れ優勝を逸した。この優勝戦の直前に私の大事なバッグが盗難に遭い、慌てて靴を今川先輩に、ユニホームを故本田栄一兄にお世話願って、やっと試合に間に合わせたのも懐かしい思い出である。

私どもはこの年の9月に学窓を去った訳であるが、戦後の混迷した社会情勢の中で、しかも食糧、資材の欠乏甚だしい悪条件下においてボールを愛する数多くの諸君が、部の再出発に率先して参加されたことに対し、今日もなお心から感謝している。同時に又、苦しい日常生活の下において、大変な犠牲を払い乍ら、物心両面より部の再建に温かい支援を送って頂いた諸先輩に対しても心からお礼を申し上げる次第である。とりわけ、前田、今川、奥野、赤川、麻野、安居の諸先輩を始め、関西在住の諸先輩には当時公私にわたって多大のご迷惑をおかけしたことに対し、本誌面を借りて改めてお詫び申し上げたい。

21年7月に発行した戦後最初の名簿が手許に残っているが、これは名簿というには余り

にもお粗末なガリ版刷りの手書きのものである。部の再出発に際して、早く先輩との連絡をとり、名簿を作成するようにとの奥野先輩の指示にしたがって、各先輩に葉書を出し、その消息をお知らせ願って作成したものである。予算が無いので、用紙は麻野先輩より寄付して頂き、下手な字で原紙をきり、同学会事務所の謄写版を借用して印刷した。戦後の蹴球部史を語るものとして、その原稿を私は今も大事に保存している。

(50年史より再録)

敗戦後のサッカー部の思い出



昭和22年卒業 松山 宏

高校を卒業して京都に来た年の12月に学徒動員となった。そのため練習はもとより試合も全くやっていない。敗戦後の暮れにはグラウンドに出、翌年にかけて関学、関大、京府医大と試合をやったことを覚えている。友貞主将以下メンバーはギリギリの11名であった。食べるものもなし靴も満足なものがなかったのに、ボールを蹴ったのは高校時代の思い出があったからであろう。卒業後は関西白線クラブに属し、また東大との超OB戦に出場した。OBインターハイが終わったのは残念だが、思い出だけは大切に持ち続ける積もりである。

戦前戦後の事



昭和22年度主将 多々 働 志
(信 二)

先日貫戸氏より電話あり、戦時中の京大サッカー部の様子を尋ねられ報告を求められましたが、何しろ昔のことで思い出すのに一苦勞でした。以下記憶のまま書いて見ました。

私が京大医学部に入学したのは昭和18年9月であり、丁度この秋、文科系学徒の出陣という事態に陥っていた時でした。この頃サッカー部に入部したものの、未だ学内の事情、京都市街のこと等全く不案内で本当の1年坊主でした。たしか故奥平氏(昭和19年卒業、旧姓・野沢信韶氏)にさそわれ入部したように思います。私の第一戦は、間もなく催された出陣送別親善試合で嵐山付近のグラウンドであったように思います。対戦相手は何校であったか覚えておりません。私はRWを命ぜられ右よりシュートレンジに入ってシュートを試み失敗。その時貫戸さんがLWとして左側より入り込んでいたのは知っていました。案の定「こちらに回せば1点」と注意されたのを覚えています。

その後学徒も出陣し、工学部関係の人々も勤労働員とかで欠けることも多くなり、遂に貫戸氏も出征するに及んでは私が一人の時もあったように思います。ですから当時(昭和19年~20年)、今の記憶では、五高の宗田(昭和17年五高キャプテン)、六高の高砂(高砂輝夫氏、昭和21年卒業)他3~4名位が高校でサッカーをしていた人達であったろうと思っています。然も一同に会する機会も殆どなかったが、府立医大と2、3回試合をしたこ

ともあり、又春秋にチーム編成の出来る高校を集めて親睦的なインターハイをしたこともありました。年に5、6個でもボールの配給が在り、予算も在ったのですから、サッカー部が在ることを同学会に示す必要も兼ねていたわけですから、此の様な行事は勿論当時部長であった原随園先生にはご報告していたように思うのですが、全て正規の部活動ではありませんので出場メンバーその他試合記録等は残してありません。

終戦後、文化系の学徒が復員して来られ友貞、向井、前田等々次第に部員が増えてくるのが楽しみでした。向井氏が友貞氏であったか？戦時中の記録を見たいと云って記録簿を誰かにお見せした様にも思うのですが、何しろ判然とした記憶ではありません。

かくして次第に部員も増えて戦後初めて関西リーグ——之が又私の大学サッカー部の緒戦——が始まり第一戦は関学ではなかったでしょうか。こうして漸く活況を呈して来たサッカー部も彼らが次々に卒業した後には旧制高校で鍛えた選手は殆ど補充出来なくなり、新しい方針で新入部員を迎えることになった次第です。どうしても戦力の低下するのは止むを得ぬ次第でしたが、でも皆仲よく頑張ってくれた様に思います。恒藤、湯浅君達も大変だったことと思います。皆よく力一杯頑張ってくれて二部に落ちることは何とか回避していた様でした。

尚、旧部史その他の記録は私が貫戸氏より預かり、ロッカーに鍵をかけて入れて置いた様に思います。前述の如く誰かにお見せしたかも知れず、誠に残念乍ら覚えておりません。長々と不確かな記憶を述べて参りましたが皆で話し合ったら又新たな記憶を探り出すかも知れず、京都も近くなりましたので出頭命令があれば何時でも喜んで出席させていただきます。

(50年史より再録)

終戦直後の京大での私の球歴



昭和23年卒業 酒井重通

復員ボケからようやく立ち直って、昭和21年に京大に復学、食糧難で朝はコッペパン一個、昼はすいとん二個杯、夜は米一合といったところで、蹴球どころではなかったある日、高校対抗戦がある、というので出て行った。靴などはなくハダシである。どういう風の吹きまわしか、いいパスをもらって、たしかグラウンダーで右隅にシュートを決めた。それを見ていた当時の京大蹴球部深山主将（広島高）がやってきて、ぜひ蹴球部へ入れ、という。蹴球をやりたいくて東京の中学から六高へ行った私だが、京大でやるつもりはなかった。が、もともと好きな道なので、口説き落とされ、関西大学サッカー1部リーグや、第二回国体（金沢）に京都地区代表の全京大のメンバーとして出場する、という球歴を持つことになった。

思い出のゴールゲット



昭和23年卒業 藤本 典秀

正確な年月は忘れたが、多分1947年（昭和22年）秋のリーグ戦だったと思う。当時リーグ校は関学、神経大（現神大）、関大、京大、神商大、阪大（成績順）で、関学、関大、神経大はいずれも全国で一線級であった。

関学戦で、前半拮抗したが1点先行されていた。前半終了間近、センターより左ウイング（小生）にパスされた球を中央に切り込み、1、2度ドリブル後シュートと同時に相手バック스에スライディングタックルされ、正に蛙がヘシャゲられたようにグラウンドにたたきつけられた。その一瞬脳裏には、球がゴールの上をオーバーしたと思いきや、顔を上げた瞬間相手キーパーが両手を上げた間を抜けて、上端一杯に見事に決まっていた。同点で前半終了、先輩同輩から祝福された。しかし、後半20分位で7点を奪われ、体力の差をみせつけられた。

昭和20年代前半の時代背景と思い出

昭和23年度主将 恒藤 武

私が主将を務めた昭和23年とはいうと、もう半世紀も前のことで、当時の記憶は風化してバラバラでかつ臆気である。そこで、50年史をめくって当時のことを記している方々の文章から、時代背景を如実に示している箇所を抜き出してみることにした。（引用に当たり敬称を省略します）

「戦後の混迷した社会情勢の中で、しかも食糧、資材の欠乏甚だしい悪条件下において…」（S.21. 向井清之）

「…終戦後の混乱期で食糧事情の悪い時でもあり…」（S.22. 宗田邦男）

「昭和21～23年食糧事情の最悪の京都下宿生活の飢餓の中でやったサッカー、まさにハングリースポーツ？」（S.23. 酒井重道）

「何しろ食糧難の時代でしたから、空腹でボールを蹴っていた訳で…」（S.23.9. 梶川玄治 旧姓・太池）

「食糧難の栄養不足時代にサッカーをし…」（S.25. 深浦秀夫）

「空腹を感じながらボールを蹴っていた…」（S.26. 松本 昭）

これらを証言とすると、終戦後の数年間に共通しているのは、物資不足、特に食糧難からくる空腹感の切実な悩みであった。

私は当時銀閣寺の近くに下宿していたが、米が配給で、米穀通帳を近くの外食食堂に預け、三度の食事に通ったのであるが、腹一杯食べるという訳にはいかなかった。そのような社会環境にあったから「腹が減って仕様がないうのに、よくサッカーなんかするねえ」と友人から言われたことがある。したがって部員数もメンバー編成がやっとならなかつたから、「当時は常時メンバーがちょうど11人で、試合当日全員の顔が揃うまで安心出来ませんでし

た」(S.24.小島洗一)という心配をしながら、試合に臨んだものである。

かかる食糧難の中で、終戦後初の夏期強化合宿を西宮球場の一室を借りて行うことになったが、米の調達のため部員に松山まで船で買い出しに行ってもらった。この合宿のことについては岡本が記述すると言っていたので、詳細はそれに譲ることとする。

50年史に掲載されている年度別の合宿時の記念写真を見ると、参加人数が徐々に増えており、社会情勢が好転しつつあったことが窺われる。

昭和23年(西宮) 8人。昭和24年(名張) 11人。昭和25年(大社) 15人。

この合宿をはじめとする部活動の資金は、部員によるアイスキャンデー売り、音楽会などの入場券売り等のアルバイト収入、個人負担の他はOBの方々からの寄付で充当した。当時は現在のような組織立ったOB会の運営がまだなされていなかったため、部員が手分けして先輩をお訪ねして寄付を仰いだ。物資不足の時代で一人暮らしの学生生活ですらまならぬ頃であったから、所帯を構えて生計を維持することはより大変なことであった筈で、困難な事情の中で部の活動を支援して下さった先輩各位にはただただ頭の下がる思いである。

こうやってみると、時代検証としてのキーワードは、物資不足、食糧難、空腹感ということになり、本来サッカーどころではなかったのである。地元出身者が主力の関学、関大、神経大に比べ、下宿生活者が多い京大が条件的に不利であったのは明白で、ギリギリのメンバーでお互いによく頑張ったなあという想いで一杯である。一緒に練習し、試合に出た連中の中で、

私のことを「年寄り」と呼んで飄々とプレーしていた 越智 修三
 大便時のチリ紙4枚説で皆を笑わせた 遠藤 隆一
 マネジャーとして部活動のみならず私の代理として学連の活動に尽力してくれた

松本 昭

ハンティングをかぶってゴールを守ったダンディーな 藤田 勇雄
 正統派の堅実なプレーでチームの要として活躍した 深山 荘二郎

の諸君が故人となられた。50年の歳月の流れに思いを致し、心からご冥福を祈る次第である。

文末になったが、昭和23年の主な事項を記録にとどめておく。

1. 朝日招待サッカーの復活。

昭和23年1月 全京大 0-4 全東大

昭和24年1月 全京大 2-5 全文理大

2. 戦後第1回全日本代表候補選手強化合宿に、恒藤 武が参加した。

・期間は、昭和23年7月9日～18日。

・場所は、静岡県三島、日大校舎(元重砲連隊跡)。

3. 東大定期戦復活内定。

昭和23年8月に、恒藤が上京し、東大・馬渡キャプテン、馬越マネジャーと打ち合わせで、昭和24年7月に復活第1回定期戦を東大御殿下グラウンドで実施することが内定した。

4. 同志社大定期戦実施内定。

京都蹴球協会事務局の清水定一氏のご配慮で、都新聞社後援にて実施が決まり、第1回定期戦は、昭和24年5月に京大農学部グラウンドで実施された。

5. 最後の旧制高等学校インターハイの運営。

昭和23年10月12日～17日 於、京大農学部グラウンド。

戦後の初合宿

昭和25年卒業 岡本 彰 郎

1945年（昭和20年）8月15日、第2次世界大戦終結。1947年（昭和22年）春、京大入学。先輩の横山慶一さんの勧めで蹴球部に入部した。

翌1948年、戦後はじめての夏期合宿をもった。戦時体制の長い抑圧から脱却して、自由の風潮を急速に取り戻しつつあった我々にとって、夏の合宿というスポーツ三昧の生活は申し分ないイベントだった。場所は西宮球技場、宿舎は当時、阪急電鉄におられた先輩山口興一さんのお世話で西宮球場と決まった。西宮球場はプロ野球の元阪急ブレーブスのホームグラウンドである。スタンド下の大きな部屋が宿舎だった。しかし、合宿という戦時中だったら望むこともできないイベントに我々は勇気百倍して乗り込んだものだが、如何せん、敗戦国の悲しさ、食糧は全く不足していた。若いから動物性蛋白は欠かすことができない。ところが、阪急西宮駅近くの市場に不思議と鯨のベーコンだけが売られていた。買い出しに出た私は毎日の如くベーコンを買って帰り、みんなに食わせた。脂っこいので、さすがにみんな閉口したらしいが、以後しばらくは「クジラ」と綽名されてしまった。合宿の苦しさは忘れてしまったが、クジラの話だけは合宿の思い出として未だに鮮明である。



70分の3の回顧録

昭和25年度主将 小山 啓 二

70年の京大蹴球部の歴史の中で、私の在席した昭和23、24、25年度の三年間は、今から顧ると太平洋戦争後間もない頃で、年一年と復興の兆しが表れはじめていたものの、まだまだ混沌とした窮迫の時代であった。腹を空かしながら、よくぞ部活動が続けられたと感慨深く思い出す。

蹴球部としては、戦前の輝かしい実績に比して、取り立てて言うべきほどのことはなかった。それでも一部リーグで一方の陣を張れたのは、伝統の力というものであったろうか。誇るべき戦績は、残念ながらあまり見当たらないけれども、当時の部活動の一端を順を追って紹介し、往時を偲ぶことにしよう。

昭和23年度

チームの内情

入学と同時に蹴球部に入り、北白川のグラウンドで球を蹴り始めた。戦後間もない頃とて世情も落ち着かず、一緒に入部した一回生は、今は亡き松本 昭君、途中休部した井上 通君、病気のためやがて休学した田部忠行君と私の四名だけだった。

二、三回生も人数は少なく、やっとチームが編成できる程度で、普段の練習はいつも10人に満たず、ポジションもFWをやったりBKをやったり、その時その時で互いに補いながらお茶を濁していた。戦争によるダメージがまだ色濃く残っていた所為だったろう。

でも、そんな練習が却ってポジションを固定せず、オールラウンドプレーヤーとまではいなくても、どんな場面でも自然になんとかこなせる底力が個々に醸成されてきて、意外な効果をもたらした。

西宮合宿

小人数といえども、チーム作りに対する情熱だけはどこにも負けず、厳しい世情の中、戦後初めて夏合宿を実施した。練習グラウンドは西宮球技場のサブグラウンドを使用、寝泊まりは西宮野球場の一隅に寝具、食料を持ち込んで、部員が交代で買い出し、炊事を担当するという涙ぐましさであった。

当時、米はまだ配給制で合宿の食料を賄うには到底足りず、先輩を頼って四国の波止場まで闇米の買い出しに出掛けた。故宇和川 孜氏と一緒に、米を担いで大阪の天保山栈橋に帰りついた時、経済警察（闇商売の取り締まり）に捕まって危うく折角の米を没収されそうになったが、学生証を出して合宿用のものだと必死に抗弁し、親爺ぐらゐの年配の警官に見逃してもらって助かった。

そんな苦労を重ねた夏合宿も、参集したのは僅か10名足らずで、激励に訪れた諸先輩は“秋のシーズンは大丈夫か”と口々に心配されていた。

最後のインターハイ

夏合宿が終わって秋のシーズンに入ると、追々部員も北白川に戻ってきて、この年の10月に旧制高校最後のインターハイの全国大会が、この農学部グラウンドで開催された。終戦後全国の高校が一同に会したのは、これが最初にして最後だった。

この大会は、京大・東大の共同開催であったため、東大ア式蹴球部の部員が多数東京から駆けつけてきて大会の運営に協力し、審判も交互で担当して共々に有終の美を飾ることが出来た。時の京大蹴球部長原 髓園文学部教授(西洋史)は「昔、ギリシャの若者達は生命を賭けて得意の技を競い合ったが、その若者達の伝統を、二千年の時を経て、遠い東の国に具現したのがこのインターハイではないだろうか。ここに参集された皆さんと一緒に、万感の憶いをこめて、栄光あるインターハイの残紅を、今、永遠に見送りたいと思う」と、惜別の辞を述べられたが、参集の学生達にとって感動的な瞬間だった。

秋のシーズン

インターハイの実施によって、部員のまとまりは更に良くなり、リーグ戦の開始前にはあまり評価されていなかった京大が、一部リーグ各チームに互して対等に戦いをすすめ、リーグ終了後の正月には、朝日招待大会に全京大として出場することが出来た。

スタープレーヤーのいない京大としては、まずまずのシーズンを送れたのではないかと思う。スタープレーヤーこそいなかったものの、苦しい環境の中であって、往時の輝きを取り戻そうという一同の一致した目的意識が、チームをまとめ上げる力として働いたのであろう。

昭和24年度

新制大学発足

この年から学制が変わった。旧制高校はあと一年を残して廃止と決まり、代わって現在につながる新制度の大学（新制大学と呼んだ）が発足し、旧制度によるものと新制度によるものが同時に入学してきた。但し、新制度の大学は準備が間に合わず、受験による合格者は決定したものの、入学は秋まで延期され一学期の間は待機ということで、四月には旧制の入学者のみが京大生となって、吉田・北白川にやってきた。

三月に卒業したのは、豆タンクとあだ名された突貫小僧の小島 洸氏一人で、新たに入部してきたのは旧制5名、秋には新制の5名が加わる予定で、員数的には一息つける状態になった。然しながら、万事うまくは運ばないもので、日頃の無理が祟って体調を損う者、アルバイトに精を出さねば学業が続けられない者、理科系で卒論の実習に追われてグラウンドに出る余裕のない者が続出し、いつもちぐはぐな練習しか出来なかった。

昨年度のメンバーが殆ど残留し、新部員が大幅に増えるという好条件は、当然チーム力をアップさせる筈だが、諸般の事情でなかなか思うようにならない。少数精鋭というのは精鋭が少数で成り立つものではなくて、少数になれば夫々が精鋭に育つということなのだろうか。

更に、秋になっての新制の入部者は宇治の分校が本拠となって、北白川には稀にしか顔を出せないという事情も重なって、この年度は保有戦力の割には結果を残せなかったように思える。

東大定期戦

前年のインターハイで東大の連中と共同作業をしたのが縁となって、東大と定期戦を行うことになった。まずは第一回、京大が東征した。

東海道線の急行で東京まで10時間ぐらいかかり、遠征費用節約のため夜行を利用するというハードなスケジュール。宿舎は、在京の諸先輩のお宅や勤務先の会社の寮を世話してもらって、2～3名ずつ分宿した。籤引により私は越智修三氏（昭和25年卒、卒業後間もなく結核で死亡）と二人で日本橋近くのF電工の寮に泊めてもらった。先輩のお宅にあたった人は、奥方の手料理のもてなしを受けたりして結構な待遇だったらしいが、こちらは粗末な外食を済ませたあと、せんべい布団にくるまったものの、隣の部屋で社員の人達が麻雀をやっていて、夜中の3時頃まで眠れず、翌朝寝不足の目を腫らしたまま東大御殿下グラウンドに出向いた。事情を知った先輩が心配して、東大側に頼んで、すぐ前の東大病院で葡萄糖の注射を打ってもらい力をつけたが、越智氏と顔を見合わせて“まるで鬮鶏のシャモだな”と苦い思いを噛みしめた。

試合のほうは、前年度関東の覇者東大を相手に、堂々と後半まで1-0とリードしていたが、終了直前に東大のプライドと執念による1点を押し込まれ、掌中の珠玉を取り落とした。ゴールネットの隅に転がるボールを拾って、センターラインに戻ってくる深山主将の残念そうな顔付きが未だに脳裏に焼き付いている。目の前の安田講堂の時計は、試合時間をすでに3分ほど過ぎていた。何故時間が延長されたのだろうと不思議だった。試合を観戦していた早稲田と東京教育大（現筑波大）のマネジャーが急遽対戦の希望を打診して

きたが、当方は翌日の予定もあり、滞京延長の費用もないので、素っ気なく蹴飛ばしてしまった。

明るく日は、渋谷区の初台にある草茫々のグラウンドで東京体育専門学校（のち筑波大に吸収）とのオープン試合を2-0で一蹴し、そのまま東京駅へ駆けつけて、又々夜行列車で帰途につくという、まことにハードな遠征であった。

名張合宿 シーズンイン

この年の夏合宿は三重県の名張だった。周りを山に囲まれた小高い丘の赤土のグラウンドで、とにかく暑かった。食事は作ってくれたが、米はやはり持ち込みで、参加人員は西宮の時よりは少し増えて12名、ようやく1チーム出来た。同じ時期に早稲田のアメフト部がそのグラウンドで合宿練習していたが、あちらは盛大に40~50名がグラウンド一杯に散っているのに、こちらは球拾いの人数の余裕もなく寂しい限りだった。

雨が降って少しグラウンドが濡れると、赤土がボールにくっついて雪だるまのように大きくなり、転がってくる球をストップしようとする、まるで鉄の塊が当たったように重く、足がすくわれて転倒しそうになった。この方が足首を強化するのにいい練習になる、などと負け惜しみを言いながら走り回っていたが、天候にも恵まれず、精神強化の他はあまり効果があがらなかったように思う。

まだ入学式も済まない待機中の新制の長井 茂君が参加してくれていたが、いかにも気の毒だった。合宿期間の一週間が過ぎるのを待ち兼ねたように山を降りた。参加人員が予定より少なく、米がいくらか余ったので、早稲田のアメフト部へ譲って大いに感謝されたが、彼等はずいぶん長期にわたってキャンプを張っていたようだ。

秋のリーグ戦は、この年の宿命ともいえるメンバーの故障が連続し、実力を考えれば、大変不本意な成績に終わった。阪大と最下位争いを演じ、引き分け再試合で漸く勝利して、二部との入替戦だけはまぬがれた。

部員も増え、シーズン後の全関西の強化練習に5名もピックアップされる人材を要しながら、リーグ戦5試合を通じてわずか2点しかとれなかった。ここらあたりがチームづくりの難しいところだろう。

この年度は、復活した東大戦以外はあまり印象的な場面はない。春に思わぬ敗北を喫した同志社に対し、秋には鬱憤を晴らすように10-0と大勝したのも、年間を通じ不安定だったチーム状態を象徴しているようだ。

昭和25年度

チームづくり

心技の中心だった恒藤、深山の両氏をはじめ大量8人が卒業して、チームづくりは全くの白紙から出発しなければならなかった。しかも、私と同学年の田部君は病気休学中、井上君は学業専念のため休部、松本君はハンドボール部の創設に走り、いきおい私が主将の任を引き受けざるを得なくなった。新入部員は、最後の旧制、二年目の新制合わせて6名だったが、幸いなことに新制の二回生が宇治から吉田に移ってきて、新しく毎日の練習に加わり始めた。まさに新旧混交である。

京都にあって他チームにおくれをとったことは未だかつてなかったけれども、私立の同

志社は一足先に新学制が滑り出していて、それまでの高商チームを大学チームに格上げし力をつけて、打倒京大に目の色を変えている。前年から始めた春の定期戦が6月初旬に迫っているの、なんとかチームの形を作らねばならず、とりあえず各人の経験したポジションを割り振って見たら、BK陣は新制の人ばかりで、なんだか芯が抜けたような布陣になってしまう。やはり連携プレーには核になる精神的支えが必要で、近江君にBKに下がってもらい、GKを大橋君に任せて、なんとか格好がついてきた。

新チームでのテストマッチ同志社戦では、私がCFをつとめて斬込隊長となり、RW西田君の快走、左サイドFW大石、片山両君のキープ力、新制長井茂君の幅広い動きなどが際立って3-1で快勝した。同志社は、意気込みが空回りしてガックリと肩を落とし、当方はあたかも“まだまだ君達には負けないよ”と言わんばかりに、高らかにGO KIUを歌い上げてまことに気分がよろしい。

同志社のコーチをしていた賀川浩氏(神戸大出身、全日本メンバー)が首をかしげながら私のところへやってきて“今日は勝てると踏んでたんだがな”と口惜しがっていた。

東大定期戦中止

ムードというのは不思議なもので、同志社戦の僅かな一勝がチームの雰囲気盛り上げた。夏に予定されている東大との定期戦に備えて、更にチーム力をつけ、今年の京大の型を作ってゆこうと、日々の練習に力が入ってきた。その頃実業団チームの雄であった大阪ガスと対戦し、一方的に7-1と圧勝して自信を深め、京都師範OB中心の紫光クラブ(Jリーグ京都パープルサンガの発祥母体)とも何度か練習試合をしたが、引き分けはあっても負けたことはなかった。

これなら関東の雄東大ともいい勝負になるだろう、一泡ふかせることも出来るかも知れない。毎日の練習にも熱が入ってきた。ところがどうだろう。東大からマネジャーの河村君のところに、芳しくない打診の報が入った。“昨年は京大が東京へ来たので、今年は東大が京都へ行く番だが、遠征費用や宿所の手配のこともあり、また選手達の個人的都合で、どうしてもやり繰りがつかず、勝手を言うようだが、今年もう一度東京へ来てもらえないだろうか”ということである。

何ということか。昨年多大の犠牲をはらって漸く東征したのに、引き続いて今年もとは出来得べくもない。先輩にも重ねて支援を頼むわけにはいかない。どうしてもということなら中止も止むなし、と再三交渉したが、遂に折り合いがつかず、本年度は中止と決定した。東大京大定期戦の25年度の戦績のないのはこのような事情による。時代を象徴していたともいえる。

出雲大社会宿

目前の目標が突然なくなって、皆気が抜けたようになったが、河村マネジャーが耳よりの話を持ち込んできた。彼の出身校である松江高校の地元、島根県蹴球協会の大社支部が、京大蹴球部の合宿を大いに歓迎する、との情報である。出雲は、京阪神の都会から遠く離れた農村地帯で、食糧も不足なく、合宿への米の持参も必要ないとのこと。このことが一番効いて、今年是非其処にしようと、なんとも単純にしてイジましい理由で出雲に決定した。

瓢箪から駒が出たような感じだが、結果は非常に良かった。宿舎にした大社門前町の旅

籠『日の出館』の当主が大社中学（現高校）サッカー部OBで一手に世話を引き受けてくれ、練習も大社高校のグラウンドを使用し、大社中学OBチームや新制大社高校チームが練習台になってくれた。丁度、隣県鳥取県のNHK支局長をしておられた往年の日本代表名GK金沢 宏先輩が姿を見せられて何日間かの指導が受けられたし、四月に卒業したばかりの恒藤氏も初めから終わりまで付きっきりでコーチを務めてもらった。実りある練習が出来た。

合宿終了後は協会の大社支部の役員の人達が、船で観光名所の日御崎まで、宿のお姐さん方と一緒に案内してくれ、最後に出雲大社の神前に秋のシーズンの必勝を祈念して解散した。だが、好邪魔多しとはこのことか。合宿解散の夕刻頃から雨が降り出して、次第に風雨が強まり、かのジェーン台風が中国・近畿地方を襲ってきて、交通機関は麻痺状態となり、それぞれに別れて帰途についたものの、みな汽車の中や駅のベンチで夜を明かしたり、秋芳洞方面に廻ったものは大雨洪水で動きが取れなくなったり、散々な目に遭った。

秋のシーズンとその後

長短あったけれども、この出雲の合宿はよかった。部員のまとまりが一段と強固になって、シーズンに入ってから練習への出席率もよくなり、各ポジションもおおよそ固定して、チームとして幾つかの攻めのパターンが生まれてきた。リーグ戦でも、Bクラスに甘んじはしたが、5試合で11点を取るという近来にない得点能力を誇示し得たのも、密なる練習の賜物であったと思う。

アサヒスポーツの新聞評にも「全員でフルに走り回る京大チーム」というように取り上げられており、技の拙さを忠実さで補うという、スターの存在しないチームの目指すべき一つの型を表現出来た。当時の主将として、ここらあたりで少しばかり胸を張らせていただきたい。

リーグ戦が終了してみると、二部リーグでは同志社大が優勝していた。一部の最下位は例年のごとく阪大である。そこで同志社から、阪大との入替戦への力試しとして、延び延びになっていた京大との秋の定期戦を急遽実施したいとの申し入れがあった。少し間が抜けたが、同じ京都の仲間として相手になろうではないか、ということで木枯らしの吹く北白川農学部グラウンドで対戦することになった。

結果は1-0で勝ったが、同志社は個々の走力や足技は京大より上に見えるのに球離れが悪く、守る側としてはマークがずれないので、非常に守り易い。同志社の賀川コーチにその点を指摘したら、彼氏も頷いて入替戦までにそのことを徹底的に叩き込む、と決意を固めていた。

作戦が効を奏したのかどうか解らないけれども、結果的には同志社が阪大を下して初めて一部に昇格することになった。二部の各大学が段々と力をつけてきており、大阪経済大学や京都学芸大学などは同志社と同等の実力を有していて、京大もうかうかしておれない状態が迫っていた。

年が明けて主将の任を大石道夫君に託し、三年間の私の蹴球部生活も終わったが、新しい年度は私一人が抜けるだけなので、そんなに戦力ダウンする筈がなく、一応は安心していた。然し、押し寄せる新しい波には、想像以上に強烈な感触があったので、一抹の不安は消しようもなかったのは、今でもはっきり覚えている。

以上三年間を振り返って、華々しく語り継げる事柄はないけれども、苦しかったあの時代に、何とか京大蹴球部の灯を絶やすことなく、次代に受け渡すという責務を果せた満足

感は持っている。社会へ出てからも、高校時代のサッカー部の仲間、そして京大蹴球部、さらにはインターハイ、リーグ戦を通じての友人知己と、生活の半分以上がサッカーを介してのもののような気がする。

特に、練習終了後、暮れなずむ比叡の山を背景に、仲間と肩を並べてグラウンドの脇道を歩きながら GO KIU を吟唱したあの時のことは、忘れようとしても忘れられない。

私は、歴史と伝統に裏打ちされた京大蹴球部が大好きである。魂の故郷ふるさととも言えるKIUが大好きなのである。



あの頃のこと

昭和27年卒業 河村 篤彦

私が京大に入ったのが昭和24年。あの頃は敗戦の混乱が漸く収まりかけてはいたものの、世の中は占領下から独立へと進む中で、全面講和か単独講和か、学内にはデカデカとした立て看板、毎日のような学生デモなど騒然たる雰囲気、田舎の高等学校から来た私にとって戸惑いの連続であった。

下村事件、三鷹事件、松川事件などが相ついで起こる中で、朝鮮戦争の勃発、共産党幹部の追放など学内はますます揺れた。全学の自治組織の同学会に規約によって運動部を代表して執行委員として入った。執行委員会は所謂過激なカーペーの牛耳るところであった。執行委員会ではノンポリの私は常に無視されてはいたが、その雰囲気は時には激しい論争の場であり、時には沈黙の場であった。彼らは次々に事件を起こして、或いは停学になり、或いは退学になり、或いは自ら身を消し、ついには同学会自体解散させられた。今になって彼らはどうしているだろうかと思ひ起こすことがある。

蹴球部へは、高校の先輩にすすめられて入学と同時に入った。「出席をとらん講義に出る奴の気が知れん」との先輩達の忠告に従って講義はあまり出なかった。私だけでなく、朝から弁当持ちでウチに碁を打ちに来ていた者もいた。彼らはたまに教室であうと腕枕で眠っていた。そして揃って農学部のグラウンドへ行った。練習だけは真面目に通った。というより暇はあったが金がなくて他にすることがなかったからだった。熱心なわりには一向に旨くならなかった。プレーヤーはあきらめてマネジャーになった。阪神間の先輩を訪ねて、後援会費を集めて回った。おかげで多くの先輩と顔馴染みになった。昼飯をご馳走してくれる先輩には時間を見計らって行った。東京の先輩も回った。今だにその時の話が出る老大先輩も健在である。

たまには試合に出してもらった。最後の試合は大経大との一部、二部入替戦だった。私はキーパーだった。0-0で守り切れると思った時、中央のバックを抜けたボールを追って敵のフォワードが走り込んだ。オフサイドという声が出た。シュートは私の脇を抜けた。ホイッスルが鳴った。その瞬間は今でも目に浮かんでくる。京大が初めて二部に転落した一瞬であった。

あれから50年。70周年の日、京大のグラウンドに立ち、紫こむる大比叡を眺めた時、まざまざとあの頃のことを思い出した。そして70年の生涯の中、僅か3年間であったが、充実した生活を送り得たことを誇りに思っている。

旧制から新制へ - 1粒の麦 -

昭和27年度主将 近江 達



戦後の混乱が漸く静まりつつあった昭和24年春、入部した途端、同じ新人の三高出の連中が上級生と友達のように振る舞うのにまず驚いた。現代の諸君には何でもないことだろうが、戦前の「長幼序あり」で教育された私には、上級生を呼び捨てにするさえ思いもよらぬことだった。年食った彼らが中学では先輩達と同窓だったと、理由はやがて分かったけれど、兵隊帰りの3回生など「昭和生まれがいる」と口に出すくらいだったから、どちらを見ても大人ばかり。そんな中でプレーすることは、最年少で神経質な私にはとてもやりづらく、気おされて萎縮したプレーになるのを、どう仕様もなかった。

それでも、復活第1回の東大との定期戦には、空いていたLWに出された。さいわい右からのセンタリングのボールを、まともに蹴るとみせて逆を狙った浮き球シュートがうまく決まり引き分けたものの、あとで相手にいやというほど足を踏んづけられて動けなくなってしまった。その後、夢中で戦った同志社との定期戦のハットトリックでやっと膨らみかけた自信は、一部リーグが始まって、きびしいチェックに出会うと、アツという間に跡形もなく消え失せてしまった。

当時は関西でも当たりがきつかった京大は、伝統的にフェアなので、他校は京大との試合を皆喜んだものだから、よそのチームでは今なら反則にとられるプレーがざらだった。それにまだ戦後の食糧難は続いており、外食券で僅かな食事にありつく時代だったから、西宮まで試合に出掛けるだけで疲れてしまう。結局、その年は一部リーグ5位。追い出しコンパで深山主将が「今年は有望な新人が入って期待していたのに」と言ったとき、申し訳なくて顔を上げられなかった。私からレギュラーの座を奪ってみせると宣言した同期生など、あの夜の光景は今でも目に浮かぶ。

翌25年のリーグは、当時全盛で日本一を誇っていた関学に3得点をあげるなど、小山主将らの活躍で切り抜けたが、26年にはどうしても勝てず、入替戦で大経大に0-1で敗れ、京大蹴球部創立以来初めて二部に転落してしまった。

遠因は学制改革にあり、当時はちょうど旧制（戦前の6・5・3・3制）から新制（現在の6・3・3・4制）への移行時期だった。（学制改革は、戦勝国アメリカの命令による。目的は、将来の日本を背負って立つ人物を育成する旧制高校、帝大の解体であった）

旧制では、中学5年から旧制高校3年を経て大学に進んだ。旧制高校への入試は今の大学入試同様に難しかったが、入ってしまえば、新制高校のような大学受験予備校と違って、青春を謳歌し、「勝って泣き、負けて泣こう」という生き方だったから、スポーツは盛んだった。その上、京大蹴球部へ入るほどの者は、旧制高校の主将やスタープレーヤーばかりで一国一城の主といった大人が多かったので、大して練習もせず11人揃う日さえ珍しいくらいだったけれども、結構強く、優秀選手を推薦入学させて鍛える私大を凌駕した時代さえあった。（旧制大学の歴史に関連して是非書き残しておきたいのは、神戸一中のことである。一流校への進学率でも中学サッカーでもトップクラスを続けていた神戸一中は、全国の旧制高校蹴球部への選手の供給源であった。従って、京大蹴球部にも神戸一中の出身者

が多く、多くの名選手が生まれた)

だから、この選手供給源だった旧制高校の廃止は京大蹴球部にとって大変な痛手であり、これを境に選手のレベルは急激に落ちた。新制となると、旧制中学上級に相当する新制高校からストレートに大学に入るため、他の私立大学と全く同じ条件になっただけでなく、高校でサッカーに打ち込んだのでは京大に入れぬ、という状態になったからである。

27年、医学部を除いて、旧制最後の卒業生が出たあと、私が主将、新制の長井が副主将、武居が主務に命じられた。しかし、サッカーそのものに対する情熱では誰にも負けなくても、現実のサッカー界の在り方に強い疑心を持ち続けていた私は、良い主将とは言えなかった。人は先ず勝敗を問題にし、そこからさかのぼって技術力や鍛え方の差をとやかく言う。たしかに、グラウンドに出た以上、そこでは何もかも忘れてサッカーに熱中しつくさねばならない。しかし、普段の生活を見ると、京大生は勉学を第一、スポーツを第二としているが、大学の中には、勉学はそっちのけで、外国のプロ以上の練習に明け暮れているものもある。それほどちがったものを同列に扱うこと、そういうスポーツのあり方は正しいと言えるのであろうか……。

だが、成績は悪くなかった。旧制時代より小型になったが、長井、大羽、志方、広野らが活躍し、FWラインを浅くして敵のBKを引き出す作戦も効を奏して、名手岡野（その後、全日本コーチ）が率いた東大にも、一部の同志社にも快勝した。ただ残念なことには、前年から台頭して宿敵となった二部の京都教育大学とは、数回戦いながら引き分けか1点差の惜敗を繰り返し、とうとう二部で優勝できなかった。優勝した京教大は、たしか7-0くらいの大差で一部に昇格したから、京大も一部の實力は十分あったわけで、京教大につき勝てなかったのは、主将の私が懐疑的で生ぬるく、将たる力量に欠けていたため、同期の諸君には済まなかったと思っている。

私の在学した頃の京大の先輩や選手は皆紳士で知的だった。あるいは、そういう人々が残り、そうでないものは去ったのであろう。社会に出て、いろいろな人や世界に接し、人物の大きさ、広さ、深さについて感じ考える年になってみると、つくづくそう思う。

現役の時、よく「京大生なら、もっと頭を使え」と言われたものだ。しかし、ほんやり者の私はその意欲はあったけれども、どこに、どのように頭を使うのか、茫然として分からぬまま、糸口さえ掴めぬまま卒業してしまった。

少年老いや早く学成り難し。あれから十数年の歳月が流れ、縁あって少年たちにサッカーを教えるようになったとき、私の胸は、少年たちに自分の二の舞いをさせてはならぬ、という思いで一杯だった。

金沢、栗原、安居、友貞、皆木……名選手といわれたOBのプレーを見て、そういうプレーが何故私には出来なかったのか、私が知らないで彼らが知っていることは何なのか、コツはどこにあるのか、彼らはどうして自分のもてる力をいつでも十分に発揮できるのか……現役時代、何となくわだかまり、月日とともに次第にはっきりしてきた悔恨と疑問を、ひとつひとつ追究し解明して、少年たちの教育に生かすことが、私の仕事となった。

そして、この京大蹴球部から地に落ちこぼれた一粒の種子は、今や従来の日本人の枠を越えた見事な技術戦術を身につけ、しかも、いかにも楽しげにプレーする少年たちの出現となって、実を結びつつあるのである。(現、枚方フットボールクラブ・コーチ)

(50年史より再録)

(注) このたび70年史を発行するに当たり、近江先輩からは改めて「回顧からパイオニアへ」と題する手記を寄せていただいた。本稿が昭和20年代の一時期の年代記であるのに対し、「回顧からパイオニアへ」には、その後、枚方フットボールクラブを全日本クラブユース選手権大会で2回優勝、2回準優勝に導かれたことについても触れられている。ついで、「回顧からパイオニアへ」は、本稿と一部内容の重複するところがあるが、「VI. 活躍するOB達」の項に掲載させていただいた。(編)



苦しかった昭和28年度

昭和28年度主将 大羽 泰

昭和28年度のリーグ成績を唐原友三郎先輩が教えて下さった。計算してみると、6試合4勝2敗で、得点合計25、失点合計11であった。「入れた点も沢山だが、入れられた点も沢山、近来の新記録」とのことである。このような妙な新記録については今まで意識していなかったが、当時のわれわれのおかれていた苦しい事態をふりかえって感慨なきを得ない。名門出身の優秀な人が理科学部にはかなりいたのに、健康上の理由などで実戦に参加してもらえなかったことは本当に残念であった。したがって大抵の試合はマネジャー共で12、3人ででかけた。夏の東大戦の翌日、東伏見の対早大戦で撮った写真によると総勢14人である。

卒業後40年も経ったが、あのチームのイメージは大変鮮明に残っている。得点が多かった理由は恐らく、駿足強蹴の右ウイング平岡君、インサイド若山君、猛烈なスピードでヘディングを放つ左ウイングの広野君（岸和田時代、平木隆三氏＝関学、古河を経て名古屋グランパス初代監督＝等ともまれただけあって、とにかくすごかった）、それに技と攻撃力に優れたセンターハーフ志方君（浦和時代、全国制覇している）、確実な守備の押坂君（当時の名門・伊賀上野出身のベテラン）、馬力のある大友君、忠実なプレーの松尾君、武居君、須藤君、木村君、それに新人の長井君等が頑張ってくれたからだと思う。

ところで、私が在学した3年間の東大戦は1勝2敗であった。京大グラウンドでの雨中戦で勝ったのだが、あの年はたしか中条氏（朝日新聞）か海老原氏が東大の最年輩で、岡野俊一郎氏（昭和28年度主将）はセンターフォワードをやっていた。その時でも実力の上では東大がまさっていたように思う。その後、岡野氏ひきいる東大は大学選手権で優勝したことでも分かるように、最強の時代で、副将の原氏や後に本邦初の国際審判員になられた浅見氏等、立派な選手を相手に昭和28年度のわれわれは完敗した。

同志社戦ではなかなかよく戦った記憶がある。ただ同大はエンジ色のユニフォームだったので、そうでなくても発育がよく体の大きい同大の連中が、色彩的にますます大きく見え、われわれダークブルーは縮小して見えるのに閉口した。

現在は部員の数も増え、優秀な選手が沢山いることはまことに喜ばしい。昭和48年頃、日本リーグの一戦のテレビ解説に岡山に来られた岡野俊一郎氏に20年ぶりに会ったら、「京大も近頃はなかなか強いですよ」と認めておられ、大分、態度が変わったなと感じた次第。京大蹴球部の発展を心から祈ります。

(注) 本稿は、50年史の手記に一部加筆していただいたものです。

体育会の本旨は知育・体育の両立



昭和29年度主務 武居 誠之

「最早戦後ではない」と、経済白書に記載されたのが昭和31年であり、我々の学生生活は真に戦後の混乱期であった。小学校の低学年で太平洋戦争に突入り、軍事教練、勤労働員、戦災などに戸惑い、敗戦後の混乱を身を以って体験し、漸く、食糧難から開放された時点で占領軍の指令による学制改革が実施された。京大サッカーの母体は旧制高校のサッカー部における猛練習にあったが、昭和29年に旧制入学者の全てが卒業し、新制高校サッカーは広島、神戸などに旧制中学の伝統を引き継いだ強力チームが出現したが、食糧難、ボール、靴、練習場などの入手難により高校で満足にサッカーの基礎を習得した選手を京大に迎えることは容易でなかった。

昭和25年に阪大が2部に転落、同志社大が1部に昇格、京大も翌年には関西学生リーグ1部で最下位となり、残念乍ら、漸く台頭し始めた新制大学(大阪経済大学：旧昭和商)に1部の地位を譲ることとなった。

当時の学生生活は戦後の政治的混乱を背景とした不安、危機感が漲り、なかでも京大・同学会は毎年全学連に中央執行委員長を送り出す共産党主導の学生運動のメッカであった。このような状況を憂慮された運動部の先輩、教授が大学スポーツ復興の必要性を痛感され、スポーツ振興のため大規模な寄付金募集事業が行われた。各運動部の主将、マネジャーは、この事業の推進を通じ横の連帯を強め、スポーツ会館の設立、グラウンドの修復などの環境整備が進み、昭和28年、運動部協議会が同学会から独立して、今日の京大・体育会が発足した。

体育会の趣旨は知育、体育の両立であり、新入部員の獲得と、大学としての体育予算の確保であり、その後、受験難を克服した学生の中からアメリカン・フットボール部の例に見られるように優秀な選手の発掘、強力なチームの育成に貢献してきた。

今日のスポーツの多様化、プロ・サッカーの台頭により、京大・蹴球部に優秀な人材を多数集めることは非常に困難となっているが、他の大学とはひと味異なった効率的な練習、チーム形成により、かつての隆盛を蘇らせる可能性を求め、サッカー界に貢献する人材を輩出することが可能であると確信する。

1部復帰を目指し、現役諸君の奮起を切望して止まない。

一言いわせてください



昭和30年卒業 大友 満

私は対東大定期戦には昭和28年に一回だけ出場しました。最終学年の昭和29年は50年史に記しましたような事情で年末までピッコでしたので、対東大戦も秋のリーグも出ていません。私のサッカー歴はグルーミーで、大きな試合で勝ったことなど一度もないのですが、自分で密かに「俺もサッカーやってたんだよな」と思い出に浸るのが、昭和28年の対東大戦の後半です。

私はサイド・ハーフで、やや上がり気味の位置でチャンスがあればとゴールを狙っていたのですが、前半は岡野、浅見を擁する東大に1-6と大量リードを奪われました。そこで後半は大羽主将から「お前は岡野をぴったりマークして点を入れさせるな」と指示され、彼を徹底的に密着マークしました。これが功を奏して(と、自分では思っていますが)、後半は彼に得点を許さず、京大が1-2と健闘したのは、記録の示す通りです。でも、負けは負けですよ。

思い出の二つの傷あと



昭和30年度主将 松尾 徹郎

スパイクされた向う脛と、ヘディングでどこかの石頭とぶつけた唇とに残る、二つの傷あとのみが、京都大学サッカー部の、文字どおり、わが身に刻みこまれた思い出です。

「ゴオオール」も、あのプレー、このプレーも、遙か遠い彼方へと、薄れて行ってしまいました。

しかし、何故か、今もサッカーボールがひとつ、わが部屋に転がっています。雀百まででしょうか。

志を高く持ち輝かしい思い出を



昭和30年度副将 須藤 一夫

人生それ自体に目的はない。目的や目標は人生の節目節目に個々人が決めるものだと思う。これを「志」としたら私の京大蹴球部時代は志を失っていたように改めて感ずる。戦前の栄光と戦後数年の一部リーグでの頑張りが崩壊して部全体が志をなくしていたのかもしれない。高校時代(豊中高)、一年生有志でサッカー部を再建し、無謀にも全国高校選手権優勝チームの池田高校に挑戦、惨敗しながらも懲りずに次々と強豪チームと戦っていたこと。そして三年生主体のそれなりの強いチームに仕上がった時の

心の高揚は、大学時代にはほとんど経験することがなかった。勿論、熱心な先輩や主将、主務の人達は躍起になっておられたが、私ときたらGKという特別のポジションで無競争を良いことにテレンコ、テレンコやっていて今思い出しても慙愧の念にたえない。

一回生(S.27.)の時は宇治分校だったので、夏の合宿と数試合の練習ゲームしか思い出はない。二回生以降は農学部グラウンドに顔出しするようになり、四回生までの三年間はリーグ戦、定期戦(対東大、対同志社大)の全試合にGKとして出場したと思う。

昭和27年から昭和30年までの四年間の戦績を五十年史で見たら10勝10敗3分(リーグ戦)、2勝6敗(定期戦)である。

昭和27年、28年は旧制・新制大学の混在の時代で、高校時代にインターハイ(旧制)や全国高校選手権(新制)で名を馳せた人達が結構おられたのに、練習不足のためチーム力が凝集していなかった。今思い出すに順当勝ちか順当負けという結果が多く、チームとして100%以上の力を出して番狂わせを演じた記憶がない。伝統を守ってこうという志が欠けていたと指摘されても致し方のないところである。

こんな中にも部史を見ていて鮮明に思い出したゲームが一つあった。昭和30年の関西学生二部リーグ第五戦、対立命館大での1-1の引き分けゲームがそれだ。立命館はリーグ最終戦、それまでの成績は無敗で京大に順当勝ちすれば一部への入替戦がある。立命館大チームはその日の試合は当然勝ちと計算して、入替戦のための合宿に入るべく旅支度で来たようである。(当時は一部6チーム、二部は7チームで構成されていて、二部優勝即一部最下位との入替戦があった)。試合は前半0-0、後半遂に1点先取された後、現在、京大蹴球部総監督の長井博氏(S.32.卒業)が、右サイドで相手のクリアボールをカットしてシュート、鮮やかに左コーナー一杯に同点ゴールを決めた。これに奮い立った京大はその後善戦、引き分けに持ち込んだため、立命館はリーグ四勝二分となって五勝一敗の甲南大と同率となった。一部への挑戦権を決める甲南大との試合に敗れた立命館が、その後念願の一部昇格を決めたのは昭和32年度のことである。

GKとしてこの試合で思い出すのは試合終了間際にペナルティエリア内で味方の反則があり、PKをとられた時のこと。もはやこれまでと観念した私はキッカーをにらみつけ、キックの寸前にペロッと舌を出したから、気後れしたのか相手の蹴ったボールは左枠一杯ではあったが威力なくヤマを張った私には楽々セービングキャッチすることが出来た。これはよく覚えている。相手が私の奇妙なふるまいにどの程度影響を受けたかは知る由もないが、もし思わずタイミングを狂わせたとしたら卑怯だったかなと思う。

先日、長井氏が社に私を訪ねて来られたとき、この話をしたら彼の同点シュートは実はセンタリングの仕損じだったとのこと。彼は左が利き足だが、あのとき右足でのセンタリングがうまく足にフィットせずにアウトにかかったためにボールがスライスしてゴール隅一杯に決まったとは、全く知らなかった。その時まで私はあの角度のないところから、ナイス・シュートが打てたものだと感心していたのである。

思い出すままに書いたが、今振り返ってみると、私たちの時代は旧制から新制への切り替えの影響を受けて創部以来初の危機的な状況にあったのだが、私はどちらかというと、なるようにしかならないと、気張らずにやっていた。当時のチーム力もさることながら、こうした取り組み方では良い思い出は少ない。そして、その後、京大も徐々に力をつけ、念願の一部復帰を果たしてくれたのは、私が卒業してから3年後のことであった。

京大蹴球部でサッカーをやる以上は志を高く持って、とにもかくにも勝つために精進す

ること。これが人生の一時期の輝かしい思い出となってくれるということ。当たり前のことを自分の京大蹴球部時代を振り返って反省し、他山の石として後輩諸氏に贈りたい。健闘を祈る次第である。

忘れ得ぬ「ゴオオール」



昭和31年卒業 木村 博

私の記憶では、2対0で勝っている阪大戦。私がサッカーに魅せられ、中学一年のとき蹴球部に入って、丁度今年で50年。入部当時は、素足で蹴れ、ヘディング練習用ボールは蹴るなの掟。ヘディング専用ボールは砂入りで重いが表皮はいつも艶つやしていた。特にヘディング練習は辛かった。その練習がやっと得点に生きた。対阪大、場所は西宮グラウンド。ポジションはいつもの右のHBだったが、ラインアウトからのスローインの後、相手陣内での混戦中に、かなり前にでてしまっていた。ここでFWの若山さんから絶好の高さと角度でボールが出された。これをヘディングシュート、決まった。その瞬間、「よーし」と言う声が全身を駆けめぐった。ヘディングで得点したのはこれが最初で、その後はない。出雲大社で合宿した年の秋のリーグ戦であった。この試合、五十年史の記録では1対1となっている。

学制改革の影響と 1部復帰への橋渡しの時代

昭和31年度主将 長井 博

戦後の学制改革によって、スポーツ選手の国立大学への進学は難しくなった、と当時言われていた。新制高校で活躍していたスポーツマンで国立大学に進学した者は確かに少なかった。それでも、一般的に、国立大学の運動部がまだある程度のレベルを維持できていた時期は、旧制の学生がまだ在学している昭和20年代の後半の時代だった、ということが出来るだろう。どの運動部も経験者が少なく、極端に部員数が少なかった。学制改革によるこうした影響によって、昭和20年代の後半、関西学生サッカー1部リーグから阪大、京大および神大が相次いで2部に転落した。

そして、京大蹴球部が経験者減少、絶対部員数不足という状況におかれたのは昭和29年度、私が2回生の年であった。私は2回生の初めに膝の靭帯を痛め、しばらくグラウンドに出なかった。「お前の兄貴の時代に2部に落ちたんやから、1部復帰には弟が頑張らなあかん」と、唐原監督から言われたことがあったが、兄弟でもそれは関係がないと思っていたし、しばらくグラウンドに出ない間に、正直なところサッカーにかけける情熱が冷めかかっていた、ちょうどその時に、主務の足達裕司君から「これからどうする気や」と声がかかった。当時、1回生は宇治分校に通学していたが、宇治への通学時に私の高校の同窓生である中村勝美君（S.32年卒業、S.41年死亡）と一緒にいた足達が網野高校でサッカー部のマネジャーをしていたことを知り、中村、足達両君をサッカー部にひっぱった経緯があ

る。その上部員不足でチーム力が落ち、試合のために11名を揃えるのもやっとというのが分かっている時に、その足達の「わしらをひっぱって、無責任やないか。これからどうする気や。足治ってるんやったら出て来たらどうや」の一言には参った。

部に迷惑をかけていたことを詫びてグラウンドに戻るとともに、このままでは3部転落も危ぶまれる、自分たちが4回生の年には何とかチーム力が上向いているようにするには、何はともあれ経験、未経験の如何を問わず、まず部員数を増やすことが先決ということで活動を始めた。

当時、1回生は宇治、同じ教養課程でも2回生は吉田分校に通学していたので、吉田・宇治両分校の交流をはかるための行事が毎年夏に行われていた。その一つに宇治・吉田対抗サッカー試合があった。新人発掘のためにその試合を観戦した。経験のありそうなのが殆ど見当たらない中に一人目に止まった選手がいた。若井 尚君である。しかも出身はサッカーの名門、広島大学付属高校である。早速、足達と二人で若井にアプローチし、入部するよう勧誘した。幸い、秋からだったと思うが入部してくれた。その後、彼の人脈と情報のお陰で部員は増えた。

しかし、すぐにチーム力が充実する筈はなく、昭和29年は2部7チーム中6位で辛うじて2部を維持、30年は少し良くなって2部4位と、極めて苦しい2年間であったが、雌伏2年の間には、日々の練習の積み重ねで少しずつチーム力が上向きかけてきた上、昭和30年、31年には今永、大木をはじめ優秀な経験豊富な選手が数名ずつ入部してくれ、幸いにも私が4回生の昭和31年は、2部優勝を狙えるチームづくりができると実感した。そこで、この年を何とか1部復帰の足掛かりをつくる年とするため、春は基礎体力づくりと基礎練習に徹しようと、春の京都リーグ不参加を決めた。他大学からとかくの批判はあったが、この時期の基礎練習の成果は案外早く確認することが出来た。

それは、同志社との定期戦を1-1で引き分けた後、それまでの3年間、2-8,0-13,0-6と屈辱的な敗戦を余儀なくされた東大との定期戦を3-3の引き分けに持ち込んだことである。

そして、1部復帰に焦点を合わせて臨んだ秋のリーグの第1戦、絶対勝たなければならぬ神商大戦にベストメンバーで臨むことが出来ず、1-1の引き分け。これが響いて、2部リーグで甲南大と同率1位となったものの、1部への挑戦権決定戦で敗れた。

念願の1部復帰をきめてくれたのは、それから2年後のことであった。

振り返って見ると、あの頃は、体も技術も基礎・基本の繰り返しであった。そしてシステムはWMが確立された時代であったので、私は攻守ともに一人ひとりがその基本に従い、適切な判断力でプレーをしてくれるよう、チームメイトに求めていた。

名目はともかく、事実上コーチを持たない京大は、毎年主将を中心としてチームづくりに取り組んでいる。下手をすると継続性に欠け、振れが大きいかもしれない。それだけに、学生自身による自主的なチームづくりは大事であるが、それで結果が出せるか、が問われる。しかも、学制改革という時代の影響を受け、難しい時代でもあったが、皆気張らずによく頑張った、と思う。

現在の大学サッカーは、われわれの頃と異なり、その環境は極めて厳しい。しかし、学生による自主運営を続けて結果を出すためには、現役諸君の情熱と、常に高い目標を設定しながら、現実には基礎・基本を大事にした地道な努力の積み重ねが必要である。現役諸君の健闘を切に祈る次第である。

70周年記念試合第一戦の第1号ゴール

長 井 博

思い出に残るゴールは、やはり70周年記念試合第一戦における第1号ゴールである。

キックオフのホイッスルが鳴って約2分、ハーフラインを越えた左サイドあたりで、大木と私との間で横パスをつないだ後、フォローしてくれた塩路との間できれいなトライアングルパスが通り、私は最終バックラインの裏でフリーになった。塩路からのパスはやや強めであったが、ゴールラインまでは約10mあった。私は中を見た。ゴール前も逆サイドも上がりが遅れている。その時、GKのポジションが見えた。ゴールのニアポストよりも少し手前である。とっさに、ゴールラインに平行に、うまくGKの頭を越えるボールが蹴れればボールの回転でゲットできる、と直感した。しかし、最近は大腿筋が落ちていてボールを蹴ってもボールは上がってくれない。「えーい、ままよ」。ゴールライン一杯の所で左足のインフロントで蹴った。するとどうだ、ボールが上がった。塩路からの強めのボールが脚力の衰えをカバーしてくれたのだ。GKの頭を越えた。ワンバウンドして左に切れて入った。「バンザーイ」。還暦をすぎてからの嬉しい嬉しい初ゴールだった。

サッカー部生活4年間の思い出

昭和32年卒業 宮本敏継
(旧姓 日比)

中学2年よりサッカーを始めて、球蹴りの虫となって大学へ入ったが、グラウンドに来て見ると、サッカー部は練習をしていない。ままよと、ラグビー部に入った。数日後、サッカー部が練習しているのではないか。やっぱり球蹴りをしようとサッカー部に入った。天王寺高校(大阪)卒の黒野は私と同じようにラグビー部に入り、遂にサッカー部には戻って来なかった。メンバーはならず、マネジャーが試合に出る始末。しかし数少ないメンバーは皆、球蹴りの虫ばかり。その意味では誠に楽しい集団であった。

しかし練習に集まる人数は少なく11人揃うことは殆どなく、少ない時は3、4人、多い時でも7、8人であった。恒藤先輩は集まる者が居なくても、一人でドリブルの練習をしておられたという伝説を聞いたが、私にはそんな真似は出来ないと、ヨット部に入部して二重国籍のまま、大津へ繁々と通うようになった。堪りかねた足達マネジャーはヨット部と交渉し、私はヨット部をクビになり、サッカー部に専念せざるを得なくさせられた。

その年(昭和29年)の東大戦は13-0で負けた。東大戦に限らず京大サッカー部の戦績の中で最悪のものであろう。まさに屈辱的なスコアである。

翌30年の東大戦は6-0で負けた。この時の東大のセンターフォワードは岡野俊一郎氏であったが、彼とのボールの競り合いで勝った。負けていれば、もう一点とられている所であった。若井君(昭和33年卒)が「岡野が5、6mもふっ飛んだよ」と言った。大敗ではあったが大いに溜飲を下げた。

関西学生リーグでは2部に立命館大、近畿大等がいたが、いずれも強面の猛者ばかりで

ボールを蹴らずに足を蹴りに来たり喧嘩腰で、試合どころではなく逃げ回るようなこともしばしばであった。

しかし暗い話ばかりではない。4年生（昭和31年）になった時、後輩にポツポツ恵まれ、やっとなサッカーらしい格好がついて来た。東大戦は3-3で引き分けた。先輩達が騒ぎだした。ひょっとすると一部へ復帰が可能かも、と。練習も私が入部した頃とは様変わり、皆熱心に集まった。監督の唐原さんも毎週のように神戸から来てくださった。今、思えば全く頭の下がる思いである。

秋のリーグは甲南大と同率首位。首位決定戦は甲南に破れ、遂に一部復帰の夢は達成されなかった。神戸からの帰途の車中では、物を言う者は誰も居なかった。京都へ着くなり殆どの者が泣き始めた。その後の行動については皆さんのご想像にお任せしよう。

甲南大と同率首位になった原因は、神商大と引き分けたからである。神商大の実力からして京大の勝ち星は計算に入っていた。それが引き分けた。私は安居 律先輩から大目玉を食った。私は試合を観戦していたのだ。私が試合に出なくても勝てると考えていたからだ。

リーグ戦後、それまで一度も勝てなかった京都学芸大（1部）に4-2で勝った。手応えがあった。来年こそは一部復帰を、と後輩に望みを託して卒業となった。一部復帰は更に一年を要し、昭和33年の秋に実現した。

蹴球部に情熱を傾けて

昭和32年度主将 若井 尚

私は生来の怠け者で、いい加減な人生を過ごして今に至る。しかし時々、発作的にひどく物事に真剣に打ち込む変な病がある。今から40年の昔。サッカーへというより京都大学蹴球部への打ち込み方は、この病症の最も激しい例であったかと思う。どうしてそんなことになったのかは良く覚えていない。間違いのないことは、入部した当時、伝統ある京都大学蹴球部が信じられないくらいひどい状態であったことである。

もともと、(大先輩には叱られるかも知れないが)東大にしろ京大にしろ、名門と呼ばれた旧帝国大学のサッカーは、旧制高校で鍛え上げられた優秀な選手を全国から集めて成り立っていた筈である。それが、学制改革によって旧制高校がなくなる。新制高校からは入試難で選手が入らない。当然戦力は低下する。二部転落。サイドキックさえままたらぬ新人を入れてのチーム編成。さらに負け試合続き…。

まあ、そこまでは止むを得ないとしよう。ただ部内の雰囲気はひどく悪かった。5人も集まれば良しとする練習。一人でボールを蹴る日もしばしば。イライラから来る感情の対立。要するに当時の蹴球部は、悪循環の中で組織としての末期的症状を呈していた。

不思議なことだが、どうしたことか、こんなひどいチームに賭けてみる気持ちになってきた。一部に復帰させてやろうと思うようになってきた。二回生の終わり頃だったか。

幸いなことに、伝統に対する誇りだけは部内に強く残っていた。過去の栄光の記録を探して朝日新聞大谷記者の所に日参したのはこの時期である。まずは部員集め。実力は玉石混交だが、余り利口でないのが結構沢山集まった。医学部チームというサッカー好きの素人集団も仲間に入れた。一生懸命阿呆な遊びもしたが、厳しい練習もした。

経過は省略するが、結果的に惜しいところで一部復帰の望みは挫折し、翌年の今永主将の代に譲ることとなる。しかし、この数年間に京都大学蹴球部のために燃焼したエネルギーと真剣な打ち込みは、私のいい加減な人生の中では希有なことであった。

卒業して40年近くの歳月が経つ。この間何度か泥沼の中から這い上がるという似たような場面に出会ったが、私の対応の発想、行動様式の底辺に、この時期の経験、そしてひそかな誇りがあったことは間違いない。当時の余り利口でない仲間達も、同じ思いで過ごしてきたことであろうと思う。改めて懐旧の念と友情への感謝を捧げる次第である。

幸せの日々



昭和33年度主将 今永俊明

“京大七年ぶりに一部に復活”

昭和33年12月、立命大との入替戦に1-0で勝ち、念願の一部復帰を果たした。

「惜しいのは立命だった。個々の技術では大経大(3位)に近いのだが、初めて一部に入ってみると試合運びは散漫で二部サッカーの名残が濃かった。技術的には一部下位と二部上位にはさして差はないと言われるが、一部にはやはり一部らしい雰囲気があってそれにもまれることが大切なのだろう」(朝日新聞「関西学生サッカーを顧みて」より)

一日も早く後輩諸君が一部の舞台上、「一部に入って激しい中盤戦に出会ったとき、地味な苦勞をいやがったりすると大きく全体に響く」等のアドバイスを活かし躍進してくれることを待つこと切なるものがある。

“負傷選手の交代認む”

9月サッカー規則が改正され、負傷による補欠選手の交代が正式に認められることとなった。当時の解説(大谷氏)によれば、「サッカーが英国のサッカーでなく世界のものになるうちに、勝負を争う気分が強くなった。(見る方にも面白い)競技本来の精神が案外軽く見られて試合運営の便宜の方が先に立って……」とコメントされているが、近年のオフサイドルールの改正、キーパーへのバックパスの禁止なり、或いは京大ア式蹴球部名称の改称?など、昔は遠くなりけりの感なしとしない。

“勝利は北白川荘から”

「夏休み前までは、同志社、東大戦もあるが、基礎強化を主とし、コンビネーションなどは極力見合わせる。練習が中途半端になることは何としても避けねばならぬ。春の京都リーグで練習が支障を受けぬようメンバー選定、試合後の練習にも工夫しよう」等年初計画を決めたのは、32年末、処は豪傑の上級生外(名を秘す)の群居した北白川荘であった。その雰囲気が若い部員を呼び寄せ連日のごとく入り浸っては議論したが、歴代の主将以下先輩の涙を見てきているだけに、目標は明確で、むしろ手綱を絞ることに苦勞したことを思い出す。その間深更に及ぶまで荘内或いは市内某所で激励、指導頂いた豪傑の方々にあらためてお礼申し上げると共に、今の時代果たしてあのような24時間の裸のつき合いが出来るのか、余り遊び事の多くなかった、又車のなかった我々の時代も幸せだったのだと回

想している。

“第三グラウンドの4年間”

メイングラウンドの一部リーグの歓声を彼方に、凹凸の激しい土のグラウンドでの試合に拘らず、大先輩に都度激励頂き、歴代の主将始め先輩部員の汗と涙で着実に一部に接近していった各年の歩み、そのステップは文字どおり京大サッカーの一時代を画するもので、かかる青春を送り得たことを当時の多くの部員（ピーク時は50人超—それなりに練習法なり、役割分担等悩みもあったが）と共に喜ぶと同時に一人一人にあらためて感謝したい。

迷マネジャー



昭和34年卒業 川越 信哉

小生がサッカー部に在席していたのは1957年（昭和32年）頃であり、すでに40年近くも過ぎ、当時のことはおぼろげになってきている。当時、小生は迷マネジャーとして活躍(?)していたのであるが、その迷マネジャーぶりの一端を披露することにしたい。

その1

昭和32年の東大定期戦は、当番校である京大が、東大と連名で案内状を出すことになった。東大側のマネジャーに相談したところ、6月の最終日曜日とのことだったので、「日時6月31日（日）」として印刷し、両校から案内状を発送してしまった。

しばらくして朝日新聞運動部から、そんな日はないとクレームがあったので、慌てて訂正したのであるが、すでに発送済みであったため、うるさがたの先輩からこっぴどく叱られてしまった。結果、その年はOB参加者が少なく、OB戦は現役を駆り出してやっと出来たのを覚えている。

その2

その年の合宿を名古屋の南山大学でおこなったが無事終了し、帰りに皆で当時としては珍しかったテレビ塔にのぼった。その時のことであるが、テレビ塔の上から小便すると霧になるかどうかが大議論になり、実際実験することになった。前マネジャーの足達氏と二人で階段から放尿したところ風もなくバタバタとすごい音で地上の事務所の屋根に落ちてしまい、ほうほうの態で逃げたものである。

その3

西宮グラウンドのとなりに競輪場があった。試合の最中に抜け出して車券を買ったところ、3900円の中穴を当てて意気揚々と帰ってきたら、試合はすでに負けて終わっており、現役、OB共に悲壮感がたようミーティングの中でひとり笑みを噛みこらすのに苦労したのを覚えている。

反省の弁



昭和34年度主将 大木 岩根

昭和34年度は念願の一部復帰を果たしての初年度に当たる。昭和31年、32年度といずれも二部リーグ優勝の力がありながら今一步及ばず、漸く33年度に至って機熟しての一部復帰を果たし得た次年度である。部の勢いは昇り調子にあり、この勢いに乗れば相当の成績が期待できる状況下にあった。

勢いを象徴するかの様にこの年は有力な新人が多数入部して、卒業された諸先輩の穴も埋まり戦力に不安なし、といったところであった。しかしながら、結果は東大定期戦で大敗、初の一部リーグでも最下位で再び入替戦を戦わねばならぬ破目となった。

今、三十数年を経て当時のことを振り返って見ると、力がありながらその力が十分に発揮できず、諸先輩のご期待に添い得なかったことを深く恥じ入るばかりである。何が至らず、何処が間違っていたのか、今更言っても仕方のないことではあるが反省の弁を述べてみる。

第一に、練習というものに対する考え方が根本的に間違っていた。練習は試合と違って試行錯誤が可能である。何度でも試すことが出来る。従って練習では自分の出来ないプレーを身につけるべく練習することが大切である。然るに当時は自分の出来るプレーばかりを繰り返していた感がする。得意技を磨くのはそれなりに大切ではあるが、不得意技を克服しなければ練習の意味はない。右足でしかボールを扱えない人は練習中は左足ばかりを使い右左の差を無くすべきである。遠くへ飛ばせない人はどうやったら飛ばせられるか研究し訓練をする。ドリブルがじっくりいかない人はどうすればボールをコントロールできるか、夫々テーマをもって練習に臨むべきなのがなされなかった。その結果、練習が成果を生まず、プレーの幅も広がらなかった。

第二に、個人プレーに磨きをかけることに徹するべきであった。辛く面白くない練習となるがドリブル、トラップ、キック、パスなどのボールコントロールの練習への注力が不足であった。ボールコントロール、ボディコントロールが不十分であれば次のステップへは進めない、この点の認識が甘かった。

第三に、チームプレーとしては、ピンチ、チャンスの認識が何処まで統一されていたか、認識眼の養成が不十分であったと思う。強い相手と練習試合を重ねること、テーマを持って練習試合に臨むことが大切である。状況判断の統一により戦術眼の共有がなされ、チームプレーとしての集中力が発揮される。これがバラバラであるとチーム内にキシミが出来る。

以上、「帰らぬ夢を顧みて」の反省の弁である。

サッカー部の仲間は大切な宝



昭和35年卒業 市山 新

私は昭和31年から35年まで、若井、川越、松川、新田、東原、足達、高、藤井、加藤という同級生やその他の素晴らしい仲間のお陰で、まさに青春と呼べる恵まれたサッカー一部生活を過ごした。試合としては、立命に1対0で勝って一部に復帰した昭和33年の入替戦、同志社に3対2で勝ってやっと一部に踏み止どまった昭和34年の入替戦、関学に1対6で大敗した一部での最初の試合、開始早々いきなり3点を取られた後粘って遂に逆転し4対3で勝った昭和33年の東大戦などが印象に残っている。これらの試合の思い出も大切であるが、私にとっては良き仲間と共に過ごしたサッカー部での日々そのものももっと大切であり、宝である。今は生化学教授という特別忙しい職業のためこれらの仲間とも滅多に会えないが、退官し時間が出来たら努めて会う機会を作り、交流を深めたいものと楽しみにしている。

入替戦の王者



昭和35年度主将 塩路 正信

Jリーグの試合観戦に行った都度感じることもある。グラウンドの芝が冬でも青々として非常に美しいし、プレーヤーもフカフカのカーペットの上でプレーする感触で、こんな芝の上でプレーが出来たら良いだろうなあとと思う。

我々の学生時代（35年も昔の話だが）は練習も試合も土のグラウンド。学生は1部リーグしか芝生のプレーが許されなかった。（それでも現在のJリーグの芝生とは雲泥の差があったが）。だから、1部リーグへ昇格することは、名誉もあるが、芝生球技場でのプレーがその夢の半分でもあった。

さて、我々の時代にそれが実現したのである。2回生の秋の入替戦で立命館に勝ち、晴れて1部リーグへ昇格したのである。3回生から憧れの芝生の上でプレー出来た。土とは違うその感触……それは今も忘れられない。

しかし、3回生、4回生共、リーグではテールエンド（当時は確か6チームで最下位のみ入替戦へと、なっていた）、2年連続で同志社との対戦となった。当時の同志社は日本ユースのメンバーから推薦入学させた何人かのプレーヤーがいたし、春の京都リーグでは大半京大が敗れていた。いわばチームのレベル自体は同志社が上だったと言えよう。

しかるに幸運にも2年連続で我が京大が勝ったのである。勿論1部リーグに残留したのである。どうしても京大に勝てなかった同志社は、内部では「頭の差かな？」と言われていたらしい。人呼んで“入替戦の王者”と言われたものだ。その入替戦のいつだったか覚えはないが雨中戦でのこと。左45度、30mくらいのフリーキックに恵まれ私の蹴った一球が-----そのままゴールキーパーの手を越えゴールネットをゆるがせた。その1点が勝敗を分けた。今も忘れられない“ゴオオール”である。

その後我々が卒業し、次の年次のチームが何十年振りかで関学に勝ち、とうとう1部リーグで3位にまでなってしまった。もう入替戦に出場しなくても良い。我々先輩も嬉しかったし、大いに鼻も高かった。

しかし、入替戦を経験した人がだんだん卒業していき、残った人が数年後入替戦に出てみると、コロッと負けてしまった。それから2部リーグの歴史（時として3部リーグも）が始まってしまった。

当時1部と2部とはレベルに相当の差があり、長く2部でプレーしていると技術レベルが2部流となってしまう、なかなか1部のチームには勝てなくなると言われた。勿論それは真実だろうと思われるが、入替戦に勝つと言うのは技術レベルのみでは測りきれない何かがあると思われる。集中力というのか何か別の要素が必要なのかも知れない。その“SOME-THING”を我々の時代は持ち合わせていたのではないか？などと昔を振り返り、ニンマリしているこの頃である。



1、2部入替戦で同志社大に4-0で快勝、1部残留を決める。

昭和35年12月11日（西宮市民グラウンド）

たとえ痴呆症になっても忘れない

“GO KIU”

昭和36年卒業 平尾敏朗



4年間のサッカー部生活は、皆様と同様、本当に素晴らしい青春の1ページだったと思います。よき先輩、同輩、後輩にめぐまれたのは言うまでもありません。中でもサッカーは手の活用こそ大切だということを教えてくれた若井先輩、シュートはネットを揺らさなくてもよい、ゴールラインを少しでも越えればよいことを身をもって示してくれた高橋先輩など有意義な思い出です。また同輩の塩路兄（ゲンさん）にはサッカーだけでなく、学問の方でもお世話になりました。教養学部時代、独語の試験の際に助けてもらったことを憶えています（“そやけどゲンさん、間違い多かったよ”）。今後何年元気でられるかわかりませんが、たとえ痴呆症になっても京大のサッカーのことは忘れないと思いますし、多分“GO KIU”と叫んでいることでしょう。

満天の星仰ぐ



昭和36年度主将 清水 太三郎

一回生、立命館大学との入替戦に勝利、一部昇格。二回生、同志社大学との入替戦に引き分け、入替戦再試合に勝利、一部残留。三回生、同志社大学との入替戦に勝利、一部残留。三年間で四たびの入替戦を経験してしまった。さて四回生、サッカーを楽しんでいるだけでは許されなくなった。今シーズンの具体的目標を決める必要があった。秋のリーグまで半年あまり、時間はなかった。つい以前までは、上位入賞あわよくば優勝という淡い夢を見ていた。いい気なものである。さあどうする。一応彼我の実力比較を試してみた。関学、関大には、ちと無理かもしれぬが神大、大経大、学大には、なんとかなりそうだ。京大の弱みは体力不足、一時間もたない。技術を問題にする以前に、走れなくては話にならない。これさえ克服できれば目がある。一方、京大の強みは先輩の物心両面にわたる援助であった。当時高価なボールが邪魔になるくらいあった。また農学部グラウンドが自由に使えた。

そうしたある日、日比野朔郎氏（当時教養学部体育の非常勤講師）から専門のコーチの教えをうけてみないかとの話があった。二つ返事でオーケー、早速そのコーチに会った。筋骨隆々、色黒、毛むくじゃら、逞しさのなかに知性を感じさせる男であった。気に入った。そして、コーチをお願いした。瀬戸 進氏である。京大以外からコーチを迎えた例は初めてだが瀬戸氏（東京教育大学卒）もキョーダイ卒だ。よかろう！ということで先輩の了解もいただいた。さて、練習メニューである。まず基礎体力をつけることにした。サーキット・トレーニングを取り入れた。紅白試合を数多くやった。夏の合宿は農学部グラウンドで二度おこなった。落ち着いて十分練習をやりたかったことと、経費の節約とが理由であった。合宿の成果は素晴らしかった。体もできてきた。持久力もついてきた。二時間三時間紅白試合を続けても、皆動きは軽かった。目標とした基礎体力はこれでよし。秋のシーズンはひょっとすると上位へゆけるかもしれない。期待をしながら合宿は終わった。

その夕方、帰り支度をして全員で吉田山へ登った。まだ明るかった。夕飯はとっていなかった。すきっ腹だった。マネジャーが焼酎を買ってきた。車座になった。松川迪夫先輩がいた。瀬戸コーチがいた。焼酎をのみはじめた。あちこちで取っ組み合いが始まった。そのなかに瀬戸コーチの姿もあった。素っ裸でライン・ダンスをする者がいた。それを自転車をこいでライト・アップする奴がいた。それらを横目に、大声でカウントしながらコップに八杯まで焼酎を飲み干したのを覚えている。どれほどたったであろうか。心地よい夜風で目が覚めた。一面の星空である。『満天の星仰ぐ』とはこのことである。このような美しい星空を見たのは初めてであった。周りには仲間がごろごろと転がっていた。呻いている奴もいた。いわゆるすきっ腹に一気のみをした焼酎による急性アルコール中毒である。立ち上げられる者から順次合宿所のスポーツ会館へ戻った。朝日が高くなっても目が覚めなかった。合宿終了後また合宿をしたのである。その後、秋のシーズン中も体調が戻らない者がいた。大変有意義な合宿ではあった。

こうして迎えた秋のリーグ、関学、関大、学大には負け。神大には引き分け。ここまで得点零、失点あまた、そして最終戦の大経大、1-0で勝ち。結果はたった一点、たっ

た一勝で四位。瀬戸コーチのお陰であった。その後、京大は瀬戸コーチから多大の影響を受けることになる。

茫漠たる記憶

スナップ写真のような思い出



昭和37年卒業 東川 昇

昭和35年の秋のリーグ戦（1部リーグ）のことであったと思う。茫漠たる記憶の中に2枚のスナップ写真のように不思議と今も思い出せるシーンがある。

場所は西京極競技場で、対戦相手は優勝の常連、関西の雄関学。当方は1部リーグとはいえ入替戦の常連の頃のことである。小生は左バック。

1枚目のスナップは試合開始直後3分に相手右ウイングの志治君にこぼれ球を右45°、約20mのロングシュートをゴール左上隅にきれいに決められた。ボールがパーすれすれにゴールに吸い込まれるシーンは忘れられない。場内放送が女性の声で「前半3分 関学志治君のゴールが決まり1点」と放送した。小生は「さすがに関学だな」と思い、センターハーフの清水（キャプテン）と顔を見合わせてニヤッと笑った。これは何点入れられるかなとの想いもあったと思う。

ところが、確か前半の10分過ぎに1点を京大がとった。ここで2枚目のスナップだが、速攻から京大右ウイング（平尾さん？）が中へ折り返したところ、レギュラーでなくその日が初出場(?)の浅野 肇にボールが渡り、ノーマーク気味。相手ゴールキーパー飛び出す間に浅野ノートラップシュート。ボールがゴール中央につきささり、ネットが大きく揺れた。同点。

その後一進一退で後半35分まで同点が続く。残念ながら次のスナップ写真はでてこないが、コーナーキックから何かの拍子にヘディングシュートであったと思うが、1点を入れる。京大緊張の糸が切れたのか、その後立て続けに2点を入れられて、結局4:1と負けた。相手は海岸の波のように同じ力で攻め続けてきたのだが、受け手の体力が最後の10分間は限界で持たなかったという感じがした。泣き出したくらい残念であったのをよく憶えている。

忘れられない試合

昭和37年度主将 浅野 洋

私にとって、大学生活4年間の中で、忘れられない試合が二つあります。

一つは、私が3回生の時（1961年）の秋のリーグ戦で、うつぼ公園で行われた最終戦、対大阪経済大学戦です。当時、京大は1部リーグにいましたが、私の1、2回生の2年間ともリーグ6位で、2部優勝チーム（いずれも同志社大学）と入替戦を行い、何とかこれに勝利を得て1部リーグに残っていました。1961年も大経大戦の前には勝利なく、かつ1点の得点もありませんでした。この大経大戦で右コーナーキックをヘディングシュートし、

これが決まって1-0で勝利を得ました。結局このシーズンでは1得点のみでしたが、4位となり入替戦を免れたものです。この1点こそは、私にとってもチームにとっても、文字通り虎の子の1点でした。

二つめは、私が4回生の時(1962年)、西宮球技場で行われた対関大戦です。当時のチームは、片肺飛行のチームで、瀬戸コーチの戦略で、右ウイング根本、右インナー東の両君が突破口を開いてセンタリングし、センター唐津、左インナー私、左ウイング伊藤の3人が何とか得点するというものでした。事実、この関大戦以外は左からセンタリングかあがってシュートするというようなことは一切なかったように記憶しています。ところがこの関大戦はどういう訳か、左右いずれからも攻め上がりセンタリングもあげるといふ形が幾度も出来ました。試合そのものは0-1で惜敗したのですが、試合内容は5分5分、むしろ京大が押していたといえるでしょう。結果は残念でしたが、左右から攻め上がったという意味で、私にとっては忘れられない試合です。この年は同率3位で、入替戦は免れました。以上二つが終生忘れられない試合といえます。

ボールコントロールをシンプルに



昭和37年度副将 東 宣 孔

我々が入学したときは既に一部に昇格しており、1年の時から関学をはじめそれなりの相手と試合が出来、サッカー生活としては恵まれた環境でした。何度か入替戦の経験を持ちながらも37年は比較的良い成績でした。しかしこの成績に至る練習や試合の中身となると漠々とした記憶の彼方で現役の参考になるような纏まった話になりませんが、フラッシュのように思い出されるのはチームメイトの各々の癖であったり特徴のあるプレーです。

キャプテンを務めた浅野は厚い脂肪に被われた体軀ながら反射神経もするどくそのシュート力は皆に期待されていました。

岩城は熊のような体にジャック・パランスの風貌をのせその迫力だけで相手フォワードを威圧していました。

根本は素質に恵まれていたのかどうかわかりませんが、まちがいなく人並みはなされていたのはその意志力です。一つ一つに意図を感じさせるプレーをしていました。

榊は珍しく知性と顔がマッチした部員で難しいキーパーのポジションを恵まれた体軀と勇気で経験不足をおぎなっていました。

樋口は性格そのままの真面目なプレーで右足のキック力は破壊的なものを持っていました。

中村はドリブルは旨いが競り合いが嫌いでタッチラインを背に敵のタックルを燕の如く避けるのを得意としていました。

土橋はバネのある長い足で(パンツが短いせいで長く見えたのかも)ロングキックを愉しんでいましたが、コントロールがいま一つでした。

片桐は膝の固さが治らずタイミングがよい割にシュートはラグビー向きでした。

今村は黙々と研鑽に励み型は奥義を究めた感じでしたが、如何せんスピードが不足して

いました。

現役の皆さんに何かアドバイス出来る事がないかと考えました。30年も経てば戦術も相手も環境もかわっているでしょうから最も基本的な事の一つだけお伝えしようと思います。それは“ボールコントロールは出来るだけシンプルにやれ”と言うことです。例えばボールを前にドリブルしたいのであれば来たボールをワンタッチで前に押し出せばよく、後方に展開したいのであれば前もって体を開き同じくワンタッチでコントロール下におく、この為にはつぎに何をするのかを考えその目的に添った動きをすればよいわけです。当たり前で簡単なことやないかと思われるでしょうが、このシンプルさが少なくとも2～3ステップの差を生みゴール前では決定的な差が生じます。

一度次の練習をやってみては如何ですか。即ちシュートの練習に際し右（左）から来たボールを左足（右足）で受けそのまま左足をシュートの軸足として踏み込み右足でシュートする。これを走りながらやるのです。プレーの順序は受けたボールを左足のエッジでその勢いを殺すと同時にインサイドでボールをシューティングポイントに押し出します。このときのコツは右足の膝を柔らかかくねばりを持たせることです。これが出来れば1試合1点は保証します。

Go KIU! Good luck!

4年間のほとんどを農学部のグラウンドで過ごしたような気がしています。しかし33年も経ってみるとぼつぼつと浮かんでくる鮮烈な記憶も、それを繋ぐ淡々とした時間の中に漂ってちゃんとした年代記が書けず申し訳ありませんでした。でも楽しい4年間でした。



昭和37年度1部リーグ戦 京大2-6 関学（西京極競技場）

京大ゴール前の攻防。HB小田、ヘディングで返す。

忘れえぬ「ゴオール」



昭和38年卒業 市山 徹

炎天下、農学部グラウンドでの東大戦が始まってすでに70分。中盤でガチンと当たってボールが残ったので、思い切って20数mのシュート。あわててジャンプしたキーパーの指先をかすめてゴール！ やっと2対2で追いつく。フォワードのママダ（根本）やトン（東）らが大いに喜んでくれ、自分もうれしかったが、気持ちの一方では「まだ同点ではないか」と自分に言い聞かせていたように思う。

どちらかという守備的なハーフバックであった自分の、公式戦での数少ないゴールであったが、その感覚は35年後のいまでも残っている。昭和35年の第11回東大定期戦のこと

であった。

サッカー部の思い出



昭和38年卒業 丸島 護

昭和33年春、入学と共に入部した。

当時は、一部復帰も手に届く所まで来ていて、全体の士気は非常に旺盛であったと思う。卒業した諸先輩がたのご指導もあり、翌年首尾よく一部リーグに復帰することが出来ました。一部リーグ運営のための6大学の幹事会に出席のため大阪に出向いたこともありました。小生には荷が重い仕事だったという思いが今も残っています。

1年目の暮れに九州大学との定期戦のため夜行列車の3等車に乗って遠征した思い出があります。道中山陽パルプ、東洋ソーダや朝日新聞等にご勤務の先輩に大変お世話様になったことを今でも良く覚えています。これも運動部の良い伝統と思います。今後とも継続することを希望します。

更なるご発展を祈念いたします。

昭和33年入部のメンバーと
昭和34年、2回生の時（農学部グラウンド）



蹴球、いや蹴足!?



昭和38年卒業 岩城 元

ボールを奪えない時は相手の足を蹴って止める。——僕みたいに運動神経の鈍いバックスにとっては、昔は本当によかった。今なら即退場となるプレーを十回くらい繰り返しても、警告を受ける程度だった。

敵のフォワードもそれほど文句を言わなかった。たまには、レフェリーの目を盗んで仕返しの蹴りを入れてくる奴もいたが、それはおたがいさま。甘んじて受けてあげた。

あれから三十数年。今や相手の足を狙うなぞというふらちなマネは絶対にしないけど、残念ながら寄る年波。タックルに入るタイミングがどうしても大幅に遅れ、結果的には昔以上のことをやっている。

「ピーッ」「危ないじゃないか!」「ゴメン、ゴメン」

昔はいちいち謝らなくてもよかったのに。

娘は“J”のサポーター



昭和38年卒業 中村 壮

私は神戸の中学の時に蹴球を始めました。高校教師で蹴球協会員でもあった父に連れられ昭和20年代の蹴球試合を見たり、出たりしたことになります。西宮市の芝生のグラウンドでの関関戦(ナイター、平木選手のキックオフが印象的)、東西対抗戦(岡野俊一郎選手が卒業直後で東軍に出場)、日米戦(鶴田選手のドリブル等)を覚えています。高校では先輩から戦前のベルリンオリンピックでスウェーデンに勝った体験を聞かされました。

私達の頃は十手風の金具でボールの紐を締め、雨天のヘディングでは額に紐の当たった後が残ったりしました。靴は革製のポイントを釘で打ち付け、磨り減ってくると試合中に釘が足裏に刺さり出して大変でした。

家族は娘が3人で蹴球とは縁遠くなくなってしまいましたが、突然サポーターとやらでマイカーを運転して球場へ出掛け、額にペイントを付けてアントラーズの応援を始めました。Jリーグと同じ90分の公式戦に私が出たと言っても信じてもらえませんでした。

「大荒れの日曜日」「京大、関学を降す」



昭和38年度主将 時 森 日 出 二

表題は、当時の11月18日の新聞の見出しである。我々昭和38年度は、結果としては、当時日本学生サッカー界のトップクラスにあった関学を破り、三位という成績を残すことができた。しかし年度のスタートでは前年度の優秀なレギュラーメンバーが、七人卒業し、四年間では最弱と思われる状態であった。過去三年間は、入替戦も先輩たちの力で何とか切り抜け、ずっと一部リーグに在籍しており、自分達の年度で二部に落としてはいけないという危機感と不安感で一杯であった。瀬戸コーチも非常に心配して頂き、まさしく寝食を忘れて御指導頂いた。

チームづくりの基本的な考え方は、高度な技術、戦術は追い求めず単純なプレーに徹することであった。

まず第一は体力づくり。春の合宿から年間を通して、サーキットトレーニングと、とにかく走ることを基本とした。練習の前後には、各自で必ず500mトラックの直線部分をダッシュし、それを五周すること。その後サーキットトレーニングをした上で全体のチーム練習に入ることにした。現在から考えると無茶な考えだったかもしれないが、これがリーグ戦になって効果を発揮したと思う。少なくとも相手に走り負けしたと思った試合はなかったと自負している。

第二は、基本に忠実に。高度なプレーは求めず、キックを始めとしてボールコントロール、タックル等すべてを、初歩からキチッと、何度も繰り返し練習した。これは軽快なプレーは出来ないが、当たり負けをしないでプレーが出来るという効果をもたらした。

第三は戦術は単純に。フォーメーションは、当時としては新しい4・2・4システムであったが、意識としては守りを固め、少ないチャンスを何とか得点に結びつけるという考えであった。特に守備には重点を置き相手チームのトップを、川野・時森の二人が前後ではさみ込み、いずれかが前で競り合い、こぼれ球を後にいる者が前線に蹴り返すという型をとった。現在ではここから攻撃の基点にする訳であるが、我々の時は、ボールを繋ぐというより、とにかく危険な地域から蹴り出すのが精一杯であった。攻撃は、非常に少ないチャンスを、キープ力のある唐津がキープし、そこを基点として外にまわし両サイドからセンタリングをしてシュートに結びつけるというごく単純なフォーメーションを基本とした。戦績は年度前半は非常に厳しい状況であったが、夏の二度の合宿を終えた頃から少しは型ができたなと感じるようになった。

秋のリーグ戦は、京学大と甲南大に勝ち、何とか一部に残留出来ればといった皮算用であった。ところが初戦の京学大に勝ったものの、関大、甲南大に負けてしまい、チームの中にもひょっとしたら二部にという危機感が漂った。その危機感がチームを引き締め、大経大と引き分け、当時としては奇蹟的と言われた、昭和16年以来二十二年ぶりに関学を破り、関・関に次ぎ第三位という成績を残すことが出来た。今でも唐津がセンタリングをし、井坪が走り込んで決まった瞬間とその後の関学の火の出るような攻撃を必死になって防いでいるゴールキーパーとボックスの姿が眼に浮かんでくる。昭和38年は本当に苦しかったが、印象に残る最良の年でもあった。

俺には年齢はいらない



昭和39年卒業 影山孝夫

中学2年でボールを蹴り始めたから、40年間サッカーと付き合っていることになる。

大学時代は虚弱だったので、1回生の夏休み前に腎臓炎で入院してからは、マネジャーの手伝いをしてサッカー部に関わった。だから公式戦には一度も出たこともないし、小生が農学部グラウンドでボールを蹴っていたのを覚えている人も殆どいないだろう。

社会人になってから体も丈夫になり、会社チームを作ったりして、現在も若者たちとボールを追っている。ゲーム中は全く年齢を忘れてる。いつも思う、「俺には年齢はいらない」と。2年前から始めたレフェリーも緊張感あふれて面白い。体力と気力が続く限りサッカーと共に歩んで行きたい。

1部リーグ3位の年の思い出



昭和39年卒業 川野 眞治

30年経た今となつては、負けたゲームも勝ったゲームも思い出となる。前年7名もの卒業生を出し、この年（昭和38年秋）は、全ての点でチーム力は特に弱体化していると認識することから出発した。まず守備を強化するため、WMシステムから4-2-4システムへ変更した。関西リーグで4-2-4を採用したのは京大が最初である（おそらく、全国でも初めてと思われる）。さらに、練習前のベンチプレス、腕立て伏せ、スクワット運動などの各種の筋力強化運動、練習後のインターバル走により、スタミナと基礎体力だけはどこにも負けないような練習をした。フォワードは、唐津のドリブルとキープ力、伊藤のスピード、井坪のゴール前のねばり、小田の運動量、今井の意外性の一発に期待することになる。バックスは、右から大家、水谷、時森（主将）、西と並び、川野がフォワードとバックスをつなぐ布陣であった。この布陣がリーグ戦で威力を発揮する。まず、初戦でこれまで勝てなかった京学大を、唐津のドリブルからのシュートで1-0で完封勝ち。これで安心したのか、次の関大戦ではバックスがぼろぼろで0-3の負け。これが尾を引いて勝たねばならない甲南にもこぼれだまをケアしていた毛利に決められ、その後は押しっぱなしなのに冷静さを欠いて0-1の負け。ところが、次の関学には必死のゲームで1-0のスコアで22年ぶりの勝ちで新聞を飾る。唐津のドリブルからのセンタリングを井坪がきれいに決めたものだが、最後まで粘り強く崩れなかったバックスの勝利でもある。最終戦は大経大でこれは余裕をもって1-1の引き分け。結局、2勝2敗1分、単独3位であった（強いといわれた前年は同率3位）。このリーグは、個人の長所をうまくチームにまとめあげた瀬戸コーチ、根本氏（現九大教授、当時大学院生）の指導とこれを受けとめた全部員の結束の結果であった。勿論勝つことを目的としていたが、練習後の上級生を中心とした連日の夜遅くまでの近藤亭でのミーティングが懐かしく思い出される。

忘れられないゴール

川野 眞治

昭和37年秋のリーグ戦での同志社とのゲームが忘れられない。私は、3回生でLHとして出場した。この年、同志社は2部から昇格し、有望新人を揃え前評判が良かったが、京大は、バックスは素人だがフォワードのチームと評価されていた。前半は同志社やや押し気味、後半は逆になり、何度かゴール前に寄せた後、17分私のシュートを同大キーパーがつかみ損ね、こぼしたところをLW伊藤（当時1回生）が蹴り込み、これが決勝点になった。翌年もリーグ戦に出場したが、結局ゴールに私がからむシーンは、バックスであったこともあって、これひとつである。それだけに忘れ難い思い出である。

今でもひきずる“くやしい”



昭和39年卒業 難波 寿太郎

『試合前にコミュニケーションを確立しておくこと。たとえ口論になっても遠慮せずに。“意思是日頃の練習で、口ではなく体で伝わっているはず”ではだめ。(4)』

『試合は結果で決まる。練習のように蓋然性を高めるためのものではない。(1)』

このように書いてみると極めて単純な、当たりまえのこのことをGKが守らなかったために、1963年のリーグ戦で、京大は大恥をかいた。カッコ内は失点数である。GKの私が失った5点はすべて敗戦につながった。まさか心の中に30年生き続ける痛恨の大事件だとは思わなかった学生時代が懐かしい。

舞台裏から



昭和39年卒業 留岡 寛

試合の話については書く人も多いと思うので別の見方から当時を振り返って見ました。

[新聞記者席から]

当時関西学生連盟では秋のリーグ戦開始前に大阪スポーツ会館で記者会見をやるのが通例であった。カレーライスを食べながらスケジュールの説明、1部チームの当年度の抱負等を話し質疑応答することになっていた。この結果は必ず戦前の予想として各紙のスポーツ欄を飾った。学生連盟は1部チームの主務、副務が委員を務め関学大、神戸大、京都大などしっかりしたメンバーが揃い、他には事務をやってくれる人1名で学生だけで運営していた。新聞側は朝日、毎日、読売、産経その他スポーツ紙の記者連であった。36年度の会見で私は「京大は失点を最小に抑え、最小の得点で勝つサッカーをやりたい」と京大の考え方をひれきした。事実失点は数多くあったが得点はリーグを通じて最終戦の僅か1点、それでも4位であった。

朝日は大谷(東大)、毎日は岩谷(早大、全日本)、産経は香川 浩(神大)さんといずれも蹴球歴も立派な人たちで、神戸一中の同窓生であるだけに極めて和気あいあい試合を楽しんでおられた。朝日だったか京大は立ちんぼのサッカーと書かれたが、それでも一番理解があった。瀬戸コーチの指導による技は未熟でも、全員統一された考え方による戦い方はそれなりに評価してくれた。

当時西宮にサッカー場が数面あり高校選手権はここで行われていた。ちゃんとした芝のグラウンドはこのメインだけで学生サッカーも1部で年1度位しか使えなかった。このグラウンドで学生連盟の委員連中でチームを作り上記の新聞記者連中のチームと高校選手権の決勝日の午前中にゲームをやったりしたものだ。

京大で記者席から評価されていたのは36年度ではボールに対する予測がよいということで主将の清水であった。CHでは優勝チーム関学に主将の芝がいたが劣らず評判がよかった。37年度では東がよく試合を読めて、ゲームを作れるということで一番評価が高く、ごちゃごちゃ突破力のある根本、浅野もそのパワーは評価された。38年度は体は非常に堅いがよく頑張っている時森、39年度ではキープ力がありボールを溜められる唐津が好選手とされた。

ついでに言えば、他チームのマネジャー連中に言わすと「京大は試合前の練習を見ると、下手くそな、なんだこんなチームかと思うが、全然うまいこといかん。単純なことを何べんもやってくるけれど、やはり頭が違うのかな」ということであり、最もいやがられたプレーヤーは東であった。どこへ蹴ってくるか読めない、いやな所に蹴ってくるということとプレーに緩急がつけられることなどがその理由であった。

記者連の話を総括すると、35年度に比べて36、37、38年度（その後は直接知らない）と明らかに毎年チームは変わった。技量はつたなくとも、その中で自ら考え、統一された考えによる戦い方は他チームにないものであった。愚直とも思われるやり方の繰り返しは相手を疲れさせその中で意表をついたプレーは効果があった。他私学とも比肩できる、中核になる選手がいたこともあるが、やはり選手達の能力を最大に引き出し、よい点を効果ならしめるよう組み上げた瀬戸コーチの功績は大きい。

[クラマーの合宿]

昭和36年5月頃だったかと思う。関西協会だったかに1部チームの主務が集められた。日本協会が日本サッカーの強化策としてドイツからディトマル・クラマーをコーチとして呼ぶ。若い選手を集めて練習会（いわばセミナー）を京都で開く。各校選手を選定してくれということだった。

清水主将は真っ先に唐津を指名したが部室に出てこなかったので間に合わずやめ、根本は学の関係でだめ、結局東、樋口、正垣（希望で選定したが後退部）等であった。関学からは継谷、山中、則岡等、関大からは北口、柴北など当時関西学生のトッププレーヤーが集まりきながら全関西学生の合宿という感じだった。クラマーのプレーのアシスト役が前述の毎日の岩谷氏、合宿の世話役が山城高監督の森さん、私は学連の代表として森さんの手伝いををした。グラウンドは主として京都府大であり京大病院の前の旅館で泊まった。京都ということもあり地元の高校生3人が参加した。山城高の釜本、二村、長岡であった。後に大学・社会人で活躍したので記憶している人も多々いると思うが、中でもびっくりしたのは釜本だった。当時高校2年で新聞などで名前は知っていたが、体が大きい割に柔軟でプレーが大きいことだった。上記継谷、釜本はメキシコオリンピックの中心プレーヤーとなった。

はっきり気がついたのは これまで大学で聞いていた、あるいは竹腰氏の本に書いてあるやり方と随分異なっていることであった。インサイドキック自体足首を回転させながら腰で押し出す従来のやり方から立ち足を軸として足首を開いたままで振るやり方で、この方が次のプレーにつながるということだった。練習方法も従来の単純なやり方から、ゲーム感覚を取り入れ楽しませながら習得させるやり方であった。夕食後には黒板を使い練習の意味を理解させていた。パス・アンド・ゴーもよく言った。局部的に2対1、3対2と人数のアンバランスを作り防御を破っていくこと、あるいはスピリットという言葉もよく

使った。全員攻撃の全員防御であった。これが日本のサッカーを変えたといっても過言ではない。瀬戸氏のコーチ法もいち早くその流れを取り入れたものであったろう。

メキシコオリンピック3位以来日本は世界の大会に出場さえできていない。

[中国・九州遠征]

37年5月頃だったか当時山陽パルプ岩国工場におられた若井先輩から中国の方へ来ないかというお話があった。チームは順調にいきつつあり「今年は」と期する所があっただけに、夏前の総決算と戦法の確認という位置付けで西方に遠征することにした。若井先輩の声がかりだから先ず、山陽パルプと試合して、当時社会人のトップレベルにあり、全日本にも選手をだしている東洋工業、八幡製鉄を中心についでに九州大学とも試合する予定を立てた。幸い予定の日の試合を各チーム快諾してくれた。ところが、京都リーグでFBの樋口が肋骨を折り、主将の浅野は練習中左ひじ脱臼となり試合出場不能と2枚落ちになったが、この陣容で東大戦は久しぶりに勝ち、予定どおり遠征を実施することとした。特別の予算を組んでいないこともあり、全額自費負担ということにもなるし、戦法の確認という意味合いからメンバーはレギュラークラスに厳選し、瀬戸コーチ、東主将代行(副将)を筆頭に14,5名だったと思う。世話役も主務の留岡だけで選手兼用で倉内を入れただけである。東、根本、中村、唐津、伊藤、時森、川野、難波、岩城、小田、西、榑他数名だったと思う。宿泊所も山パルの寮、広島大学の寮、八幡製鉄の寮などを利用させてもらった。

広島では出身者や知り合いが多かったこともあり、前夜飲み過ぎの影響がでて、東洋工業とは5-2で負けたが、FWとしてはRW根本、RI東のコンビで右サイドを突破して折り返し、左側で決めるという形は見事にできていた。八幡製鉄とは韃ヶ谷競技場で行い、前半東がキーパーごと抜いて1点をリードしたが、結局2-1で負けた。しかし八幡は殆ど同じメンバーで半月ほど後の全国都市対抗で優勝していたことから、その戦い振りには大いに自信がついたことと思う。特に根本、東のトライアングルパスで右サイドを突破する技術は、根本の敵の間合を見て出すタイミング・東の相手の動きを見つつ根本の意図を察知して出すパスの方向・強さなど完璧に近く、この戦法でやれるという確信が得られた。今でも根本は「あの遠征で自信がついた」という。この遠征では山陽パルプ、東洋工業、八幡製鉄など大学の蹴球部以外の先輩方が扱出して夕食を頂いたし、博多では九州電力の部の先輩が一人でピヤホールで皆を飲ませて頂いた。有り難いことであった。

意図をもっての遠征、成功した例であろう。

[合宿所の選定]

合宿所の選定には苦勞した。36年度清水主将は例年夏の終わりから始める合宿の前に8月初めからやると言い出した。当時公共的な場所でグラウンド付きなど滅多になかった。また大学の運動部など優先順位は後であった。前年松本の自衛隊でやったこともあり、自衛隊に八丁先輩がおられたことから相談に朝霞まで行った。結局その年は農学部グラウンドのスポーツ会館で第1次合宿をやることになったが、暑いので5時頃起床、ランニング、ボールを蹴っていると東山から朝日が昇った。同時に合宿している他の部から「眠れない」と文句が後にでたとか。真夏のことで朝の後半の練習(9時半頃から)は予定の12時終了が1時前まで続き、夢遊病者みたいになる者や呼吸困難になる者などが毎日のように出た。2次合宿も8月末農学部グラウンドでやった。この成果については清水主将の記事にある。

翌37年は前年自衛隊で話を聞いていたので、富士山麓の須走の自衛隊でやった。見晴らしは良く涼しかったがグラウンドに火山灰の瓦礫が一杯あり、ピフテキ続出で部員からクレームがでた。毎朝キチンとして国旗掲揚に行くのをおっくうがる者もいた。

翌38年は考えた。私が別に入っていた文科系の部の先輩で富士写真フィルムにいる人(現社長)に照会してみた。当時同社はバレーボールに力をいれておりオリンピック選手も何人かおり、合宿所もグラウンドもあり京大ということで歓迎してくれた。食堂へ行くのに歩き方がだらしないという人もいたようだ。ここは割合好評だった。初めてということもあり合宿が明ける前日だったか皆を小田原の元山県有朋の別荘に呼んでくれ、京大の先輩方(蹴球部ではない)が歓待してくれた。銀座からギターの流しも連れてきてくれた。これは皆一番よく覚えている。誰か就職せんかという話があったが誰もいかなかった。ただ私は以来フジフィルムのみを使うことにしている。

[工夫した道具など]

練習用の設備・道具といえば、当時はシューティングボードがあるだけだった。キックは基本であり未経験者が多いこともあり真夏の休み中でも何人かはこの前でボールを蹴っていた。そのうち誰かがヘディングの練習道具があればと言い出し、大学の厚生課(確か課長が運動部の先輩)にお願いして作ってもらった。秋口は放課後練習時間が少ないのが問題だったが、蹴球部出の児玉体育会幹事長の努力でグラウンドに照明設備ができた。照明のポールは住金の寄付であった。照明設備を持っている部は他大学でも当時殆どなかっただけに、3時からしか合同の練習を始められない京大にとってはありがたいことであった。

手作りといえばトンボを作った。材木を買ってきて適当に切断、釘を打ち幾つか作った。ガタガタのグラウンドを整備するためであり、練習終了後と練習前に皆で使った。

以前からあったタックル用ボールも引き続き作った。まだ使えるボールは再生用に回したが(ボールを分解し皮のまだ使える部分を継ぎ合わせて再生ボールとした)再生ボールの古にボロ布と砂をつめタックルの練習用とした。靴は当時革製が殆ど、ポイントが減ると北白川の靴屋に持って行っていたが、時間と経済性を考え靴修理用の台を買ってきて、ポイントと釘はまとめて部で買い自前で修理できるようにした。修理台は靴修理屋開業につながるのだから家の近くの靴屋で訳を話して分けてもらったが1ヶ月程かかった。

バーベルを使いだしたのもこの頃である。筋力を強化しなければどうにもならないということで瀬戸コーチの要請で置くことにした。これも他大学に比べても早い方ではなかったかと思う。

瀬戸コーチの指導でプレーヤーにやらせたものに選手の動きのトレースがある。一人ずつプレーヤーを割り当てどう動くかを紙上に描き出すのである。これによって相手の個人のあるいは全体の動きを読み取り、自らもそのポジションの動きを習得するためであった。その他まだまだ新機軸があったと思う。皆で自分自身でできるものは自分で、直接できないものは大学に働きかけるなどしていろいろ工夫してきた。

今電子機器類が一杯ある。京大として最も得意な領域ではないか。もっと活用を考えたらどうだろう。京大アメリカンフットボール部の活躍もこれらの活用に帰する所も大と電気工学教授のアメフット部長は言う。

ロジスティックスについてもよく考えておくことが大事であろう。

京大独自の戦術の確立



昭和39年度主将 唐津徹男

京大サッカー部に入部した昭和36年当時、所属していた関西学生1部リーグは関学・関大が圧倒的な強さを誇っており、大阪経済大学・京都学芸大学等が関々に続き、神戸・同志社・甲南等が京大と共に1部の下位を争っていた。当時、京大は昭和34年度に1部昇格したものの、2年連続の入替戦を勝ち抜き1部残留を辛うじて果たしており、チーム全体としての目標は関西学生1部リーグで入替戦を免れる戦績をあげる事であったと思うが、個人的には4年の間に1度は関学を倒す事を密かな目標としていた。昭和36年度の関西学生リーグでは最終戦の勝利で4位、昭和37年度は同率3位、又、昭和38年度には22年ぶりの関学戦勝利で3位となり、幸いにも入替戦を経験する事なく4回生を迎える事が出来た。

私が主将を引き受けた昭和39年度の1部リーグでは2勝2敗1分〔甲南大学(3-1)；関大(1-1)；関学(1-0)；大阪経済大学(0-1)；京都学芸大学(0-1)〕の同率3位となり、京大として戦後最高の戦績を残すと共に初めて得点が失点を上回った年になり、戦績的には満足出来るものであった。唯一悔いの残った点は最終戦の京都学芸大学戦に引き分ければ関大に続き2位となり、天皇杯に出場資格がある事に選手・ベンチも気付かず不本意な最終戦を戦った事である。我々は既に5位以上の成績が確定していたのに対し京都学芸大学は敗れると最下位になる状況にあった事から、勝利への意欲不足で十分引き分けられる試合に敗れてしまった。最終的に関大・関学が天皇杯に出場したのであるが、状況を的確に把握していたら選手・ベンチも最終戦を違った形で戦い、天皇杯に出場できたかも知れなかった事をやや残念に思うと共に京大の戦力・技術レベルから出場しなくて良かったとも思っている。

昭和39年当時は「WMフォーメーション」が一般的であったが、我々は瀬戸コーチの指導でサッカー先進国で採用されつつあった「4-2-4システム」を採用した。我々のシステムは守備を1名増員する事で大量失点を抑える一方、出来るだけ単純且つ効率的な攻撃で数少ないチャンスを生かした得点を守り切る変則的な「4-2-4システム」であった。具体的には伊藤(LW)の縦への突破力、小田(RI)の精力的な動きによる相手守備体制の攪乱及び唐津(LI)のボール裁きを組み合わせた攻撃を中心とする一方、バックスは細かなパスを省き相手守備陣の背後に深く蹴り込むボールを攻撃陣が忠実に競り取る戦術を採用した。個人技では劣勢なチームが総合力に優れたチームに勝つ為には互いの戦力を冷静に分析する一方、選手個人の長を生かした特異的な戦術を忠実に実行する事が肝要である事を実感すると共に京大選手の技術レベルにあった戦術を組み立てる指導者の重要性を痛感した。我々の現役時代は、瀬戸コーチの最新戦術情報を個々の京大選手の技術レベルに合わせて応用し、京大独自の戦術を確立した事が好成績に繋がったものと理解している。

忘れ得ぬゴール

唐津 徹男

京大サッカー部選手生活で忘れ得ぬゴールと云えば、昭和38年度の関西学生サッカーリーグでの対関学戦における決勝点である。当時、関学は関大と共に圧倒的な強さを誇っており、京大は関学に約20年間に亘り勝ち星のない状況であった。試合は防戦一方ながら両者無得点のまま推移した後半35分、味方クリアボールを敵陣20m辺りで受けた私(LI)は関学RHをドリブルでかわしてエンドライン迄持ち込み、ペナルティエリア近くから敵守備陣の希薄なスペースを狙って蹴ったセンタリングを唯一詰めていた井坪(RW)が決勝点を蹴り込んだ。その後、京大は関学の熾烈な攻撃を守り切り、本ゴールは22年ぶりに関学に勝利するという忘れ得ぬゴールとなった。

思い出のゴール

昭和40年卒業 小田 晋作

相手ゴールキーパーがパンチングする。目の前にボールが跳ね返ってきた。体を横に倒して、ボレーで叩きつけた……筈が……ボールはフワッと飛んで行く。後ろ向きになって必死に体を伸ばすキーパー。その手の先を越えてボールはゴールに吸い込まれて行った。歓喜に包まれてセンターサークルへ帰ったと同時に試合終了のホイッスル。1-0の勝利だった。昭和37年7月の第13回東大戦、私が2回生の時の焼け付くように暑い京大農学部グラウンドだった。

後で知ったことだが、それ迄の12回の定期戦の中で、京大は僅か2勝しかしていない。私が在学中の4年間、関西リーグでは好成績を残したが、東大戦では1勝1敗2分と冴えない。このような中での1勝であることと、終了直前の得点だったことが、このゴールに対する私の思い入れを強くさせている。

今でも時々、私の頭の中の「再生ビデオ」がスローモーションで飛んでいくボールと、更にスローなゴールキーパーの動きを写し出してくれる。

1部リーグ4年連続3位



昭和40年度主将 伊藤 庸夫

前年度主将の唐津氏より引き継いだ時、果たして、過去3年間の関学・関大に次ぐ3位の座を保持できるかが課題であった。フォワードの要であった唐津・小田氏の後釜と、センターバックの西氏の穴をどう埋めるかも、課題であった。キャプテンとしては、過去4年続いた1部での地位を最低限守らねばとの使命もあり、春のシーズンはなかなか勝てず苦しいスタートであった。運良く、センターバックは神戸高校より塚本が入り、何とか埋められたが、唐津氏のプレーメーカーの代わりは最後まで見出せず、片岡を入れ、中より外へのダミーランと私の外から中への突破で、何とか形を作って闘ってきた。春は殆ど勝てず、夏合宿に、教育大に私のドリブルシュートで1対1の引き分けを、そして当時2部に落ちていた同志社大にプレシーズンマッチで2対2と引き分け、何とか瀬戸コーチの猛烈な練習（この年より農学部グラウンドに照明がつき、4時頃より8時すぎまでハードな練習をする事が多く、技術のない京大の選手が唯一勝てるのは、体力のみとのサーキット、ウェイトトレーニングを行っていた）で秋のシーズン前には、チームに自信が生まれてきた。

シーズンの開幕は、甲南大であった。バックスは堅く守り、^{キョウテン}久典（片岡久典氏、昭和42年卒業）の、ゴール前の混戦から正しく押し込むシュートで、1-0で勝ち、「これで2部落ちはなくなった」と安堵した気持ちとなり、2年連続勝っていた関学には0-5と敗れたが、関大、京学大に引き分け、同率3位となりシーズンを終えた。4年間3位であったのは、大学に入ってからボールを蹴り出した選手もいる中で、チームの中には全国大会出場者（伊藤、今井、塚本）および県でのトップ高校卒業の選手が多く、バランスのとれたチームである一方、卓抜したサッカー理論と身体でコーチした瀬戸氏抜きには語れない。当時の大学では珍しい先駆的な4-2-4システムをとり、理解力と体力とで技術をカバーし結果を出した年でもあった。1回生からレギュラーで出て、ある面では楽しくサッカーが出来たにも拘らず、4回生での主将としては、「2部には落ちてはならない」という重責が背にのしかかって来、いかにチームが勝てるかが四六時中頭の中を駆け巡り、4年間で一番苦しいシーズンでもあった。その後、日本リーグの三菱でプレー出来たのも、その時頭でトレーニングしたことが大いに役に立っていたと感謝している。

同期でレギュラーは他に副主将でコチといわれたセンターバックの水谷、GKの橋本、そして橋本と同じく大学に入ってからボールを蹴った土佐こと宮地の4人で、他に入江、織部、真田が我々の仲間として、今も親交を深めている。

一言いいたい

伊藤 庸夫

私が京大でサッカーをした4年間、関関について3位を維持できたのは、やはりコーチであった瀬戸進氏が存在し、殆ど毎日のように新しいアイデアで指導に來られたからであると確信できます。学生が自主的にサッカーをするのも、学生生活を楽しむという点からは批判できませんが、やはり伝統を維持し、強さを維持するために、選手でない、選手以上のものを持ったコーチが、絶対に必要であります。現在の日本のサッカー界に真のヨーロッパ・南米と同等以上の眼をもった日本人のコーチはおりません。コーチというのは、自分もっているコーチ学、戦術、技術面のレベルを維持し、それを如何に選手に伝達し、実践させるかのプロフェッショナルでなければなりません。

その意味で、当時強かったのは、選手であった私達が、選手としての眼をもち、コーチであった瀬戸氏が、絶対に妥協しなかったからであると思います。コーチの重要性は、一つレベルアップするために不可欠な存在なのです。

考えるサッカーを

昭和41年度主将 今井 哲 男



〈特徴的な戦績〉前半の東大戦には引き分け、七帝戦等には勝利したが、関西リーグでは残念ながら敗退し、尻すぼみの結果となった。

〈システム〉前年度に引き続き、相手のWMシステムに対する4-2-4システムを採用した。当システムは瀬戸コーチのご指導により、クラマー氏直伝の新技术とともに我がチームに適合したシステムとして導入されたものである。

〈戦法〉守備をマンツーマンとし、さらに後方に一名残すことにより守りを強化し、失点をおさえ最少得点で逃げきる戦法である。

このため、

- ・マンツーマン守備を徹底する。
- ・攻撃面では活動距離を長くとり、大きなパスをつなぐ。
- ・バックラインをおし上げ守備陣と攻撃陣の間隔を狭くすることを基本とし、相手のペースで試合を展開させないように留意した。当戦法は、確かに試合内容では面白くないが、技術力や体力で劣勢ではあっても、集中力と忍耐力では優位な我がチームにはよく合致しているといえよう。

〈どう模索したか〉当年度は技術力の高い新人の入部等により、点が取れる形は多く出来るようになった半面、逆に失点も多い傾向が見られた。このため、基本戦法を中心に練習するなかで、特にマンツーマン守備の徹底に重点を置くよう努力した。

〈覚えておいて欲しいこと〉反省点を踏まえ、蛇足とは思いますが、今後の参考となればと考える。

- ・30年代後半から瀬戸コーチのご尽力により新しい技術を取り入れ、個人の技術、戦略面でかなりの飛躍ができた。今後さらに戦力を伸ばすためには、広く新しい技術情報を吸収し、京大チームに適合した技術、練習方法によるチーム力強化が肝要。
- ・効率よく試合に勝つには、相手チームをよく知ること、すなわち相手チームの解析と十分な対策が重要と思われる。
- ・考えるサッカー——“ガンバリズム”だけでなく、頭を使ったサッカー——が我々に求められている。楽しく勝つ方法を見つけていただきたい。

東大定期戦を前に記念撮影

昭和41年7月3日（農学部グラウンド）後列（右端を除く）が京大、試合は1-1の引き分け。



徹底して「これしかない」をやり通す



昭和41年度副将 林 和 俊

原稿締め切り直前の1月17日未明、阪神大震災発生。自分の住む神戸市東灘区住吉は激震地のド真ん中。幸いマンションの躯体は大丈夫だったが屋内は目茶苦茶。本山の両親宅は全壊、六甲の義兄もマンション損壊等々身内にも被害続発。最低限の生活維持への身辺整理に加えて、奉職する大阪ガスは86万戸の供給停止からの復旧活動と、公私共忙殺の中で執筆を暫時の放念。これも一つの記念。

さて本題。昭和41年度は数年間維持してきた関西学生リーグ1部から転落。神大との入替戦に敗れ、伝統を崩壊させて当分は顔出しもできないと申し訳なきに極めて暗い卒業だった。栄枯盛衰は世の常と納得できたのはかなりの後年になった。

わが学年は在学4年間ずっと1部リーグという恵まれたチームだったが、自分の印象でチームの特色を一言で言えば、「下手くそだが負けないチーム」ということだ。以下解説。

別に好き好んで下手くそを目指したわけではない。他チームとの個人技術レベル差は4年間では埋めがたい。では何で勝つか（「勝つ」というより「負けない」が優先していたと思うが）そこからチームづくりは始まる。その答え。

(1)相手に嫌がられるチームになる。どうすれば嫌がられるか。(汚く汗臭い服装だけでなく…)

①「守」=「徹底的にマークする」。相手がボールをコントロールしたらもう負けだから、パスがわたる前にorわたった直後に猛然とチャージをかける。遠慮はしない。今井・中野・浜井みんなそのエキスパートだった。今のようにイエローカードもレッドカードもない時代だ。試合でのファールの数と、練習でのタックル・スライディングの量は抜群だった。

②「攻」=「ボールは持たない」。ドリブル厳禁。パスは考えない。ともかく蹴る。できれば前へ蹴る方がよい。蹴ったら走る。「蹴って走る」は今も変わらぬサッカーの本質だ。

タッチを切って相手スローインは大歓迎。片岡のヒョロヒョロなのにくたばらない走りっぷりが思い出される。蹴れなければ頭でつつこむ。野田のヘディングならぬ必殺頭突きは語り草になっている。相手は勘狂いリズムを崩す。崩れるとこちらに勝機が開いてくる。(2)上記をどのように実現するか。これが次のテーマ。

個人技術は話にならないから、話になるものを活かそうというわけだ。それが即ち①体力(運動量)②頭(考える力)③精神的スタミナ(頑張り続ける力)④上下に縛られない自由なチーム雰囲気。これだけあれば何とかなる。練習時間は長くよく走った。走るのがきらいだった今井も主将になると走りが大好きになったようだ。ミーティングもよくやった。相手チームの研究分析もよくやった。相手・味方の動きを1人ずつトレースして特徴を指摘しあった。

そして下手くそでもこれが自分達のサッカーと全員しっかり理解し、最後まで徹底してやり通す。相手に嫌がられようが(それを期待していたのだが)、レフェリーに注意されようが恥も外聞もなく、ひたすら「これしかない」をやり通す。この形容は高橋にこそふさわしい。ズブの素人ながら味方でさえいやになるほどの執念の持ち主だった。この「やり通す」という能力こそ京大ならではの最大の武器だったと確信している。まあこんなサッカーだった。これらを支えてくれたのが瀬戸コーチの献身的な指導だった。今ふりかえり改めて感謝する次第である

しかし大商大のような技術の優れたチームがあがってくると、我々もいつまでも下手くそではいたくない。もう少し上手になりたいと思ったのも事実だ。1部リーグから転落したのは案外こういうところに因があったのかも知れない。



新入生身体検査当日の部員勧誘風景
昭和41年3月29日

ともあれ卒業してもうすぐ30年。学生クラブ活動もスポーツ全体も以前よりは達観できるようになった。サッカーしかなかった4年間だったが、よき思い出、よき収穫と今は満足している。

忘れえぬゴオール

林 和 俊

秋のリーグ戦、相手は京学大、田口・大西という錚錚たるバック陣が相手だったから3年の時だったか。

LW伊藤が中盤左でボールを拾い中ヘドリブルをかけた。中盤右にいたRI林はペナルティサークルへ走り込む。伊藤より林へ15m位のゴロのパスが出る。林は相手ゴールに背を向けてポストとなり、そのまま走りこんでくる伊藤にパスをかえそうとした。伊藤の豪快なダイレクトシュートを期待して本当にパスをするつもりだった。京学の田口・大西は林のうしろでマークしていたが、ポストプレーと見てとった2人は、2人とも林の左右から伊藤のマークに出ようとした。この瞬間、林はポストをやめてボールをそのまま流し、振

り向きざまに左足でシュートを放った。ボールはGK宮階のセービングした右手の先をかすめゴールインした。田口・大西は完全に逆をとられた形となり、スタンドで見た目にはあざやかなシュートだったろうと思っている。

S40.10.31.リーグ初戦。2-0で勝った試合の2点目だった。

部の名残

昭和42年卒業 高橋 靖典

入部は1年の秋で、あとはグラウンドを駆け回る日常が続いた。巧くはならず、公式戦に出たのは数回、それも4年になってからだ。あげくは二部に転落したから、さえないサッカー生活ではあった。

当時は皆からきたないと言われた。狡いのではなく、不潔との意味だ。風呂が嫌いで、入浴は数カ月に一度だった。練習着は汗が乾いて白く粉を吹き、脂が固まってゴワゴワした。部室にあった持ち主不明のパンツを失敬し、付録のインキンをもらった。

あれから30年を経た。良妻の監督が厳しいから、毎日入浴し下着を着替える。もちろん歯も磨く。服も妻のお仕着せで、先日は知人からダンディと評された。過日を知る者は信じまい。

その後インキンは、場所替えして足先の水虫となった。今では、この菌だけが部の名残である。

サッカー部で学んだこと

昭和42年卒業 中野 昭一



卒業して間もなく30年、農学部グラウンドを駆けていたのは、随分昔の事になった。最近では、サッカーはTVで見るだけだが、若い頃に熱中したスポーツとして、今でも思い入れは強い。それにしても、日本のサッカーも盛んになったものである。我々の頃は、日本でワールドカップが開催されるなど思いもなかった。

さて、京大サッカー部についての感想は、「しんどかったが得たものも多かったな」という事である。瀬戸コーチや多くの先輩の指導のもと、自分なりに一生懸命に4年間取り組んだと思う。

あまり上達しなくとも、懲りずに続けてやったお陰で、いくつかの重要な事を学んだと思っている。例えば、

- (1)技術のレベルは低くとも、しっかりした戦略を持って戦えば、それなりの結果は出る。
- (2)スポーツの持つ厳しさ、楽しさ。
- (3)少々しんどくても、理不尽でもとにかくやってやろうと言う習慣が身についた。
- (4)家族ぐるみで長く付き合える友人を持てた。

などなど、これら京大サッカー部で得た事は、今の自分を支えている大切な要素になって

いる。

いずれにしても、若き時代に真剣に打ち込むという経験を持てた事は、大きな幸せであったと感謝している。

30年前の思い出

―― 1部リーグと学連委員長――

昭和42年卒業 野田 雅 昭



30年前の朧気な記憶を辿ってみますと、私は1回生で選手、2回生の夏から主務補佐、3回生は主務、4回生で学連委員長と、選手の期間は一年強であったと思います。

この間でビッグゲームに出場したのは、皮肉にも主務補佐をしていた2年の秋の関西学生一部リーグの二試合のみであります。

第一試合は大経大戦でRWでしたが、前後半90分間でボールにタッチしたのは確か3回だったと思います。これではメンバーに迷惑を掛けるばかりで出場しない方が良かったのかと後悔の念に堪えませんでした。

第二試合は関学戦で、これもRWで出場しましたが、前半10分ころにLW伊藤先輩のセンターリングに合わせヘディングしそのままゴールに飛び込み、“ああダメか”と思った瞬間、ボールが私の横を通ってゴールネットを揺るがしたときの感動は今でも忘れられません。ボールは私のヘディングでキーパーを抜いていましたが、バックがクリアしたところを林君がサイドでシュートしたものであります。その後、80分間攻められ放っして自陣のゴールポストに何回ボールが当たったか記憶に残せないくらいでした。結果は1対0で勝ちましたが、後半の後半は主務補佐のため練習量足りず体力がついていけなく朦朧状態であったと思います。その時、後輩の梅田君たちの“あと5分”、“あと5分”という励ましにいかにも勇気づけられたか、またその5分間（実際はもっと永かったと思う）は皆の勝ちたい気持ちの表れの5分だったと思います。この感動は4年間サッカーをしていて良かったなあと今でも感じております。

最後に、学連委員長時代は、学連が50周年を迎えるという時で、50年史を編纂するようにとの田辺五兵衛氏等の提唱で朝日新聞大谷氏、毎日新聞岩谷氏、サンケイスポーツ賀川氏等の協力を得て記事・座談会まで準備しましたが、結果は今日まで結実せず、現在に至っていることに悔恨の念を感じております。

想 出

——憧れの京大サッカー部に入部して——

昭和42年度主将 塚本大三



私の人生の岐路を大きく変えたのは昭和37年、神戸高校時代に西宮球技場で、京大サッカーの試合を見た時であった。その時の対戦相手の関大とは対照的に、そのユニホームの余りにも汚いこと、濃紺のはずのシャツは色あせ、白いはずのパンツが泥と汗とピフテキからの血痕で何とも言えない色であった。だが、その京大が一部リーグで堂々と戦っている真摯な姿に深く感銘したのを覚えている。これが大学進学を京大サッカー部と決めた大きな岐路となった訳である。

一浪後の昭和39年、農学部グラウンドに初めて訪れ、その部室の汚さ、古さ、不潔さには驚かされると同時に、何故ユニホームが汚いのか納得できた次第であった。同期入学では主将の私塚本（ゴンドークジラ）、副将青木（プー）、主務安田（ヤッサン）、GK神谷（ガーコ）、FB梅田（MG）、FB竹本（空手）、FB紅松（コンチャン）、FB溝淵（二郎）以上8名であった。

我々の時代はどうであったかと言われても27年前のことで、また50歳にもなるとアルツハイマーも始まり記憶も薄れて来るが、前年不覚にも二部へ転落し何とも言えぬ暗いムードでスタートした思いはある。また、一部では入場料（とは言っても300円程であった）が取れる一流の競技場で試合をし、シーズン前には一流新聞にリーグ戦の展望もあり、気分的には優越感を抱いていたが、二部ではグラウンドも二流、対戦相手も今までより1ランク下と随分惨めな思いをした。やはり何でもそうだがトップクラスにいないとダメで、二流三流に甘んじていると、気づかない内にそのクラスに馴染んでしまい、昇格するのに大変なエネルギーを使うことになる。その意味で我々三年の時に二部に転落した責任は大きいと痛感している。

ただ二部のリーグ戦の天王山である同志社戦で、一年生の黒田の右からのセントリングを私が見事頭で先制したにも拘らず、その後気迫負けで逆転され、一部リーグとの入替戦に出られなかったのが何としても痛かった。

最近のJリーグを見ていてつくづく思うことは、もし当時のコーチをしていただいた瀬戸先生（チーピン）の教えどおり、ハーフタイムで選手に反則が少ないと怒鳴るやり方をしていたら、京大の全選手がイエローカードをもらい試合が出来なくなってしまうだろう。

最後に一言提案。昨年70周年行事で久し振りにグラウンドに行ってみたら、何とあの汚い部室は昔のままでも使われているではないか。今後の計画がもしないなら、この70周年を契機に部室の建て直しを是非計画していただき、京大サッカー部の再建のキッカケとしてもらいたい、皆様いかがですか？

8年間維持した一部から二部に落ちて



昭和43年卒業 梅田 幹雄

昭和42年度のチームは41年度の納会から始まった。この年8年間維持した一部リーグから転落し、我々3回生には塚本大三君以外戦力になる選手がいなかったため、有力OBから、1・2回生だけで新チームを結成すべしの発言があり、3回生全員が退部させられることになりかけた。最終的に3回生に42年度に一部復帰の機会が与えられ、コーチの瀬戸進先生も残ってくださることになり、塚本君を主将として新チームがスタートした。これまでは、一部リーグの相当技量が上の選手を対象に、戦術を組み立てていたのに対して、大阪商大、神大が一部に昇格し、同大だけが敵であったことや、前年度優勝の関大がユース代表フルバックの大西をセンターフォワードに据えて成功したこともあって、守備の要であったセンターハーフの塚本主将をセンターフォワードにコンバートすることからチーム作りが始まった。今では当たり前の戦法であるが、瀬戸先生が作り上げられたセンターハーフを二人にするという、当時としては全く独創的であった京大式4-2-4システムも残るには残ったが、相手が二部チームということもあり、WMシステムに近い形に戻ることになった。戦法とは彼我の力関係によって変わるということを知らされた。また、これまで春のリーグ戦は秋に強いチームと戦うための準備であったのが、42年度からは、春のリーグ戦の相手が秋の対戦相手となった。これは秋のリーグ戦のグラウンドが芝生から靱の凸凹の土のグラウンドに変わったのと同時に二部落ちの悲哀であった。

夏の東大戦にはチーム作りが間に合わず、同志社大定期戦、東大戦とも記録的大敗を喫することになった。秋の近畿国立大学体育大会でも秋の対戦相手である阪大に0-3で大敗した。東大戦は別にしてこれらの結果はとにかく秋のリーグ戦に焦点をしばったためであったが、納会のOB発言の経緯もあり、この年はOBが全くグラウンドに顔を出さない厳しい環境の中で練習が続いた。瀬戸先生も口には出されなかったが、この戦力を見ておそらく一部に復帰できないまま京大サッカー部を去る覚悟をして秋のリーグ戦に入られたと思う。リーグ戦は2試合目に、近国体で大敗した阪大に1-0で勝ち、立命館大に引き分け、2勝1分で全勝の同大と対戦することになった。この試合はきわどい判定もあり、1-2で敗れ、一部に戻して卒業するという夢は消えた。当時の同大は個人技ではよい選手も何人かいたが、チーム戦術は未熟であり我々にもう少しのスキルとサッカーに対する理解があれば勝てた相手であった。

京大でのサッカーは実に多くのことを教えてくれた。社会人となってから役立ったことは、講義で学んだことよりはるかに多かった。しかし、これらは先輩達が築いてこられた強いサッカー部にいたからこそ味わえたものであった。その意味で二部に落としたこと、一部に戻して卒業できなかったことの重大さが理解できたのは、社会に出て相当の人生経験を積んだ後のことであった。卒業後30年近くたつ今も、調子の良いときには二部落ちを思い出し、悪い時には同大戦のように、相手には必ず弱点がありそれが見えていないだけなのだということを思い出す。もし、言い訳できるなら、我々の学年も先輩達同様京大ではサッカーが全てという生活を送ったことと、後輩達にかけた迷惑をそれぞれの人生にかしたことであろうと考えている。

私とサッカー

——上海東華足球会元老隊の外人隊員は私一人——

昭和43年卒業 青木 功 一



京大時代のサッカーと言っても昭和43年卒業の身にとっては大昔のことで、また、活躍したわけでもなく、書くことも余りありません。ただ、現在に至っても曲がりなりにも、まだサッカーとは縁が切れていないのも京大でサッカーをやっていたお陰かと感謝しております。こんなにも長くサッカーと付き合いとは、現役当時には思いもよらないことでした。

そういうことで、現在の私とサッカーとの関わりを書いてみます。

1. 少年サッカー

私は東京都下の多摩市に住居を構えておりますが、多摩地域はサッカーが盛んで、少年サッカーも読売クラブを頂点に多数のチームがあります。私も長男・次男が小学校の頃にサッカーをやるのに引っ張られて「聖が丘サッカークラブ」コーチとして毎週日曜日に小学校の校庭での練習、また、対外試合にと忙しくしていました。折しも始まったJリーグの影響か参加する小学生も多く、また、両親の支援体制は至れり尽くせりで、サッカーのレベルも相当に高く、隔世の感を持ったものでした。例えば、グラウンドの整備、ライン引き、試合の手配、付き添いは全て親やコーチが行い、子供はサッカーに専念できる体制で、リフティング（昔はボールつきと言っていたと思います）にしても、5-6年生になると、回数ではなく5分とか6分とか時計で計っていました。因みに、昭和40年代初めの京大蹴球部では100回を超えてボールつきが出来た人は何人いたでしょうか。当時の瀬戸コーチのご苦労がしのばれるというものです。

私は1994年3月から上海に単身赴任していますが、今でも少年チームのコーチの肩書を持って今年5年生担当と言うことになっています。たまに帰国した時には小学校に顔を出して子供とボールを蹴ったり、コーチとお酒を飲んだりして遊んでいます。

2. 中年サッカー

多摩市も中年を対象にしたクラブチームがあります。名前に「四十雀」とついてはいませんが40歳以上を対象にしたチームで「多摩サッカー（シニア）クラブ」として40人程の部員がおります。三多摩地区を対象に結成された多摩シニアサッカー連盟に所属して、親睦試合をしています。

上海から一時帰国した時には出来るだけ参加し、上海勤務が明けた後の50歳以上を対象とするスーパーシニアチームへの参加につなげたいと考えています。自分自身が若い頃には、京大の農学部のグラウンドで大先輩が来られた時に、よくもあんな年になってまでボールを蹴っているものだ等と思っていましたが、自分がもうその年になったのかと思うと感無量です。

3. 老年／元老サッカー

上海には上海東華足球会元老隊というサッカーチームがあります。上海赴任後その存在を知り唯一の駐在外人として隊員に加えて貰いました。(足球队員とはサッカー部員と言う意味です)。東華隊は戦前に設立された大学卒業生を中心とした産業人のサッカーチームで、戦争によりその活動を中止していましたが、中華人民共和国設立後の混乱期が治まり生活に余裕の出始めた1981年に至り、かつてのオリンピック、アジア大会などを含む対外試合に出場した上海代表、華東地区代表、解放軍代表などのサッカー経験者が集まり再興しました。拠点を上海市盧湾区体育場に置き、少年隊、女子隊、青年隊、老年隊、元老隊を抱えるクラブチームです。

老年隊と元老隊は毎週日曜日にはクラブ室に集合し、ある人はお茶だけを飲んで歓談し、また、ある人は着替えてミニゲームをして楽しんでいます。現在最高年齢でボールを蹴っている人は73歳です。今までに、国内外で対外交流試合を行っており、昨年（平成7年）は多摩サッカー（シニア）クラブチームが上海に遠征してきて、東華元老隊と対戦しました。結果は2対1で東華隊の勝ちでした。今年（1995年）は東華隊が多摩に遠征することを計画中です。

中国語によるサッカー用語を紹介します。日本では英語をカタカナ表記していますが、中国語ではすべて漢字に翻訳してあります。話のネタになれば幸いです。

- | | | | | | |
|---------|------|-----------|------|----------|-------|
| ・キックオフ | ：開球 | ・パス | ：伝球 | ・ヘディング | ：頭球 |
| ・ドリブル | ：帯球 | ・シュート | ：射門 | ・ゴールイン | ：射中 |
| ・反則 | ：反規 | ・ペナルティキック | ：罰点球 | ・フリーキック | ：罰任意球 |
| ・ハンドリング | ：手球 | ・オフサイド | ：越位 | ・コーナーキック | ：角球 |
| ・フォワード | ：前鋒 | ・ハーフバック | ：前衛 | ・バック | ：后衛 |
| ・キーパー | ：守門員 | ・キャプテン | ：隊長 | ・選手 | ：隊員 |

4. 上海サッカー同好会

上海に住む日本人も増え、領事館に登録している日本人は約4,000人、日本人小中学校に通う生徒も約250人となっています。サッカー愛好者も増えて来たので今年になって上海日本人商工クラブ内にサッカー同好会が出来ました。会員は40人程度で、各国の上海駐在員チームと親善リーグ戦をしています。参加国は英国、ドイツ、北欧、メキシコ等8ヶ国で、現在の成績はパープルサンガと同程度です。私も人数が少ない時には試合に参加しています。

上海にお出かけの節には、お気軽にお立ち寄り下さい。

上海住居	上海市仙霞路88号太陽広場東塔2803室	TEL 86-21-6270-0024
勤務先	日本郵船（中国）有限公司	
	上海市河南南路16号 中匯大厦 8楼	TEL 86-21-6328-1166

当時の日記より



昭和43年度主将 藤田 正次

昭和42年11月28日（火）

[関西学生2部リーグ戦を終了し、新体制になった頃]

- 2部リーグに馴れてしまう傾向がある。強い相手との練習試合を出来るだけ数多くやり、緊張感を保つ。
- 1-4-2-3のスイーパーシステムを基本とする。。
- GKサブ、1-ナマズ、4-大村、二谷、福島、久下、メシ、六甲、2-野田、丹羽、大村、樋口、ジョン、3-丹羽、ハチ、メガ、黒田、鈴木、樋口、尾籠、大村。
- 練習時間は短く、2時間前後で終わりたい。短時間でクタクタになるようなスケジュールをくみたい。
- 京大ボックスの特色であった、激しい当たりがなくなってきた。

昭和43年11月10日（日） 晴れ、小雨、冬みたいに寒い風

リーグ第3戦、対大工大。2対2の引き分け。後半中頃に2点取られてあわててしまった。ナマズがPKを決めて2対1になった時は終了5分前。その直後、相京、野田が樋口からのセンタリングに飛び込んで同点とした。

これでやっと優勝のチャンスが残ることになる。残りの阪大、神大にはどうしても勝たねばならない。

昭和43年11月16日（土） 晴れ、ボックスでは数日前からストーブを焚いている。

いよいよ明日が阪大戦である。これに負けると優勝の望みはなくなる。

今週は二度ミーティングをやり、各自のやる気は十分である。チーム力も同じあるいは我々の方が少し上だと思う。必ず勝てる相手である。

昭和43年11月17日（日） 晴れ

阪大とは2対2の引き分け。後半ラスト3分で同点にされてしまった。優勝の望みは消えた。

日記に散見する当時の物価

・祇園会館の映画（3本立て）	250円	・インスタントラーメン	25円
・カレーライス（学食）	55円	・同左（楽友会館）	130円
・ハイライト	70円	・お好み焼き	100円
・月刊「小説現代」	150円	・卵丼	100円
・きつねうどん	50円	・灯油1缶	330円
・牛乳1本	15円	・銭湯	28円
・生卵	16円	・下宿代1月	4000円
・散髪	330円	・吉田寮の定食	90円
・追い出しコンパ会費	1500円		

芝生



昭和44年卒業 上 本 憲 嗣

4月初めから2週間ドイツに出張した。フランクフルト上空から見る初めてのヨーロッパの大地は果てしない平原に広大な牧草地、畑、森が広がり文字通り緑一色に圧倒される感じがした。

市街を少し外れると広い公園や空き地が芝生で覆われ、散歩やジョギング姿の大人たちとサッカーに興じる子供達を見て、都市そのものの豊かさを見せつけられる思いがした。

我が国で芝生が豊富なのはゴルフ場だけである。Jリーグが発足してようやくサッカースタジアムも整備されるようになっては来たが、子供達が広々とした芝のグラウンドで日常的に遊べるような環境が果たして可能なのであろうか。

サッカー底辺の拡大には、良き指導者層の拡充もさることながら、先ず第一に楽しくボールに親しめる環境こそが基本であろう。狭い国土では望む方が無理なのだろうか？

与えられた条件下で最高を目指す



昭和44年度主将 鈴木 俊 郎

私が入学した昭和41年以前は、関西学生リーグは一部六校であり、京大蹴球部は一部に属し当時絶対的な強さを誇っていた関学、関大と常に互角の戦いをしていたように記憶しています。

国立大でありながら、関西の学生最高レベルで真剣勝負をしているチームでサッカーをやりたくて入学したのですが、チームは一年の秋にリーグ最下位、入替戦に負けて二部転落。二年のリーグ戦は同志社に勝てず二位で入替戦に出られず、三年の時は、二部リーグ三位と年々チームの成績は、下降の一途をたどっていました。

四回生としてチーム作りを開始するに当たり唯一の目標は、我々は関西学生リーグの関関と真剣勝負するのだ。そのためには一部リーグに入らねばならない。ただそれだけでした。そのために必要な事で有れば何でもしよう、まづ当時崩れかけていた関係の修復のためにOBに協力依頼をすることから開始しました。幸い根本氏を始め当時若手から中堅に移行しつつあったOBの協力を得ながらチーム作りをしてゆくことが出来ました。

我々は、とにかく一部に上げるんだとの考えでいたのですが、OBを通し学んだことは、チーム作り際に大事なことは一年ごとの単年度で観るのではなく、流れの中で自分たちの年度がどのような位置づけにあるかをみきわめるといことです。冒頭に述べたように、我々の年度は、じり貧的に成績が落ちてきていました。それは当人たちが認識していなくてもチーム全体のモラル、部員の志気、考え方も落ちてきているということです。

一部に上がるのは、それなりの実力及びチームのモラルの両方が必要です。ここで言う

モラルとは単に精神論ではなく技術の裏打ちが無ければ意味がありません。モラルはそのつもりで作り直さなければ低下する一方で、たとえ一部にあがってもすぐに落ちてしまうチームを作っては意味がありません。

我々の年度は、落ち続けているモラルをくい止める、出来れば上昇させる素地を作り上げることに変更しました。その決断以降は、いろいろ軋轢は有りましたがあくまでもチームの意識を高める、そのためにじゃまになるものは切り捨てるとの考えで1年をとおしました。

残念ながら我々の年は一部には上げられませんでした。しかしながらその後数年にわたり一部で活躍する良いチームを作ってくれた人達が現れ、我がチームのように一喜一憂することが出来ました。

チームには、いろいろな形があって良いと思います。しかしながら体育会のサッカー部を選んだ以上は与えられた条件の中で最高レベルを目指す事によってのみ楽しみが得られると思います。

がんばれJリーガー



昭和45年卒業 久下 雅 裕

今ここで、何をしているのだろうか。

大学に入って始めた蹴球。秋のリーグ戦、関大戦の試合中だ。そう、フリーキックである。眼前に迫っている。無意識に、首を引っ込めた。ボールは頭上を通過した。幸いキーパーのファインプレーで事無きを得た。両側に立っていた先輩から、キーパーから、きついおしかりを受けた。当たり前である。

Jリーグ、2年前。ニコスシリーズ第8節。プロの選手達は、この時ボールに向かって飛び上がっている。この場面を観ると、今でも28年前の情景が浮かぶ。あの時初めて教わった。大切な部分を押さえて守るのだということを。それでも、まともに当たれば、守っていたはずの大切な部分は大打撃を受ける。悶絶してしまう恐怖感は、去らない。

この恐怖感をものともせず、Jリーガー達は今日も命を張って頑張っている。

Jリーガー達よ、頑張れ！

挫けなかったからこそ



昭和45年卒業 福島正和

サッカー部の思い出という私の場合、1回生の時のトレーニングが今でも脳裏に焼きついています。

(その1)

高校時代は、アーチェリーの同好会みたいな事をやっていた私は、大学に入ったらサッカーをしたいという思いが強く、入学後の4月中旬に、さっそく農学部のグラウンドを訪れました。

丁度その日は、練習最後の仕上げがインタバルトレーニングの日となっており、私も一周500mのトラックをジョギング、ダッシュと繰り返しました。まともな練習をしていなかった私は、その日はなんとかこなしたものの、下宿へ帰ってまさしくダウン。翌日は、階段の登り降りが出来ず、歩くのもままならない。“もう、こんなには絶えられない”と、グラウンドから足が遠ざかってしまいました。

しかし、“ここで挫けたら…”と、約1ヶ月後に再び練習に参加しました。もし、そのままあきらめていたら、今、こんな原稿を書いていなかったということです。

(その2)

1回生の時の夏の合宿は、富士写真フィルムの小田原足柄工場のグラウンドでしたが、これが、なかなかのハードなもので疲労困憊。この夏は特に暑く、午前の練習後、工場の食堂で昼食となるのですが、流動食しか喉に通らず、バデバテだったのが思い出されます。

そして、東大戦、合宿、納会等の節目、節目に歌う“知るや友、……”が、一番の思い出です。

4年ぶりの1部復帰



昭和45年度主将 二谷則彦

1. はじめに

入部した年の前年(S41)京大は関西学生2部リーグに転落していました。その後、1部復帰に4年かかりましたので、我々の年度は一度も1部を経験していません。

2. 戦績・戦法

(1)関西学生リーグ(秋)

4・3・3システムを基本とし、BK, MF, FWは横のポジションチェンジはしましたが、縦のポジションチェンジは少なく分業的でした。7試合で18得点、2失点。

FW：俊足揃いではないものの、黒田を中心としたボールコントロールに優れた層の厚いメンバー。

MF：横内を中心とした運動量豊富な不動のメンバー。

BK：二谷をスーパーとし、うまさはないが堅い守り。LBにFW出身の山田（次年度はCFをした）をよく使ったので、対戦相手から見るとBKが攻撃参加する京大らしくない印象があったと思われる。

GK：安岡。1部を含めてもトップクラスのGKであった。

(2)入替戦（3：0、前半0：0、後半3：0）

入替戦は、前年と同じ阪大が相手でした。終わってみれば「何となく勝っていた」。ただ、タイムアップの笛の後、涙が出てきてしばらく止まらなかった。

3. その他

(1)春の京都学生リーグ（1部）での成績が悪く、6月頃から個人技の向上と、2～3人のグループでのパスワークを徹底的に練習したことを覚えています。

例えば、

- a. ボールに寄る前に、まわりを見る
- b. ボールにすばやく寄る
- c. ボールにタッチする前に必ずフェイントを入れる

数年後、京大が2部に転落してから農学部グラウンドに訪れることがあり、この時上記a,b,cが不十分であることを見て、「今年の1部復帰はむづかしい」と思ったことがありました。

(2)現役時代に次のような話を耳にしたことを覚えています。ほかのチームの人が話していたことです。「京大のマネジャーは、あんなに必死になって応援しているぜ。あれなら選手たちも頑張らざるを得ないよな」

我々の頃は、京大のマネジャーは伝統的に男性のみでしたことを念のために申し添えておきます。（もし、女性マネジャーがいたらもっと頑張ったという声もある…?）

(3)層の厚さと故障者

6月の四者リーグ（京大、阪大、神大、京教）は、3戦全勝でこの頃からチームは上向きとなってきたのですが、三津川（RW）が京教のGKとの接触プレーで足を複雑骨折してしまい、以降のシーズンは戦力外となってしまいました。

とはいえ、チーム全体としてはケガ人はほとんどなく、かつレギュラークラスが各ポジションにバランスよく揃っていましたので、この点が秋リーグの成績につながったと思います。例えば、入替戦のメンバーを決める時、助監督の根本さんと相談してもなかなか決めかねて、当日のウォーミングアップが始まってからやっと決めたことを覚えています。



1、2部入替戦で阪大を3-0で破り、1部復帰なる。
昭和45年12月6日（宇治グラウンド）

ランニングコースと叡電跨線橋

昭和46年卒業 丹羽 彰

入部してすぐ、一回生のころ、雨の日の練習はグラウンドを荒らさないため、ランニング、筋力トレーニング、タックル練習とほぼ決まっていた。中でも宝ヶ池までのランニングは最も嫌な練習の一つであった。最後尾何人かは罰則が待っているの、そうならないよう誰か先輩の後について黙々と走ったものである。前を走る先輩のシャツから湯気ももうもうと立ちのぼっているのが印象深かった。

このランニングルートが最近では高校駅伝のコースの一部になっている。周囲の風景は変わっているが、それでも記憶に残っている場所はあちこちにある。特に叡山電車の跨線橋を登って行くところは当時のことを強く思い出すので、毎年欠かさずチャンネルを合わせ地元チームの応援をしているところである。

まだ5分あるぞ



昭和46年度主将 安岡 健

「まだ5分あるぞ」。誰が言い出したのか今でも判らない。

まる4年の二部生活を経た後、久しぶりの一部での最終戦である。それまで大経大に勝ち、大商大とは引き分け、更には京教大にも勝ち、2勝3敗1分で臨んだ最終戦、相手は1分5敗で格下と見くびっていた立命大であったが、何のことはない先行すれど先行すれど追いつかれる展開となり、2対2となった後半40分のことである。

この試合に勝ちさえすれば、ほぼ一部6位を確定させ、入替戦なしで一部残留が決まる筈である。相手は弱い、楽に勝てる、しかも1点軽く先行した。今にして思えば油断もあったろう。何れにせよ2対2になった時には、入替戦そして敗北、一年での二部陥落と、暗い思いが私だけではなく全員の頭をよぎったものと思う。

その瞬間であった。普通なら「あと5分しかない」と思う90分の、我がサッカーの試合の中でも流れの悪い、その最後の5分に誰かが大声を出したのである。「まだ5分あるぞ」、その声はグラウンドの全員に、いや京大蹴球部の全員に静かにそして力強く、あたかも5分あれば間違いなく1点取り3対2で勝てるが如く伝わって行ったように思う。

そして私はその流れに押されるようにゴールキックを蹴ったと思うが記憶は定かではない。勝てる流れにも拘らず2点を入れられてしまった自分のゴールキーピングへの悔いと、再度の二部落ちの悪夢、入替戦の相手チームを全く知らないことなどと共に、「まだ5分あるぞ」と言う自信に満ちた声などが一緒になっていたのであろう。気が付いたら、森（久松）と山田が中央をゴチャゴチャしながら突破して行き、山田が勝ち越しの3点目を入れており、そして試合は終わった。

諸先輩のお陰でやっと一部復帰は果たしたものの、春には一部のチームとは呼べない試合しか出来ず、夏合宿でも悩むばかりでなかなか格好がついてこないままであった。マメさん（根本紀夫氏、当時の助監督）に、今年のチームで点を取るパターンとしてはこれが一番と教えられ、追加メニューで練習した形が最後の最後に対立命大戦の3点目に生きたのではあるが、秋のリーグ戦でもゾーンプレスじみたことをやろうとして大失敗して、緒戦の関学には1-3、第二戦の関大には1-4と大敗を続けた後、目標を入替戦に負けないことに切り替え、徹底的なマンツーマンに変更してようやく2勝3敗1分となった後の最終戦であった。

その試合で「まだ5分あるぞ」との声が出るチームとなっていた。これ程強くなるチームを我々へと引き継いでくれた諸先輩と、一緒に苦しみ成長して行った同輩、後輩に感謝すると共に、現役諸君が自分達のドラマを作り出して行かれることを願って昭和46年度の年代記とします。

忘れられない大商大戦



昭和47年卒業 相京重信

昭和46年11月14日の朝刊である。「同大を追う大商大は前半14分、古前田のシュートで先行しながら、京大の鋭い動きに次第に押され始め、後半36分、京大はFKを相京が直接決めて追いついた。大商大は大事な試合を引き分け、優勝争いから脱落した」。古前田とは現在、Jリーグ、ベルマーレ平塚の監督である。

我が京大では無く、大商大にスポットライトが当たっている点は残念だが、当日の感激は忘れられないものがある。兎に角、守って守って守り抜く。余程の力の差がない限り、必ず一試合に何回かは得点チャンスがある。それを決め、守り抜けば必ず勝てるという根本コーチの言葉通り、この日、京大は大方の予想を裏切り、優勝候補の一角、大商大に対し、引き分けに持ち込んだ。試合後、キーパーの安岡、バックスの渡辺、森岡、ハーフの棚井、フォワードの私、相京の4回生が集まり、北白川で飲んだ酒は格別であった。

この年京大は一部リーグに復帰直後ということで心配したが、同志社、関学、関大には敗れたものの、大商大に引き分け、大経大、京教大、立命大に快勝し、3勝3敗1分と、堂々五分の戦績を残すことが出来、6位となった。

25年以上経た今でもあの時の勝利の嬉しさ、負けた時の悔しさ、新築されたばかりの神戸中央競技場、整備された芝生のグラウンド、そして、断片的ながら印象に残っているプレーを思い出すことがある。そんな思い出と同時に、ふと懐かしさとも、悔しさともつかぬが、あのパスを、あのシュートのコースを変えていたら、ひょっとしたら、もう一試合勝ったのではないだろうか。そうすれば…と言う思いもする。

思い出が尽きないサッカー部時代である。

ゴールの周辺

——70秋2部リーグ 対京都工大戦——

昭和47年卒業

棚井和義

1年生のデッカイもん同士が、「蹴った」「蹴られた」と言い合いを始めた。ボールはとっくに向こうの方に行っているのに。「こらっ！ ケンカすんな」。私は込み上げる笑いを押し殺してコワイ顔を作る。今日は、自分が勤務する高校のサッカー部で紅白戦の審判をしているのだ。あの頃サッカーをしてなかったら、今になってこんな事してないだろうなあと思いつつ。あれから25年が経ってしまったのだ。

左FBの山田(彼は翌年CFで大活躍する)がロングシュートを放った瞬間、私は敵GKへ突進していた。前半、工織大キャプテンに強引に蹴りこまれて0-1とリードを許す。その先制点は、敵イレブンの執念が乗り移ったかのようなシュートだった。後半、森(久松)が上手く決めて同点とするも、ゲームは一進一退の揉み合いが続いた。相手は一向に消沈せず、退き下がらないのだ。この日の工織大は、我々に対して特別の敵愾心を掻き立ててきたらしく、試合開始から、ある種強い意志を秘めているかのようにであった。それ以前のイメージを一新するような動きぶり、我々に立ちはだかつてきた。1部復帰を目指して全勝で進んできた我々であったが、リーグ戦も半ば、ここで敗れては勢いも止まる……。しかし、私の中に焦りはなかった。

3回生の秋、私は絶好調で心身共に充実していた。試合の成否は自分に懸かっていると密かに自負しながらも、気負いで己が張り裂けてしまうことはなかった。自信と過信の切っ先に居たが、不安定な心理を押さえることができていた。春のシーズンでは、根本助監督に教えられた「コート外から見ての心算で、各々の場面では何が最適かを考えながらプレーしろ」ということを忠実に実行した。毎試合フラフラになった。サッカーってそんなに頭が疲れるものとは知らなかった。走り回るだけよりも何十倍も重労働だった。そのお陰で、秋にはゲーム中にストーリーが少しは解るようになっていた。5分前、1分前の様子から今の瞬間へ至る流れ、次の場面の予測、今どちらがゲームを支配しているか、自分はどこにポジションを取ればよいか、敵味方の配置はどうか……流れの中で、それらをリアルタイムで読み取る。そんなことが幾分やれるようになっていた。その上、ハードな夏合宿を経てきたのでスタミナは満点だ。——毎年の夏合宿は本当にしんどかった。サーキットトレーニングの別名は「殺人体操」だ。生命までは取られないだろうと思って、ようやく耐えた。それを仕切ったキャプテンたち、藤田さん、鈴木さん、二谷さん、そして安岡……。ほんとに凄い人たちだった。——ゲームの終盤に近づくほど身体もよく動くし、判断も冴えわたってくる。

4-3-3システムの右サイドハーフ。こんな嬉しいポジションはない。ボールに触わる回数はチームで一番多く、チャンスもピンチも全て絡むことができる。ピンチを摘めば自動的に我々のチャンスとなる。私に打って付けの役割だ。攻撃の起点となり中継点となって何十回も敵BKを背走させるのだ。それを積み重ねるとパカッとゴールシーンが生まれる。高い位置での相手ボールは外へ外へと追い込んで、味方の三角形で潰す。タッチへ逃れて敵のリズムを寸断するのも上等な策だ。逆サイドを襲われたら自陣BKラインに飛ん

で帰ってセンタリングをはね返す。自分がペナルティエリアで守っている間は絶対にゴールを割らせないのだ。

味方がシュートしたらゴールへ突っ込む……もう、習性のようなものだった。工織大のGKは、人混みを抜けてきた低く鋭いシュートを前にはじくのがやっとなかった。突っ込み過ぎた私は、機敏に反転して、とにかくボールをゴールマウスへと押し込んだ。左足の弱いシュートが枠へ吸い込まれていった。次の瞬間、押さえ切れない嬉しさが沸き上がってきた。私は味方の方に振り返って万歳し、何かを叫んだ。言葉にならない叫び声だった。ボールがネットを揺るのは見なかった。(見届けておけばよかったとすぐに後悔した)。一人では立ってられないところへ、快足ウイングの石瀬さんが飛び掛かってきて支えてくれた。向こうの方ではハーフでコンビを組む横内さんが躍り上がっていた。タイムアップまで残り僅か。そして全勝を保つことができた。整列のとき、となりの前田さんが手を取って讃えてくれた。この日、私はマン・オブ・ザ・マッチだった。助監督の姿がベンチに見えないのが恨めしかった。彼は1部で最下位になる予定の阪大、神大の試合を偵察に行き留守だったのだ。仲間うちでは悪口を言っている我々だったが、グラウンドに彼が現れると、リキ入れて練習してしまう。サッカーの事は何でも知っている、どんなプレーも見本でやって見せる、そういう助監督だった。——今にして思えばそんな訳ないのだが……。

新入生の私は、京大サッカー部が2部ということすら知らなかった。しばらく前までは1部だったことも、そして、チームが1部へ復帰したいと思っていることも。下宿でひとり暮らしをはじめた私は友人も居らず、何もすることがない毎日だった。教室で、めし屋で、銭湯で、耳にするのは関西弁ばかり。半分、外国へ来ているみたいだった。私には関西人的感覚が全くないのだ。高校までやってたサッカーをするしかないかな、でも、チビの自分が通用するだろうか。グラウンドを見物して「あのお、サッカー部に入れてもらいたいんですけど…」とモジモジ申し出たのは、もう5月だった。部員は総勢60名。誰が誰だか分からない。新入生がレギュラーに混じって練習していたり、上級生でも一日中球拾いで終わったりしていた。自分に出番が回ってくるのだろうか。この様子では、退部者がたくさん出るのを待つしかないな。

工織大に勝ってリーグ戦半ばを乗り切った後、我々は2部優勝して入替戦(対阪大)を快勝し、4回生の秋は1部で試合をすることとなった。それは、私にとって不相応な出来事であった。行く末も知らずにトボトボと大学生活を歩き始めた私にとって。

さて、次の日曜日の練習試合では生徒たちに何を言おうか、ピッタリのひと言、これが又、なかなか見付からないのだ。

ベストを尽くす



昭和47年度主将 山田 哲治

私の時代を振り返ってみると、端的に言って、1969-1971年の間(鈴木主将-三谷主将-安岡主将の時代)に築かれた、京大サッカー部の輝かしい実力と伝統をただひたすら守り続けるのに精一杯であったことである。

1969-1971年の京大サッカー部の栄光は、むろん当時京大工学部で助手をされていた根本大先輩(通称：豆さん)が、大事なお仕事を犠牲にされてまで後輩のために、コーチ役をかっていただいたお陰であることはいうまでもないが、豆さんのおかげでまた、チーム自体が非常に結束力を持ち出したことも否めない事実であった。それぞれの年代、3-4年生が主将をもちたて、チームをもちたてたのが、大きな底辺を支えていたように思う。小職が主将に選任されたときは、既に豆さんの海外留学が決まっていたときであり、4年生は言うまでもなく、チーム構成員全員が将来に対して、一抹の不安を憶えた。

主将選挙では豆さんもまだ日本におられ、安岡主将、相京副主将、渡辺副主将も同席で今後のサッカー部の運営について協議され、古松主将-山田、船曳両副主将体制がベストであろうという線ができあがっていたにもかかわらず、実際選挙結果が出てみると、小職が主将として選ばれた。小職自身も豆さんの構想に同意していたので、かなり面食らった感があったが、それ以上に豆さんのサポートが得られない状況でのサッカー部の運営に対する責任の重さを痛感していた。しかし、われわれだけの力でやっていくしか選択の余地がなかったので、主将、副主将はほとんど毎日のように練習計画・クラブ運営に関して協議したばかりでなく、4年生全体でのミーティングもかなり頻繁にやると記憶している。チームの第一の目標は秋の関西学生リーグで少なくとも6位以内の成績(当時は1部リーグ8校で下位チームが入替戦に出場を余儀なくされていた)を収めることであり、東大との定期戦、同大との定期戦などすべての試合は秋に向けての実践練習として位置づけていた。戦法では、豆さんから教えられた4-3-3システムを守り続ける上で手薄になってきたウイングの攻撃力・バックスの防衛力・攻撃参加をいかにして補充していくのかが大きな課題であった。練習では、特に基礎体力・持久力の向上をはかり、秋にむけて完成をめざしたが、正直言って満足できるレベルまでは到達しなかった。

しかし、本当に幸運であったが、秋の大会で6位という成績を収め、主将としては面目を保って安堵したことを憶えている。やはり、豆さんの力強いバックアップがなくなって、チーム自体の個々人の技術力・チームの組織力すべての面で弱体化していった事実は否めないが、それでもわれわれがベストを尽くしたことは自負できるであろう。しかし、次の時代の森主将にもっと大きな借金を残して、引き継いでいただいたことに対しては、今でも申し訳ない気がする。

サッカー議論に明け暮れた4年間

昭和48年度主将 久松啓次
(旧姓 森)

1. 1973年(昭和48年) 1部リーグ復帰3年目のスケジュール、練習メニュー

(1)年間スケジュール 「最終目標 秋の関西リーグ1部上位」

前期：基礎体力、筋力トレーニング、基礎技術、理論

3月 練習開始、3月末1週間合宿

4～5月 京都リーグ、関西選手権

7月第1週 東大戦

後期：戦術的練習主体

8月初旬 10日間合宿

9～10月 関西リーグ

(2)夏合宿練習メニュー

早朝 30分 (起床 6:30)

グラウンド1周、体操、サーキット、ボールリフティング、ランニング

午前 9:30～12:?

体操、ボールリフティング、ダッシュターン

1対1、2対1

ヘディング、ボレー、ドリブルフェイント、トラッピング、シュート

キック、ロングパス

紅白試合または6対5

午後 15:00～18:?

各自アップ、ボールリフティング、シュート

ゴール前2対1、3対2、センタリングシュート

フォーメーション

50Mダッシュ

消灯 10:30

サッカー漬けの4年間、昼夜分かたずサッカー論議に明け暮れた。特に49、50年度主将の巖本、永井両君とは、いかにすれば今後も1部にて通用するか、頻りに話したものだ。

2. 戦法

レベルが1枚上の相手と互角に戦うには、中盤にて相手に好きなようにプレーをさせないこと。そのためには全員の攻撃的守備(今で言うゾーンプレスか)が必要で、いったん攻撃に転ずればオープンスペースを狙った速攻を主体に攻める。

3. 関西リーグ戦績

1971年度 3勝1分3敗 6位

1972年度 1勝1分5敗 6位

1973年度 1勝2分4敗 6位

結果的に100%満足出来なかったが、コーチなし現役のみでここまでやれたことは大いに

意義があったし、今後も京大蹴球部はあくまで現役の自主運営でやることに価値があると考えます。いずれにしても、現役の皆さんが、共通の目的と前提のもと切磋琢磨され、近い将来必ずや1部復帰されることを期待しています。

GO KIU!!

守備力強化は絶対命題

昭和50年卒業 荒木 茂

振り返ってみると、京大蹴球部が関西学生サッカー秋季リーグにおいて、昭和42年から4年間の2部暮らしにピリオドを打って1部復帰を決めた翌年の昭和46年の春、私は京大に入学した。そして、関西の大学サッカー界の表舞台で活躍できる期待を胸に抱いてサッカー部に入部した。大方の仲間もこんな期待を抱いていたのではないだろうか。

その年は、まだ大学闘争が尾を引いており、前期、後期試験の度にストライキに突入していた。そうした環境の中で、必然的にクラブ中心の生活になって行ったのを覚えている。そして、毎日午後4時から練習し、試合を目指して、技術を磨くという、クラブがすべての日々が続いた。

当時の1部リーグで京大は、大商大、関学、同大、京産大、大経大、関大、京教大などの強豪の中でよく健闘し、昭和46年から3年間連続して、1部6位を維持した。

我々の時代の活動は、1年間を通して考えると、春から目標とする秋の関西学生リーグまで系統立てて考えることができた。大まかにいうと、1.春合宿 2.春の京都リーグ 3.同志社戦 4.東大戦 5.夏合宿 6.遠征 7.関西リーグ、の順番である。

春合宿は新チームの各メンバーの特徴をつかみ、組織としてどう戦うか基本線を見いだすのが目標だった。この関門を経て春の京都リーグに臨んだ。京都リーグには、同志社大、京産大を筆頭に京大とレベルの変わらない京都教育大、立命館大、天理大などが入り、春先の実力をはかるには格好の舞台だった。また、新入の1回生の力を試すこともできた。戦術的には春合宿で試したフォーメーションを試合の場で経験すること、新しいコンビネーションでのプレーを実践することで反省材料も多く生まれた。

当時、京大がとったシステムは、対戦相手がすべて京大よりはレベルが上という状況の中での、マンツーマンを重視した4-3-3であった。守りの局面でトイメンに負けない個人能力を高めることに努め、もう少し広い局面では組織プレーで負けないことが必要だった。一人一人のレベルが平均して劣る中で、相手に勝つためには守備で負けないことが絶対命題であり、点を取れなくても点をやらなければ負けることはないという思想が根本にあった。同志社戦は相手が戦力を落としてくる年もあり、さほど力を入れなかった。むしろ、夏の最大目標である東大戦に向けての調整的な意味合いがあったように記憶している。その東大戦だが、秋のリーグ戦に次ぐ年間の節目となる試合としてとらえていた。この試合は「勝つこと」だけが目的である。しかし、梅雨時にあたり、体調を崩すこともあって必ずしもベストコンディションでは臨めなかった。実力的にも拮抗しているため、私の在籍中は2敗2引き分けという成績に終わった。

夏合宿は、今から考えれば精神の高揚、精神力をつけることが最大のねらいではなかったかとさえ思える。というのは、宇治の暑さは京都以上、しかもグラウンドの地形上、風も期待できず、練習に熱中する前に暑さに耐えることが合宿をこなす最大の条件だったからだ。ここでは、基本練習とともにフォーメーションや紅白試合を多くこなした。目的は秋のリーグ戦しかない。しかし、基本が徹底できていない面もあり、練習メニューの組み立てには工夫が必要だった。合宿を乗り切ると、8月中旬に東京遠征。関東の2部や都リーグのチームでも、力は上でありこうしたチームとの対戦でかなり正確に戦力をはかることができた。また、3回生の時には日本リーグで優勝した日立製作所と対戦したこともあり、日本のトップの実力を垣間見る体験もできた。

そしてメインイベントの秋の関西リーグは、何としても勝ち点をあげることが一試合一試合の課題だった。しかし、昭和49年は、大阪体育大学など新興勢力の台頭もあって、それまでの3年間以上に厳しい戦いが続き、ついに1部の最下位となって、入替戦でも天理大に敗れ、残念ながら1部の座を明け渡すことになった。この2年後の昭和51年度には京大サッカー部として三度目の1部復帰を果たしてくれるが、この頃から、新興の他大学との関係では相対的により厳しい状況が、すでに生まれつつあったと言えるのであろうか。

しかし、最近の現役を見ていると、我々の時代と比べて、サッカーには真面目に取り組んでいるように思えるが、どちらかと言うと、ひ弱さを感じる上に、他チームにどうやって勝つかという研究が足りないように思える。こうした点を含め、現在の京大サッカー部のあり方では、主将、副将のリーダーシップが不可欠である。そして、個人能力やシステムもさることながら、課題の根本は、個人レベルにおいてもチームとしても、その基本と精神力抜きではあり得ないことを自覚し、常に実現可能な高い目標を掲げて、日々の練習に取り組んでくれる事を切に念願するものである。

昭和50年度年間実施スケジュール



昭和50年度主将 永井利明

目標：2部優勝1部復帰

昭和49年11月30日	49年度スケジュール終了(2部転落)
12月	OFF 自主トレーニング。ただし週1回は全体トレーニング
昭和50年1月16日	練習開始(週3日)基礎技術及び体力トレーニング中心
2月24日	本格練習開始
2月26～3月2日	第1次春合宿(農学部G)
3月24～30日	第2次春合宿(宇治G)
3月22～4月27日	京都学生リーグ(第6位)

4月19～5月17日	関西学生選手権(2部リーグ優勝、決勝トーナメント1回戦敗退)
6月8日	同志社大学定期戦(2-2で分)at農学部G
6月29日	東京大学定期戦(1-2で負)at東大御殿下G
7月6～20日	天皇杯京都府予選(第4位)
7月15～18日	国立大学定期戦(優勝)at愛知トヨタスポーツセンター
8月1～10日	第1次夏合宿(宇治G)
8月25～9月1日	第2次夏合宿(宇治G)
8月28～29日	近畿国立大学体育大会(2回戦敗退)
9月14～10月26日	関西学生リーグ(2部リーグ優勝)
11月22、24日	1部2部入替戦(2戦2敗にて1部復帰ならず)

<終了>

<部の構成>

体制： 監督 恒藤 武
 主将 永井利明
 副将 伊藤 顕
 梅田邦夫
 主務 田路厚洋

運営方法：主将を中心に副将及び4回生ですべて決定
 (練習計画、内容、試合出場選手等)

構成： *夏合宿時
 4回生 永井 伊藤 和田 佐藤 田路
 3回生 梅田 松岡 田中 西田 藤原 藤多 芝田 山本
 2回生 宮本 北原 谷野 川本 池添 杉田 中村 本藤
 吉村 大樫 塩見
 1回生 高岡 坂口 田中 佐藤 橋本 勝山 松村 稲村

<戦法、戦術>

根本先輩が残してくれた「考えるサッカーPart I 及びII」が基本

4-3-3システム(スーパーシステム)

守備はマンツーマンでのマーキング

FWから追い込んでボールを奪う(ゾーンプレスの前の段階か?)

攻撃は逆サイドのオープンスペースの活用と左サイドの田中のスピードを生かすこと

<一言>

4年間続いた1部リーグから2部に転落し、その屈辱をはらそうと「2部優勝1部復帰」を目標に上記のようなハードなスケジュールをこなしました。この1年間は、相当独断的に皆に無理を言いましたが、他の4回生の協力があり、下級生もよくついてきてくれたと思っています。1年間やれるだけのことはやったという思いがありますが、2部リーグで優勝はしたものの入替戦で関学に完敗したのはやはり心残りとなっています。

サッカー漬けの大学生活でしたが、先輩の方々のおかげで3年間を1部リーグでプレー

でき(やはり芝生の真剣勝負はいい)、いろんなポジションを経験し、1部復帰はならなかったものの、ある程度満足できる4年間だったと思っています。1回生の時から練習中だけでなく練習後も森先輩や巖本先輩達と夜遅くまで京大のサッカーはどうあるべきか教えられ議論していました。基本的には根本先輩の教えをもとにいかにして1部でやっていくか、技術が上のチームを相手にいかにして負けないサッカーをするか、そのためには何をやらねばならないか等明けても暮れてもサッカーの話ばかりでした。他の大学のように、監督が指示したことしかできない管理サッカーとは違って常に自分たちで考えてサッカーをやっていたと自負しています。もちろん他のチームと個人技術の差はありましたが、それを読みと当たりの強さでカバーし、負けないサッカーを目指していました。経験ある人材確保の難しさと専属コーチもないという他の大学からは考えられない不利な状況の中で関西トップの1部リーグでやってきたという事は自分に自信を与えてくれ、また誇りに思っています。

一つ記録に残さねばならないのは、同期のGK伊藤氏が2回生の春に関西学生選抜に選ばれたことです。1回生の秋のリーグ戦での活躍が認められてのことですが、反応とキャッチングは抜群でしたが、実はセービングができないGKでした。彼は高校時代は野球部で、大学からサッカーをはじめたわけですが、その運動センスとショートだったからゴロを捕るのがうまいだろうとGKに抜擢されました。そのころの新入生は3分の1以上がサッカー未経験者でしたが、その中で1部で通用するプレーヤーが育つというのも京大の強さだったと思います。

卒業して20年、今もサッカーから離れられずに40歳以上の中年おっさんを集めてサッカーを楽しんでいます。これができるのも、大学4年間の真剣勝負の賜物だと思っています。現役の諸君は常に1部リーグを目指して勝負にこだわるるサッカーを真剣にやっていただきたい。今しかできないのだから。



第26回東大定期戦

昭和50年6月29日(東大御殿下グラウンド)

得点力と1部リーグへのこだわり



昭和51年度主将 梅田 邦夫

昭和51年度には、二部リーグに転落して二年目の年でした。当時、特に意識していたことは、(1)仮に何年間も一部リーグに復帰できなければ、ずるずると弱体化し、その内の一部リーグでプレーすることがどうでもよくなり、それが自分たちの手が届くものではなく、単なる憧れと思うようになるのではないか。(2)そうならないためには、やはり後輩たちに一部リーグでしか味わえない感激と厳しさを経験してもらい、頑張れば自分たちだって一部リーグでやれることを実感してもらう必要がある。一部リーグの経験者がまだ主力に残っている今年に何としても復帰しなくてはならないということでした。この思いは、私だけでなく当時の四年生、三年生全員が強く持っており、チームとして固い心の一致がありました。また、前年の秋には入替戦までいきながら関学に敗れていただけに、主力メンバー全員はそういう思いと同時にもう一步頑張れば必ず一部に上がれるとも感じていました。その年の結果は、幸運にも秋のリーグ戦で優勝し、一部復帰を実現できました。また、思いもよらないことでしたが、春の関西学生選手権では、一部リーグの京産大、大経大に逆転勝ち。準決勝で大体大に惜敗したものの、三位決定戦では前年入替戦で負けた関学に完勝できました。選手権で優勝した同志社との定期戦も押されながらも引き分けでした。この結果、自分たちも一部リーグのチームと互角に戦えるということがはっきりと判り、全員にとって大きな自信になりましたし、秋に向けて部の雰囲気も格段と明るくなりました。

当時、自分たちは何故あれほど一部リーグにこだわったのか。各人の考えは様々であったと思いますが、自分自身を振り返ってみますと、(1)毎日多くの時間をさいてサッカーをやるからには、芝生の上で少しでもレベルの高い試合やプレーができるようになりたかった。一部リーグで味わうことのできた感激や満足感等は二部でのそれとはあまりに大きな隔たりがあった。(2)高校時代に京大が一部リーグの強豪と接戦を演じているという新聞記事を読み、もし京大に入学できたらサッカー部に入って、その一人としてプレーしてみたいとの夢を持った。幸いにして大学に何とか合格でき、サッカーでもその夢を実現させてもらった。そのことに関連し自分としては、一部リーグで活躍できるサッカー部を築いた諸先輩に対する感謝とともに、引き続き夢を与えることのできるサッカー部として後輩に引き継ぎたいとの気持ちも強かったと思います。

当時のチームを考えますと、一部リーグ時代の負けない為のサッカーがまだ生きており、ディフェンスでは粘りと強いあたりのプレー、的確なカバーリングを目標にした練習をよくやりました。また、二部で確実に優勝するためには得点力をあげることがチームの大きな課題でしたが、フォワードの田中君、中盤の藤原君（両君とも副主将、攻撃面は彼らがやってくれた）を中心に、六月頃には大学のどんな強豪チームと対戦しても一点以上は必ず取れるという安心感が持てるようになっていました。従って、ディフェンスが頑張れば最少失点に抑えることができれば、我々は勝つことはあっても負けることはないとの気持ちで試合に臨むことができました。色々なハンデを背負っている京大サッカー部に

とって一番大切なことは、目標を明確にし、その為になにをすべきかについてみんなで知恵をだしあうことだと思います。現役諸兄の悔いなき大学生活と充実したサッカーへの取り組みを期待します。

常に1部を目指せ！



昭和51年度副将 田中徹也

京都大学蹴球部の創立70周年を心からお慶び致します。私は現役の時に50周年を経験しましたが、当時はピンと来なかった伝統の重みを感じています。この20年をとっても1部昇格・3部落ち・2部昇格を繰り返していると言っても過言ではなく、またそれが京大の持ち味だと思います。その年の戦力により結果が左右されるのは仕方ないが、1部を目指す気持ちだけは伝承してもらいたい。そんな私の思いを自分の経験を基に述べたいと思います。

私の4年間は、波乱万丈、地獄と天国を味わった、ドラマチックなものでした。

- 1 回生：左右のキックと駿足が認められ、秋のリーグ戦からレギュラーに抜擢され、無我夢中の中、神戸中央Gで得点も上げ、1部6位残留、バラ色のオフ。
- 2 回生：フォワードのリーダーとなるが、得点力の無さが原因で秋のリーグ戦で最下位になり、入替戦で天理大に完敗し2部降格。
- 3 回生：前年までの1部の意地もあり秋のリーグ戦で優勝し、勝算有りと言った入替戦で関学の伝統の前に完敗。
- 4 回生：運も味方し、ここ1番の試合にチームがトップコンディションで臨み、秋のリーグ戦で優勝。1部へ復帰。

特に4回生の1年間は、何年経っても忘れられない年で少し詳しく述べたい。

春の選手権では1部の強豪を撃破し3位決定戦で前年完敗した関学に完勝し3位になりマスコミの注目も浴びた。続く同志社戦は、選手権の1位と3位の戦いと言うことで注目される中で引き分けた。そして東大戦を迎えた。フリーキックのスペシャルプレーも出て3対1で完勝。13年ぶりの勝利に農学部は興奮のるつぼとなった。このレセプションの席上で「本日の勝利に奢ること無く、我々の最終目標である秋のリーグ優勝・1部昇格を果たす」と明言した事を鮮明に覚えています。

秋のリーグは、予想通り関大との一騎打ちであった。前年に関西リーグ始まって以来初の2部落ちとなった関大のOB挙げての応援は相当なもので、この年より2部の1位が自動入れ替えになるシステムが変わったのは関大の陰謀でないかと思ったほどだった。優勝への道乗りは険しかった。追手門大戦では、後半途中まで0対2とリードされたが、選手交代で流れが変わり3対2で逆転勝ちした。京大6戦全勝、関大5勝1分で決戦に臨む。

この試合は、当時の1部上位校同士の試合と比べても遜色のないレベルの高い試合だったと思う。引き分けでも優勝と言うのがかえって堅さになった京大に対して、死に物狂いの関大が先取点を取り押し気味でハーフタイムを迎えた。この時私は、自分にこう言い聞かせた。「このまま負けていいのか。これまでの4年間は何だったのか。残り45分で全てが

決まる。最後まで諦めるな」

そして迎えた後半。そんな私の思いに反して10分頃、決定的と思われる2点目を取られたのだ。しかし私を初めチームは不思議なくらい冷静だった。とにかく自分のプレーをしよう。京大の攻めをしよう。そして30分過ぎ、左タッチライン沿いにマークをかわした私は、更にゴールライン沿いに切り込みディフェンスを2人抜きキーパーと1対1になった。しかし角度は無い。その瞬間、右後方から練習通りに攻め上がったパーマ（宮本）の動きが私には手に取るように判っていた。アイコンタクトである。迷うこと無く彼へ「パーマ決めろ！」と言いながらパス。彼は、サイドキックで十分なのにインステップでゴールネットをつきさす。このプレーが流れを変えた。2点目も左サイドから崩しセンタリング、右ウイングの石原が1度にかぶったが粘ってセンタリング。ゴール前で両軍の選手がダンゴ状態になっているのを嘲笑うかのようにジャ原（藤原）のゆるーいシュートがコース良く入った。その後の5分間、関大の猛攻を凌ぎタイムアップ。1部昇格が決まった。この瞬間を求め4年間苦しい練習にも耐えたのだ。関大グラウンドに多数のOBを交えて蹴球部歌がこだました。

私はこの年のチームを誇りに思うと同時に、このチームの中に先輩の姿がダブって見える。この年の成果は先輩方の遺産である。2回生・3回生の時に実らなかった努力が決して無駄ではなく、少し時期が遅れて結実したのだと思う。

この当時も今も京大の周りの他校の状況は同じだと思う。当時は、関関の常勝時代が終わり大商大が台頭。S47～50年にかけて、京産大・大体大・天理大と次々と有力校が1部に昇格。国立大には苦しい時期だった。技術面で数段劣る京大を支えていたのは「考えるサッカー」と受験勉強で培った集中力だと思う。「粘り強いディフェンスと効率のよい攻め」。この命題に対してそれぞれの年のメンバーに最適なフォーメーションを追求していた。また、同じサッカーをするなら芝生で出来る・日の当たる1部リーグ。大商大・同大をやっつけたい。この精神的な共通の意志統一のもとにチームは一丸となっていた。

京大の場合、毎年安定したチーム力を維持するのは困難だが、基本理念はしっかり傳承し、常に2～3年先を考えたチーム編成が重要である。現役諸君には、常に上を目指したチーム作りを心掛け、充実した4年間を過ごされる事を期待します。

昭和51年5月、関西学生サッカー選手権決勝トーナメント2回戦で大経大を2-1で破り、ベスト4進出を決めて!!



忘れられない勝利 「幻の全国大会出場」

田中徹也

忘れられない勝利、それは昭和51年6月6日、万博競技場で行われた第5回関西学生サッカー選手権大会の3位決定戦で、宿敵関学を2対1で破った試合である。

この選手権大会では、京大は2部でありながら、1部の京教大、大経大を連破し、準決勝では大体大に1対2で惜敗したものの、3位決定戦に臨む我々のコンディションは絶好調であった。対戦する相手は、1回戦で優勝候補の大商大を破って勢いに乗っている強敵関学である。

関学には1年前の入替戦で0対5で完敗していたので、雪辱を期する気持ちは強く、必勝を誓ってこの試合に臨んだ。試合内容は、京大が力強くスピードのある攻撃で関学を圧倒し、終了直前に1点を返されたものの、危なげない内容で、2対1で勝利した。

この勝利はマスコミにも大きく報道され、我々の自信となり、その後の東大戦では13年ぶりの勝利、そして、秋のリーグでの1部復帰へと続いたのである。

実は、この大会は翌昭和52年からは、新しく始まった“総理大臣杯全国大学サッカートーナメント”の予選を兼ねることになった。



従って、関西学生サッカー選手権の3位までの上位3チームが“総理大臣杯全国大学サッカートーナメント”への出場権を手にするわけである。

関西学生サッカー選手権3位、そして全国大会への出場は、1年の違いで実現しなかった。誠に残念!!

昭和51年6月6日、関西学生サッカー選手権の3位決定戦、2-1で関学を破り、京大3位。
写真は、ドリブルで切り込むLW田中徹也。「チャンスメーカーとして良い形をつくった」と『イレブン』に掲載された。

体で覚えたスライディング

昭和52年卒業 西田哲郎

私のポジションはフルバックであったため、敵のシュートやセンタリングに対し、スライディングをする機会が多かった。入部したての頃は、特に体力や敏捷性に欠けていたため、捨て身ですべらなくても取れるはずのボールにも、飛び込まざるを得なかった。

それも、練習試合となると、つい力が入りスライディングの回数が増え、「まんじゅう」を作るはめになる。大腿部側面にできたサンドペーパーでこすったような煎餅大の傷は、一番使う筋肉の表面にあるため治りにくかった。かさぶたが小さくなってきた頃にまたス

ライディングするため、傷口の肉が盛り上がった。

しかし、「蛙跳び」「ボール引き」「タックルマシン」の反復練習が効を奏し、スライディングをしても腕で支えられるようになり、「まんじゅう」を作らずに済むようになった。この時は本当に一つの壁を越えたという感動があった。

今も右足の傷跡は勲章のように残っている。

身の程知らずの評論家



昭和52年卒業 藤多 英夫

巷のスポーツファンというものは、テレビを見ながら、兎角、無責任に自分に出来ないことを偉そうに言うものですが、私もその例に洩れず、現役時代には飲み屋で、低迷していた日本リーグの選手のプレーに好き勝手なことを言っていたものでした。当時、日本代表であった、三菱重工の右ウイング高田選手も酒の席で話題に上った一人で、「周りを見んと一人で前ばかり走っとる」とか「ボールひとつよう止めへんで何が代表や」とか、ボロクソ言っていました。

ところが、幸運にも三菱重工と練習試合をする機会に恵まれ、かの高田選手にマークでつくことになりました。私はこのときとばかりに彼にギャフンと言わしてやろうと、大それた思いで試合にのぞみました。

私の意気込みといえば、それはものすごいものでしたが、結果は、試合の前半、高田選手に5～6度、ハーフやボックスからボールが出て、その度に猛然とタックルにいったものの、軽くかわされ、彼の体に近づくこともできませんでした。後半はベンチに下げられ、11-0という記録的な大敗となった試合を口惜しい思いで見っていました。

その時、己の身の程を知った筈の私ですが、現在も懲りずに、テレビを見ながら「福田は全然センスがない」とか「武田はせこいことばかりしてるからアカン」とか、反省も忘れて言っております。



昭和51年晩秋、シーズンを一部復帰で終え、嵐山で飯ごう炊さん。

夕日は涙の向こうに



昭和52年度主務 吉村玄浩

グラウンドの南、スポーツ会館2階大部屋の北側廊下からは、木立ちの向こうに「妙法」の文字。宮川商会のジュースと食堂奥のテレビが1回生の合宿の楽しみで、泥だらけのパンツやストッキングを洗濯機で洗い、皿や茶碗の山を片付けることから「おとな」への一歩が始まったような気がする。

部屋に入ると右にボールの山、石灰の袋、ゴールネットとライン引き。左は上級生しか使えないドアの壊れた木のロッカーの列。真ん中に、かしいだ大きな木の机、スコアブック。どこも鞆でいっぱい、腰掛ける場所もなく、足もとに散乱した古靴の山。頭上を交差するロープにはすえた匂いのシャツ。

グラウンドの北西東は腰の高さまでの雑草の茂み。新入生歓迎コンパの後に行方不明者がでたときは、どこぞに倒れ込んではいないかと探し回った程だった。アメリカンが強くなり、部員も多くなるにつれ、次第に草むらは踏まれて短くなっていった。

はやりの漫画は「嗚呼花の応援団」。蹴られてうずくまれば、「役者やのう」と声をとんだ。同志社との定期戦に応援団がきたことがある。女リーダーのこわそうだったこと。「よごれてる」と手袋をはしと地面に投げれば、真っ白なのを両手で捧げた下級生が、片膝付いて渡していた。ドンガン太鼓をたたかれ、フレーフレーと叫ばれると、指示の声は聞こえなくなり、混乱のうち試合は1対1の引き分けに終わった。

両サイドのハーフウェーラインから20メートル程と、ペナルティーエリアの前が窪んでいて、雨の日は水たまりができ、ボールが止まった。全員でコースを切ってサイドに追い込みつぶす。小人数のカウンターでなんとか1点もぎとる。1部リーグのなかで、窮鼠が猫を噛むための練習が地面を削った。時代は4・3・3から4・4・2への移行期。強い所ほどサイドのスペースを利用した攻撃を試みていた。必然、強いチームの両ウイングは守備に忙殺され、そして自然に3・5・2へと変化した。

1年前に先輩が引っ張りあげてくれた1部リーグを何とか7位で終え、自動降格は逃れた4回生の入替戦。第1戦は引き分けで、2戦目も引き分けたかと思われた再延長後半夕暮れ間近の万博グラウンド。脚の止まった相手ディフェンスをかいぐるようにシュートが入り、1部残留が決まった。ホイッスル、胴上げ、Go, KIU。夕日は涙の向こうにくしゃくしゃになって沈んでいった。

今年の夏の東大戦で訪れたグラウンドは平らで広く、雑草もなく。けれど、着替えに入った部室は相変わらずで、用具のあふれた通路の前の土の坂だけが、昔に比べ、高くなだらかになっていた。グラウンドから部室へと毎日泥を運び続ける営みの今も続いていることが、なんとなくうれしくて一歩踏みしめてから地面に降りた。

もう一つの昭和52年度年代記



昭和53年卒業 中村 英一

年代記といっても、思い出せるものは断片的なエピソードしかありません。我々の時代にはこんな出来事があった。良くも悪しくもそういう時代だったなあと思い起こしながら書いてみました。実名で書くと差し障りのある話題もあるので、イニシャルで表現しましたが、必ずしも頭文字とは限りません。

① S君の不可解な自主的ランニング事件

1回生の時S君が無断で練習を休んだことがありました。てっきり病気で寝込んでいると心配した私は翌朝バナナを持って彼の下宿に見舞いに行きました。ところが、部屋の扉を少しだけしか開けずに対応した彼は病気といった感じではなく、どうやら4畳半の室内にはだれかがいる様子なのです。バナナを渡した私は事情を半ば察して帰ったのです。それから数日経って彼は、「ある人と結婚することにした。サッカー部も退部することにした」と宣言し皆を驚かせました。ところがそれからまた数週間経ったある日、いつものようにグラウンドに行くと、練習の前に自主的に走っている奴がいました。我々の時代はそれが罰則だった訳ですが、彼はまったく悪びれたところ無く、「またやることにしたわ」「結婚するのんやめてん」と言って再び我々を驚かせたのです。本当に立ち直りの早い奴でした。その後、在学中にもう一度彼から「結婚するねん」（もちろん他の女性と）と聞かされたことがありますが、誰も彼のいうことを本気にするものはおりませんでした。

② P君とJさん、頭にホータイ事件

春のリーグ戦の最中のことでした。ある日練習に行ってみると、P君とJさんが頭に包帯を巻いて練習を見学しています。本人等によると、自転車の二人乗りをしていて転んだという話でした。ところが、これが真っ赤な偽りで、かなり後になって聞かされた真相はというと、酔っ払って怖いお兄さんと喧嘩(?)して怪我をし揚げ句の果てに警察のお世話になったとのことでありました。このP君にはこの他にも、酒にまつわる数々の武勇伝(?)があり、我々の学年を代表する酒乱のY君が羽交い締めしたタクシーの運転手(さん)を殴ったという後一步で手が後ろに回りそうな話もあったと聞いております。ただ、彼のために弁護しておく、この様な傾向は決して彼だけのものではなく、当時の諸先輩の伝統的な生活様式を正しく次の世代に継承しようとする一連の行為だったともいえると思います。

③ 二つ鳴いた大三元に放牌する奴がいるか〜事件

我々の同期には唯一人さんづけで呼ばれていたKさんという男がおりました。この男、体質的にアルコールがまったく駄目、女にはまったくもてないということもあって、無類のマージャン好きでありました。どれくらいマージャンが好きだったかということ、1回生の時、練習で脳震盪を起こして入院した時に他の記憶がまったく無くなっていたにも関わらず、マージャンの点の数え方だけは答えられて、見舞いにいった一同が安心したというエピソードがあったほどでした。

ところがこのKさん、マージャン大好きなのではありますが、腕の方はというといささか？

でありまして、ここで紹介するのはそれを裏付ける話のひとつです。当時は年1回「サッカー部マージャン大会」なるものが開催されておりました。勉強もせずほとんど毎日マージャンばかりしていた人が多かった(?)ため、サッカー部のレベルはなかなかのものでした。歴代の優勝者も錚々たるメンバーで、この大会で優勝することは大変な名誉とされていたのです。話は我々が3回生の時の準決勝でのことです。Kさんは、4回生2人と2回生1人とで卓を囲んでおりました。戦局は終盤で、敗色濃厚だった2回生のI君が發・中の2つを鳴いて大三元を聴牌っている様子、白は河に1枚出ているだけでした。残りのツモ数も少ないこともあり、4回生2人はほぼベタオリ状態のところ、Kさんは突然2枚目の白を強打、大三元を振り込んでしまいました。「おまえなにすねん」の怒号のなか、彼いわく「だってハネ満てんぱったんだもん」。この煽りを受けて、戦意喪失した優勝候補の4回生が敗退、波に乗ったダークホースのI君があれよあれよという間に優勝してしまったのです。この時からマージャン大会の名誉は地に落ちてしまいました。恐るべしKさん。

④ 北白川明け方の四暗刻単騎事件

当時、麻雀屋(さくら荘)は夜の11時に閉店となり、それ以降の延長戦は誰かの下宿でおこなわれるのが常でした。我々の場合は、比較的皆の下宿が集中していた北白川にあり、大家さんは別棟、隣室の下宿人は文句をいわない、本人がきれい好きで部屋が比較的清潔という四拍子揃ったSくんの下宿がもっぱら徹マン会場となっておりました。

その日のメンバーはSくん、John、私、そしてB坊でした。Sくんは自他共に認める同期実力No. 1、ハツトリが利き、かつ明け方に滅法強く(勝つまでやめない?)、皆から恐れられておりました。Johnは技巧派、キャリア・技術共に申し分なく、かつ研究熱心(愛読書:麻雀放浪記)でした。ただ、やや気の弱いところが弱点で、特にSくんのハツトリに弱く、Sくんを天敵としておりました。B坊はサッカーと同様に猪突猛進型、ひたすら己の手牌のみを見つめて聴牌即立置というタイプでした。いつものように明け方近くになって皆が疲れだしSくんの一人舞台となりつつあった時のことでした。たしか裏の3局(当時は東東回しだった)ぐらいのこと、終盤に差し掛かった親のB坊の鼻息が異常に荒くなってきました。これはいつもの彼の癖で、いい手が入るとフガフガ言い出すのが、この時は特別激しかったように思います。Sくんと私は「これはやばい」とB坊の安全牌を選んで打っていましたが、Johnはまったく気付かぬ様子、初牌の一索をスンナリと通してしまいました。「ウグググ」と言いながら、その後B坊は手牌の中から一索を切り出してきました。そして、残り数巡というところで「自撲ったぞ」(フガフガフガ……)と言いながら倒した手牌が東単騎の四暗刻だったのです。親の2倍役満「2万4千トーシ!」となってしまいました。「John、お前が振っとったらまるうおさまったんや……」

⑤ B坊、日の丸観戦事件

当時B坊には、我が学年にしては珍しく恋人がおりました。彼女はB坊の試合を見に時々京都まで来たものでしたが、ある時B坊がたまたま怪我をして試合にでられないことがありました。翌日の試合を心配する必要のないB坊は彼女との逢瀬をぞんぶんに楽しもうと思いましたが、生憎なことに彼女は生憎なことだったとのことです。ところがどっこい、そんなことにひるむようなB坊ではありません、ひるまず初志貫徹、猪突猛進、満願成就したそうです。翌日は彼女を伴って我々の試合を仲良く観戦しに来ました。試合前にその話を具体的に聞かされた我々は、試合に集中できず大変困りました。

⑥ モビーディック「せこいことすんなよ〜」事件

モビーディックと呼ばれた男がおりました。クラブは途中でやめてしまったのですが、色白で大柄な彼は1回生の夏合宿の際にフリ〇〇で宇治の合宿所の前をブラブラして（させて）いて皆からこの異名を頂戴してしまいました。

同じく1回生の東大戦の時、当時はミニ周遊券というものを使って遠征していた訳で、この切符は夜行バス（ドリーム号）か、夜行列車（銀河）を使う限り追加料金のいらぬもので、もちろん皆そのどちらかを利用していたものでした。我々1回生にとっては初めてに近い東京、特に行儀の良さという大阪にはないカルチャーになじめなかったことがこの事件の発端でした。八重州駅前で時間つぶしのマージャンをして、その大阪弁丸出しを周囲の客に存分に笑われた後、我々は東京駅のホームで銀河を待ちました。ご存じのように大阪では普通、電車を待つときには列を作りません。ところが東京ではそうではないのです。それを知らない我々は何となく乗車口付近にたむろし、列車が着くや否や、我先に乗り込もうとしました。先頭をきったモビーディックは素早く乗り込んでしまったのですが、それに続こうとした我々は少し年上の男の人に大きな声で怒鳴られてしまい、その場にフリーズしてしまったのです。あの時の言葉は今も耳に残っています。「せこいことすんなやー、せこいこと！」（大阪弁やったんかなー？）。でも結果はモビーディックのおかげで大阪まで座って帰ることができ、負けた東大戦の仇を打ったような気分でした。東京もんには負けへんでー！

⑦ Oっさんのゴルゴ13

Oっさんはサッカーに関しては大変厳しいキャプテンでした。我々が1回生の春合宿の時のこと、激しい練習が終わってスポーツ会館でくつろいでいた時、Oっさんは難しい顔をして何かの本を読んでいた。いわく、「やっぱりゴルゴ13は難しいなあ。これ読んだらごっつい疲れるわ。あんまり読まんとこ」。余りのショックで我々1回生は言葉を失ってしまいました。「こんなクラブにおいて卒業できるやろか？」と思ったのは私だけでは無かったはず。しかし、その日を境になんとなくOっさんに冗談を言えるようになってきたことを考えると、あれは計算された演技だったと言う可能性もまったくのゼロでは無いと今になっては思える出来事でした。

ずいぶんと冗漫な年代記になってしまいました。なにぶんにも卒業してから18年近く経っている訳で、エピソードもかなり曖昧なものとなりつつあります。記憶の不確かな部分は同期に確かめることよりも、こっちのほうが面白かろうということの基本姿勢として書きました。だから奥さん、もし奥さんがこれを読まれて思い当たる点がもしあったとしてもそれはほとんどフィクションなのです、あなたの御主人は決してそんな人ではありません。この男（私）は昔から針小棒大、一を百にして話すことが得意な奴なんです。そして、かくいう私にも家内には決して話すことの出来ない「Aちゃん、夏合宿でタコの食えなかった事件」があるのですから。

やっぱり1部リーグがええで！



昭和53年度副将 田尻 守

私が入学、入部したのは昭和50年で、京大サッカー部はその前年に関西学生サッカーリーグの1部リーグから2部リーグに（入替戦で天理大学に敗退した為）降格していました。当時の関西学生サッカーリーグは1部リーグ、2部リーグともブロックは1つだけで、おのおの8校（8チーム）で構成されていました。そして、1部リーグ下位2チーム（7位、8位、）と2部リーグ上位2チーム（1位、2位）が入替戦を行い、その勝敗によって降格、昇格を決定していました。そのころの、1部リーグの有力校は、大阪商業大学、大阪体育大学、同志社大学などで、実力的には他校と開きがありました。1部リーグ下位から2部リーグ上位に位置するチームとして、天理大学、関西大学、京都教育大学、大阪大学などがあり、京大もこの中に位置していました。

入部したばかりの初々しい私にとって“1部リーグ復帰!!”をお題目のように唱え、目標に猛進する上級生の姿は、時には奇異に、時には滑稽に思えました。（当時の上級生の方々ゴメンナサイ）。正直に言って、1回生の間はこの“1部リーグ復帰”の持つ意味、重要性がほとんど理解できませんでした。しかし、2回生の途中から、時々試合に出してもらえるようになり、関西学生選手権で当時1部リーグ所属の大阪経済大学、大阪体育大学との試合にも出場、そして、関西学生選手権3位となりました。今ほどサッカーがマスコミに取り上げられなかった当時、京大の善戦、好成績は新聞、雑誌にかなり掲載されました。「新聞や雑誌に自分の名前がちょっとでも載るのはええもんや」。このころから私は「やっぱり、1部リーグがええで」と若干不純ながら思い始めました。

そして、2回生の時の秋季リーグに優勝、関西大学との激戦を乗り越え、1部リーグに昇格しました。その後、3、4回生は1部リーグで過ごし、4回生の時の秋季リーグ終了後、天理大学との入替戦で敗退し、2部リーグへ降格しました。2部リーグ降格のA級戦犯の私が言うのもなんですが、1部リーグに所属しているのはええもんです。その当時でさえ、試合結果が新聞の片隅に掲載され、試合翌日に授業に出席すると、クラスメイトから前日の試合について尋ねられたりしました。まして、今ならテレビにも取り上げられるではありませんか。不純な動機ほどその影響力は大きいものです。現役諸君、1部リーグ目指してがんばれ！



昭和53年度1部リーグ戦（韋グラウンド）

戦術の成功と戦略の失敗

昭和54年卒業 石原 孝

試合終了の笛が鳴り、2部降格が決まった。対天理大の入替戦2試合の結果は、いずれも1対0の敗戦だった。試合は我々が、七部通り押していたように思う。逆襲一発の失点だった。

リーグ戦は徹底した守備戦術を取った。守って守り抜いた結果は1勝2分4敗で、勝ち点4が3チームいたが、得失点差で7位だった。前の年まで入替戦は、引き分け1部残留だったものが、その年から引き分けはなしとなった。それで入替戦は攻めに出た。しかし守備偏重の戦術を長く取っていたため、攻守のバランスを欠いていた。リーグ戦で我々が行っていた戦術で我々は天理大に負けた。

決め手としてのインテリジェンスを



昭和54年度主将 藤井 慶治郎

私が主将を務めたS54シーズンは、前年度に一部から二部へ落ちていたので、チームの最終（結果）目的は、当然ながら“一部復帰”ということでした。当時の二部リーグは、8チームずつA・B2つのブロックに分かれ、各ブロック上位2チームが、最後に相對戦して（1位）一部自動昇格、（2・3位）入替戦出場を決めるというシステムでした。我がチームの戦力を他チームと比較して、ブロックで2位以内に入ることは、それ程むつかしいことではないと思われました。が、結果は、序盤・中盤戦は順当に勝つも、終盤戦に於いて近大戦で痛い黒星を喫し、続く大教大戦に引き分け、最終戦の京教大には惨敗し、ブロック3位という周囲の期待を裏切る不本意な戦績に終わってしまいました。せめて、入替戦に出場できれば、例え一部復帰はできなくても次年度以降に何かは残せると思っていただけに、私自身満足なプレーが出来ず、終盤戦でチームを持ちこたえさせられなかったことに主将として大きな責任を感じています。

以上、秋のリーグ戦について簡単に振り返りましたが、当時のチームの実質的な意味においての課題としては以下の様なものがあったと思われまます。

(一) 前年度は一部において、“負けないサッカー”に主眼が置かれたと思いますが、二部では“勝たなければならないサッカー”が要求されますので、攻守共にバランスのとれたチーム力、特に「中盤」を如何に強化するかが大きな課題でした。

(二) 部員数が、以前に比べ多くなってきており、当然試合に出たくても出られない人数は増え、以上の状況に於いて、如何に全員の緊張感を持続しつつ、チームを運営していくのか。

(三) 年間スケジュールの中で、夏の過ごし方（宇治での夏合宿とそれに続く東京遠征）を

そのまま踏襲するのか。(結果は、東京遠征を兼ねて千葉の検見川で合宿を張りました)
 (四)個人的条件として、私自身フォワードの経験しか持たず、特に守備面又中盤面で主体性を持ってチームを統率できるのか。(結局、このことが出来ず、低成績に終わってしまった大きな原因であったと思っています)

以上の諸課題に関して(四)以外については、明確な評価及び解答が出せず、今だに自分自身草サッカーで現役を続け、又将来地元でサッカークラブを運営したいと思っている中で、考えたりしている次第です。

毎年度の報告を頂き、現役の成績の浮き沈みは激しいみたいです。大学サッカーという性格上、周囲からどれだけ現役生に要求できるかは限界のあるところと思いますが、サッカーは、他のスポーツ以上に、決め手としてのインテリジェンス(状況に対しての認識・適応・想像力etc)が強く要求され、京大としてはその潜在的可能性がかなり期待できるのではと思います。以上、かなり主観的なことにお許しを頂き、京大でサッカーができたことに深く感謝し、京大サッカーの発展を願っています。

忘れ得ぬゴール



昭和55年卒業 西浦 優

あれは昭和53年の秋のリーグ戦のことだったと思う。その前の年、主将の宮本 彰さん達のがんばりで一部リーグ残留が決まり、翌年の秋のリーグは一部でやることができた。私は3回生だった。1戦2戦で大商大、大体大に実力負けし、第3戦の同志社戦だった。場所は韮グラウンドだったと思う。コーナーキックだったかどうかは記憶が定かでないが、右ウイングの須山から上がってきたボールは私の頭ぐらいの高さで敵のプレーヤーの間を通り抜けてきた。私は右足を高く上げインサイドであわせた。結局試合は強敵同志社に1-0で勝ったのであるが、ゴールを決めた後キーパーの大石までがとんできて私に抱きついたので覚えている。入替戦で天理大に負け一部は落ちたが、私の忘れられないゴールである。

メンバーに合った システム・戦略と意識の高揚



昭和55年度主将 大石 雄一

79年11月9日新チームは始動した。私達の世代は幸いにも1、2回生で1部リーグを経験し3、4回生では2部リーグで戦った。チームの目標は1部リーグ昇格であった。長井監督のご指導の元、チームの思想統一を図りながら冬場は基本技術と対敵動作の鍛練をした。前年の主力メンバーの大半が残っていたためチームに自信がありシステムも4・3・3を踏襲した。しかし現実には厳しかった。勝ちを狙って試合に臨むのだからなかなか点が取れない。守備のバランスもしばしば崩れた。OB諸兄からも期待の大

きさに比例してか厳しい楯が飛ぶ。

80年3月、ここで原点に戻ってチーム戦略を見直すことにした。課題①：CFとSWが力不足。課題②：勝利の方程式が見えていない。言い換えれば1部リーグ時代の「負けない」サッカーから2部での貪欲に「点を取って勝つ」サッカーへの意識転換ができていない。課題③：得点力のアップ。攻撃参加人数を増やし中盤を支配する。これらの課題をクリアし、かつチームの問題意識を高めるため4・3・3からWM(3・4・3)システムに変えることに決めた。システムに合わせて人を配置するより今のメンバーが仕事をしやすいシステムを選んだのであった。このWMを可能にしたのは、中盤の人材が豊富だったことと3バック+GKで最終ラインが機能できたことであつた。ただシステムを変えただけでは何も向上しない。特に中盤の底に一枚加わったりベロとCFにはキープレーヤーとしていろいろ注文が付いた。最初はぎこちなかつたWMシステムだが、チーム全員が自分のこととして問題意識を持ち次第に調子は上向いていった。

7月の東大戦では前半PKで先行されたものの、左ウイングの水倉がこれまで見たこともない見事なオーバーヘッドキックを決め同点、その勢いで3-1で試合終了。この結果東大戦では78、79、80年と3連勝を飾り貴重な思い出になった。

秋の関西学生2部リーグでは優勝こそ逃したが3位に入り、入替戦の切符を手にした。この時点でチーム戦略を見直すべきか、ここまで戦つたWMにこだわるか一つのターニングポイントだつた。入替戦の相手ははっきり言って格上の大経大。守備的な布陣に戻してカウンターを狙うのも一手であるが、積極的に攻めて勝たなければ1部昇格はないと判断し結局WMフォーメーションは変えなかつた。12月の入替戦までの準備期間は、今にして思うと悔いが残る。もっと戦術的な工夫ができなかつたか、練習方式、練習試合の相手など。入替戦は0-2、0-3という結果だつた。大目標の1部昇格はできなかつたが、良



関学との練習試合での昭和55年度GK大石雄一のプレー
(関学グラウンド、関学の故ペーダー先生撮影)

きチームメイト、監督さん、OB諸兄に恵まれて京大サッカー部の主将として1年と1月サッカーができたことは幸いである。

最後にマネジャーとして労を惜しまず尽くして下さつた山本さん、佐藤さん、澤さん(以上旧姓)、丸山君、そして練習、試合を問わずいろいろとサポートして下さつたOBの吉村さんに感謝を捧げたい。

現役諸君に対する私のアドバイス

昭和56年卒業

安達 智美

サッカー部を卒業してから早くも16年が経ち、月日の流れの早さを痛感しています。70年史の発行にあたり何か書けということで久々に昔のことを思い返していますが、最も強烈に思い出されるのは、我々の新歓コンパの際の当時の恒藤監督の歓迎の言葉です。「君達は京都大学体育学部のサッカー学科に入ったと思ってください。勉強をしたいとか楽しくサッカーをしたいと考えている人がいたら同好会へ行って下さい。それがお互いの為です」。大学へ向学心を持って入学した矢先のこの言葉には、当時少なからず反感を抱いたことを覚えています。しかしながら今、現役諸君に小生がアドバイスするとしたら、「大学時代にはほとんことん熱中できることに没頭しなさい。サッカーに没頭できない人は別のことをやった方が良い」ということで、基本的に恒藤監督と同じことになってしまうなあと思ってしまうかもしれません。

40年近く生きてきて、仕事以外に没頭できるものを持つことの重要性を益々感じています。どこの地方、国へ行ってもサッカーを通じて知り合いができ、しかもお互いに相手を認め心がかよう、通り一遍ではない人間関係が作れる、あるいは困難に直面した際に自分に自信を与えてくれる、そしてなによりも今に至るまで常に、さらに良いプレーをするためにはどうすれば良いかを考え続けさせ、人生を豊かにしてくれるサッカー、そしてそれをはぐくんでくれた京大サッカー部に感謝の気持ちで一杯です。寄る年波には勝てず、向上心を持ってプレー出来るのもこの先それほど長くはないと感じておりますが、ゆくゆくは子供のサッカーチームのコーチをやり、一生サッカーとの繋がりをもち続けたいと考えています。こういうことは、なんであれひとつの事を徹底してやり、ものになるレベルに達して興味をもちつづけられるものであれば得る事のできるものであり、とにかくひとつの事、一生興味をもてることに没頭する事をアドバイスしたいと思います。それとともにひとつの事をやりつづけられれば、当然いやになる時期はあるもので、石の上にも3年のつもりで続けて貰いたい。結局小生のアドバイスは、とにかくサッカーは大学の4年間のすべてをかけるに足るものなので、石にかじりついて没頭して貰いたいということです。いまさら解りきった事を言うなと思ってくれる現役諸君が多ければ全く嬉しい限りです。

1981年卒業同期紹介

昭和56年卒業 山下和久

大石(GK)静岡選抜で国体優勝、大商大の加藤(現テレビ解説者)を押さえての関西学生1部ベスト11, トヨタ(現名古屋グランパス)でも正GKとして活躍する等の輝かしい経歴を持つ我らの主将。ただ、試合中にチ○ポと叫ぶのだけはやめてほしかった。

安達(DF)小柄ながら当たりが強く、スピードと技術があり、おまけに能書きが多く、態度がでかい上にケガが多く、肝心な時にまったく役に立たないこまったやつ。後輩しごきでゲシュタポ安達の異名を取ったが、一時下痢をしてゲリタポに変更された。

英(DF)スピードとスタミナはNO.1だが、見た目が「ひょっこりひょうたん島」の「博士」のため相手FWはフェイントをかまされて、いつもめんくらっていた。大酒飲みで、勝手に私の下宿に寝泊まりしていたこまったやつ。通称ハナブン。

平尾(DF)真面目な性格通りに相手CFに向かって突き進み、ボールだろうが相手の足だろうがかまわずぶちかます、とても静岡出身とは思えない強力ストッパー。

山下(DF)私のファウルが多かったのは、体当たりとローキックを熱心に教え込んだ先輩と、試合中にそれが決まると「よし」「それでいいんだ」という反応しかなかったまわりのみんなと、ほとんど警告を取らなかった関西学生リーグの審判のせいである。

合羽(MF)相撲取りがサッカーをやっているといわれた巨体の持ち主で、頭と足の強烈なシュートを誇る。普段は手を抜いているが、年に1回くらい本気を出してとんでもないプレーを見せる。そのかわり、時々体罰が当たり、急所や頭にボールが直撃し、退場したりする。

藤元(MF)コテコテの関西人で、パスをもらう時も「ワシや、ワシや、ワシや」と大声で要求するため、目立ってしょうがない。これがシュートでも決まろうものなら、1ヶ月はうるさいのが見えているため、思わずパスを出すのをしぶってしまうこまったやつ。

米田(MF)走れ、蹴れ、当たれ、すべれの力ずくの京大サッカー部では、異色の理論派だが、その正体は痛いとしんどいのが大きらいな最長老。

須山(FW)せこいドリブル突破と、せこいセンタリングと、せこいシュートが持味の地黒の右ウイング。強い相手に競り勝つには欠かせないやつだが、2点以上取って私達DF陣を楽にしてくれたことは1回もない。

水倉(FW)東大戦で同点のオーバーヘッドと逆転シュートをたたき込み、その勢いでマネジャーをくどき落とし、結婚まで持ち込んだ、まさに少年マンガの主人公を地でいくやつ。後輩諸君もぜひ、これを手本にがんばってほしい。

以上で紹介を終わるが、思い起こしてみるとこまったやつばかりである。おまけに、私達はお互いあまり仲が良くないため、卒業以来みんなで集まったことがない。ここに書い

たことは、全て本当のことだが、これに腹を立てることなく、だれかが温泉旅行の音頭でも取ってくれることを願う。

恐怖の宇治合宿



昭和56年卒業 須山千秋

最高気温39℃、湿度70%。活字にするだけで、暑さが漂ってくる。

「今日は昼飯に素麺が食えなげ。昨日なんか、かき氷だけだったけどね」。こんな会話をしていたのが、今では懐かしく思える。

京大サッカー部生活で一番強烈な印象を残しているのが、何と言っても1回生の時の宇治合宿であった。とにかく、盆地特有の蒸し暑さに加えて沖縄並みの気温が、容赦なく体力を搾り取っていく。おまけに、中学～高校と和気藹々のクラブ活動を送ってきた小生にとっては合宿は初めての経験であり、体力プラス根性をつける練習というものなかなか受け入れがたかった。幸か不幸か、レギュラー練習に加えられ、基礎技術も体力も未熟であった小生にとって、あの極限状態で一つ一つのプレーをきちんと行うことは不可能に近いことであった。しかも期間が確か10日間と長かったように記憶しているが、とにかくそれは1カ月にも感じられた。まして、中日があって、小生は一旦自宅に帰ったわけであるが、再度合宿所へ戻る道がなんと憂鬱であったことか。実際1回生の中には、戻ってこない者もいた。「何でここまでやらないかんのか」「ここまでしてサッカーをやっていくべきなのだろうか、同好会でもっと楽しくサッカーをした方が良かったのでは」と、自問自答の毎日であった。とにかく寝ている時が一番幸せで、起きるのが恐ろしかった。

結局、4年間でこれほどハードな合宿はなかった。しかし今考えると、ここ一番の試合での極限状態で、自分達のプレーができなかったのは、結局このような合宿を乗り越えるだけの心・技・体が備わっていなかったことに通じるように思える。あれだけ苦しかった宇治合宿が、懐かしく、また今の後輩達にも必要ではないかと思うこと自体、自分が年をとった証拠である。これをそのまま後輩にぶつけても、我々が昔思ったように、後輩達は反感を覚えるだけであろう。

先日、社内の講習で「コーチング学」を研究している人の興味深い話を聞いた。野茂は走るのが嫌いだった。ひたすら走る練習を強いる鈴木監督がいやで、近鉄を飛び出した。しかし、大リーグにいった彼は、今ひたすら走っている。コーチに言われたのではない。技術を磨くため、そして大リーグで生き残っていくためには、根本的に下半身の強化が必要であると自ら認識したのである。厳しい練習を上から根性論で押しつけるのではなく、個々の個性を認めつつ、ここ一番で力を発揮するためには何が必要であるかを自ら気付かせ、実行させるようなコーチング。野茂はそのおかげで蘇ったのである。その意味でも、最近のJリーグにおける外人監督に学ぶべきところが多いのではないかと思う。

悲願の1部復帰のためにも、恐怖の宇治合宿が益々発展的にかつ有意義に続けられていくことを望む次第であります。

「アホー」



昭和56年卒業 水倉 泰治

私が4回生の時、混戦となった2部で、残念ながら3位となり、1部昇格をかけて入替戦を戦うことになった。

当時1部校であった関学に練習試合で二度楽勝していたため、リーグ戦中から入替戦の権利さえつかめば、1部へ昇格できると思っていた。そして、入替戦の相手は関学の下位になった大経大と決まった。

その前年1部上位で活躍していた強い大経大のイメージと入替戦という雰囲気の中で、自分達のサッカーができずに初戦を落とした我々は、第2戦に向け、敵陣でのスローインの練習を重点的に行った。そして、好調に立ち上がった第2戦の序盤、練習通りの局面ができ、私は完全にフリーでボールを受けた。思いがけない絶好のチャンスのその瞬間、私の頭に浮かんだのは、ロングシュートが得意なA君のイメージだった。

「アホー」と言うY君の声が今も時々聞こえてくる。

理想と現実の狭間



昭和56年度主将 谷村 耕一

主将に任命されてチーム作りを任された時に考えた事は、点の取れるチームにしなければならないということであった。1点取られても2点取り返す、2点取られても3点取り返す、そういうチームでないと2部で優勝する事はできない。1回生で経験した2部落ち、2回生、3回生で経験した2部残留から、相手以上に点の取れるチーム作りの必要性は我々同期の一致した考えであった。しかしながらである。人材的にはスピードのあるフォワード、ヘディングの強いフォワードは居たが、典型的な点取り屋は居なかった。またゲームも作れるし点も取れるゲームメーカー、一人で相手守備ラインをズタズタに切り裂くゲームメーカーも居なかった。さらにもう一つハンディを背負っていた。それはゴールキーパーのスペシャリストが居なかったことである。1年先輩の主将であり関西選抜のゴールキーパーであった大石さん以降2年間、ゴールキーパーの経験者が入部して来なかったのである。苦しい台所事情のため同期の成富君、鶴君が時期こそ違え、大石さんの指導のもとゴールキーパーの練習を受け、4回生の時のゴールは鶴君が守る事になった。2人ともフォワード志望であった。当時のサッカー人気は、底辺の広がりがあったと思うが、今と比べるまでもなく、ましてマスコミに大学サッカーが取り上げられることも非常に少なかった。サッカーマガジンも月一回の刊行であり、その中で大学サッカーの記事が写真付きで掲載される事も稀であったと記憶している。そういう時代であるから2年続けてキーパー経験者が入部して来ないという事も十分有り得たと思う。逆に

1年先輩の山下さんのように、大学からサッカーを始められレギュラーとなられた諸先輩方も数名お聞きしていた。現在の大学サッカーでは、たとえ2部であってもこんなケースはあるのだろうか？

話は少し横道にそれたが、相手より点の取れるチームを標榜しながらも、我々のスタイルは守備を固めながらオープンに開いて速攻をかけるオーソドックスなスタイルに辿り着いたのである。秋のリーグ戦の結果は、2部Aブロックで8チーム中3位に終わった。リーグ序盤戦で、下位に終わった和歌山大に2-2で引き分け、中位に終わった大阪府立大に雨の中0-1で敗れた事が最後まで響いた。同率2位の滋賀大に3-0で勝っただけに悔しい思いが蘇って来る。

ただチームづくりにおいては関西選抜であった小林と、彼と同等の力があつた3回生の藤原の2人のバックの周りに、攻撃の好きな香川、中谷を配したり、2回生の小村、大塚、1回生の松村といった攻撃センスのある若手を、秋のリーグ戦でも起用した。終盤ラインから攻撃を組み立てられるチームの実現にはほど遠かったが、2年後に小村、3年後に松村らのチームは得点能力のあるチームを完成させ、1部との入替戦に出場した。(残念ながら昇格はならなかった)。さらに時を経て、平成2年に卒業した佐々木君の年度のチームは、1部の天理大との入替戦で勝ち、堂々と1部復帰を成し遂げてくれた。この時の2戦とも見させていただいたが、攻守ともバランスのとれた良いチームであつたと思う。

ここ数年京大サッカー一部も苦しい時期が続いているようだが、昨今の大学リーグのレベルアップされた現状を考えると致し方ない点も多いと思う。土・日に仕事を休みづらい事情があつて秋季リーグも平成3年に見たのを最後に足を運べておらず、台所事情も推察するばかりである。私の学年がそうであつたように、現役諸君も理想と現実の狭間で試行錯誤の毎日だと思う。はっきりした目標を立て、1部を目指す練習を繰り返し積み重ねていってください。応援しております。

4年間のプレーの思い出

谷村 耕一

[一回生の時の思い出]

夏の東京遠征の時に1軍の試合に出してもらった。対戦相手は覚えていない。意識朦朧の中で、人間機関車の田尻さんに「しんどいんか」と聞かれた。「いいえ」と答えると「ほな走らんかい。走らんヤツは試合に出るな」と言われた。田尻さんは、それ以来先輩の中でも最も怖い人であり、40を過ぎた今でも異常に体力のある人です。

[二回生の時の思い出]

a. 春の関西選手権の2回戦で大商大と対戦した。当時少しは弱くなつていたとは言え、関西No.1チームであり、関西大学サッカーの顔であつた。2点先行された後半、左のコーナーサイドからの味方のセンタリングがピタリと私の前に来た。左足でダイレクトに放つたシュートは相手ディフェンスの顔に当たり再び私の前へ。もう一度左足でダイレクトに放つたシュートはゴールに見事に吸い込まれた。自分で言うのも何だが、素晴らしいゴール

であり、私のベストゴールである。

ハーフウェイまで舞うようにして帰った。得点者の載ったサッカーマガジンをしばらく宝物のようにしていた。不思議な事にセンタリングが誰であったか全く覚えていない。覚えている人があれば教えてください。(結果は1-2で惜敗)

b. 二回生の時の思い出はもう一つある。実は私はアシスト王を狙っていたのである。結果としては京都教育大学の菊岡さんが12~13点くらいでアシスト王になった。私は8点か9点で次点であった。

この年の京教大は、安本キャプテンを中心に、2部でダントツの力があり1部に昇格した。主力はほとんど次年も残り、春の1部リーグで優勝した。京大は入替戦に出場することが出来ず、また私のアシスト王も夢と消えた。

[三回生の時の思い出]

1部との入替戦の相手は意外なことに大阪経済大学となった。大経大はキャプテンであり日本リーグへ進んだ高橋を中心に力のあるチームで入替戦に回るようなチームではなかった。この年の京大はキャプテンであり関西選抜のキーパーでもあった大石さんを中心に攻守とも充実しており、1部復帰の期待がかかっていた。秋季リーグに入る前の夏に1部の関学を2度の練習試合で撃破しており、関学が入替戦に出て来そうな途中経過もあったのだが。さて、試合の方は極寒の万博球技場で、相手のペースで進められ、敗れた。私もリーグ戦前からの肉離れで何一つ納得のいくプレーが出来なかった。後半数分間だけ京大が主導権を握りそうな時間帯があった。右コーナーキックをゴール正面で合羽さんが合わせゴール前に居た私の前へ。しかし、こともあろうか、ゴール前1メートルからフリーで放ったシュートはバーの上へ。これを決めていればムードが引き戻せたかもしれなかったと思う。シュートは沢山あるが、その最大のものがこの時のミスシュートである。

[四回生の時の思い出]

四回生の時は、主将として気が張っており、結果的に入替戦にも出られなかったので、私自身のプレーに関する思い出もありません。

春の京都リーグで、同志社大、京教大を連破したこと、秋季リーグ初戦でダークホースと見られていた大工大に勝った試合、2位争いをしてきた滋賀大を直接対決で3-0と撃破した試合は、印象深く残っております。

試合はさておき、夏休みに三重県の神島に同期で旅行しました。日頃男くさい、汗くさい生活をしていたので、甘い思い出をつくろうと期待に胸をふくらませて、小説「潮騒」の舞台へと向かいました。ところが世間一般のサマーバケーションには早く、今期初の夏休み客とのこと、仕方なくだれもない浜でオールヌードで遊びました(私と数名は海パンを着用していました)。水も湧水を集めて飲まねばならず、夜は砂浜から無数の虫が這い出てきてテントを襲い、時間が遅々として進まず都会育ちの我々のひ弱さを知りました。その中で、成富君だけは2日目も喜々として泳ぎまわり「楽しかネー」と言うので、誰ももう帰ろうと言えなくなり、もう一泊しました。

成富君には、この他様々なエピソードがあり、会社生活も15年になった今でも、彼を上回る豪傑にはお目にかかっていません。その彼も昨年結婚し、同期10人が皆所帯持ちになりました。年に1回は何らかの形で顔を合わせています。

4 回生時代の思い出

昭和57年卒業 丸山 哲二

卒業して、もう15年になり、当時の記憶がだんだん薄れていっていますが、なんとか思い出し、主務としての立場から書かせてもらいます。

- ・ 2月 紫光クラブ：毎週1回、夜7時頃から、紫光クラブと農学部グラウンドで試合をした。とにかく寒かったことを覚えている。
- ・ 3月 京都リーグ：京都学連幹事長でもあったので、運営委員会のあった京都外国語大学・辻先生の研究室へ準備のために、練習後によく通った。前年度幹事長がリーグ創設何周年かの立派なプログラムを作成されたので、今年もやろうということになったものの、金がなく、各大学のマネジャー手書きのプログラムを作成した。当時の我が女子マネジャーにも多大なご努力を頂いた。
- ・ 4月 女子マネジャー：京大の女子学生が2人いたが、1人は京大体育会へ、1人は関西学連に出向していただき、欠かせない存在になるほど大活躍してくれた。
- ・ 8月 夏合宿：先輩のご尽力で前例のない川崎製鉄水島（現ヴィッセル神戸の前身）で合宿をした。宇治とは比べられないくらい立派な施設であった。
- ・ 9～10月 秋季リーグ：ライバルは天理大、そして大工大に足をすくわれなければ入替戦には出場できると読んでいた。しかし、安定しているはずの守備にほころびが出て、大工大には勝ったものの、和歌山大に引き分け、99%ボールを支配しながらも大阪府立大に負けるなど、芳しくない状態だった。それでも、最終戦の天理大に負けても、ある程度なら得失点差で2位になるはずのところまで挽回し、必勝の思いで宇治での天理戦に臨んだ。しかし、天理戦は、総力を尽くしたものの点をとる局面を作れず、負けてしまった上に試合終了直後に、2位を争っていた大工大が最終戦に大勝したというニュースが入り、この瞬間われわれの1部復帰の望みは絶たれてしまった。その日、宇治の長い坂を交わす言葉もなく下ったことを、昨日のこのように思い出す。

以上がだいたいの思い出です。同期の10人は今でも4～5年に一回は一同に会する機会を作り、旧交を温めています。また、同期のうち、関西在住組は毎年末、家族同伴で温泉旅行をして、思い出話に花を咲かせています。

卒業してからは、京都社会人リーグに所属している京大OBチーム(及びそのシニアチームであるトゥエンティナイナーズ)で約10年間お世話になりました。その後転勤で、関西を離れたため参加できないのが残念でなりません。

最後になりましたが、現役時代、卒業後ともに立派な先輩、よき同輩、頼もしい後輩のおかげで、楽しいサッカー生活を送れたことを心から感謝いたします。

私の忘れられないゴール



昭和57年卒業 山本達志

現役時代はFWでしたが1試合だけGKとして出場させて頂く機会があり、その時に決められたゴールをよく覚えています。2回生の同志社戦でのことで、正GKの大石さん（昭和55年度主将）が突然の盲腸で出場不能となり、2日間のGK練習の後、試合に臨みました。シュートを打たれても横っ飛びにパンチングしたりして何とか凌いでいたと記憶していますが、前半も中程でふわっとしたロビングが上がり、軽くクロスバー越えに押し出してCKとなりました。そこから、ヘディング折り返し・ゴールラインにたたきつけるヘディングシュートと絵に描いたような失点を喫してしまいました。

自分がぼけていたのを白状しているようですが、この時GKを経験したこともあって、今でもOBチームで参加している社会人リーグでGKとして試合に出してもらえるということにつながっており、私には思い出深いゴールとなってしまっています。

反省から得た教訓



昭和57年度主将 藤原徳久

私が主将を務めた昭和57年度は、ブラジルの黄金カルテットのジーコ、ソクラテス、ファルカンが全盛期の頃で、ワールドカップでは、ロシアの活躍でイタリアが優勝した年であった。

関西の大学サッカー界は大商大の黄金時代で、全国制覇を3年連続達成した頃であった。京大は、私が入部する前年に、1部から陥落して以来、ずっと2部に低迷したままであった。2回生の時、大経大と入替戦を行ったのが、唯一1部復帰のチャンスだったと記憶している。残念ながら、私の年代も秋季リーグは5位か6位で1部復帰は果たせず、反省点ばかりが残った年であった。何一つ誇るべき事がないので、少しでも現役のチームづくりの参考になればと思い、反省から得た自分なりの教訓を紹介し、年代記としたい。

教訓

その1. 1年間は非常に短い。

自分たちの目指すサッカーを1年間で仕上げるのは難しい。1～4回生全体が目標とするサッカーに対し共通の認識を持ち、2～3年間単位のチームづくりも重要である。

その2. 強みを持つ選手を生かそう。

いろいろ欠点を持つ選手でもチーム全体で欠点をカバーすれば、その選手の強みが生き、チーム全体としてはプラスになる。特に京大は他大学のように優秀な選手が

どんどん入部してくるわけでもなく、限られた戦力の中でやっていかねばならない。
その3. 対戦相手の研究は、最も有効な練習の一つである。

相手チームの戦法を把握し、チームとしての戦法を立てる事も大事だが、一人一人が相手プレーヤーを思い浮かべ、対策を立てる（イメージトレーニング）事も重要だ。

その4. サッカーは足だけでやるものではない。

頭もみがこう。上半身も鍛えよう。特に京大は上半身が弱く、体の入れ方が下手で競り合いに弱かった。ボールコントロールなどのテクニックは一朝一夕で身につくものではないが、上半身はだれでもトレーニングを行えば、短期間でそれなりに鍛えられるものである。

その5. お酒はほどほどにしましょう。

コンディショニングに影響します。お酒は社会人になったら、いやでも飲めます。また私みたいに酒造会社に勤めてもいいでしょう。

大学時代は、4年間（人によってはそれ以上）と、人生の中では短い期間だが、京大蹴球部に所属し、充実した大学生活を過ごせた事は、非常に貴重な経験となっています。しかもそればかりでなく、アフタケアも万全で現在もOBチームでプレーできる事は、大変素晴らしい事だと思います。このような京大蹴球部が、今後益々繁栄する事を祈念します。

4年間の思い出



昭和58年卒業 遠藤 健夫

70年史に載せるとあって、私もその中の4年間を体験したということを書きたいと思います。

まずは、入部。当時高校の先輩が2人いたため、割と気楽に入れましたが、練習に参加してびっくり。全然レベルが違いました。まあ高校でやっていたとはいえ、県大会にやっと出られるくらいのチームで、まともな指導者もいなかったのも、ギャップがあっても当たり前だったかも知れませんが。

高校で何をやってきたのだろうと、しょっちゅう思っていました。

1回生の時の一番の印象は、その技術的なギャップと、体力的にも話にならなかったのも、夏合宿の時（多分検見川）こんな日が続くのかと思うと、ほとんど泣きそうになっていたところを「何泣きそうな顔してるんだ」と先輩に怒鳴られたことでしょうか。

さて2回生になると、体力的には少し慣れてきて、試合に出られるかも知れないというところまでできました。2回生での思い出は、秋のリーグで誰かの怪我のためチャンスがやってきたことです。しかも二十歳の誕生日。気合は十分だったのですが、緊張しすぎか、実力通りか、さっぱりで、あっという間に交代させられてしまいました。

3回生になるとめでたく試合に出られるようになりましたが、どうも気合いが抜けてい

たのか、春合宿の途中の昼休みに、バイクで飯を食べに行く途中で転んでしまい、なんと足の中指骨折…。あのレントゲン写真を見たときは、本当に気が遠くなりました。そんな訳で5月ぐらいまでぶらぶら練習を見る日々が続き、やっぱり気が抜けていたのかなあと反省していました。夏頃から試合に復活でき秋のリーグに突入。初戦で相手のキーマンへのマーク役となり結構抑えることができ、しかも決勝点までゲットできました。

最終学年の4回生の思い出は、やはり秋リーグです。半分以上調子良く終わり、山場の神大戦、はじめに私のしょうもないファールでPK。先行され、追加点も取られ2-0、その後1点返した後、私の前に偶然転がってきたボールをおもいきり蹴るとなんと左隅にゴール、同点!!。とここまではいい思い出だが、その後逆転のチャンスを逃し続け、逆に1点取られてしまい、そのまま試合終了…。決勝点の1点はハーフウェイ位で私が切りかえされ、そこからのチャンスだった。その日の落胆ぶりは今でもよく憶えています。その試合で緊張の糸が切れてしまい、次の試合も負け、結局1部昇格は泡と消えてしまいました。

という具合に、私の4年間はあっという間に終わってしまいました。今思うと、もっと練習すれば良かったとか、あの時飲み過ぎなければ、とかいろいろ出てきますが、終わったことはしょうがないですね。最近、どんどん走れなくなりつつありながら、なんとかサッカーを楽しんでいます。

京大蹴球部の4年間



昭和58年卒業 桑 江 茂

私が入部した昭和54年は、街ではインベーダーゲームがはやったためにパチンコ店がつぶれたり、サザンオールスターズの「いとしのエリー」がヒットしたりした年だった。

「なぜ大学の4年間、サッカーをしていたんだろう…。」。卒業して14年が経とうとしている今、この70年史の機会に学生時代を振り返ってみた。

特に1回生の頃は、高校とは比較できないほどの練習の密度が濃く、体力的についていけないため、退部を考えたこともあった。ところが、夏合宿を経験し、秋のシーズンが終わった頃には体力がついたこともあるが、やめようなどという気持ちはなぜか消えていた。親からはよく「あんたは大学に入ってもサッカーばかりして、他にすることはないの?」と言われていたし、考えてみるとサッカーをしたいだけなら拘束される時間も規律も緩い同好会で良かったはずだ。また、体育会蹴球部として私の在籍した4年間はチームは1部に上がれず、個人的にも実績を残せなかったこともあって、良い思い出は少なく、辛いことの方が多かった。しかし、やらなければ良かったという後悔は決してないのである。その理由は格好よく言うと、広いグラウンドの中で敵味方にわかれ、90分間に数少ないゴールを目指して一つのボールを奪い合うというサッカーの魅力、それに惹かれた者の情熱だろうと思う。

ただ、私は現役の時、小さい体のハンディに妥協してしまい、より高いレベルを目指し

て練習に励まなかったという反省はある。特に、私のやっていた中盤には世界の有名選手の名前を出すまでもなく、京大にも小さな名選手はたくさんいたはずだ。

京大蹴球部の歴史はこれからも長く続くだろう。その中で昭和54年度から57年度までを過ごし、底辺を支えた者としてコメントを残した次第である。

最後に、同期の高嶋と立命館の松田君が始めたOB戦「大文字杯」が早12回を重ねている。平成9年は8月16日が土曜日に当たることもあり、名前の通り大文字の送り火の日に行うことを計画している。例年、農学部グラウンドで正午にキックオフしている。参加はOBならば自由なので、遠方の人も、帰省や「あけぼの」に呑みに行くついででも、農Gに来てくれることをPRして、筆をおくこととする。

初ゴールの思い出



昭和58年卒業 堀川 健一

今年の夏も暑かった。暑い夏が来ると、いつも炎天下でボールを蹴っていた頃のことを思い出す。余り楽しい記憶は浮かばない。練習の暑く苦しかったことと、試合で負けて悔しかった思い出が多い。そんな中で唯一自分だけが強く印象に残っていることがある。いや、これがなかったら今でもボールを蹴って楽しんでいる自分とは違った人生になっていたかも知れない。

受験勉強を終えてサッカー部に入った一年生の夏は、体力も十分ではなく、基礎練習の上に準備等の下働きが多く、肉体的にも精神的にも限界の毎日だった。この夏は東京で遠征の合宿があり、慣れない土地の検見川グラウンドと試合相手の大学を往復する生活だった。当然その頃は技量も未熟で球拾いが中心の練習ばかりでゲームに出場したことはなかった。それがたまたま、慶応大学との2軍戦に途中出場するチャンスが与えられた。

初めて出る試合は外から見ているのとは大違い、相手も見方も自分の周りで回転している様でボールなんかなかなか触れない。必死の思いで取りに行っても軽くかわされる。信用がなければ味方からボールはもらえない。時間だけが過ぎて行く。その時、不意にボールが目の前にやってきた。相手ゴールキックのミスだった。神様からのプレゼント。一人かわしてシュートがゴールに入った。初試合で初めてのゴール。これでサッカーやめられなくなった。人生はハプニングの連続。チャンスを生かす努力の大切さを教訓として暑い夏の思い出がなつかしい。

現役時代の反省

昭和58年卒業 野口 哲史

およそ全てのスポーツについて言えることだと思うが、その年のチャンピオンになるか、これに準ずる戦績をおさめたものでない限り、後から思い返して良い思い出だったと言うことはないだろう。我々の代もそうだった。関西学生2部の上位にはいたが、結果的には1部との入替戦出場もままならず、そのほかのトーナメントも思ったほどの出来ではなかったように思う。今から思い返してもつらい合宿や、ここ一番での痛恨の負けのことが、いくつかはあったはずのナイスゲームよりは鮮明に思い出される。自分たちの世代の戦績を誇らしげに披露できないのは残念だが、ただ当時は自分としても、チームとしてもかなりの努力をしたはずだ。体育会系だから当然なのだが、少なくともサッカーで勝つことを目的で過ごした4年間であった。

現役時代を振り返ってみて今、感じるのは我々の努力が効果的になされたものではなかったということである。平たく言うと我々には（少なくとも私個人には）戦略がなかったと思われる。これは個々の試合をいかに戦うかと言う戦術を言っているのではなく、現状の戦力を分析し、どういうチームを作り上げ、最終目標である秋のリーグをどうやって勝ち上がるかという長期計画のことである。

直感的な言い方だが戦略がないと苦しいところが乗り切れないと感じる。あの1試合、あの1ゴールさえなければ、あるいは入れていたら、もっとバラ色のリーグだったということがある。しかしその1試合、1ゴールがとてつもなく遠く、緻密な計画を立ててこれを着実に実行する勇気を持たないものには越えられない一線なのだと思う。

当時、京大はキャプテンを中心として練習計画を決め、スタメンもキャプテンが決めるというスタイルだった。フィールドプレーヤーの采配に全てを委ねるというシステムはキャプテン個人に対して過酷だったと思う。そうかといって私自身もチームの運営に対して積極的であったかと言うと甚だ自信がない。また仕事の合間にご厚意からグラウンドに来て下さる監督さんにもずいぶんご迷惑をかけたと反省しきりである。そんなことが解っているのならなぜそれを早く言わないとの謗りを受けそうだが、当時の私は戦略を立ててシーズンを戦うなど夢にも考えなかった。このことは社会人になって十数年がたった今になって痛感するのである。幸い今はコーチ制になっていると聞く。当時我々がキャプテンにかけた負担が少しでも緩和され、組織として効果的な戦略がたてられる方向に向かっているのであれば良い方針だと思う。生意気な後輩であり、頼りにならない先輩であり、相変わらずグラウンドには足の向かないOBではあるが、ここに私の現役時代の反省を添えて、現役諸君の健闘を心より祈る。

2部ブロック優勝と1部への壁



昭和58年度主将 小村 稔 郎

私が昭和57年度の藤原主将からバトンを受けとった時、同期は私を含めて5人でした。幸い一つ下の学年が15人前後と大所帯で、そのため彼らの中から根岸君を副主将として部の運営に参加してもらうことになりました。とはいえ、チームの実質的な中核は3年生以下が担うこととなり、戦力が整わぬまま春先は連戦連敗でした。

7月の東大戦は完敗。私の中で「秋のリーグ戦は大変厳しい」という危機感が高くなっていました。夏の合宿の成果を試す近国体も1回戦で破れ「3部落ち」という悪夢のような言葉も現実のものと感じられるほどでした。

その頃からだったと思います。春先から私達が「おまえ達が頑張らなくてはだめだ」と言い続けてきた3年生の目の色が変わってきたのです。ようやく危機感が浸透して来たのです。秋のリーグ戦の開幕は対甲南大。攻守がかみ合い2-0と勝ち、私がチームを預かってから初めて思い通りになった試合でした。チーム構成からいっても華麗に攻めて勝つといった試合運びは無理でしたが、基本は守りを固めるという京大の伝統的な進め方で、終わってみればブロックで全勝の1位という予想外の成績でした。2部優勝をかけた関大戦は勝てば1部に自動昇格という試合でした。しかし惜しくも敗れて2位となり、立命館大との入替戦に臨むことになりました。初戦は引き分け、2戦目で敗れたため、あと一歩のところまで、1部の夢を果たすことが出来ませんでした。

いま考えても最初の甲南大戦でつまづいていれば、そのまま悪い方向に向かって敗戦を続けることも十分あったと思います。選手層の薄い中、それぞれがケガを抱えつつも、無理して頑張ってくれて、リーグ戦を通して同じ戦い方が出来たことも大きかったでしょう。特にチーム力にそれほど差がない場合、全体を一つの目標に向かってまとめることが出来るかどうか、が大切になります。その点で、最初の秋のリーグに限って言えば、うまく出来たかなという満足感は残りました。

4年間を共に苦しみ、共に喜んだ同期を得られたことはかけがえのない財産となります。また、OBの方にも心配をかけ、時には厳しく、時には温かく励ましてもらい、京大蹴球部とは現役だけで成り立っているのではなく、伝統の中で生き続けているのだと、今感じています。

最近では現役の試合を生で見ることがめったにないのですが、秋のシーズンになると結果はどうだろうかと、毎年気になります。私と同じようにサッカーを愛し、京大蹴球部を愛している人間が、全国で現役のあなた達を見守っていることを、頭の片隅にでもおいていただければ幸いです。

京都大学の夕焼けの中で

昭和59年卒業 広瀬 憲嗣

もう10年以上も前の記憶を、消えかかった中から拾い出すことが、意外と難しいということに初めて気づいている。その中には、思い出さないでいたほうが良かったことなども含まれていて、多少興奮したり、赤面したりしている。とにかく、京都の夏は暑く、冬は寒かった。

私が入部した昭和55年には、農学部の合宿所がまだ木造だったのを記憶している。そこには食堂と大部屋があり、食堂では主将が大石さんだったこともあって、よくミーティングが行われていた。当時の監督は長井さんで、話が長いと評判だった。そのおかげでデートに遅刻したなどという話もあった。そういえば「ながいはむよう」だとか、「ながいものにはまかれろ」などという言葉が流行したような、しないような。

新歓コンパはこの合宿所で行われ、何杯か飲んだらグラウンドを1周するとか、口から出るものは外の溝に流すとかしたようだ。合宿所は、今駐車場となっているこの場所に、確かにあったのだ。こうして思い起こし、筆を走らせれば、いろいろなことを思い出すものだが、その中でもはっきりと思いだし、とてもなつかしいものがある。京都大学の夕焼けである。

毎日練習し、ボールを蹴りこんでいたゴールネット。その後ろにはなんとも言い表せない、微妙な色合いの夕焼けがあった。私はこの夕焼けを「一休さんの夕焼け」と呼んでいた。ゴール裏は農場になっていて、何度もボールが飛び込み、拾うのに苦労した思い出もあるのだが、この農場のおかげで遠くが見通せたのである。そしてそこには、赤過ぎず、黄ばまず、マンガの一休さんの寺の夕焼けに似た、京大蹴球部の夕焼けがあった。

この夕焼けを見ながらいろいろなことを考え、多くの思い出がこの夕焼けとともにある。今もまだあるのだろうか。

再び1部への厚い壁



昭和59年度主将 根岸 正人

京都大学蹴球部のOBの一人として、現役時代の思い出を少しばかり綴ってみたい。当時我がチームは関西学生リーグの2部。僕らが入部したときの4回生が1部を経験しており、1部への振り返りが大きな目標だった。

同期は全部で16人、一年上の先輩が4人だったこともあり、3回生の時からのレギュラーが多いチームだった。前年に、多くの先輩の心配をよそに、1部との入替戦に出場して、立命に善戦。1部は目の前と、部員全員が考えていたと思う。

チーム作りは、前めのつぶしを重視した守りを基本としながらも、組織的に厚い攻めが

できることを狙った。1部のチームに互角以上に戦うために、固い守りの上にも攻め勝てる力をつけたかった。

春のリーグでは、あまり力を発揮できなかった。運動量やボールへの寄りが甘く、思ったような試合運びができなかった。東大戦でも運動量とスピードでやられた。

夏合宿から、相手に「出足」で勝つため体を鍛え直した。秋のリーグで1部に上がるには何をすべきか、誰もがよくわかっていたので、よくがんばってくれたと思う。

秋のリーグでは、納得のいくチームに仕上がった。何点か失点もしたが、逆転できる力をつけていた。天王山の関学戦で、終盤でコーナーからヘッドで決められ敗戦。2-3だったと思う。動きも悪くなかったし、技術、気合でも負けていなかったが、あと一步及ばなかった。結局、所属リーグ2位、順位決定戦に勝ち2部3位で入替戦の切符は手にしたが、相手は何と同志社。前年は1部3位なのに、何も2部との入替戦に出てこなくてもいいのに。結果は2戦ともまったく歯が立たず、長くて短かった4年間が終わった。

10年以上たった今では、絶対忘れないと思っていた得失点シーンも影が薄くなってしまっているが、いろいろな価値観を持つ一人一人の部員が、気持ちを一つにできたことはよく覚えている。思い出をたどるにつれ、あらためて当時の仲間に、いいサッカーができたこと心より感謝したい。

海外駐在中で長らくのご無沙汰ながら、日本に戻ったらOB戦を楽しみにしています。

やるだけやった2年連続入替戦出場



昭和59年度主務 瀧下 靖 春

我々の代、3回生のときからチームの主力となっていたこともあり、4回生になると戦術的な意思統一が早くからかたまっていた。それは、大卒では次のようなものである。

相手にボールが渡ったときには、DF、特に根岸(スーパード)の指示によりFWがプレッシャーをかけに行く。まずは自由に長いパスを出させない。そしてワンサイドカットをしながら意図した方向にボールを回させ、最終的には相手ボールをタッチラインぎわに追い込んでサイドバックとスーパードで数的優位を作って奪う。

身体的能力において特に優れた選手がそろっていたわけではないので、敵にスピードにのらせないこと、センタリングを上げさせないこと、プレッシャーをかけ自由にさせないことなどを徹底した。関学、大経大、この2チームが同じブロックのライバル校だったと思うが、堅い守りから京大のリズムで試合が流れていたように思う。

個々の選手についてみると、技術レベルはさておき、試合の中ではポジションに応じて個性が人それぞれで、それがうまくかみ合っていた。DFではストッパーの洲崎はスピードとパワーが売り。練習ぎらいではあったが、試合では相手ウイングをほとんど止める益山。うまいとは決していえないが、相手ボールが渡る瞬間を狙い、ガツガツとプレッシャーをかける東、服部。自分の前にいる味方に敵を追い込ませ、最後に確実に止める根岸。MFでは、粘り腰のディフェンシブ瀬川、体力はないが技師の木下、バランスのとれた松村。

FWでは、右サイドを確実に突破する室田。ヘディングの村田（3回生）。

戦術と選手の個性はかなりよくマッチしていたように思える。これが、2年連続で入替戦に出場できた大きな要因ではないのだろうか。ともあれ我々全員が思っていたことは、納得のいくサッカーがしたかったということである。頑固者のあつまりで、時には言い争うこともあったが、言いたいことを言い合う中で良いものを探っていく、それが、学生がつくるサッカーの良さである。

東大戦にも同志社戦にも勝てなかった。一部に昇格できなかったのは残念だった。しかし、入替戦に出場し、同志社大にコテンパンにやられても、我々の胸の中には「やれるだけのことはやった」という想いがあったと私は信じている。後輩の皆にも、勝利のために何を為すべきか、つきつめて意見をたたかわせ、納得のいく4年間を過ごしてほしい、そう願う次第である。

東大戦の思い出



昭和60年卒業 山田 実

僕の場合、昭和57年7月（当時2回生）の東大定期戦が最も印象に残っている。東大戦の一種独特な緊張感、外から試合を見ている人にとっては凡戦かもしれないが、試合している本人達の興奮状態での集中力は今でも時々思い出す。特に、ゴールキーパーだった僕の場合、この東大戦の後、けがとの闘いが卒業まで続き、後輩にレギュラーの座も奪われてしまったので、最後の検舞台という意味で、一層思い出深いものがある。

さて、試合を振り返ってみたい。農学部のグラウンドでの雨の中での試合ということもあり試合内容は今一つであったように思う。0対0での前半半ば、センタリングのクロスボールをダイビングキャッチした時、競り合いで相手選手とぶつかり、着地の際右膝を強打し、靭帯を傷めてしまった。でも、温まった体と、興奮状態のため、前半終了間際のフリーのヘディングシュートを奇跡的に止め、前半は0対0。膠着状態のまま後半44分を迎え、右からのセンタリングをダイビングヘッドで決められてしまった。まさに悪夢だった。試合が終わり、体が冷え、興奮状態から覚めた時、脚を引き摺り、堀川さん・安積さん（当時4回生）に付いて飲みに行ったのを覚えている。

卒業して既に11年経つが、サッカーの思い出は、この東大戦を含めて、どちらかと言うとほろ苦いものだった。何故もっとがんばれなかったかという思いが非常に強い。でも、それが良い教訓となり、会社に入ってから今迄は仕事では自分なりにがんばってこれたと思う。これからも合宿のダッシュターン・200m走・100mダッシュの苦しさを思い出して、それに比べればはるかに楽な(?)仕事でがんばっていきたい。

大学4年目の初得点



昭和60年卒業 洲崎章弘

私の忘れられないゴールは、昭和59年9月9日、4回生の秋の関西学生サッカーリーグの初戦で入れたものです。京都学園大学に1対0とリードされていて、チームの雰囲気少し重くなっていたとき、コーナーキックで競り合っている人の頭の間からボールがスッと目の前に抜けてきたのを、夢中でヘディングで決めた同点ゴールです。このあと4対1と逆転に成功し、初戦を勝利で飾れました。

この年は1部との入替戦で、1部6位の同志社と対戦して敗れ2部に残留しましたが、もし初戦で負けていればそこまで行けなかったかもしれません。私のポジションはバックで、それまで得点に縁がなく、このゴールが公式戦初得点だったので、後のリーグ戦に望みをつなぐゴールというだけでなく、本当に感慨深いゴールとなりました。

京都大学サッカー部に思うこと

昭和60年卒業 木下政人

京都大学のサッカー部は、その宿命として、優秀な選手が集まるものではなく、チーム力を維持していくのは困難である。それにもかかわらず、私が3回生、4回生の時は1部昇格はならなかったものの連続して入替戦に出場するという好成績を残すことができた。その原動力となったものは何だったのだろうか。それは、各個人の集中力とチームとして目的意識がはっきりしていたことだと思う。

各個人の集中力もさることながら、やはり、“チームの集中力”とも言うべき全員の目的意識の高さを維持できたことが好成績につながったと思う。特別な設備やコーチがいるわけではなく、文句（わがまま？）を言い合いながら学生主体でチームを作っていたこと。試合には出られない上級生（私たちの学年では、その当時ではまれな16人もの部員がいた）が、真剣に練習や運営に取り組んでいて、そのことが下級生の良いお手本になり全体が引き締まっていたこと。リーグ戦の一戦一戦を、11人ではなく、まさに部員全体で戦っているといた感じだった。

京都大学サッカー部の基本は、学生を主体としたいいわゆる“大学のスポーツ”の典型もしくは手本であると思う。最近、古き良き“学生スポーツ観”が忘れられていく中で、この伝統をいつまでも持ち続けてほしい。

眠れない一年



昭和60年度主将 村田 伸 治

昭和60年秋季リーグ第3戦、大阪教育大学に2対1で勝ち、「これで3部に落ちんで済むやんけー！」と叫んで目を覚ます。引退してからこんな夢を何回見たことだろう。実際の試合は、1対1で引き分けたのに…。引退してからも眠れない日々が続くことになろうとは！

昭和58年(対立命館大学1部7位)、昭和59年(対同志社大学1部6位)と2年連続1部昇格を賭けた入替戦に出場し、1部昇格まであと一步というところまで行きながら、2部残留のまま最上級生になった昭和60年、主将を務めることになった。前年度までの攻撃面における戦術は、関西学生サッカー2部選抜の駿足ウィング室田伸夫氏(昭和59年卒業)に如何にボールを展開するか?如何に彼のドリブルコースを開けるか?であり、守備面における戦術は、スーパードであった根岸正人氏(昭和59年卒業)の指示により、前線からプレッシャーをかけてパスコースを限定し、DFがインターセプトを狙うことであったと記憶している。名ウィングを含め、レギュラーが8人も引退した大幅な戦力ダウンの中、1部昇格を目指しチームづくりを行った。

と言っても、新たな戦術があるわけでもなく、センターフォワードの高さを生かし、ボールを当て、そこから展開すると言った戦術であった。センターフォワードであった自分の力不足もあり、戦術が十分に機能していたとは言えなかった。チーム戦術の立て直しを行うべきだったと今でも深く反省しているが、サッカーを知らない、がむしゃらにやるしか能の無かった自分には、他の戦術を導入する術がなく、技術不足を補うには体力勝負に出るしかないと言う単純な発想しか浮かばなかった。チーム運営に関しても、「グラウンド整備が悪い!インターバル5周!」と言い渡すような、自分が経験してきたスポ根を踏襲することしかできなかった。20人近くいた新入部員も1人、また1人と退部していったが、「練習せざるもの試合に出るべからず」という考え方や、サッカーを一番に考えることが京都大学蹴球部に所属する最低の資格であると思っていた自分には、去る者を引き止める言葉がなかった。方針を変更することができないまま秋季リーグを迎えることになったが、そんな環境でもサッカーをやりたいという新入部員が6人も残ってくれた。彼らの内3人をレギュラーメンバーに加え、何とかそれらしいチームで秋季リーグに臨むことができた。

開幕から3試合連続で1対1の引き分け、4試合目にして初勝利。勝ち点5で、残り3試合を全勝すれば優勝できる順位であった。当然、下(3部との入替戦)など頭の片隅にもなかった。第5節、龍谷大学に1-2と惜敗し、初めて下を考えたが、それでも優勝の可能性が残されていた。第6節、阪大に0-1と負けた時でさえ、その時点の順位は同率5位であり、最終戦の結果次第では2~8位の可能性がある異常なまでの大混戦であった。決死の覚悟で臨んだ最終戦、神戸大に0-4とまさかの大敗。試合後、目の前で神戸学院大(第6節終了時7位)が追手門大(同6位)に1-0と勝ち、勝ち点5で3チームが並び、得失点差で京大は7位以下が決定した。その夜、頼みの綱の京都外国語大(第6節終了時最下位)が大阪教育大に1-0で勝ち、勝ち点が6になったとの連絡を受けた。最悪

の3部自動降格となってしまった。

京大蹴球部60年(当時)の歴史に3部自動降格という汚点を残すなんて、目の前が真っ暗になるばかりか、吐き気まで催したのを覚えている。後輩たちから1部昇格を目指すチャンスを取り上げただけでなく、彼らに「2部復帰絶対」という、多大な負担をかける結果になってしまった。運が悪かったとは言え、その運を悪くしたのは主将である自分のやり方が間違っていたからである。悔いても悔やみ切れない1年間となってしまった。

翌年、後輩たちが2部復帰を決めた数日後、「3部に落ちて、一からやり直せて、かえて良かったのかも知れません」と、ある後輩に言ってもらえた日から、冒頭の夢を見ることはなくなった。

卒業10年後

昭和61年卒業 成瀬英治

早いもので農学部グラウンドを後にしてもう10年になります。この10年の間にサッカーを取り巻く環境は急速に変わりました。入部当初(S.57年)の新入生歓迎会は、今はなき木造のスポーツ会館で行われましたが、挨拶をされた一人の先輩が「我々はアマチュアではあるけれども、プロのハートを持って練習・試合に臨もう」と言われたのが今でも印象に残っています。しかし、10年後に日本でプロリーグが盛んになり、21世紀にワールドカップが日本で開催されるとは当時は思いもよりませんでした。

ボール自体も天然皮革から人工皮革の弾むものになりました。1回生の時はボール係でしたが、天然皮革(代表的なブランドはPEACOCKでした)のボールは変形しやすく、また雨が降ると重くなり、乾くと皮が伸びて肥大化したものです。

現役の時は残念ながらいい成績は残せませんでした。仲間と汗をかきながらボールを蹴ったのは何事にも代えがたい思い出になっています。昔のスポーツ会館の廊下に布団を敷いた夏合宿や、冬の凍ったグラウンド上での練習試合など、貴重な体験をさせていただきました。今は部員数もかなり増えたようですが、少し心配なのは、Jリーグが隆盛になるにつれて大学サッカーが低迷しないかということです。しかし、昨年福岡でのユニバシアードで全年代に先がけて世界一になったように、プロのハートを持ったアマチュアであれば杞憂に過ぎないことでしょう。出来の悪い卒業生ではありますが、OBチームでボールを追いかけながら後輩諸氏の活躍を期待しております。

次年度以降に向けたチームづくり



昭和61年度主将 加藤 晋 央

私が主将を務めた昭和61年度の特徴的なことと言えば、京大蹴球部史上初めて“屈辱の3部リーグ”生活を送らざるを得なかったことに尽きる。それゆえ最上級生として過ごした1年間を思い返すことはこれまでほとんどなかったが、年代記作成にあたり当時の運営方針等を紹介したいと思う。

3部降格が決定した秋のリーグ戦終了後、新体制発足とともに「2年後には1部に定着できるチーム力を蓄え、1部復帰を果たす」ことを蹴球部再建の中長期ビジョンとして掲げ、その初年度として「下級生の育成」「1部復帰への土台作り」「上昇思考の継続」を運営方針とした。

まず「下級生の育成」では、当面戦力ダウンがあろうとも可能な限り下級生主体で試合のメンバーを編成し、試合に出ている者はもちろん、他の下級生にもチームとして進んでいる方向を形の上からも明確にした。それ以外では練習の時からこれまで以上に下級生の発言機会を増やし、早い段階から次年度以降に向けたチーム運営を考えてもらえるようにした。一方、最上級生は試合以外でチームを引っ張る役割に徹し、特にサッカーに対する取り組みという点で手本になることに努めてもらった。

「1部復帰への土台作り」という点では、将来より高いレベルで通用するサッカーをするためには、個人のスピードアップが必須と考え、特にサッカーでは必要である瞬発力、反射神経、身のこなしと言った基礎体力の向上に力を入れた。技術面では高度な技術を求めるのではなく、基本的なキック、オープンスペースへの動きといったごく基本的なチーム戦術の理解を深めるため、5対5、6対6のパスゲームを繰り返した。その結果、攻守とも中盤までは個人技に頼らずあくまで基本に忠実かつシンプルに行い、中盤以降ではスピードを生かして攻めるサッカーが定着したと思う。

「上昇思考の継続」というのは次年度以降が本番となる「1部復帰、定着」という目的を意識し続けることである。一例を上げると、3部という低いレベルに合わせた試合は決してせず、力の差を見せつける試合内容を要求し、上位レベルの相手に対しては「来年以降の京大は要注意」という印象を与えられる試合を心掛けることで、具体的なハードル(目標)を見つけにくい一年間が、次への確実なステップとなるように心がけた。

以上、昭和61年度の紹介内容は具体的戦術、システムより運営方針に終始し、年代記として要求される趣旨と多少ずれてしまったと思うが、私も含め当時の最上級生に課せられた最大の命題は、自分たちのことよりも、下級生にバトンタッチするときにチームがどうあるべきかを考えることであつた点を理解していただき、お許し願いたい。

近況報告——現在のサッカーとの関わり——



昭和62年卒業 中村陽介

近況報告も兼ねて、現役諸君には今あまり関係のないサッカーの世界を紹介したいと思います。

□ 小中学生のサッカー

卒業して以来10年間、休日は東京都町田市の少年サッカーチーム（小中学生）のコーチをしています。昔の走る根性サッカーとは違い、どのチームも個人の技術、特にボールコントロール技術は、我々が子供の頃と比べ格段に向上しています。

これまでの自分達のコーチ方法の反省も含め、今後さらにレベルアップしていくために何をすれば良いのか、小中学生のコーチ達が考えていることを簡単に挙げます。

① 教えすぎない

創造性のあるプレーをするためには、自分で考え判断する能力を伸ばさなければならぬ。よって、アドバイスはするが、あまり一方的に沢山教えすぎない。

② ワンタッチコントロール

高校生になってプレスサッカーに対応できるように、状況判断のスピードとその判断を表現するワンタッチコントロールの意識と技術を高める必要がある。

③ 勝敗にこだわる

勝ち負けの結果を重要視するという意味ではなく、常に真剣勝負をしていないと能力を伸ばせないし、ファイティングスピリットを養えない。

□ チョットおじさんのサッカー

京大、関学、同志社、神戸大OBの同年代を中心としたチームを作り、世田谷区の大会に出ています。京大OBでは私の他に森一晃君、大谷一博君（ともに昭和62年卒業）が参加しています。ひょんなことから芋蔓式にメンバーが集まり、楽しく試合をしています。もし参加したい方がいればご一報を。

□ フランスのおじさんのサッカー（未来の日本のおじさんのサッカー？）

平成8年の春、仕事の関係でフランスのリヨンを訪れました。幸運にも時間が取れ、リヨン対モナコの試合を見に行くことになりました。早めにスタジアムに行き、当日券を買い、席に着いていると、試合開始2時間くらい前に前座試合が始まりました。リヨンのおじさんチーム対どこかのおじさんチームの試合でした。選手は元プロ選手ではなく、そのリヨンサッカークラブに所属するシニアの選手達でした。ユニフォームもプロと同じものを着けています。早目に来た観客もパラパラと入っており、良いプレーには拍手や声援が飛び、選手達は楽しそうにはつらつとプレーしていました。

アマチュアのおじさんが、プロと同じグラウンドで、観客の前でプレーできる環境があるということに驚かされると共に、地域に根付いたクラブチームの歴史を感じさせられました。

転機、3部転落と松本郁夫氏の講習会



昭和62年度主将 河原崎隆一郎

1985年(昭和60年)、私が2回生の時、3部リーグに転落したことは、京大サッカー部にとって大きな転機だった。それまでにやってきたあらゆることを見直すという意味で。86年春、京大宇治グラウンドで催された関西学生サッカー連盟主催の講習会は、松本郁夫氏を招き、私にとってサッカー観を補強・改革する大きな事件だった。私はその後2年間、そこで学んだことを京大サッカー部で徹底的にやろうとしたのだと思う。

技術面では基本を重視した。

戦術面は最重要の課題で、通常誰でも教わる個人戦術すなわち

- ①周りを見る。
- ②ボールに寄る。
- ③パス・アンド・ゴー。

に加え、集団戦術

- ①ボールが動いている間にプレーする(ポジショニング)。
- ②ボールの背後の選手がプレーする(プレス・ディフェンスやオーバーラップ)。
- ③リズムを作る(長短のパス、パスとドリブル、グラウンダーと浮き球等)。

を常に言い続けた。

体力面では90分走れることを目標とし、長距離走、ダッシュ&ターンに加え、乳酸性運動で一番きつい400メートル走もやった。

社会人サッカーを経て現在ブラジルに住み、いろいろなサッカーを見てきた今振り返ると、技術・戦術の考え方に関しては間違っていなかったと思うが、経験不足から来るバリエーションの少なさ(練習がつまらなくなる)と、うまくいかないことをうまくいくまでしつこくやるというスポーツ上達にとって好ましくない日本的根性練習とが問題だったと思う。

体力練習については大いに反省するところがある。選手にとって一番重要なのはいいコンディションでゲームに臨むことだが、当時の練習はドイツ式だったため日本人にとっては無理があり、また個人差を考慮しなかったことも問題で、ケガで泣いた選手達には申し訳ないことをしたと思う。当時からブラジル式のトレーニングを知っていれば、と思う。ただし諸先輩には悪いが、それ以前の不合理と思われた練習はできるだけさけるように努めたことも事実である。

システムは、世界では82年のスペイン・ワールドカップからすでに主流であった4-2-4のシステム、バック・ライン以外はゾーン・ディフェンスを採用した。私はバック・ラインもゾーン・ディフェンスでという考えだったが、当時の副将でディフェンスを見ていた安藤君の意見で、バック・ラインはマンツーマンを維持することになった。これも学生だけでやっている弊害で、経験豊富な人に教わっていれば違ったと思う。

3部転落後1シーズンで2部に復帰した我々の最大の目標は1部リーグ昇格だった。春

のリーグは散々で、同大戦・東大戦もともに敗れ、私がいた4年間全敗だったが、東大戦はその年の成果が出たいいゲームだった。近国体は13年ぶりの優勝を果たし、秋のリーグで1部に昇格する力は十分あったと思う。私自身は第2戦の前日に顎の骨を骨折し、ずっと出られなかった(順位決定戦でやっと復帰)が、何とかグループ2位に入れた。残念でないのは、やはり大舞台を経験した選手がいなかったためだろう、一番大事なゲーム(勝って2位以内を確保すべき阪大戦と順位決定戦の京教大戦)で勝てるはずの相手に勝てなかったことだ。

10年近くたった今思うと、当時我々はサッカーに関して全く無知で、レベルも低かったんだなあという反省と、サッカーばかりやっていて本当によかったのだろうかという疑問と、サッカーに没頭し充実していたなあという感慨が交錯する。「人生とは後悔し続けることである」と言った人がいたが、サッカーをしてきた事実とサッカーへの思いに全く後悔はない。
(1996.11.4.サンパウロにて)

甦れ、われらが29ers!!

昭和63年卒業 安藤正史

私がOBチームに参加してはや9年(平成8年現在)、早いものだとつくづく感じておりますが、最近とみに感じてしまうのが、メンバーの老化とそれともなう走力の低下であります。ついでに体力が落ちているので技術的にも低下しているの言うまでもありません。私自身、現役時代は持久力のみでサッカーをやっていたわけですが、こんなことが続くわけもなく、現在、没落の一途をたどっております。昭和63年に参加した頃はというと、ようするに今より全員が約10歳若かったわけですが、走力抜群、京都社会人2部にあって常に上位を占め、因縁の洛東クラブなどにいたってはけちょんけちょんにたたいたものですが、今は逆となって対戦するたびにポコポコやられているような気がします。なぜ、このようにOBチームが弱くなってしまったのかというと、それはやはり29ersの登場に負うところが大きいようです(注:正確にいうと弱くなったのは29ersであり、OBチームは1部で立派にがんばっておるようです)。

参加者が増えてきたのでチーム分割案が浮上(民営化ではない)、そしてナイスミドルズの誕生となったわけであります。ところが、最近若手の補充が少ないうえに、ミドルズの転勤が相次ぎ、さらに高齢化ともなう体力の低下が追い打ちをかけ、29ersは苦戦の連続であり、このままでは3部転落のうえ、二度とはいあがれない状況に追い込まれかねない様子であります。さらにまずいことに、負けても「負けた」という意識が1日もたず、「次の試合はいつかな」などという脳天気ぶり(私ですが)、これではさすがに勝てません。

そこで、最近流行の電子メールでメンバーに「歩け歩け運動のすすめ」を配信しました。これは、くそ忙しいこの日常において、いかにして体力の維持をはかり、ひいては2部残留、打倒洛東をめざすものです。といっても、まったくおおげさなことではなく、日常的に歩くことをこころがける、例えば車で10分の距離ならば30分かけて歩く、エレベーターは使わない(高層ビルは除く)、ひとつ遠い駅まで歩く、等々であります。これならばあえ

て着替える必要もなく、また弱っているひざを痛めることもなく、しかも、筋力の増加にともない、相手がドリブルしていくのをただ見送るといったきわめて悲しい思いもせずにくすむという、一石五鳥ぐらゐの奥の手であります。これでメンバーの体力が2割増加すれば、あと5年は2部におれるのではないかなどと、とらぬぬ算（一般には、とらぬたぬきの皮算用といいますが）を頭に思い浮かべる日々です。1年でも長く上のほうでやりたいなあなどと思っておりますが、「効果が出てきた」という話はいっこうに聞こえてきません。不安です。

甦れ、29ers!!

明るく楽しくそして1部定着を



昭和63年卒業 末 永 敦 康

私達が大学生だった頃は、世の中でスポーツといえば主に野球で、サッカーは今ほど人気はなかった。もちろん、サッカーのプロ化などは夢のような話であった。さらに、京大ではアメリカンフットボール部（以下、「アメフト」と略す）の時代であった。練習場の農学部グラウンドに関する主導権はアメフトに握られていた（こんなことを言っただけでは、マネジャーとしては失格なのであろうが）。

最近の新聞のコラム記事で、アメフトの監督の水野弥一氏が「スポーツを勝つことを目標とする事業としてとらえており、目標を達成するのに明るくて楽しいことがあると思う方がおかしい」という趣旨のことを語っていた。確かに彼らは練習に対してストイックな態度であったし、すべてを犠牲にしてアメフトに打ち込んでいた。そして事業としての成果をあげていたのだから、これもひとつのスポーツに対する考え方であろう。

さて、私達サッカー部は「関西学生リーグ1部復帰」を目標として掲げていた。この目標を達成するために、日々の練習、冬・夏合宿、東京遠征、練習試合等を精力的に行っていた。繰り返す基本練習、ひたすら体力のハードな練習、毎日続く筋力トレーニングがあり、練習そのものはつらく厳しいものであった。しかし、厳しい練習だからこそ、明るく楽しく練習すべきであると考えていたと思う（私達の学年の性格からいって、実際明るい雰囲気であったかは疑問であるが）。同じ練習メニューを行うのに、暗い顔で練習を消化するよりは、明るく積極的に練習に取り組むほうが効果があると思う。（もちろん、楽しく練習するために練習の負荷を軽くしたということはない）

結局、私達が4年生のときの成績は、2部Aブロック2位、順位決定戦で敗れて（これに勝っていれば、1部との入替戦であった）、残念ながら目標を達成することはできなかった。2年後には後輩達が、私達の手が届かなかった1部復帰を達成した。彼らのその当時の練習風景を見たことはないが、彼らのキャラクターからいって暗い重苦しい雰囲気だったとは思えない。このことから「明るく楽しく」の方針が間違っていなかったと、勝手に決め込んでいる。

現役諸君も明るく楽しい練習で、1部復帰、さらに1部定着を目指して頑張ってください。実をいうと「京大サッカー部出身のJリーガー」が登場することも、密かに期待している。

3部から1部への道程



昭和63年度主将 前田 洋

創部70周年おめでとうございます。私が入部してから10年余り経ちますが、歴史の重みを感じます。私たち平成元年卒業は6人ですが、入部時点では18人いたことを考えると随分減ったと今更ながら思います。理由は練習の厳しさ、価値観の多様化等いろいろあると思いますが、その中で最後まで続けてきたことをよかったと思います。

私たちの4年間を振り返ってみますと、1回生のときに2部最下位となりまさかの3部降格を味わいました。1回生の私にも3部降格と言うショックは口では言い表せないものがありました。しかし、ここからの京大サッカー部の再出発に参加できたことは大きな経験でした。

2回生になると、梅南さん（加藤晋央・昭和61年度主将）、隆さん（河原崎隆一郎・昭和62年度主将）を中心として3部にいながら1部と戦えるチーム作りがスタートしました。と言ってもこの1年間は京大が目指すサッカースタイルの模索、そして模索しながらも3部で優勝して1年で2部復帰を必ずしなくてはならないというプレッシャーの1年でした。

この1年を経過してようやく目指すべきサッカースタイルが見えてきました。それはロングパス中心からショートパス中心へ、マンツーマンからゾーンへの転換です。3回生の時は、サッカー研究に熱心なリュウさんを中心として全員の意識転換の1年だったように思えます。そして私たちが4回生になったとき、このサッカースタイルを体で覚える実践の1年間を過ごしました。春の合宿から5対3を中心としたパスワークの練習と1対2で1つのボールを2人でとる練習を徹底してやりました。正直言って、3回生のときにリュウさんに言われて頭でわかっているけど体でわからなかったことが、この1年間で体で覚えていけたと思っています。

この成果は、京都選手権で天理、京産を破り3位、同志社戦の久々の勝利等に現れました。唯一後悔される成績が秋のリーグでブロック2位に終わり、順位決定戦でも桃山大学に破れ、1部復帰を果たせなかったことです。この最終目標を達成できなかった悔しさは今でも忘れることはできません。しかし、唯一の救いは後輩がこのサッカースタイルの転換をもっと完璧に成し遂げて、翌年入替戦に勝利し、1部に昇格してくれたことです。

京大サッカー部の長い歴史には好成績を収める年もあれば、残念な成績に終わる年もあります。しかし、それぞれの年に掲げた目標に向かって努力することが、個人にとっても京大サッカー部にとっても大事なことだと思います。現役の皆さん、自分たちの目標に向かって頑張ってください。

「何をするか」より「如何にするか」



平成元年卒業 伊勢昌司

京大蹴球部を卒業してからはや8年余が経過した。京大蹴球部で過ごした4年間を振り返ってみると、月並みな言葉ではあるが、私にとって今後の人生の指針の一つを見出せたという意味で大変意義深い4年間であったといえることができる。

私が京大蹴球部で学んだ最大のことは、「何をするか」ではなくて「如何にするか」ということである。もちろんサッカーをする上で、試合に勝つことは最大の目的であり重要なことであるが、もっと重要なのは勝つためにどのようなアプローチを行ったかであると思う。如何にして自らのスキルアップを図るか、如何にしてチーム全体のレベルアップを図るか、相手の長所、短所を分析し、短所を如何に攻めるか、攻めるためには何をしなければならないか、相手との比較において、自チームの長所、短所を見つめ直し、長所を伸ばし、短所を補強するために、どのようなトレーニングを行わなければならないか等を考え、実践する。その上で、試合においてどのような戦術を用いて如何に相手に打ち勝つかを考える。運動能力という点で他チームに劣っていると思われる京大が、試合に勝つためには、このような「如何にするか」というプロセスが重要になってくるのである。日々の単純な基本練習を受動的に繰り返すのではなく、何のための練習か、試合のどのような場面を想定した練習かを常に意識し、能動的に取り組んで行かなければ、相手に打ち勝つことは到底できない。私にとっては、「如何にするか」という観点を疎かにして勝利を手にしたとしてもあまり意味がなく、たとえ負けたとしても、「如何にするか」というプロセスを十分に踏んだ上での敗戦の方が充実感があるときえ思えるのである。

私の京大蹴球部時代は、関西学生リーグ1部昇格という目標があったが、結局4年間2部、3部、2部、2部とプレーしたに留まり、「何をするか」という意味においては、残念ながら目標を達成できなかった。しかしながら、限られた時間で、如何に自らのレベルアップを図るか、如何に相手の短所を攻めるか、如何に効率良くトレーニングを行うかを考え、実践したと自己評価でき、「如何にするか」という意味においては、大変充実した、満足できる4年間であった。

京大蹴球部で得た「如何にするか」という教訓は、卒業後8年を経た今日でも、会社組織の中で生活する私にとっては、貴重な財産となっており、今日の私を形成する重要な要素となっている。「何をするか」はもちろん重要であるが、それ以上に「如何にするか」ということに今後も拘り続けていきたいと思う。

「いいプレー」の追求を



平成元年卒業 大目 裕 千

先日、テレビでトヨタカップの観戦をしました。ユベントスのアグレッシブなゾーンプレスと速い球回しに強い印象を受けたと同時に、中学と高校の恩師の言葉を思い出しました。中学当時の私はドリブル大好きなFWでボールを持つとゴールへ突進していた選手でしたが、ある時対戦チームにちょうどユベントスのデシヤンのようなプレーをする選手がいました。当時の部のコーチがその選手のプレーを指し、技術を持つプレーヤーがあのようなプレーをするチームが本当に強いチームであり、私にあのようなプレーをする選手になってほしいと言われたのを強く覚えています。もちろんマリオ・ケンペスを目指していた私は強い反発を感じたのですが、高校では、希望していたFWから現在でいうボランチになり若干ふてくされかつ体調も悪かった私は、その試合で全くドリブルをすることなく、ほとんどワンタッチかツータッチでボールをさばっていました。試合後監督が、大差の勝利でFWが大活躍であったにもかかわらず、私を最優秀選手に指名したのでした。もちろんなぜか分からなかった私は全然うれしくなかったのですが。

二人の言葉を理解することができたのは、大学に入ってからでした。怪我で満足にプレーのできない私は、ベンチから試合を見る機会が多かったのですが、その中でボールがうまく流れるときのプレーを良く観察すると、それは上記の二人の言葉につながっているのに気づきました。一見、個々を押し殺したプレーが、チームとしてのダイナミックなプレーに結びつくという、外で見て初めて気づく発見でした。当時の京大蹴球部は傑出した選手が多くいたわけではありませんが、個々のプレーヤーのチームプレーに対する認識が高く、試合の前半などは日本リーグのチームにも勝てるのではないかというぐらいすばらしいプレーが数多く見られたチームでした。(ただし、技術が伴っていなかったのでスタミナの切れる後半は並のチームになってしまったが)。残念ながら、私の在籍中は1部に上がれなかったものの、次の年には1部への昇格を果たして、いいプレーの追求がいい結果を残すことを示してくれて本当によかったと思います。現役の皆さんには、試合の結果だけでなく、いいプレーとは何かを自分たちで追求することを求めて部生活を送って下さるよう願っています。

私のサッカー人生の中間まとめ



平成元年卒業 島 正 樹

70年という京都大学蹴球部の歴史をまとめる本が制作される。この機会に、自分が確かに存在したサッカー部における4年間の記憶が忘却の彼方へ消え去る前にまとめておくことは、自分自身にとっても有意義なことである。しかし、残念ながら字数の関係で全てをここに投稿するわけにはいかないようなので、作成したfull paperは私の机の引き出しにしまっておくこととして、ここでは大学時代を中心に総括的にshort notesとしてまとめておきたい。振り返って見れば、私のサッカー人生はこれまですべて中途半端なまま節目を迎えている。中学校の時は広島市の大会で準優勝したが、ベスト4以上は堅いと言われていた県大会では準々決勝で足元をすくわれた。高校の時も県大会で3大会連続3位までは進んだが、インターハイにも正月の全国大会にもあと一歩（二歩？）手が届かず、新人戦後の中国地区大会では1回戦でまさかの敗退。そういった常に悔しい思いばかりしてきた私は、何の疑問もなく京大サッカー部に入部した。昭和60年4月19日のことである。私は当時京大のサッカー部についても関西学生サッカーリーグについても何の予備知識もなく、正直少し甘く見ていた。レベル的にもそんな高くないだろうし、すぐレギュラーになれるだろうと思っていたことを告白する。その後この甘い考えは半分以上間違っていたことを知ることになる。

そして、大学のサッカー部でも中途半端な成績しか残せないまま4年間はあっという間に過ぎ去ってしまった。1回生からレギュラーとして試合に出るチャンスを得ることが出来たにも関わらず、1回生では京大蹴球部史上初の3部転落の憂き目を見、2回生の時の最も重要な試合である2部復帰決定戦はレギュラーをはずされ外から見ていた。3、4回生では1部昇格の挑戦権を得る一歩手前の2部順位決定戦で2年連続の敗退という結果に終わった。京大での4年間において、私にとっては満足のいく結果は一つもない。達成感がないのである。もちろん、勝ててうれしかった試合はいくつもある。が、それは一時的な喜びでしかない。私が卒業した翌年に京大はついに11年ぶりの1部復帰を果たしたのであるが、それはかなり神憑りのであったように思える（入替戦は完璧な出来であったが）。いずれにせよ、後輩たちが達成できた1部復帰という目標が自分たちにはなぜ達成出来なかったのか？ その思いは多少薄れることはあっても今でも消えない。私が現役の頃のチームが土台となり、次の年にチームが完成したのだと先輩方は言う。確かに私が4回生の時試合に出ていた最上級生は2、3人だった。では私達のチームは完成していなかったのか？ 否、天皇杯では関西大会2回戦まで勝ち進み、秋季リーグも5勝2分と無敗だったが得失点差でわずか1点及ばず2位となった昭和63年のチームは、京大史上決して弱い部類のチームではなく、むしろ強い部類であっただろう。「運も実力のうち」とはよく言われるが、それではある意味で運がなかった私にはやはり実力もなかったのか？ 確かに、私個人の力はレギュラー11名でみれば11分の1以下であったかもしれない。それならば自分が懸命にやったと思っている努力や練習では足りなかったのか？ だとすればどこまでやればよかったのか？ 私がこれまで自ら満足できる結果が得られなかったのは、一体何が足りなかった

からなのか？

これらの数々の疑問は、経過に関係なく結果だけしか評価されない学生スポーツ界において、京大サッカー部という長い歴史を持つチームに一時期身を置いた私がこれから追突すべき永遠のテーマとして残されている。私はこれからもフィールドに立ち続け、ボールを追い続けることだろう。自らの疑問を解く鍵を見つけ、自らを納得させられるまで。

全員一丸、11年振り1部復帰



平成元年度主将 佐々木一隆

私の代で特徴的だったことは、

- ① 4回生が全員個性的(女子マネジャーを含む)で、発言力があつた上に相手を尊重する人柄だったため、下級生達になつかれていたこと、
- ② 京大サッカー部を1部に上げる為のプランニングと、それを実行する実力を持った副将が主将の下にいる組織だったこと、だと思います。

この副将(坂下君)は関西選抜のキーパーに選出される程優れた選手でそこで学んだ最新のトレーニング法(西独式ランニング、筑大方式ダッシュ、年間を通じたウエイトトレーニング等々)や戦術(ラインディフェンス)を持ち込みました。その結果当時の対戦チーム(確か大阪経済大)が「あいつら陸上部ですよ」と言い訳する程の体力と、全員の戦術理解を備えた強力なチームとなっていたと思います。また、①のお陰で、チームの風通しが非常によかったと思います。主務(浅井田君)が発案し、1年間全員の持ち回りでつづり続けた「サッカー部日記」も、意思疎通を図る上でも面白いものでした。自分のサッカー論をぶつ奴、弱音をはく奴、それを叱咤激励する奴、なぐさめる奴、サッカーに全然関係ないことを書く奴もいました。各々漢字を間違えたりしながらも天理大に勝って一部に上がった日まで続けました。

チームは体力的、戦術的にもタフでしたが精神的にもタフだったと思います。その年最終的には昇格しましたが、順調だった訳ではありませんでした。秋のリーグ戦では初戦で負け、第3戦でも負けてしまいました。敗戦直後どうやって立て直そうか考えていた私に1回生が言いました。「ボンさん(私の当時の呼び名)まだまだこれからですよ。いけますよ」と。その時、「えらい強いチームになったな」と驚いたことを今でも憶えています。実際他チームのもたつきもあり、最後にはFWの気迫で、相手選手をオウンゴールに追い込んだりして、終わってみると奇跡的にAリーグ2位になっていました。

その後は勢いのまま順位決定戦を乗り切り、入替戦も自分達のサッカーをして天理大に完勝しました。最後までチーム内で分裂することなく、本当に一丸となって1部入りを勝ち取ったと思います。

個性的な4回生とカリスマ的な副将、そこに逃げ道を作れる主将と、マメな主務。そんな4回生の下で、十分能力を発揮していた下級生達。表現すればそんなチームだったのではないかと思います。



天理大を3-1で破り、1部復帰を果たした瞬間。平成元年11月25日（ヤンマー瀬田グラウンド）

忘れられないPK



平成2年卒業 佐藤克文

京大サッカー部OBそして現役の皆様、いかがお過ごしでしょうか。この文章が長井さんのところに届く頃（96年12月）、私は南極大陸に向かう船の中です。フランスの観測基地のデュモンドビルというところに、来年2月までアデリーペンギンの調査に行くのです。現在私はウミガメやペンギンといった海洋動物の調査を仕事としています。砂浜や海辺を延々と歩いたりせねばならず、サッカー部時代に鍛えた体力が大いに役立っているわけです。調査の合間に砂浜に座って、じっとカメの上陸を待っている時や、ペンギンがカーカー鳴いている集団繁殖場でぼけっと立っている時など、一人思い出せばニヤニヤしてしまう思い出があります。それは、あるペナルティキックのことです。

みなさんご存じの通り、PKなんてもんはだいたい成功するもので、決めて当然。しかし、大切な試合の大切な局面で行う場合、あれほど簡単なPKがえらく大変なものに思えてきます。思えてくるという点が重要で、つまりプレッシャーのある状況下で、きちんといつも通りのことが出来なければならない。そのため、PKの練習をする時には、ジュースを賭けたり、晩飯を賭けたりするわけです。ワールドカップの決勝戦をイメージして練習するという方法もありますが、私にはあまりにも無縁の世界で、イメージするにはかなり無理があります。当時私がおその際に頻繁にイメージしたのは（ペナペット？）、関西一部リーグ昇格を賭けた試合中のPKでした。大学一回生の秋に初めて目の当たりにした他大学同士の一部昇格を賭けた入替戦は、それはそれは熱い、独特の雰囲気を持った戦いで、今自分が所属する大学の体育会サッカー部というところがどういうところかを感じさせてくれるものでした。

一部昇格を賭けた試合中のPKという状況は、本当に訪れるかどうかはわからないけれども、うまくいけば本当に来るかも知れない、ちょうど良いイメージでした。そして、そんな状況が4回生の時に本当にやってきました。それは秋のリーグの後に行われた天理大学との一部二部入替戦の二戦目でした。一戦目を引き分けていたので、勝てば一部昇格という試合でした。そんな試合の前半、0-0の時点で京大がPKを得たのです。その時まで、

試合中のPKを蹴るのは私の役目ではありませんでした。ところがなぜか入替戦の前あたりから「アツギ（私の通称）おまえ蹴れ」てなことになっていたのです。自分にその大役が回ってきたということ自体が大変嬉しいことでした。そしてその時、イメージ通りの弾道でゴール右下に決まったのも嬉しいことでした。キーパーはちゃんと予定通りにボールとは逆の左に飛んでいました。これは偶然ではなく、ちゃんとそう引かかるような微妙なフェイントが入っているんです、私のPKには、フッフッフッ。

今、過去を振り返ってとても後悔していることがあります。それは一部昇格を果たしたその試合を撮ったビデオテープに、「ムツゴロウと愉快的仲間達」を重ねて録画してしまったことです。「人は過去に縛られてはいけない」などといった若気の至りがなせる愚行でした。ああお願いします、誰かダビングさせて！

一部復帰の年の チームづくりに取り組んで



平成2年卒業 阪下 昭二郎

4年間の学生サッカーの中でも私にとって何より印象深いのは最終の一年間だった。それは自分自身の考えがチームに多分に反映された故という要因が大きく、その面に関しては大変に幸福であったと思う。

当時、学生という限界はあったものの、私自身は外のサッカー界と触れる機会に恵まれ、それを大いに活用して様々なサッカーの考えを吸収して蓄積するとともに、出来る限り多くの良い試合を実際に見て目を肥やすトレーニングをした。そして、その下準備が大きな意味を持つようになった。なぜなら、サッカーを深く知るつれ、自分は今までサッカーを知っていたのかという思いが浮上し、それは自然とそれまでのチームを根本的に問い直すことにつながった。もっとスペース、ポジション、動きを理解してサッカーをする必要がある。そのことが攻守を有機的に結びつけたゾーンディフェンスの採用へと実践された。

半ば手探り状態で進んだので、結果は順調に得られなくても致し方なかった。しかし、夏になるとようやくプレイヤーの戦術理解や意思疎通が形成されはじめ、チームは意図を持った生き物としてフィールドで力を発揮し始めた。そして、ついに秋のリーグでは目標通り一部昇格を達成した。幸運な部分があったのも確かだが、実感のあるチーム力の勝利として嬉しかった。

以上は表層面を粗描したもののだが、現実的にはプロセスやチームの構成員には様々なものが含まれ、簡単にはその中身を記せない。ただ多様な要素を含むそのチームの中で学んだことは大略以下のようなものになる。まず、チームの目標に向けた最大出力発揮のための合目的的行動が、年間を通じて高い集中力を維持して遂行されること。このことを高いレベルで実現することがチームないし個人を満足化させる大事な要件となる。但し、それだけでは不十分だ。何故ならサッカーは楽しい遊戯であるボールゲームが礎であり、そのベースの感覚を根絶させてはプレーの喜びも創造性も失われるだろうからだ。その両者が十分配慮されつつ上手く調合し、チーム員の間で共通感覚が持たれるようになる。我々の時代はそれに鈍感だったわけではないが、十分に達成できたとは言いがたい。チームの目標

を多少優先させて歪ませた部分を認めねばならない。最後にチームに謝ったが表現が下手なので上手く伝わらなかっただろう。ともかく、私はチームに大きな責任を負っていたが、そのことが逆に喜びを与えてくれた。当時の試みを実験的試行と捉えるところがあって、取り組みがより真剣で、内容がより緻密で、試みがより大胆なほど楽しかった。いかんせん不完全な試みだったが、それに携われた自分を改めて幸運だと思う。

相手のオウンゴールと PKを誘って1部昇格

平成2年卒業 中小路 徹

おそらく、京大史上最も得点感覚のないFWだった私の脳裏に浮かぶのは、オウンゴール（当時の自殺点）を2試合連続で誘った場面です。それも、いずれも1部昇格へつながる、大事な試合でのものでした。

リーグ最終戦の関大戦。勝たねば、入替戦出場の望みが絶たれる状況。1-1で、残り5分ほどでした。MF村橋（通称バンク）からの縦パスに猛然と反応したら、何と、競り合っていた相手がゴールに蹴り込んだのです。GKへのバックパスだったのか、私の迫力に思わず足が出たのかは分かりません。いずれにしろ、これが決勝点でした。

次は、入替戦出場をかけた大産大戦。開始10分ほどでしょう。MF山崎（通称ショー）から、右へ走り込んだ私へ絶妙のパス。センタリングしたら、下手だったのが幸いしました。ボールはDFに当たり、空中浮遊。味方の頭を越え、GKの指先をかすめ、サイドネットに吸い込まれました。先制点でした。結局、2-0で勝ちました。

ついでに言えば、天理大との入替戦も、先制点は私がもらったPKでした。ただし、ドリブル突破を引っかけられるといったような、格好良いものではありません。

追いつきそうもないボールでも、追ってはみるものです。相手GKはそんな私の愚直さが気味悪かったのでしょうか。ボールをキャッチした後、なぜか顔面パンチを浴びせてきたのでした。パンチは当たりませんでした。主審は乱暴行為と認定しました。DF佐藤克文（通称アツギ）が冷静に決め、3-1で1部昇格を果たしました。

それにしても、スパーンと、気持ちよく決めた思い出は、ないんかいな？

1部で通用するチームづくり



平成2年度主将 前田 敦

私が主将を務めた年代は、非常に幸運かつ恵まれた年であり。またそれがゆえに私自身いろいろと悩みの多い年でもあった。関西学生サッカーリーグ1部昇格。悲願であったこの目標を達成したのは、私が3回生の時。まさか自分が京大サッカー部に在籍している間に1部に昇格できるとは思ってもみなかったし、まして1部で試合することができるなど……。

私の前の代には、阪下さんというプレーヤーとしても人間的にも突出した才能を持つリーダーがおり、彼がいなければ1部昇格はなかったと言っても過言ではない。彼の指導(洗脳と言った方が正しいか?)により、部員の意識改革がはかられ、チームのレベルは向上。もちろんプレーの面でも守備の要のGKとして大活躍。彼の存在は本当に大きかった。それだけに、彼の抜けたチームで、さらにレベルの高い1部リーグで通用するチームを作るのは、相当困難であった。

そこで私が特に意識して取り組んだのは、(1)自主性を重視し、上から与えられてやられるのではなく、自ら課題を持ってサッカーに取り組む意識を持たせる、(2)基本練習を徹底重視し、出来てあたり前のことが自然に出来るようになる、ということ。そして私自身の物足りなさをカバーしてもらうために、最上級生全員に自分のことだけでなく、チームのことを考え行動してもらうよう働きかけた。また、上下関係のないチームの雰囲気づくりや各人のサッカーに対する考え方を深めるために、ノートを回してみんなの意見を聞いたり、意見交換をしたりできる機会も設けた。このような取り組みは少なからず成果を上げたと思える。

しかしながら、1部リーグで本当に通用するチームを作るには、個人のレベルアップやチームの雰囲気づくりといった基礎的な要素の上に、誰をどのポジションでどのように使うかといったメンバー構成や、そのメンバーによってチームとしてどのように戦えば良いかといったチーム戦術のとり方が非常に重要であり、その点は指導者のいない我々にとって特に難しい問題だった。

結局、1部リーグで1勝5敗1分の最下位で自動降格。とても残念な結果に終わったが優勝候補であった京産大を破った試合は思い出に残る名試合であったし、大経大や京教大にも勝利できるレベルにあったと思う。そして何よりも、自分達で練習を考え、メンバーを考え、戦術を研究し、試行錯誤を繰り返して努力してきた軌跡は、我々のサッカー生活をより充実したものとし、今後の京大サッカー部に対しても意義あるものであったと信じている。

平成2年度 京都大学サッカー部方針

*目標：インカレ出場

*京大サッカー部員として

- ・京大サッカー部員として誇り、自覚を持つ→皆に愛される部に
- ・挨拶をしっかりとる
- ・ボックスをきれいに使う→掃除する努力よりもゴミを出さない努力
- ・物を大事に使う

*練習について

- ・指導者がいない→各個人がしっかりとる
- ・目的意識をしっかりと持つ
- ・けじめをつけて集中する
- ・常に全力を尽くす→プレーを途中でやめない、最後まであきらめない
- ・全員で雰囲気づくり
- ・集散はグッシュ
- ・自分の個性（特長）を伸ばし、欠点をなくす
- ・うまい人のプレーを盗む（ビデオでも）
- ・お互いにチェックしあう
- ・味方に敵を作らない、すねない、怒らない
- ・球拾いも練習できる→自分で工夫、人より努力する
- ・健康管理（特に試合前は注意）←チームの一員という意識
- ・出席はマネジャーに言う（日誌につける）
- ・練習開始10分前までにボックスを出てリフティングをする
- ・遅れてきた者はキャプテンに言いに来てから参加
- ・練習の最後はボールを集めて数える→足らなければ全員で探す

サッカーノートの使い方

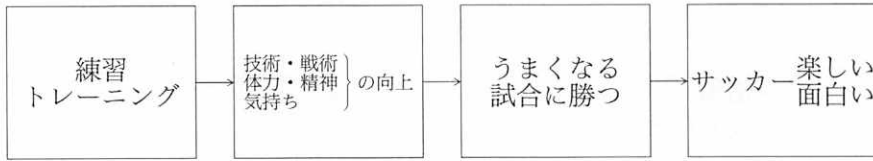
去年の反省 個人の目標 体力記録 試合記録、反省 ビデオ感想、考察等	}	提出してもらうことがある
--	---	--------------

チーム発足直後、1、2月の練習、トレーニング計画

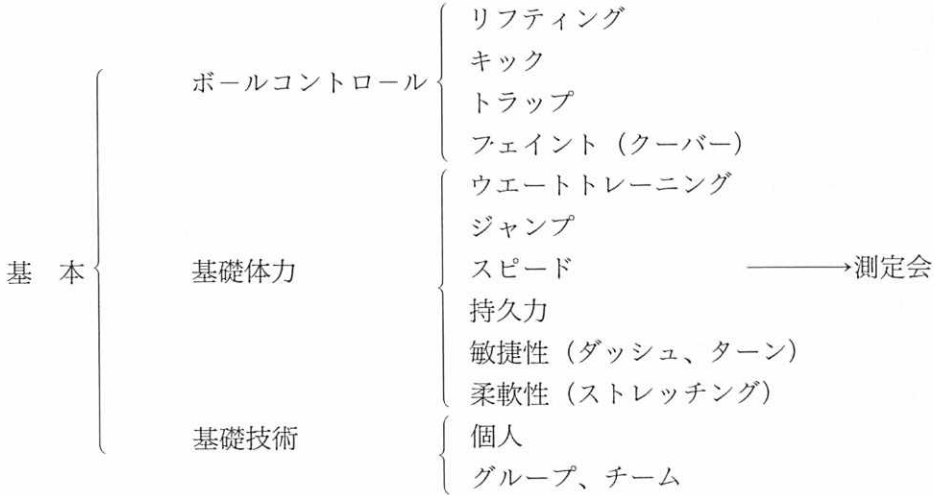
- ・1週間の基本パターン

月	火	水	木	金	土	日
(休)	体力トレ	ボール(J)	(休)ビデオ	体力トレ	ボール(J)	ゲーム中心

時間：16：00～18：00
(前後に自主トレ)



・基本を徹底練習



- ・イメージトレーニング → ビデオ
- ・メンタルトレーニング → 精神面の強化
- ・ゲームを想定した or ゲーム形式 練習
- ・自主トレーニング → 得意な面をさらに伸ばす、弱点克服
- ・ウォーミングアップ、クールダウンは必ず行う

忘れ得ぬゴール



平成3年卒業 石田 隆

僕にとっての忘れ得ぬゴール。それは僕の公式戦唯一のゴールだ。平成2年10月13日、雨。関西学生サッカーリーグ1部、京都産業大学戦。1-2とリードされた後半、右CK。ペナルティ中央に構え、ワンフェイント入れてニアへ走って飛んだ。松下からのボールを初めてジャストミートし、ニアポストへ。しかしボールはファーポストへ。祈るようにボールを見送る。ボールは相手DFの頭上を越えてゴール左上へ。ゴール！ 入ったと思った時には、もうフィールドを走っていた。練習の成果？まぐれ？何でもいい。大学4年間公式戦唯一のゴール。そして、この後3-2と逆転に成功し、秋の1部リーグ2位の京産大に勝った。この1点の有無で、僕の京大サッカー部の思い出は、

大きく違ったものになっていただろう。

風通しの良いチームづくりと成果



平成3年度主将 衣川 剛

私が主将を務めたのは平成3年であるが、その1年は、前年に関西学生サッカーリーグ1部から2部へ自動降格し、その味わった屈辱からスタートしたものであった。

リーグの運営方法も、この年から変わった。すなわち、春期リーグから、1-2部、2-3部の入れ替えが行われることになったのである。これは、われわれにとって1部復帰へのチャンスが増えたことを意味すると同時に、毎年、春期リーグにおいては戦績の奮わない京大蹴球部にとってはピンチをも意味した。実際、春期リーグの結果は、伝統を守り2部5位であった。直後の同志社戦では、2軍メンバーを送り込んできた相手に快勝したものの、東大戦では、内容の悪い凡戦を演じ、1対1の引き分けに終わった。

わがチームの採ったシステムは、2年前の1部復帰を果たした当時のものを踏襲した。すなわち、DFは4枚でラインディフェンスを採用、MFは中央にディフェンシブハーフを置き、FWは2トップというものであった。前年は、1部リーグの強豪を相手にまわし、ほとんど受け身で守備ばかりしていたので、その鬱憤を晴らすべく攻撃的なチームに仕上がったと思う。その攻撃も、オープンスペースへ大きく蹴って走るというキックアンドラッシュを捨て、中盤でショートパスをつなぐ（つなごうとする）という意識を強く持つように変わっていったと言えよう。現に、秋季リーグでは、色々なパターンで結構得点できていたように思う。FKにサインプレーを導入したのも新しい取り組みであった（但し、ほとんど成功しなかったが…）。

秋季リーグでは、ブロック2位、順位決定戦で、関西大学に延長の末1-3で敗れた。関西大学の昨今の活躍を目の当たりにするにつけ、何とも悔しい敗戦であった。神戸大学との入替戦でも1点差で敗れ、結局、1部復帰は果たせずに、シーズンの幕を閉じたのであった。主将であった私の考えでは、実は“風通しの良いチーム”を目指そうとしていた。70余名の大所帯であったが、当然ながらゲームに出られるのは11名であり、残りの部員も心からチームの1部復帰を信じチーム内で与えられた役割を果たせるようなムード作りを、常々やろうと考えていた。実際はどうであったか、当時のチームメイトはどう感じ、どう評価してくれるのか、それについては全く自信がないけれども、あれから4年近く経った今日でも「またあのチームでサッカーがしたい」と考えてくれる方々が少しでもいれば本当に嬉しいことである。

サッカーはチームスポーツである。チーム全体が一つの目標を目指し、がむしゃらに体を動かし、その結果として大勝利をものにした時、全員が心から喜べる……そんなチームが私の理想であった。実際の達成度も、当時のメンバーの評価も低いであろうが、私は「あのチーム」でもう一度サッカーがしたい。

Field of Dreams



平成4年卒業 松本 浩

この度は京都大学蹴球部70周年誠におめでとうございます。1OBとして伝統ある蹴球部に更に勲章ができたことを非常に誇りに思います。

私の大学生生活を今振り返ると、サッカーしかやっていなかったような気がします。本当について最近の事だと思っていましたが、考えますと、その当時1部をめざししのぎを削りあっていた関大、関学、阪南、天理はばりばりの1部校となり、1部強豪校の大商大、大体大、立命館が2部でプレーしていることを知り、卒業して5年という短い時間ではあるものの、隔世の思いがしております。

しかし、未だに頭の中には鮮明に初の1軍公式戦デビューの神院大戦、1部での初勝利の京産大戦、4回生の時の1部をかけた関大戦、神戸大戦の事を思い出しますし、また一生忘れる事はできないと思います。しかし今思うと何よりの財産は、その間で得た、同期・先輩・後輩の人とのつながりと実感します。「淀むひまなき青春を 今宵かたみに宴して」を、今もなお継続して実践できる素晴らしい環境に感謝しております。サッカーというキーワードで同じ時間・空間をすごし、思いは色々あれ、1つの目標に向かい続けてきたからこそある連帯感が幸せな時をすごさせてくれるんだなあと思います。

今思うと、私にとってまさに京大蹴球部という場所は「Field of Dreams」夢の場所という気がします。年齢的にも体力的にもあの時間には戻れませんが、心のどこかにはもう一度あの時間に戻れば・・・という思いは今もなくなっておりません、というか一生消えないままでしょう。

今後もこのような付き合いが一生続けていければ・・・と思います。東大との定期戦やOB戦で、たとえ10分ハーフでもプレーができ、その後も互いに色々な事が語れる・・・そんなつきあいを一生続けていきたいと思います。

最後になりましたが、京都大学蹴球部が今後100周年、200周年と続いていき、できればまた1部で活躍してほしいと思います。その後輩の姿をOBとして応援できれば・・・と願っております。

大学初ゴール

平成4年卒業 森 茂 紀

1989年6月24日(土)、前日の大雨もすっかりあがり、暑すぎず寒すぎず絶好のサッカー日和であった。私はこの時2回生。それまで7年間続けてきたDFのポジションを去り、MFとして新たなサッカー人生を踏み出し、ポジションにも慣れてきた頃であった。この日は大阪市立大学を農Gへ招き、練習試合が行われた。天皇杯の京都予選を翌日に控え、2軍戦は天皇杯チーム(当時のチーム体制で、リーグ戦に出場していない者で構成されていた)で対戦した。私は運良くサイドハーフとして出場することができた。

天気は良かったがグラウンド状態は最悪で、お互いにボールコントロールに手間取るなど思い通りのプレーができないまま0-0で残り10分を切っていた。その時大阪市立大ゴール前で決定的なチャンスが生まれた。当時4回生で天皇杯チームのキャプテンを務めていた浜本さんにパスが渡り、つり出された相手DFの背後にぽっかりとできたスペースを私は見逃さなかった。この間約0.8秒ぐらいの出来事であった。私はスペースへ走り込む瞬間、浜本さんをちらっと見ると浜本さんもこちらを見ていた。つまりアイコンタクトである。浜本さんから出されたパスは小さな弧を描き相手DFの背後にポトリ。落ち際を私はトラップし、右足でシュート! ボールはキーパーの手をかすめるようにすり抜けゴール右サイドネットを揺らした。

これが私の大学での初ゴールの思い出である。現在もあの時の感動を求めてサッカーを続けている。

思い出の東京遠征



平成4年卒業 西澤 賢太郎

京大サッカー部を卒業してちょうど5年が過ぎようとしています。久しぶりに振り返ってみますと、現役時代がずいぶんと遠くに感じられます。今でも多少は緊張感のあるサッカーをやってはいますが、なによりも現役時代の熱い気持ちは、やはりあの時代ならではの特別なものだ、と再確認するところでもあります。

大学時代の4年間は、他のサッカー部員と同様、サッカーに関してはそれなりに濃い密度で過ごしてきたので、思い出に残っている出来事、場面、試合等を数え上げるとキリがありませんが、その中でも僕の頭の中でひときわ輝いている記憶といえば、大学2回生のときの東京遠征(1989年8月)であります。

1989年の東京遠征の拠点は、お馴染みの検見川の東大グラウンドであり、4泊5日で5試合という日程でした。その年は特に目玉となる試合は組まれておらず(その前年は、順天堂大、筑波大等と試合をした)、相手は初日から順に、成蹊大、千葉教員、中央学院大、

そして東大宿舎で合宿中だった古河千葉、そして同じく合宿中の広島大でありました。

初日の成蹊大戦だけは、検見川ではなく成蹊大で試合があったのですが、なぜか遅刻者が続出し、レギュラー4回生も含めた部員の半数以上が罰として試合中にフィールドのまわりを走っていたのを覚えています。そのおかげか、試合には途中まで出させてもらいました。2-0で勝利。

二日目の千葉教員は、5日間で最もハードでした。相手が強かったのと併せて蒸し風呂のような暑さとで、せつかく試合に出してもらったのにほとんど仕事ができなかったことだけを覚えています。当時、ディフェンシブハーフをやっていたのですが、キーパーの阪下さん（当時副主将）とセンターバックのトモさんこと佐藤智典さんの絶え間ない指示の声が今でも頭に残っています。そして試合後、阪下さんに「サイドキックの練習を100回やれ」といわれ、へろへろの状態で、当時一回生だった行方君とサイドキックの練習をしました。結果は鳴り物入りで入ってきた当時一回生の柘植君がこの試合でも得点を重ね、1-0で辛勝しました。また、その日は試合が午前中だったのですが、昼飯の“ケミカレー”がほとんど食べられなかったことを覚えています。個人的に暑さとスタミナに自信がなかったこともあり、そのころは試合までの時間をどう過ごすか、食事や水をいつ摂取するかといったことばかり気にしていたように思います。

そのような中、三日目の中央学院大学（4-1で勝利）、四日目の古河千葉（2-0で勝利）と試合を重ねていくうちに、自分のポジションに求められていることが出来るような手応えを感じ始め、試合が楽しくなっていったのを覚えています。最終戦の広島大戦は、その当時の京大のあらゆる得点パターンが見られるオンパレードで7-0と圧勝し、ベンチもお祭り騒ぎとなりました。

このような、肉体的にも、気持ち的にも充実した合宿を経る中、次第に自分にも自信がつき、レギュラーポジションというものを意識していったのでした。ただ、今から振り返れば、レギュラーをとるだけでなく、もっと高いレベルを目指すべきだったという気持ちはあります。

その年は、この東京遠征で負けなしの5連勝のあと、近畿国公立体育大会でも優勝し、さらに秋季リーグにて2部3位となり、当時1部6位の天理大との入替戦の結果、1勝1分けで11年ぶりに1部に昇格したのでした。

いや、最後に読み返すと本当に単なる思い出以外の何ものでもないなと感じますが、同世代の同じ体験を共有した人たちの間で、そういえばそんなこともあったなと振り返ることが出来れば、それでいいような気がします。いずれにしても、70年という長い京大蹴球部の歴史の中で、非常に短い期間ではありますが、その中に確実に自分が存在して、きちんと足跡を残してきたのだ（他人の評価は別として）と、今、思えることにわけもなく感謝したいのであります。

「1部リーグ復帰」の目標を掲げて



平成4年度副将 行方 一也

平成4年度当初の目標は、昨年度あと一步のところまで逃した「1部リーグへの復帰」ということで全員が一致し、各種大会や定期戦、遠征、練習試合はすべて春季・秋季リーグでの優勝及び入替戦勝利への調整として位置付けた。結果としては京都選手権2位、近国体優勝、阪大定期戦と同志社大定期戦は勝ち、東大定期戦は引き分けと、良い成績を収めたが、部員の心は「1部復帰」が全てであった。また、チームの底上げを画策し、いわゆるBチームを京都社会人リーグへ登録し、全体のレベルを向上させる工夫をした。

リーグにおける戦い方は、過去3年間に蓄積した戦術をまとめ、そこに出場メンバーの個性（長所）を生かす方法を模索した。具体的には、①システムは4-4-2 ②ラインディフェンスによるゾーンマーキング ③速い攻守の切り替え、を意思統一の基本とし、攻撃・守備のパターンを、そのポジションにつく選手の個性を考慮した上で明確にした。その結果、非常にシンプルな戦術を持つ攻撃的なチームが出来上がった。中央ラインに大きなサイドチェンジができる選手（安永、登り、宮尾）を配置し、両サイドに攻撃力のあるDF（酒井、行方）を据え、得点力のあるFW（柘植、岩田）を最前列に構え、対戦相手によって、ターゲットとなる大型選手（高田）やスピードのあるMF（池田、長瀬）、当たりの強いDF（加藤寛、槌谷）など様々な肉付けをした。最終成績を見ても、公式戦は27戦14勝8分5敗、そのうち敗戦は1試合を除き全て1点差、最高失点は2点、逆に最高得点は6点と、「負けないチーム」であった。

この結果を支えたのは、その3年前の「1部昇格」と2年前の「1部での戦い」の経験であったと思われる。ゾーンディフェンスという戦術は3年間で理論的に煮詰められ、経験的に熟成された。戦術がチームに浸透し、具体的なイメージトレーニングを可能にした。また、先輩諸氏から受け継いだメンタルとフィジカル両面のトレーニング方法が選手にとって効果的であり、ピークが試合時にくるように調整できたことも挙げられる。前述のリーグに照準を合わせた計画性も功を奏し、試合において十二分な力を発揮できた。

そして運営面で陰ながらチームを支えた主務・マネジャーの努力も大きい。前述の社会人リーグ参加によって事務的な仕事が飛躍的に増加し、繁雑さは並ではなかったが、選手は試合にのみ専念することができた。

かくして盤石の態勢で臨んだリーグ戦であったが、春季リーグは2部Bブロック2位という結果に終わり、目標達成は秋に持ち越された。秋季リーグは「負けないチーム」の本領を発揮し、7戦して4勝3分、2部Bブロック優勝を果たし、順位決定戦に駒を進めた。

トーナメント方式の順位決定戦の第1回戦の相手は大阪市立大学であった。一芸入試により高いレベルの選手を集めた大市大に、個人のレベルの差で徐々にペースを奪われ、0-1で惜敗した。自動昇格の望みは断たれ、入替戦出場枠である3位を目指して戦った3位決定戦は桃山学院大学であった。試合は苦しいながらもチャンスを多く作り、一進一退であったが、決定機に得点ができず、1失点を返せないまま0-1で涙を飲んだ。

多くの優秀な選手を集める私立大学が乱立する中、頭脳を駆使し、組織力を強め、学生の力でチームを確立していく国立京都大学の1部復帰・1部定着の足掛かりは果たせなかった。目標を果たせなかった敗者ではあるが、技術の差はあっても組織力で立ち向かうことができるという一つの足跡を残すことができたのではないだろうか。

東大定期戦の思い出



平成5年卒業 宮下正弘

私の京大サッカー部在籍中において印象に残っている試合は、数え切れないほどあるが、特に自分が出場したということもあって、東京大学との定期戦が一番に挙げられるだろう。東大定期戦には二回生と四回生の時と二回出場したが、東大に対して久々の勝利であった二回生の時の試合は非常に感激したのをよく覚えている。私たちが入部する頃まで、東大は非常にまとまりのある好チームであったらしく、試合はもちろん、その後のレセプションでも力のあるところを見せていたということ、先輩方からよく聞かされていたものだった。そのせいもあったと思うが、レセプションではしっかりと部歌は歌えるようにと、東大定期戦の前になると、練習後に部歌の練習をしたものだ。もちろんサッカーの方も、その年の前半を締めくくる試合でもあり、私自身このような大舞台を経験したのはその時が初めてであったので、かなりの緊張感を持って臨んだのであった。試合の結果は先にも述べたように、PKによる一点をなんとか守りきって、見事勝利を得ることができたのだ。この勝利により、ようやく東大に対し一矢報いることができたという感があった。最近ではどちらかという、京大が優勢であるらしいが、京大がこれまでそうであったように、劣勢のチームは今後変化を遂げて、巻き返しを図ってくるだろう。そして、再び形勢が逆転するときが来るだろう。このように両チームがお互い意識し合って、切磋琢磨する、そのような雰囲気京大と東大との定期戦には存在するのではないだろうか。

濃紺の思い出

平成5年卒業 木村崇博

「ここに来るまで、いろいろあった…」

阪下副将は、潤んだ目で遠くを見つめながらこうつぶやいた。

これは、私が1回生だった頃、念願の一部昇格を決めた天理大学との入替戦の後に部員に向けて語りかけた、阪下副将の最初の言葉だった。なにげない、平凡な言葉である。だが、何とも言えぬ重みがあった。あの一言を聞いた瞬間、あの日までの様々な思いが走馬灯のごとく次々とよみがえり、勝利の喜びがそれらと重なり合い、胸が一杯になり、思わ

ず泣き崩れてしまったのを今でも鮮明に覚えている。

私は、1回生の時は、残念ながら公式戦は新人戦しか出場する機会がなく、レギュラーなど到底及ばぬ位置にいた。秋のリーグ戦が近づくにつれ、1軍とそれ以外は切り離され、いよいよレギュラー偏重の練習になると（これは、当然の事だが）チームの緊張感が高まっていくのとは反比例するかのように、気持ちが腐ってしまいサッカーに対する情熱が冷めていったのを覚えている。実は、天理大学との入替戦の時は、すでに退部する決意をしていたので、ベンチサイドから鳴り物を片手に応援していたものの、非常に複雑な気持ちだった。しかし、チームの劇的な勝利が、それまで私の胸中に鬱積していた脇役しか演じられなかったくやしきやつらい気持ちにフィルターをかけ、代わりに今までに味わった事のない喜びと感動の涙をもたらしてくれた。不思議なもので、今、思い返してみると、私のその後の京都大学蹴球部生活の中で“選手”として出場して勝利をおさめた公式戦は何試合も経験しているが、応援しかできなかつたにもかかわらず、あの時ほど「うれしい」と純粋に、そして素直な気持ちでチームの勝利を喜び、深く感動した瞬間はなかつたように思える。

私のそれまでのスポーツ観では、「実際に選手として試合に出場しなければ、勝利の感動を味わえないから選手になれなければ意味がない」というドライな感覚だった。この考え方はあたりまえかもしれないが、それが強すぎたあまり、選手として出場する機会がなかつた1回生の時分は、腐ってしまっていた部分があつたのではないかと反省する。しかし、チームスポーツの場合は、選手としてだけでなく、色々な形でのかかわり方があつて、選手として出場できなくても選手同様の深い感動や悲しみを共有できるのだという、チームスポーツの奥行きを、あの時、学んだ気がする。非常に貴重な経験だつたと思う。京都大学蹴球部で過ごした4年間で経験した事や学んだ事は、他にも数知れず語り尽くせない。しかし、あの一瞬昇格の瞬間が、あの阪下副将の言葉が、最も印象深い。

今、こうして社会に出て現役時代を振り返ってみると、大文字山をバックに思う存分ボールを追いかけまわし、汗したあの農学部グラウンドでの4年間は幸せだつた。そして、私にとってあの4年間は、大きな心の支えとなっている。挫折しそうなつらい時には、「あの厳しい練習を4年間頑張り通せた」と自分に言い聞かせ、古い仲間たちの顔や感動のシーンを想い浮かべる。そうすると不思議と元気が出る。京都大学蹴球部を通して出会えた素晴らしい監督、諸先輩方、同輩、そして後輩たちに深く感謝している。また、脈々と続いてきた濃紺のユニホームを着られた事を、京都大学蹴球部の長い伝統の一員になれた事を、誇りに思う。これからも、京都大学蹴球部で過ごした4年間は、私の宝として心の中にいつまでも生き続けているであろう。将来、「ここに来るまで、いろいろあつた…」と自分自身の人生を振り返ったときにも、そして、その後も…。

春も秋も阪南大と死闘



平成5年度主将 岩田 通明

最近の傾向として、私学のセレクションによる選手集めの結果、国立大学は極めて不利な状況にあります。特にチームの戦術が確立し切っていない春季リーグでは個人の力がよりチームの力として反映し、成績が振るわない年が続いていました。

そういう状況の中で、平成5年の春季リーグでは1部挑戦権をかけての阪南大戦で死闘の末2-1で逆転勝ちし2部3位、入替戦進出までこぎつけることができたのも、私達の代の選手はレギュラーを長い間務めたものが多く経験が豊富だったことが大きな要因だと思います。結果的には入替戦で立命館大に1勝1敗ながら得失点差で敗れ、1部への厚い壁を痛感することとなりましたが、この豊富な経験を武器に安定した成績は残せました。



平成5年5月4日、2部春季リーグ、1部挑戦権をかけた3位決定戦で阪南大に2-1で勝つ。(奈良県五所市運動公園グラウンド)

東大戦、同志社戦は完勝、秋季リーグでも最終戦阪南大に敗れた1敗のみでした。しかし、この年の秋季リーグから2部は3ブロック制となり、2部各ブロックの2位チームには1部へのチャンスがなくなったため、最終戦の1敗で1部へのキップを失うこととなりやはり悔しい思いをしてしまいました。その1敗を喫した相手の阪南大学が翌年1部で活躍しているのを見ると力の差は僅かだったと思うのですが、その僅かな差がまた大きな壁となっているように思います。

私達の年の戦術の特徴は、1、2回生の頃から数多くの公式戦と一緒にプレーした選手が多く、試合中の各局面で暗黙の意志統一がとれたということだと思います。各プレーヤー間の特徴を良く知っていること、細かい動き方、ポジショニングのとり方の共通理解ができていることは大変な強みでした。もちろん、繰り返しミーティングを行いました。ビデオによる研究もして常にさらなる向上を目指しました。いずれにしても様々な具体的局面に応じた、数多くの約束事と意志統一がベースになっていて、さらにそれを応用することで、より高度な戦術を目指しました。

現役当時は結果を出すことを最優先に考えていました。そのことに誤りはなかったと思いますが、そのことに固執するあまり少し部内に硬直した雰囲気を作ってしまったような気がします。その点は最大の反省点です。いずれにしても1部昇格という目標を果たせなかったのがどうしても残念でなりません。

我々のサッカーを変えた ビデオミーティング

平成6年卒業 安永良

私は、小学校の時からサッカーをしているが、大学生になって初めてサッカーを勉強したように思う。それまでもその時なりに考えながらサッカーをしていたが、大学サッカー程考えたことはなかった。京大サッカー部には、私が入部した頃には（今のことはよくわからないが）コーチとしてサッカーを我々に教える人がいなかった。このことがサッカーについて考えるようになった大きな理由ではないか。私が2回生の時、クラブ内のミーティングには2種類あることを知った。一つは練習時間内に行われるもので、試合の反省や今後の予定の報告などを行うミーティングである。そしてもう一つは、練習または試合後の夜に誰かの下宿に集まって試合のビデオを観るものであった。これをミーティングと言うかどうかはよくわからないが、これは我々のサッカーを大きく変えるものであった。下宿で行うため人数は多くすることはできなかった。しかしその半面、小人数であったため集まった人がそれぞれ言いたいことを言えるのである。時にはビデオを何度も巻き戻して激論を交わしたこともあった。この頃は、世の中ではJリーグが始まり、Jリーグ入りを目指すselection選手を擁する私立大学相手には国立大学はサッカーを見直す必要があった。個人が試合の流れを変えられない分、チームで足りない個人能力を補うサッカーをしなければならなかった。

東大戦に3-0で勝つ。

平成5年7月4日（東大農学部グラウンド）



そのためにもチーム内の意思疎通を図るには、このビデオミーティングは欠かせないものであったと思う。

では、このミーティングにおいて何を話し合ったのか。それは、簡単に行うことができ、かつ結果にでやすいディフェンスのミーティングであった。失点シーンをビデオで繰り返し観て、何が悪かったのか、そして、どうすればよかったのかを話し合ったのである。マークの付き方はどうか、カバーの仕方は間違っていないか、などの確認である。この解決策のよかった点は“決め事”をたくさん作れたことである。“このような場面では必ずこうする”といったことを知っておくよう徹底させたのである。例えば、波状攻撃を受けた場合はボールを外に蹴り出してプレーを切ることや、周りを見ずにただクリアするときその蹴る方向を決めておき、トップの選手は予めそれに対応しておくことなどである。さらにこの“決め事”は攻撃の時でも使うことができた。スローインは必ずサイドバックが投げる、セントリングの時にはnearとfarで必ずつめるなどである。

“決め事”があることでお互い悩まずにプレーすることができ、かつ相手よりも早く判

断できるのである。フリーキックやコーナーキックはこの“決め事”で成功する最もいい例ではないだろうか。ただ、ここで1つ問題が生じてくる。どのプレーを正解とするかの判断を誰が行うかである。いくら全員の意思疎通が図れていても間違っただけを行っていても意味がない。ここで必要となってくるのが各個人がどれだけサッカーを知っているか、サッカーを勉強しているかである。このミーティングを成功させるには、まず個人がサッカーを勉強し、そしてチームとしてサッカーを勉強していくことである。コーチのいない京大サッカー部では個人がそれぞれコーチにならない限りチームの上達はありえないのである。

2回生のときにこのミーティングを知って、4回生までの3年間かなりサッカーを勉強したと思う。しかしまだまだ多くの課題を抱えたまま引退となってしまったように思う。ここが大学サッカーの難しいところである。ここで後輩への引き継ぎがチームの発展の大きな鍵となる。京大サッカー部のコーチは年々変わっていくのである。次の年のチームが全くのゼロからスタートしていれば、チームとして成長していくのであろうか。選手のレベルによっては衰退へと向かってしまうのではないか。前年のよかった点を次の年に引き継いでこそ、チームは上達するのである。

これからの京大サッカー部のさらなる発展を期待して終わりとする。

サッカーと仕事と



平成6年卒業 吉田和洋

平成8年12月にタンザニアへ出張に行ったおり、楽しそうに地元の人々がサッカーをやっていたのを移動中の車の中から見た。サッカーが世界的なスポーツであることを目のあたりにしながら、仲間に入って一緒にプレーしたいと思ったものだ。現役時代には、試合の前日の夕食で、気持ち悪くなりながらもご飯を3合食べ、さらにバナナをほうばりオレンジジュースで流し込んでいたが、アフリカの人達がもし日本人と同じようにカーボ・ローディング（筋グリコーゲン含量を多くするための食事法）を始めたなら、もともと鍛えられている彼等は物凄いパワーを発揮することだろう。

現在私は国際協力事業団で政府開発援助（ODA）の仕事をしており、度々海外に行くことになる。地元の人とどれだけ打ち解け、どれだけ本音を聞けるかが課題だと考える。一緒にサッカーをし、一緒にお酒でも飲み、腹を割って話ができれば良いな、と感じている。

さまざまなことを考えてしまうが、京都大学サッカー部では良い思い出をたくさん作ることができた。毎日サッカーをしていることができた時代が懐かしいし、貴重な自我形成のときであったと感じる。何とか勝った試合、ぼろ負けした試合、逆転勝ちした試合、ノーゴールの引き分けの試合。いろいろな試合があったが、毎日の練習も思い出深い。特に、インタバル・ダッシュやサーキット・トレーニング、南禅寺ラン、大文字ラン、15分間走、それに一番こたえたシャトル・ラン。挙げたら切りのないきついトレーニング。こんなことを一緒にやってきた仲間は貴重である。試合中に思わぬパワーを発揮してくれる頼りになる奴。練習中に人一倍がんばってくれる奴。宴会で大活躍してくれる奴。連絡業務を僕

らのためにこなしてくれる奴。下級生を指導し、良いチームづくりに貢献してくれる奴。みんなが何かしらの形でチームに貢献していた。とっても素晴らしい集団である。

現在も会社のチームを始め2チームに所属し、毎週末サッカーを続けている。現役のときよりは体力、技術ともに衰えたような気はするが、気のせいだと思い直し、相変わらず元気に走り回っている。近いうち京大サッカー部のメンバーで試合に臨むときに備えているのである。

対立命館大入替戦での1点



平成6年卒業 高田理紀

平成6年6月、順位決定戦で阪南大学と死闘を演じ、延長戦で逆転勝利を収めて2部3位となった我々は、1部リーグ6位の立命館大学との入替戦に臨んだ。

兵庫県三木市で行われた第一戦、我々は立命館の速い攻撃によって、まさかの4点を失った。けが人もなく充実していたといえるコンディションで臨んだ試合ただだけに、ショックは大きかった。念願の1部昇格を果たすためには、第2戦で5点差以上の差をつけて勝たなければならない。あまりに大きいピハインドを背に、再び雨の降る三木市での第2戦。私の胸にはもはや1部昇格という目標よりも、第1戦で何度となく跳ね返された立命館ディフェンスを破ることだけがあった。他の部員もきっとそうだったと思うが、相手が1部のチームだとか、昇格のかかった試合だとか言うことはもう関係なく、目の前に大きく立ちはだかった強敵に真っ直ぐに向かう気持ちだけがあった。試合は0-0のまま後半に入り、雨に濡れた芝生は重く、ボールは滑った。そして、後半も30分を過ぎた時、私がハーフからボールを受け、横に流れながら振り向いて放ったシュートがゴール隅に飛び込んだ。1点をもぎ取った。試合はもう1点取って勝ったものの、我々の目指していた勝利に結び付かず、今でも喜んで思い出せる1点ではない。しかし、全員でぶつかって取った1点であり、当時の部員一人ひとりが抱いていた思いとともに、私には忘れることのできない1点となった。

我々の代を教訓に



平成6年度主将 林 高 弘

私が3回生のときの京大Aチームは、7，8割が4回生で占められていたもので、新チームになったとき、まず行わなければならなかったのが、前チームからのスタイルの継承でした。スコアブック上では、DF4人、MF4人、FW2人の、4-4-2システムということですが、我がチームの守備的な性格上、ディフェンシブハーフもDFに含めた5-3-2システムとっていいと思います。基本的にマンツーマンでガチガチのプレッシャーの中で、相手に自由にプレーさせない国立大学ならではの頑張るサッカーであるのですが、その中でもより効率良く確実にボールを奪うための決め事が各ポジション様々な形で知らず知らずの間に実行されていました。

しかし、前年までのレギュラーが少ない新チームですから、それがなくなってしまったのです。ほとんどが守備についてですが、リスタート（ゴールキック、キーパーキック、スローインなど）での守備、クリアの仕方、ラインのあげかた、マークのつきかた、受け渡しかた等の、チームとしての決め事を学んで行くところから私たちの代は始まりました。このような決め事に関しては、さすが京大といったところでしょうか、吸収が早く冬から春にかけてはメキメキ強くなっていきました。（というよりも試合運びがうまくなったというべきか？）。前チームが偉大であったので当時は思わなかったのですが、あのレベルで春リーグ2部4位は今思えば立派な成績だったと思います。

しかし、我々の目標は1部昇格でありましたので、前年までと同じサッカーを続けて行くだけではいけませんでした。1部のチームと比較して決定的に劣る部分は得点力であったので、春から秋リーグまでの間は、攻撃力のアップ、具体的に言うとゴールまでのシナリオの統一、局面での攻撃イメージの統一を図ろうとしました。本当は冬からやっていたのですが、できなかった課題として残ったものです。様々な環境でサッカーを教わってきた連中が集まった大学サッカーですので、攻撃のイメージも多様で、コンビネーションがうまくいかないと、好き勝手に攻撃をしているということが起こっていました。そこで攻撃の発想を一つにまとめたいというのがねらいでした。

ところが、これがアダになったような気がします。サッカーにおける発想というのは、その人の持つ技術レベルや身体能力に左右されます。出来もしないプレーはイメージーションとして湧出せず、また得意とするプレーを最優先して選択します。すなわち個々人のプレースタイルを無視した発想の押し付けは、苦手もしくは出来ないプレーの押し付けであり、かえって攻撃力の低下を招く結果となってしまったと思います。今思えば本当にやるべきことは、個々人の得意なプレーを見出し、そのプレーが生かされるようなアドバイスであったり、ポジショニングであったり、チーム戦術の決定であったのでしょ。

OBになって2年半経ちます。現役のころを含め6年間、現役のチームを見てきましたが、どのチームも一生懸命で、真剣にサッカーに取り組んでいたと思います。しかし、毎年目標を達成できないまま悔しい思いをして、最後に美酒を飲んだことはありません。その度に目標達成のために、何が足りないのだろうかと考えさせられましたが、OBになって

強く感じるものが一つあります。

それは、同じ失敗を2年ごとあるいは3年ごとに繰り返してしまっているということです。毎年、新チームになると現役首脳陣は前年の反省を踏まえて新チームの方針を決定します。そのため前年の失敗は繰り返さないことはあっても、2、3年前の方針と同じになってしまって、結局同じ失敗を繰り返してしまうということが多く起こっています。京大サッカーで唯一伝統的に継承されていると感じる（6年の間だけですが）スタイルが、相手より運動量で上回り、相手の嫌がるサッカーをするというところです。

現役の皆さんには、その良い伝統を失わず、我々の代の失敗を繰り返さないことを願っています。

私たちの代は個性派揃い

林 高 弘

私たちの代は個性派揃いだということをよく言われましたが、少し思い出してみただけでも……、ヘディングをするたびに口を開き、股抜きをされるたびに「パワー」というジャイアント馬場ばりの雄叫びを挙げる「馬場」さん。フェイントなんかよくわからないような機械的な動きで相手を惑わして抜き去ろうとする「ロボット」君。1回生の時に3日間だけ当てていたパーマが大仏のような強烈パーマだったばかりにその後ずっと仏扱いされている「仏ディー」君。指示代名詞だけで会話を行い名前が伊藤であるがゆえに呼ばれるようになった「ハム男」君。同じように名前が菊池というだけで「モモ」になってしまった東南アジア家系のK君。表面では良識のある大人の男を装いながらプレーはダーティー、部屋にはいかがわしい本が100冊を下らないという偽善者の主務H君。金がなくなったら身の回りのものを安く売り、ちょっと金が入ると熱帯魚を買ったりしてしまう経済観念にもかかわらず今や大蔵官僚のS君。面白くもないことを大声で叫んでみんなの注目を引いてしまい、面白くないの代名詞となってしまったT君。まこで朝昼晩の3食食べていてジャージをよそ行きと普段着の2着使い分けていたH君。新歓でべろべろに酔っ払った時収容されたスポカンの中でいきなり腰を激しく振りだして以来人格を疑われてしまった「ピストン」君。九州人でもなく犬を連れてるわけでもなく、ただその風貌からだけで「さいごう」と呼ばれてしまい本名を誰も知らないスーパーキーパーのS君。おさるさん系の野性味あふれる外見とその野生のカンから繰り出される雀パイさばきには定評のあったM君。理屈を言わせたら止まらない、いつもトラブルの中心にいたモアイ顔の「モアイ」君など。

これだけ挙げることができます。こんな私たちでしたが、サッカーに対する情熱は今でも誇れるものがあつたと思っています。

（名前が挙がらなかった人 or 挙がってしまった人、ごめんなさい）

100パーセントの力を出すために



平成7年度主将 加藤 寛

私が一年間通して一番苦労したのは何か…戦術？ラン？くれしま飲み会？すべて違う。私が苦労した、そして一番大切にしたのは、いかに頭の良い京大生（おそらくはどうせ1部は無理だと頭で思ってる）にその気になってもらうかだった。「信じなければ努力も出来ないし、奇跡もおこらない」。それが私の信念であった。そして、シーズン始めに3部から2部、2部から1部へとあがるのを目標づけられたチームにとっての私の中での課題であった。だから、リフティングを練習最後にやって回数をチェックしたり、ウィルクーパーのビデオをみんなで見てまねして、結構簡単にうまくなれる、ということを実感してもらった。「粘ⁿⁱ-give up」、そう、粘ってしつこくやれば上手くなれることを知ってほしかったのだ。

戦術面は頭の良い京大生が10人も集まればいい知恵がでると思う。だからあとは一人一人が自分は上手くなれるのだ、と信じることとそのイメージを持つこと、そしてチームとしては一部にあがれると信じること、そしてそのイメージを持てるようにすることが大事だとおもう。イメージできないことは実際にもできないのだ。個人としてはビデオをみたり実際にプレーをみたりすれば以上のことは可能だと思う。ただチームとしては以上のことは結構難しい。この点において私の年は幸運だった。内容はともかく3部から2部にあがったという事実、ブラジル遠征を控えたほぼフルメンバーの同志社に勝ったという事実、夏休み中ほとんど練習試合だが負けなかったという事実、以上のことは私を最後の最後まで1部にあがれると信じさせ、そしてあがれるイメージを持つには十分だった。全員とは言わないが多くの人の人にとっても同じだったのではなからうか。

私の年の戦術面での基本は「攻めさせて速攻を狙う」であった。この「攻めさせて」というのが私のなかで気に入っていたことのひとつである。実際には攻められているのだがこの考え方のおかげでどんなに攻められてもいつも、これは思いどおりの試合運びだとおもうことができた。こういったことは全て1部への最終関門となろう相手を倒すために考えたことである。秋リーグでの第4戦の桃山大戦…引き分けという結果により1部昇格がほぼ絶望的になってしまったのだが今思えば、一年間で最も「攻めさせて速攻を狙った」試合であった。信じていたことが裏切られてしまった試合であったが、一つの可能性を垣間見た試合であった。最後に「学生スポーツはよい指導者と精神状態でどうにでも結果は変わってくる」と、別種目だが全国大会経験をもつ人が言っていたことを記しておく。そして何よりも京大は現状メンバーで最高の試合をして初めて1部へ上がる可能性がでると私が考えることも…。京大にはセレクションはないのである。

VI. 活躍するOB達

正和会のこと

昭和25年度主将 小山 啓 二

発生の由来

20年前から旧制高校のOBインターハイ（SOI）が始まった。毎年春秋に昔の連中と顔を合わせるが多くなった。京大で、ともに農学部のグラウンドを駆け廻った仲間同士は特別な思いがあって、戦後の窮乏時に無理算段をして合宿をはじめた頃が懐かしく、どこかへ一度遠征しないかという話が持ち上がった。10年程前のことである。

当然、最初は京都でという話をしたのだが、何も格式ばった会合ではなく、唯みんなで昔を懐かしむ単なる懇親の集まりだから、何かの所縁のある土地へ出掛けるほうが楽しいのではないかと、先ずは戦後すぐ全京大として国体に参加した金沢はどうだろうという意見が出た。

金沢には、渋谷亮治君（27年）がいて石川県蹴球協会長をしており、グラウンドの確保も容易だし、ロートルに見合った相手探しも可能だろうと考え、河村篤彦君（27年）から連絡してもらい、快諾を得て実施に踏み切った。

戦後昭和20年代に苦しい合宿に参加した連中を中心に、旧制新制とりまぜて約20名が金沢の新保旅館に集まって、杯を酌み交わしたのが確か昭和61年の晩夏の頃である。翌日は、石川県協会の熟年チームと看護婦さんを主体とした女子チームを相手に十分楽しんだ。

その後の推移

金沢の旅館でのコンパの席上、今日来られなかった人とも会えるよう来年は京都でやろう、そして毎年合宿したところを巡るのもいいではないか、京都一所縁の地—京都一所縁の地と隔年交代でやってはどうだろう、幹事はその時その時来年の担当を決めればよいではないか、と皆が賛成して原則が定まった。

ところが、所縁の地といっても現地に世話人がいなければどうすることも出来ない。故にこの原則は大崩れに崩れて、とにかく出来るところでやろうということになった。

第一回からの実施地は次の通りである。

金沢—京都—出雲大社—京都—信州松本—大垣・岐阜—四国松山—仙台

- ・出雲大社では、我々が合宿した時、大社高校のキャプテンだった小川さんという方に、恒藤 武氏（25年）より依頼してもらって実現できた。
- ・松本は、竹山幹夫先輩（19年）の松本高校時代の伝手を頼ってお世話願った。
- ・岐阜は、大友 満君（30年）が勤務地の関係で骨を折ってくれた。
- ・松山は、向井清之先輩（21年）の手をわずらわせて、松山高校の縁で地元名士の病院長や愛媛県蹴球協会長に頼んでいた。
- ・仙台は、SOI(サッカーOBインターハイ)で親しくなった旧制二高出身の久我さん（東北大）が大変親切に協力して下さった。
- ・京都では、地元の長井 茂君（28年）が中心になって、竹山先輩などの助力を得て世話を引き受けてくれる。

会の名と今後の行方

何処でも熟年チームと女子チームを相手に楽しんでいるが、年とともにだんだんチーム編成が難しくなるので、最近では昭和30年代に在部した人達にも声をかけて参加してもらっている。

当初は会の名もなく、会名などつけると堅苦しい感じになって、折角のフリーな集まりが枠に嵌められたように思えるから止めよう、と無名のままだった。しかし、外部に依頼する時には無名では如何にも都合が悪く、京大サッカーOBとすると、正式に皆さんの了解の上でなければまずいように思えるので、苦肉の策として正和会と名付けることにした。

正和会とは、我々昭和20年代に在部した者は、総じて大正から昭和にかけての出生であるから大正の正と昭和の和をとって正和会としただけの話。あとから気が付いたが、こうしておけば怪我の功名で、現在の京大蹴球部のOBは殆ど全部カバー出来る。明治の方がおられれば名誉会員でいいし、平成の人が出てくるのはまだまだ先のことだろう。これなら大先輩でも若手でも、その気さえあれば抵抗なく参加してもらえるので、我ながらうまい命名だったと自画自賛している

戦前の大先輩の間には三春会（注参照）というのがあって、今はおいおい範囲が広がり、戦後の在部者でも旧制の者あたりまで組み入れられているが、正和会はゼネレーション的にはその次に位置するものが中心になる純粋懐旧懇親の集まりと理解してもらっていい。



「正和会」の仙台遠征

平成5年5月23日（東北工業大学グラウンド）

中心がそうだというだけで、なんの規約も制限も設けていないから、一緒にやろうという方々は、どうぞすすんでご参加下さるよう、この場を借りてお願いする。

（注）三春会については「監督は語る」の「安居 律先輩を訪ねて」のインタビュー記事参照。

地方に生きて



石川県サッカー協会会長

昭和27年卒業 渋谷 亮治

平成9年秋、石川県サッカー協会50周年の式典、パーティーを挙げるべく、昨年からの記念誌編集等々、役員関係者一同大変な取り組みをして頂いている。

戦後第2回の国民体育大会が、非戦災都市であった石川県金沢市で開催される事になり、前年の昭和21年に僅かな有志の先輩方が苦勞して石川県サッカー協会を設立され、食糧難で特にお米の調達に至難の中で大会を成功に導かれたのであった。ちなみに国体旗のデザインや国体の歌等当時の石川の関係者の創作であった。私自身は旧制四高の2年で、今は中央公園になっているが、戦時中のいも畑の跡が残っていたグラウンドで、全早大と全慶

大の試合のラインズマンをやらされて、迫りに緊張したことを覚えている。

私は朝鮮戦争後の就職難の中で、結局都落ちの形で創業先代の会社に入り、大学、高専や高校OBのチームに加わってプレーをしていたが、当時日銀金沢支店に勤務の故三宅参次郎さんのご指導で、昭和31年に各校OBのトップクラスをつのって、「金沢サッカークラブ」を組織して、主将兼マネジャーで自宅に看板をかけてスタートした。

それまで北陸、北信越予選では富山が常勝であったが、初めて後楽園競輪場の芝生での全国都市対抗に、翌年は静岡県藤枝での天皇陛下ご高覧の国体に出場できた。どちらも日本鋼管相手に1回戦で敗退した。以後34年金沢市サッカー協会理事長、37年石川県理事長、40年会長に就き、今日に至っている。

西日本OBサッカー連盟の金沢フェニックスサッカークラブの会長として、この5月に2回目の全域大会を金沢でお世話させて頂き、私自身も背番号4（年齢順）で、プレーをする予定でいる。

この間、北信越サッカー協会会長や金沢市体育協会会長、石川県体育協会副会長を歴任し、昭和60年の高校総体、平成2年の全国社会人大会、そして平成3年の石川国体を主管して、初めて総合2位の成績をあげる事が出来たのは感激であった。

又、渋谷杯でスタートした石川リーグも今は6部までになり、我が社のチームも何とか1部に残って頑張っており、昭和58年の株式上場を記念して作った渋谷学術・文化・スポーツ振興財団で、年々次代を担う若い人の育成に貢献出来ていることにも感謝している。今後ともこの地域からささやかながら全国に発信をつづけて行きたいと願っている。

回顧からパイオニアへ

元関西クラブユース連盟会長

ひらかた
枚方フットボールクラブ・コーチ

昭和27年度主将 近江 達

小学生からサッカーになじんできた私は高校ではサッカー三昧。おまけにマンドリン。オーケストラにも出たものだから、京大医学部合格は番狂わせと言われた。

入学した昭和24年はまだ戦後の食糧難で、いつも空腹。関西学生リーグは京都から西宮球技場まで行くだけで疲れてしまい、正直言って満足なプレーなど無理だった。それでも部員は皆、旧制高校時代、サッカー部の主将やエース格だった人たちだったから、戦前ほど強くはないが、まだそこそこのレベルで関西リーグの一部だった。

しかし、私学のサッカー部は戦前から学生とは名ばかり、すべてプロなみで疲れ知らず。日本一の関学など、毎日、朝から練習、試合当日でさえ、試合前に一時間以上練習しないと調子が出ないと言っていたくらいだから、練習に11人揃えば上々だった京大がそれに対抗するのは大変だった。そんなわけで猛練習などなかったけれど、高一で肋膜炎を患い一年休学した私はそれでも疲れていつも身体が重く、医学部でもほとんど授業に出なかった。

左足も少し使えた私はいろんなポジションをやらされ、在学中、CFとキーパー以外は全ポジションを経験した。

一回生の復活第一回東大戦はLWで得点。当時、日本代表のハーフや関東代表のキーパーがいて関東首位だった東大と、夜行列車での遠征にもかかわらず1-1で引き分けた。私

個人としては相手のRBに充分勝っていたので、ずっと無事にプレーできたらもう一点取れたと思うのだが、そのうちに足を踏まれて動けなくなってしまった。私は痛そうな態度をしないタイプのため、負傷を知らない先輩に、LWが弱いといわれてしまった。いまだに口惜しくてならない。

同志社戦は左のインナーでロングシュート、混戦から浮かせてゴールの逆の隅へ頭越しなど3得点。京大の一年間の全得点の三分の一を私があげたけれど評判は悪く、主将に、「今年度は有望な新人（三高出身の大石など）が入ったのに期待外れの成績だった」と言われ、申し訳なくて顔を上げられなかった。茫洋とした外見とは逆に神経質な私には、上級生や仲間に遠慮してプレーする欠点があり、これさえ無ければもっと活躍できたと思う。

二回生はFBで、日本代表の快足RW、関学の木村を前半、巧く間合いをとって仕事をさせなかった。ところが、それが消極的と見えたのか、ハーフタイムに、「並んで前で勝負しろ」、と指示され、不本意ながらそのとおりにした結果、後半は巧くいかず負け。

神大戦では、ゴール前に上がったボールの競り合いで、相手をチラと見てからジャンプしたというだけの理由で、相手を押しもしてないのにPKを取られて2-3で敗れた。

三回生はHBで仲間が呆れるほどよく動けた。東大戦は主将の中條（サッカー記者、朝日新聞）を完封。しかし入替戦で大経大に0-1で敗れ二部転落。

四回生はセンターバック。主将として立てた他チームの作戦では、当時は、「マンツーマンに非ざれば守備にあらず」という時代だったから、攻撃では、相手の杓子定規なマンツーマン守備をよく逆用した。相手ボールになると、相手を攻めこませ、こちらのFWラインが充分後退することによって相手の守備ラインを上げさせ、背後に広いスペースを作っておいて、ゾーンの守りでボールをからめ取ったら、こちらの浅い攻撃ラインから誰かがスペースへ飛び出すのである。この戦法が成功して、当時、一部上位で勢いに乗っていた同志社に完勝。東大戦も日本代表の技巧派CF、岡野をCBとして完封して勝利。かなり強かったが、肝心の関西リーグはライバル京教大に0-1で敗れ一部復帰はならなかった。

その京教大は入替戦で大勝。翌年、一部で優勝を争ったから、当時、京教大と何回も試合していつも引き分けか一点差だった京大は、間違いなく一部なみの実力があったわけで、優秀なメンバーが揃っていたのに京教大に勝てなかったのは、練習不足と主将だった私の責任である。

先輩には名選手が何人もいた。サッカーが趣味の域を越えて自分自身の一部だった私は卒業後もそうした名手の境地に近付きたくて、自分になくて彼らにあるものが何か？ どうすればそれを体得できるのか？ という探求心は、苛酷な練習の割には選手に質的欠陥があり、いっこうにレベルが上がらない日本流教育法への不信、さらに、遊びの中から名手が生まれてくるブラジル流教育法への興味からその実行へと発展して、40歳から少年サッカーのコーチを始めた。私は、これまでの教育法だと、しょせん、従来と大同小異の成果しか得られないから、子供たちに私の二の舞いをさせないように、彼らが日本的な枠を越えた個性的で優秀な選手に育つように、既存概念を捨てて白紙から出発し、命令や教えこみで型にはめるのではなくて、幼い頃からゲームや相手ありの実戦的練習を多用。その中で少年たちを自立させ、自分自身の眼で見えて感じて、自由に自発的に判断工夫してプレーするように指導した。

この実験の結果、日本人も欧米人に負けないくらいにハイレベルの選手に十分なれることを発見。チームとしても、全日本クラブ・ユース選手権大会で読売クラブなどを破り、

過去二回優勝、二回準優勝を果たした。

こうして週三回の僅かな練習時間にもかかわらず（有名サッカー校の何分の一だろうか）、私の枚方フットボールクラブからは、日本で初めての名ドリブラーと言われた佐々木博和（元日本代表、元セレッソ）、廣長（ヴェルディ、現オリンピック代表チームの中盤）、石丸（現アビスパ福岡。阪南大主将当時、ユニバシアード世界大会で日本チーム初優勝の決勝点をあげた）などが育ち、今も私の孫弟子たちが少年たちをコーチしている。

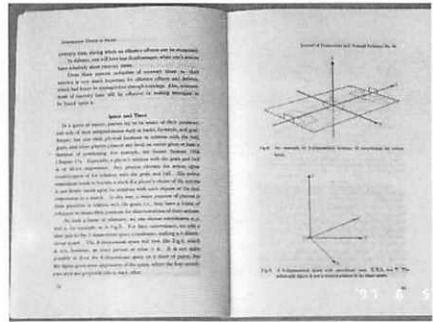
当時は気付かなかったが、20年間のコーチ人生を今、振り返ってみると、いかにも在野精神とパイオニアの京大OBらしい仕事であり、一粒の麦として日本サッカー変革に貢献できたことを誇りに思っている。



近江 達氏の著書

石原守一氏の論文 「Information Theory in Soccer」 （蹴球に於ける情報理論）の紹介

もう13年前も前のことである。石原守一先輩（旧姓：志方、S.29.卒業）から、「拝復、懐かしいお葉書有り難うございました。」で始まるお手紙をいただいた。私がどのような内容のハガキを送ったのか今はすっかり忘れてしまったが、私が監督を仰せつかって4年目、いまだに一部復帰を果たせない当時の事情を察していただき、「京大蹴球部のお世話、なかなか大変でしょう」と、小生を縷々励まし元気づけていただく内容のお手紙であった。そして、そのお手紙の最後に、「私は昔、浦和でサッカーをして全国大会で優勝し損なったので、その後ずっとこの残念さを何かに変換させようと考え、数年前に曲がりなりですが小論文を作りました。準備不十分の為もあって、不出来ですが、批判をお願いして、そのうち改定したいと考えて居ます。此処に別刷の写しを一部お送りしますので、お暇の折にでも御覧いただき、御批評でも頂ければ幸いです。」とあり、「Information Theory in Soccer. Morikazu Shikata. (Ishihara Morikazu, after 1984)」=写真=が同封されていた。



これは東京経済大学紀要「人文自然科学論集」1977年、第46号に発表されたものである。勿論、英文による論文であり、その内容も文系の我々には極めて難解で、ここにその具体的内容の一端をもお伝え出来ないことを危惧しながら、サッカーに熱い情熱を持っておられるこうした先輩がおられることを紹介したく、記事を起こした次第である。

ここでは、旧姓で書かせていただくことにする。私が入学した昭和28年は志方さんは4回生、CHとして守備の要でありプレーヤーとしては勿論一流、口数は少ないがその発言は簡潔にして核心をつき、常に重みがあった。京大では3回生の春からサッカーを再び始められたのであるが、入学当時の私は知る由もなかった。漏れ聞くところによると、氏は苦

学生であったという。その後、フルブライト留学生の試験に合格され、卒業の年から3年間アメリカに留学されている。

志方さんからお聞きしたところによると、浦和以来難しい条件の中でサッカーが出来た事を思い記念になるものを蹴球について遺そうと、サッカーを情報理論により考察されたのが、この「Information Theory in Soccer」である、ということである。

この論文は概略次のような項目から構成されている。

* 情報理論の関係では、確率、情報エントロピー。

物理学の関係では、期待される運動量、状態の回復時間、時間空間、チームの内部摩擦。

* ゲーム理論の関係では、蹴球の経済、信号と雑音とミニマックス問題、練習経済。

* 蹴球における文化的問題の関係では、個性、個人の創造性。蹴球における理論生物学および生物測定学の関係では、対称操作による技術の変化、プレーヤー間の関係、特定の関係の成功確率、関係の時系列、実験計画とゲーム品質制御。

そして、この論文の末尾に、参考文献が掲載されている。イギリス、アメリカ、ドイツおよび日本の合計21文献（内、日本の文献は5）で、それぞれの文献の発刊時期は1930年から1977年までにわたっており、サッカー、スポーツに関するもののほか、組織論、情報の数理的理論、日本文化論から心理学に関するものまで、幅広い。

しかし、志方さんはそれ以上に、サッカーは勿論のことスポーツもまた、人の活動であるから、人間としてこれを行うということを大事に考えておられるのである。

サッカーは考えるスポーツ、知的なスポーツであると昔からいわれているが、最近の我が国におけるサッカーの動向はどうであろうか。サッカーを通じて人間的にも育成され成長する環境があると言えるだろうか。サッカーが普及すればするほど、ボールを蹴ることが好き、ボール扱いはうまい、しかし自分本位で他を顧みないサッカー馬鹿が多く出てくることになりはしないか。

13年前に志方さんからいただいた励ましの文面に、その意をしっかりと汲み取ることが出来た。この論文の個々の難しい内容はよく分からなくても、志方さんは結論として、サッカーを別の観点から見ることの大切さを述べ、これを通じてただ単にサッカー技術だけでなく、若者たちが自分たちの考えで自分たちの楽しいサッカーを作りあげていく過程で直面すると思われるさまざまな問題に対し、自分たちで乗り越えられるようにいろんな観点から適切なアドバイスができる、そういう環境の実現を期待し、そうやって初めて文化的で知的なスポーツ、サッカーの本当の発展につながるということを言いたいのであろう、と理解している。20年前の論文ではあるが、出来れば志方さんに日本語版の発行をお願いしたい。

(長井 博)

海外から見た京大サッカー

サンフレッチェ広島・国際部長

昭和40年度主将 伊藤庸夫

浦和高、京大、三菱重工と当時の日本でトップレベルのサッカーをする機会に恵まれた私にとって、1980年より1994年4月までの14年間のロンドンでの生活は、あらゆる分野で新鮮であり驚異でしたが、とりわけサッカーに関しては、日本サッカー協会の国際委員として深くかかわりを持ち、根底から、日本でやってきたサッカーがまだまだ揺籃期であることを如実に経験させられました。

一つには、サッカーというのは、老若男女あらゆる階層がプレーし、観・楽しむスポーツであり、それが一つの社交となり地域の親睦を図る場でもあり、またビジネスの場でもあることでした。手軽にボール一つを持って公園に行けば必ずサッカーをプレーしている仲間がおり、その底辺の上に立つのがプロでもあったことでした。

このような環境の違い、歴史の違いから、大学サッカーという位置付けは、もう一度見直す時期に来ていると思います。現に日本もJリーグが開始し2年、もはや大学のサッカー選手はプロでは通用しなくなりつつあり、ここ数年で、数人を除いて、高卒・ユース育ちにとって代わられることになると思います。技術的にも戦術的知識の面からも、22歳以上になってもう一度基本に戻ってという時代は終わり、これからは15歳までの間に基本的に出来ていなければ、プロとしては通用せず、世界のトップチームと対抗していくことは難しいことは明白な事実です。

となると京大サッカーとは一体何か。もともとプロの養成チームではなかった。しかし、何かを残し、何かを得た歴史があった。

イギリスのオックスフォード・ケンブリッジ両大学は、1960年代前までは、アマチュアでは、イングランドでも強いチームであったが、その後プロが金銭的にも恵まれてくるに従い、伝統あるサッカークラブ（フットボールクラブ）として存続、依然として各界へ人材を出し、そのOB会は政財界に大きな影響力を持っている。その中でもケンブリッジ大学は、1846年に現在のサッカーのルールを定めたこともあり、The F.A.（英国サッカー協会）の中核に位置している。ただ単にサッカーをやっていた人が協会の役員となるのではなく見識も影響力も外交力もあるオックス・ブリッジのサッカー人脈の絆は強く、これがサッカーの発祥の地として世界へ多くの影響力を与えている糧となっている。

もはや、技術的にも、強さという点からも、大学のサッカーは時代遅れとなり、名選手を輩出する機関ではなくなっている。逆にプロ化し、大衆化した中で、サッカーを知る人そして国を担う人材が、サッカーに関与することで、ヨーロッパより遅れたスポーツ非文化国日本の新しいスポーツ文化の確立と普及に、マネージメント能力と見識と外交力を持ち貢献できるのではないかと思われる。この意味で、京大サッカー部の持つ潜在的力は、今後の日本のサッカーの国民的スポーツへの定着化、そして老若男女が安価に手軽に何処でも楽しめるサッカーの普及と、環境整備へ積極的な役割を果たすことが出来るのではないだろうか。勿論大学スポーツとしてやる以上は、勝つことも必要であり、創意と工夫により現在のレベルの大学サッカーで勝てないことは全くない。また強くなることによって、

上記のような社会活動を行う時にも、国際的な交流を行う時にも有利になることも事実である。

しかし、サッカーとは何か。何故に世界中の人々が熱狂し、誰もがやっているのか、日本にまだ定着出来ない原因は何か、そういったことを“学”することも技術向上、勝利、強さとは別に必要であり、新しいスポーツ文化を導入するための指導的役割が京大でサッカーを経験した者には期待されている。そうすれば、必ずや日本も強くなっていくであろうと信じるものである。

竹内 至著「日本蹴球外史」の紹介

昭和8年ご卒業の竹内 至先輩は、協会創立70年を祝い「日本蹴球外史」=写真=を、平成3年3月に発行された。



竹内先輩は、サッカーをこよなく愛され、いつも若人の健全な成長と活動に関心を寄せておられた。そして、ご自身が選手として活躍されていた旧学制時代に思いを馳せ、その記録を纏め残すことによって、今後のサッカー界のますますの発展の一助にと、念じておられた。昭和60年に、「若き血潮は燃える（旧制全国高等学校蹴球大会）」を発行、つづいて、昭和62年には「銀蹴（旧制新潟高校蹴球部六十年のあゆみ）」を発行された。引き続いてこの「日本蹴球外史」に取り掛かれたが、平成元年に病を得て床に伏された。散逸している記録の収集と正確を期する確認作業には大変なご苦労があったとお聞きしたが、ご高齢に加えてこ

うしたご苦労があったからであろうとお察しする。しかし、その後病も快方に向かい、平成2年から一時中断していた執筆活動を再開し、平成3年3月には念願の上梓にこぎつけられたのである。が、その後しばらくして再び健康状態優れず、その年の12月16日、遂に幽明境を異にされたのである。

「日本蹴球外史」には、極東大会関係資料（大正6年～昭和9年）、全日本選手権大会関係資料（大正10年～昭和10年）、東西学生リーグ戦関係資料（大正13年～昭和10年）のほか、日本蹴球協会創立の経緯、関東蹴球大会の発足、国際オリンピックと嘉納治五郎先生、幻の東京オリンピック大会などの随筆数編が収められている。そして「日本蹴球外史」は、大学の、つまり当時の日本サッカーのトップレベルの歴史であり、先の「若き血は燃える」旧制高校編と姉妹本になるものである。

ここに、故竹内先輩のサッカーに寄せられた情熱に敬意を表し、あわせてご冥福を祈りつつ、「日本蹴球外史」をご紹介します次第である。 (編)

京大OBチームの発足（1982年4月）

昭和52年卒業 田中徹也

卒業して5年が過ぎ、会社のサッカー部を引退する時期にきていたときに、2部に落ちて（3年間）低迷する現役の試合を応援に行っても、試合内容、OBの集まりにも盛り上がりがなく、何か支援の方法は無いかと考えた。当時、53年卒業の吉村氏が、余程サッカー部が好きなのか、医学部に再入学してサッカー部に在席していたので、彼と酒を飲んで議論して、長年の懸案だった京大OBチームの発足を、1982年（昭和57年）4月に、具体化しました。

当時考えていたのは、最初はOBだけでスタートするが、将来は現役の試合機会のない選手を登録して実戦経験を積んでもらうということでした。現在、OB2チーム、現役1チームと、当時の期待以上に発展したことを非常に嬉しく思います。また、この年より、東大戦の前日にOBの親睦試合として、東西対抗OBオールスター戦をスタートさせ、現在に至っています。

以下の記事は、昭和57年度の年報に記載したものの一部です。

いま振り返ってみると、発足1年目としては、上々の年だったと思います。OBチームの発足の話は以前から持ちあがっていましたが、メンバーの確保等難問を抱えて延び延びになっていました。幸い、ここ数年、京阪神に就職したOBの数が増え、また、熱心なOB諸氏の賛同を得て今年実現しました。私は、家が京都であるというメリットからOBチームの世話役をさせていただきましたが、今思うとOBチームに課せられた使命の重大さを痛感しています。

戦績は別記（4部全勝優勝、全国社会人大会京都予選優勝・関西大会敗退）のとおりですが特筆される点が2つあります。（4部での優勝は当然）

1点目は、全試合に11名以上の選手を確保できたことです。不運にもリーグ戦7試合中5試合が雨で最悪のコンディションでした。現役の諸君は雨でも試合をするのは当然だと思うでしょうが、OBとなり、遠方から馳せ参じる人や家庭を持っている人には、一大決心です。そんな中で竹山部長や唐原先輩や長井監督が入ってどうにか11名揃った試合も何試合もありました。その度に先輩方のサッカーに対する情熱を感じました。

2点目は、社会人トーナメントで社会人1部リーグで最強の朝鮮蹴球団に2対1で勝ったことです。（朝鮮蹴球団は、今シーズン1部リーグで無敗であった）。この試合は、総勢13名で戦い、さらに棚井先輩が途中、体を張ったプレーで足を骨折、退場と非常に苦しい試合でした。しかし、棚井先輩の気迫を皆が感じとったのか、攻守とも相手を上回り、快勝したのです。

棚井先輩の骨折、藤原（52年卒業）の網膜剝離とアクシデントもありましたが、試合の後、飲みに行き、サッカー談義に耽り、先輩・後輩との友好を深めることができました。そんなときの話は、どうしても、自分たちの現役の頃の話と現在の現役に対する期待になります。

京大サッカー部の目指す道は年代が変わっても、そう変わらない筈です。大学入学時の

素人集団が、1部でも十分通用するチームを作るには、基礎体力の向上と考えるサッカー(自分たちに合った効率のよいサッカー)を目指すことが要求されます。現役の諸君は今一度自分たちのサッカーを考え直し、秋のリーグに向かって最強チームをつくるべく練習に励んで下さい。

15年経った今、OBチームを作って本当に良かったと思います。また、OBの現役に対する思いは何年経っても変わりません。4年で京大サッカー部は終わらない。一生涯続けるに値する倶楽部だと思います。

現役諸君の活躍とOB諸氏の益々のご健勝とご活躍を祈念しています。

大文字杯に乾杯!!



昭和58年卒業 高嶋 章行

本年(1996年)8月11日に大文字杯は12回目を迎え、京大OBが、立命館大OBを7-4のスコアで破り、通算成績を7勝3敗2分とした。

若手OBには真夏の京都の風物詩として定着した感のある大文字杯は、私の在学当時、京大の良きライバルであった立命館大学とのOBの交流試合である。

私は4回生の時の京都学連の副幹事長をつとめたが、時の幹事長が立命館大学の松田君であった。我々は卒業後も両校のますますの交流を図るべく、また、松田君がサッポロビールに、私がアサヒビールに就職したことから、試合終了後に両社の(勝者の)ビールでお互いをたたえ合うべく試合を計画した。試合は京都(これまでは全て農Gで開催)で行い、京都市以外の地方に就職したメンバーが集まりやすい、お盆の休みの土曜日もしくは日曜日に開催することとし、大文字杯と名付けた。第1回大会は、昭和60年(1985年)8月18日に開催した。なお、これまでに3回、8月16日の大文字の送り火の日にゲームを開催している。

大文字杯は、真夏の京都でしかも、正午キックオフというOBには厳しいゲームである。ここでは個々人の体力および技術はもとより、チーム全体の選手層の厚さが要求される。さて、最初の3年間、京大は勝てず3連敗を喫したが、昭和63年(1988年)第4回大文字杯で初めて立命館大学を2-1で下した。また、この年はアサヒビールのシェア(20.6%)がサッポロビール(19.8%)を初めて上回った年でもあった。その翌年の平成元年の第5回大会では、私自身も1点取りチームの勝利(2-1)に貢献するとともに、アサヒビールも麒麟に次ぐ第2位の座を確実にした。以来、大文字杯においては、京大は農Gという地の利と選手層の厚みという数的優位を生かし、引き分けはあるものの負けはない。またアサヒビールも麒麟社を脅かすまでになり、大文字杯の京大の成績とアサヒビールの業績はその推移を同一にしている。

また、平成6年には大文字杯10周年を記念して、長井氏よりクリスタル製のトロフィー“大文字杯”の寄贈を受けた。このトロフィーは、その中にビールを注ぐことの出来るように特別に注文したもので、以来、ゲーム終了時に、冷やしたトロフィーになみなみと満ちたビールで勝者を祝っている。

このような大文字杯であるが、毎年毎年開催され本年で12回目を迎え、上は昭和56年卒業の水倉さんから、下は平成8年の卒業生までの幅広い参加者を得た。この場を借りて、これまで大文字杯の運営にお世話いただいた方々に御礼申し上げますとともに、明年以降、ゲームの参加者が、そして美酒（ビール）を飲み干す機会がますます増えることを願い、また、いつの日かこれが正式の定期戦になることを夢見て、大文字杯に乾杯!!

29ersと京大OBチーム

平成元年卒業 島 正 樹

関西在住の京大サッカー部OB有志で構成されるOBチームはいくつかあるが、京都府社会人リーグに加盟して活躍しているのが、「29ers(トゥエンティナイナーズ)」と「京大OB」の2チームである。

もともとOBチームは「京大OB」しかなかったのだが、近年、大学院進学者の増加などの理由により関西在住のOBが増加した結果、参加希望者が増え、試合に出たくても人数の都合で試合に出られなくなる可能性が高くなったことから、OBチームを二つに分けることになった。平成元年暮れのことである。

その時点で、チームをどのように分割するかはOBの一部で議論となったが、結局、昭和63年以前卒業のOBは「新チーム」に、それ以降の若手が「京大OBチーム」を引き継ぐことになった。以降、「毎年新たな卒業生でOBチームに参加を希望する者は京大OBチームに所属」し、人数の変動を調整する形で「卒業年度の早い者から順次、京大OBチームから29ersに移籍する」というシステムをとっている。

京大OBチームは平成5年に京都社会人リーグの1部に昇格した。以降4シーズン連続で現在(平成8年)まで社会人リーグ1部で活躍している。この間に、平成5年のシーズンには、天皇杯の予選では京都府の予選を勝ち上がって関西大会に出場(1回戦敗退)し、また全国社会人サッカー選手権大会では京都地区予選を勝ち進み、全国社会人トーナメント関西大会にも出場(1回戦敗退)している。

一方、29ersは、平成2年に社会人リーグに新規加盟し、4部からスタートした。多少の取りこぼしはあったものの、肝心な試合では勝負強さを発揮して、4部、3部を一年ずつで通過し、3年目のシーズンには2部に昇格した。この時には最下位となって一旦3部に落ちたが、再び2部に返り咲き、現在に至っている。平成7年度にはブロック3位の成績であった。(ちなみに、2部のブロック優勝チームは、入替戦はなく、1部に自動昇格する)

29ersという変わった名前は、結成当時のメンバーの平均年齢が約29歳であったことから、アメリカのプロフットボールの強豪・サンフランシスコ49ers(フォーティナイナーズ)をもじって筆者が命名したものである。読めない等の理由で、新規登録時に京都の協会から苦情をいわれたが、結局そのまま通してしまい現在に至っている。もっとも現在のメンバーの平均年齢は30を超えているが。

両チームとも練習は全くしないのにそこそこ勝ってしまうので、他のチームには申し訳ないが、現役時代に鍛えられた技術と戦術は年齢を重ねても衰えないという証明であろう

か。平成8年度現在、京都府社会人サッカーリーグ加盟チームは320を超えているが、そのような状況下で京大サッカー部のOBによる2チームが、それぞれ1部リーグ(12チーム程度：年度により若干変動あり)および2部リーグ(平成7年度より3ブロック24チーム)で活躍していることは、現役チームの刺激にもなることだろう。なお、平成4年度からは現役のBチームも社会人リーグに加盟しているが、平成8年現在3部に低迷している。Bチームの選手に対しては彼らがAチームへ上げられるように、そしてAチームの選手に対しては学生リーグでも1部で活躍できるように、京大サッカー部のOBチームはこれからも陰に陽に現役チームを支えていける存在でありたい、と思っている。

余録 生涯現役の竹山先生

第5代蹴球部長竹山幹夫先生(S.19.卒業)は現在満75歳。今も元気にサッカーを続けておられる。数年前までは、社会人チーム・京大OBまたはトゥエンティナイナーズの試合に出場され、京都新聞の「熟年」欄に「わが健康、わがサッカー人生」のテーマで登場されるなどしていたが、最近、旧制高等学校のOBによる白線クラブと京都の暁クラブ元老チームそれに母校旧制松本高等学校のOBチームのメンバーとして、年間出場試合数は海外遠征を含めて約40試合。

今やマスコミ界でも有名で、9月に入り敬老の日が近付くと「現役で活動を続けるお年寄り」の一人としてTVに登場されるのが当たり前になりつつある。こうなると、娯楽番組(和田アキ子の「アッコにおまかせ」)も、「この方はどんなスポーツをする人でしょう?」と、黒い衣に身を包んだ先生をTVに登場させることに。なかなか当たらず、やっと正解が出たところで黒い衣を脱がれると颯爽としたサッカースタイル、スタジオ内に設けられた特設ゴールに向かってシュート。これにチームメイトとして友情出演の恒藤 武OB会副会長もご登場。わずか3分程の生放送のために、暁の元老チームの先生を含むメンバー計5名が東京へ。わずかな出演料よりも新幹線代の方が高かついたとは、放送局の弁(?)。

大学教授よりもサッカーの方で有名だった(?)竹山先生も、平成7年の秋の叙勲で勲三等旭日中綬賞をめでたくご受賞。これをお祝いして平成8年にご受賞時の年齢を背番号にした京大蹴球部の現役ユニホーム=写真=をOB会よりプレゼント。

大のビール好きで、二日酔いなど体調の良くない日などはジョギングを控えるが、そうでなければ筋トレとジョギングは日課。年二回の健康診断でも健康については問題なしの太鼓判。

竹山先生の語録集には「月夜の晩に…」だけでなく、最近の「OBのサッカーは互いに自分を忘れず、無理をせず」と「生涯現役」が新しく付け加えられることになっている。

竹山先生いつまでもお元気で! (編)

竹山幹夫先生(第5代部長)の勲3等旭日中綬賞ご受賞を祝ってユニホーム等を贈呈、背番号はご受賞時の年齢。

平成8年7月7日、東大戦当日(農学部グラウンド)



VII. 支えてくれた人々

グラウンド管理人

氏江喜久子さん(元農学部グラウンド)と
小野美智子さん(宇治グラウンド)に聞く

・平成9年4月27日(日)、宇治合宿所にて

聞き手：田路厚洋(S.51、卒業)

長井 博(事務局)



氏江喜久子さん(左)と

小野美智子さん

(宇治グラウンド)

——氏江さん、お久しぶりです。お変わりなく、お元気そうで何よりです。今日はわざわざ宇治まで出て来ていただいてありがとうございます。

(氏江) 皆さんもお変わりなく。今日は私にまで声を掛けていただいてありがとうございます。

——サッカー部の70年史に、お世話になった氏江さんと今もお世話になっている小野さんに、ご登場いただくということで。

早速ですが、氏江さんが結婚されて農学部グラウンドの方へ来られたのは何時だったんですか。

(氏江) 昭和26年の秋だったんですよ。最初はクラブのボックスの東の端にあった管理人室に居ましてね。それから前のスポーツ会館(現在のシャワールームの場所、写真参照)ができた昭和31年からはそこの管理人室に移ったんですよ。

——50年史で大先輩の手記を見ますと、「戦時中あのグラウンドを使っていたのは、サッカー、ラグビー、陸上、ホッケーと教練課のみで、それ以外は誰も入れず、グラウンドの整備は今以上だったが、これは常に我々に味方して協力してくれた『氏江のオヤジ』に負うところが大きかった」と、書かれています。先代さんは何時から居られたのかご存じですか。

(氏江) 義母がよく「ご大典の年」と言っていましたから、昭和2年からだと思いますけど。

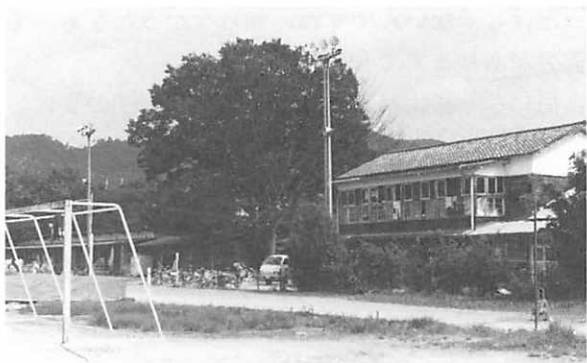
——確か、氏江さんがお退きになる時には今の北白川スポーツ会館ができていて、一時期現在の田辺町のお家から通っておられたんですね。

(氏江) そうです。昭和60年までお世話になってたんですよ。

——すると、2代にわたって約60年間、先輩や我々そして後輩がお世話になって来たんですね。義母さんはその後？。

(氏江) 義父は私が嫁いで来る前に亡くなってしまったけど、義母が亡くなったのは昭和56年でしたの。その年に不思議な事があったんですよ。グラウンドに入った所に大きな木があったでしょ。覚えてはります？ 前のスポーツ会館の真ん前にあった…。(写真を見せて) この木ですよ。義母が亡くなったその年にあの木も枯れたんですよ。何か因縁めいてるでしょ。

——そんな事があったんですか。先代さんは農学部グラウンドの主でしたからね。長い間



旧スポーツ会館



同一階食堂

(女性は管理人の氏江喜久子さん)

本当にありがとうございました。

——それでは、小野さん。宇治は何時からでしたか。

(小野) 私は昭和49年の3月からやから、やっと20年を過ぎたところで…。氏江さんの年数のまだ半分ちょっとですわ。

——長い年月の中で、いろんなご苦労話やエピソードがあるだろうと思いますが、お二人からざっくばらんなところを聞かせてもらえませんか。

(氏江) 私が来た翌年に長女ができて、31年の夏に二女ができたんですの。その31年に旧スポ館ができたでしょ。合宿のお世話をしないといけないということで、乳飲み子を抱えて調理士の資格を取りましてね。あの時は本当にシンドカットですわ。でも、前の管理人室から新しい所に移って来て。1階の食堂は(写真を見せて)こんなやつたんですよ。私も写ってますけど。

それから、そうですね。農学部のグラウンドではサッカーに、以前はラグビー、後でアメリカンと変わりましたが、そして陸上にハンドボール、ホッケーでしょ。数が多いから、私が話をするのはどうしても主務の人や女子マネージャーがほとんどですから、一般の部員さんとはどうしても接触が少なくなりますね。それに陸上でしたら一人一人がオパチャン言うて来ますけど、サッカーは練習済んでも団体行動でしょ。

——えっ？と言いますと。

(氏江) マージャン行こ、言うたらみんな団体でワァーッと行かほるでしょ。飲みに行こ、言うたらこれもみんな団体でワァーッと行かほるでしょ。団体種目は個人種目と違って一人一人との接触はどうしても少なくなりますね。

——小野さん。宇治の方はどうですか。

(小野) いま宇治のグラウンドを使ってるクラブはラグビーの他は、サッカーが時々練習に使うのと合宿でしょ。農学部のご苦労は、宇治に比べたら、それは大変だと思いますよ。

でも、宇治を使うのはこのほかに、時々ソフトボールとアーチェリーが大会の時などに使うんですよ。アーチェリーは長いレンジが必要やからね。それから、最初はアメリカンがここで練習してたけど、農学部に変わったのは昭和50年からやったかな。

——そうなんですか。サッカーとラグビーだけじゃないんですね。知らなかったなあ。でも宇治は宇治で、農学部と違う特徴やご苦労がありますでしょ。

(小野) そう。サッカーとは何と云うても合宿になりますね。私もここへ来た最初の夏に暑いとこやなあ、と思いましたけど…。それに周りは山と自然がいっぱいでしょ。面白いことがあったんですよ。夜もう休もうかというところに、あれは誰やったかなあ、「お婆ちゃん、牛が鳴いてるんですか」と聞いて来るんですよ。私も一瞬、えっ、ウシ、何のことかなと思ったんですけど、違うんですよ。食用カエルなんですよ。それはもう夏の暑い夜に、静かになると、うるさいぐらい聞こえるから、初めてだとびっくりすると思いますよ。

——宇治は暑い、蚊が多い、などは聞いてますけど。

(小野) ええかなあ。こんな話して。サッカーの合宿は人数が多いでしょ。普通やったら、上級生がタタミの部屋やと思うんやけど、ここは違うの。上級生が廊下で寝て、下級生が部屋で寝る。何故かと言うと暑いから。廊下も蚊は多いけど、言うてられへんねやろね。蚊取り線香をたくさんあっちこっちで燃やして。

——ご迷惑かけてません？

(小野) 迷惑やないけど。エピソードはあるけど。ええかなあ。

(氏江) ええやん。

(小野) 合宿で、本当に疲れてるンやろね。夜中2階でグダグダ、バタンと大きい音がするから、何か起こったんか知らんと思ったら、下級生の一人が寝ぼけて廊下を走ってバタンと倒れてそのまま寝てたの。そんなことがあった。

——そりゃ、びっくりしますね。それから？

(小野) 梅田君がキャプテンで、ジャワラ君や中村エーチャンがいた時やったと思うけど、これも夜中、2階でケンカでも始まったのかなと思ったら、ある部員が暑いもんやから全部脱いで素っ裸で寝てその上転げ回るものやから、周りの部員がそんな格好で寝るなとか、裸でなんでオレに引っ付きにくるねんとか、言い争っていることが分かってホッとするやら、おかしいやら、そんなことがありました。

——いろんなことがあるんですね。その都度、ご心配やお世話をかけて。

(氏江) そう言えば、私は滅多に人を叱れない性質なんですけれど、合宿の夕食の時に一度だけありますの。夕食の一品にとザルに一杯用意しておいたゆで卵を、午後の練習が終わって上がって来た部員の誰かが、ザルごと持って行って食べたんですの。作り直す時間はないし、本当に腹が立って皆が集まったところで、誰がやったんですか、と叱ったんですの。すると皆うつむいてシーンとなってしまっって、雰囲気は悪くなるし困ったなあと思った時に、「お婆ちゃん、あした僕タマゴ生んだるわ」と、一人が言ってくれたので皆から笑い声が出て、私も助けられた。そんなことがありましたわ。

——発言したのは誰です？

(氏江) 根本さんでしたの。

——分かる、分かる。

(小野) 学生は、そこにあるから食おか、という、そんなところがありますね。

——女子マネジャーは食事づくりの経験も浅く、いろいろお世話になっているのでしょうね。

(小野) 夕食の準備が大変やから、女子マネジャーの手伝いは凄く助かりますよ。朝は、私一人で準備出来るから、女子マネジャーも若いし眠いやろし寝かしておいてあげる…。

(氏江) 農学部の時は、クラブが重なると食数が100食になりますの。女子マネジャーが居なかった頃は学生当番でしたけど、助かりました。どうしても時間かけての作り置きになるでしょ。女子マネジャーと美味しいわね、と試食するんですけど、食事時間には味が落ちてますの。

——いろいろお世話になって来たのがよく分かりました。最後になりますが、最近の学生は昔に比べてどうですか。

(小野) 最近は昔に比べて、おとなしくなって来たように思いますよ。それと、試合の後の雰囲気というか、そう、特に大事な試合で負けた後の雰囲気が、以前に比べて変わってきましたね。以前は負けた後は緊張感というのか、ピリピリしてる感じで、声かけるのも気を使ったけれど、最近は何もケロッとしてる。こだわらない、これはこれで今の若い人のいい面なんでしょうけどね。

私はお陰で、スポーツマンの部員さんから、健康について教えてもらうことが出来て、喜んでるんですよ。今はやりのダンベル体操は、今年4回生の岩崎君が1回生の時に教えてもらって、最初1kgから始めて今2kgのダンベルになって…。でも、続けるということとはなかなか難しいことですね。

——どうも、今日はいろんなお話をお聞かせいただきありがとうございます。

(氏江) (小野) こちらこそ、ありがとうございます。

(氏江) あの一。一言よろしいですか。実は、私が退職しました時にサッカー部から記念品をいただきましたの。そして、いつまでも気にかけていただいて、とても感謝していますの。サッカー部の皆様にお礼を申しあげる機会がなくなって、ずうーっと気になってたんですけど、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

—— 恐れ入ります。

(氏江) (小野) それでは、サッカー部のOBの皆様も現役の皆さんも、お元気で。そしてサッカー部がますます発展されますようにお祈りしてしております。

——それでは、今日は、これで。氏江さん、これからもどうぞお元気で。小野さんにはこれからも後輩達をご厄介になりますが、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

わが青春のサッカー部



初代女子マネジャー 山本 睦子

「サッカー部のマネジャーにならない?」。京都女子大学の寮で同室だった京大陸上部マネジャーの美穂さんが話を持ち掛けてきた。鳥取から出てきて半年。何か打ち込めるものはないだろうかと思っていた矢先であった。好奇心と未知の世界への憧れから、二つ返事で話にのった。

農学部グラウンドへ初めて行った日は、晩秋の夕暮れであった。

「うちにも女子マネジャーが入ったぞ」と、率直に喜んでくれた芝田さん達に、良い人達だなあと感激してしまった。しかし、「男に興味があるだけじゃないか」「満足にサッカーのことも知らんくせに」という声も背中でも聞いた。

初めて全部員に紹介されたのは、追いコンの日であった。この年、一部から二部になり、会の雰囲気は、暗く沈み重苦しいものだった。「これが追いコンというものか」「ずいぶん大変なものなんだな」と、素直に思ってしまった。

翌年の春からサッカー部通いが始まった。まず、ユニホームの洗濯。なぜか下着まで入ってた。それも女物まで。次に、レモンを持参しての試合の応援。関西一円の大学を知った。泥まみれになりながら、一つのボールを追っている姿に、日頃の鬱憤も飛んで行った。

そして、合宿の食事の手伝い。農学部と宇治のおばさん達には、大人数の料理の仕方を教えてもらった。おかげで大人数の集まることの多い鳥取の暮らしに役立っている。さらに、サッカー部で知ったのは、春歌と酒の味である。藤井さん自作の歌に盛り上がったっけ。伊藤さんと飲み比べをして伊藤さんの方がつぶれちゃったな。

二年目の秋。二部から一部へ復帰した。一部昇格のための最後の試合。終了の笛が鳴った瞬間、飛ぶように、転がるように、グラウンドから、ベンチから、走って集まった。梅田さんが、芝田さんが、田中さんが、西田さんが、藤多さんが、松岡さんが、山本さんが、藤原さんが、宮本さんが、塩見さんが、杉田さんが、中村さんが、北原さんが、……歓声を上げ、抱き合い、涙と汗でぐしゃぐしゃになった顔は、輝いていた。

あれから二十年。鳥取へ帰り、幼稚園・小学校と教職につき、小学校の課外クラブではサッカー部を担当し、多くの小学生達の試合を引率してきた。同業の夫も、小学校のサッカーの世話をしてきた。息子達は、剣道をしながら、Jリーグの試合には出掛けている。サッカーとは不思議な縁があるようだ。

毎回送られて来る京大蹴球部の手紙。封を開けると、私の青春の思い出が、次々よみがえってくる。主将の永井さん、梅田さん、宮本さんには、気を遣わせたな。マネジャーの田路さん、吉村さんには、何をしたらよいか分からず、世話をかけたっけ。みんな親切で優しかった。

ありがとう、京大蹴球部。

頑張り、京大蹴球部。

私のために、先輩のために、後輩のために、そして何より自分のために。

夏の宇治合宿



昭和53～55年度 女子マネジャー
田中明美(旧姓 山本)

昭和53年夏、宇治合宿の朝は、ザクザクとキャベツを千切りにする小気味良い音で始まっていました。その音は、まだ夢の中にいた私の耳に届くと、私をふとんから台所へと走らせるのでした。「おはようございます。遅れてすみません」。毎朝同じ挨拶で、合宿所の日が始まりました。

初めて泊まり込みで参加したこの合宿では、おばさん（小野さん）の部屋に泊めて頂きました。枕を並べて寝ていたにもかかわらず、おばさんが朝起きたことに、一度も気付いたことはありませんでした。夜は、やはり先に眠ってしまいました。当時は、おばさんの手助けをしていたつもりでしたが、今考えて見ますと、世話のかかる居候だったようです。

朝食のメニューは、ゆで卵、キャベツの千切りと食パンだったと思います。このキャベツに、最初の頃は悪戦苦闘したものでした。朝のスタートが遅いうえに、おばさんの倍以上の時間をかけて切っていたため、朝食が遅くなったこともありました。朝食の準備が遅れると、食事担当の1回生も時間に追われて忙しくなりました。しかし、彼等がうまくカバーしてくれて、朝食の時間はどうにか切り抜けることができました。

朝食に比べると、夕食は時間に余裕があり、楽しくおばさんのお手伝いことができました。しかし、失敗はありました。カレーライスのとときには、煮くずれする予定で、じゃがいもを大きく切ったところ、時間をかけて煮込んでも、その大きさのまま変化なく「じゃがいもカレー」と名付けてもいいものができてしまったこともありました。お代わりしながらも、じゃがいもの大きさに苦情を述べていた人に、思わず微笑んでしまいました。

夕食の後片付けは、のんびりとできる時間で会話も弾みました。食べ物の好き嫌いや彼女のこと、出身地等いろいろなことを聞くことができました。

この合宿では、一緒に仕事をする機会の多かった1回生たちや、直接身近で助けてくださったおばさんと、よい人間関係をつくることができたと思っています。そして、この合宿がサッカー部と私の関わりを深めて行くきっかけとなりました。

もちろん、いつも温かく見守ってくださるキャプテンの高岡さん、マネジャーの寺井さん等、たくさんの方の支えがあったからこそ、短い期間の参加だったこの合宿が、今でも一番の思い出となっているのだと思います。

現役の皆さん、後日思い出すと一番心に残る時を、今過ごしているのかもしれませんが。選手・マネジャーを問わず、それぞれの楽しい思い出が、サッカーを通じてできることを願っています。

たくさんの感動を 与えてくれた京大サッカー部



昭和63～平成3年度

女子マネジャー 大野 知子

「サッカー選手になりたい」

私が勤めていた幼稚園の男の子達は、大きな声でこう答えていました。

Jリーグも開幕し、現在サッカーは国民的スポーツ、子ども達の憧れの的。サッカー人気に火がつくずっと前から、私はサッカーが大好きでした。大学生になって、マネジャーという形でサッカーに関わることができ、私の夢は一つ叶いました。

当時のマネジャーはきれいな方ばかりでしたので、ちょっと気後れしましたが、どうしてもサッカーを身近に味わいたくて、入れていただきました。マネジャーとして初めて参加した試合では、I先輩のオーバーヘッドシュート（だったと思う）を目の前で見て、思わず『『キャプテン翼』の世界だ！』と大変興奮した記憶があります。

当初、サッカーのルールを十分に把握していなかった私に、N先輩は「ゴールエリアの外からのシュートが決まると、得点は2点になるんだよ」と、優しく説明してくれたこともありました。

また、部員さん（長井監督もかな）にはサッカーだけではなく、ピールのつぎ方①ラベルは上に、②泡は3分、京大は一部一の心得を教えていただきました。今も、忘れず実践しています。

私がマネジャーを勤めた4年間、様々な試合がありました。二回生の時の秋の入替戦勝利、翌年一部での試合。その中で最も印象深かったのは、平成2年10月13日、一部リーグ第6節、大阪・高槻総合スポーツセンターでの対京産大戦、3-2での勝利。ハーフタイム前のお茶づくりも、この日だけは後輩にお願いして試合に夢中。終了後、思わず涙がポロリ。部員さんの喜んでる姿を見てまたまたポロリ。翌朝、届いた朝日新聞のスポーツ面、写真入りで左上に大きく「京大が12年ぶり白星」との見出し。この記事は、今でも大切に保管しています。

私は、京大サッカー部からたくさんの感動を与えてもらいました。優しい部員さんや気の合うマネジャーに恵まれ、充実した日々を送る事ができました。本当に感謝しています。ありがとうございました。

最後になりましたが、京大サッカー部創部70周年おめでとうございます。

現役の皆さん、これからもサッカーを愛し、たくさんの人に感動を与えて下さい。そして、いつかまた新聞に「京大白星」と大きく掲載される日がくることを楽しみにしています。京大サッカー部の今後ますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

酒場にて

奥田 寿一

20数年、昔のことである。年月日は定かではない。旧農学部電停前に酒場「出世男」がある。どうやら、ここが京大サッカー部の溜り場らしい。少し覗いて見ることにしよう。

店のテレビの前には数人がヨーロッパのサッカーゲームを見ている。それが終わると帰る者、めしを食べる者、居残って酒を飲む者、に分かれた。

K君は今年の今日で無くなる市電の最終電車（花電車）に乗って帰って行った。

F君は冷奴を注文し、半分でめしを食い、残り半分で酒二、三杯呑む、実に合理的である。そこへI君がウイスキーを抱えて、ふらふらに酔っ払って入って来た。どうやらバイト先で酒を呑んで、土産に貰ってきたらしい。もう飲める状態ではない。

S君はいつものごとく酒を呑んで居眠り始めた。しばらくして冷し素麺ができてきたので揺り起こされ、食べ始めたのはいいが、麺をたれにつけずビールにつけて、うまそうに食べている。まだ寝ボケているようだ。

T君は明日誕生日らしい。そこで店主が明日T君にハンバーグを作ってやると約束をしている。

その横で、3、4人がサッカー論議を始めている。

別のところで、一人の四回生が新入生にいろいろと話をしながら酒を呑ませている。

時間は過ぎて、もう外は白々と夜が明け始めている。店主は相変わらずニコニコと話を聞いている。よほどこの連中（サッカーバカ）が好きらしい。

ちなみにその朝、店主の母は天国に旅立ったらしい。もちろんT君のハンバーグも後日になってしまった。

追伸

その他いろいろもっと面白い話を、ここの店主は知っているらしい。

次の機会に聞きたいものだ。

今年は一部を目指して、現役サッカー部、頑張ってください。

（注）筆者、奥田寿一氏は、元「出世男」の店主である。

この酒場「出世男」には、昭和45年頃～54年頃まで、サッカー部員が大変お世話になった。そして、この店の名前のおと、卒業後の出世払いの恩恵を受けたOBが多数いる。もう3年も前になろうか、その時代のOBが中心になってできた「男組」という四十雀チームの名前は、言うまでもなく、酒場「出世男」の「男」に由来する。このチームの会長ならぬ「男組組長」は元「出世男」の店主であり、世話になったOBは今もこの組長と親交を続けている。

なお、酒場「出世男」は今はない。「男組」のメンバーの現在の溜り場は「紳婦瑠」という名の Grill である。ここのマスターもニコニコと、中年サッカーバカの話の聞いている。それもその筈、「紳婦瑠」のマスターは元「出世男」の店主、奥田寿一氏である。Grill「紳

婦瑠」(TEL.075-223-6627)は、四条通新町東入る北側、興和第一ビルの地下1階、にある。(編)

VIII. 京都大学蹴球部部歌のこと

部歌が出来た経緯と散逸した楽譜の再現を求めて

[部歌が出来た経緯]

京都大学蹴球部の部歌が作られたのは、昭和3年の秋頃にのこである。

50年史には、部歌の作詞者、溝口 治氏ご本人の記事が掲載されている。

「私、京大在学中は直接蹴球部とは無縁でありましたが、当時、旧制山口高等学校出身では級友今川義六、長谷川勝之、一年上で久次米定吉、一年下の山根東明、の諸君が現役で活躍しており、また先輩では前田純一氏が部員であった関係で、他校との対抗マッチはよく観戦しました」「思い起こしますと、確か昭和3年の秋頃ではなかったかと思いますが、当時マネジャーであった今川君から「蹴球部に未だに部歌というものがない。是非欲しいと思うのだが、君一つ作ってみてくれないか。」とのことで、拙いながら作ったような次第でした。それというのが、私が山口高校在学中に作った記念祭歌や野球応援歌が三つほど残されているので、今川君の頭にそれがあったためか、と思われます」

そして、今川先輩の50年史の記事には次のように記されている。

「京大蹴球部の現在の部歌の歌詞は、昭和3年、法学部学生詩人、溝口 治氏にお願いして出来たもの。作曲は、多分京大マンドリン・オーケストラの桑原 馨氏(法)の連中だったと思う」

我が蹴球部と無縁であったはずの作詞者溝口 治氏は、「昭和43年頃戴いた名簿の巻頭に、この拙い歌が部歌として堂々と載っているのを見て、大変感激した次第でしたが、しかも名簿を見ておりますうちに愚妻の身内になる妻鹿哲郎君(昭和46年卒業)の名を見付けましたので、家内が妻鹿君に会った節そのことを話しますと、『あれ、小父さんが作られたんですか。ちっとも知らなかった。今も歌っていますよ』と、奇縁に驚いていたとのことです」という訳で、作詞者・溝口 治氏はやはり蹴球部にはご縁があった先輩なのである。

[散逸した楽譜の再現を求めて]

昭和30年頃、当時現役であった我々の部歌を聞いて、先輩方は「テンポが早い、その歌い方が違う」などと、その頃からすでにところどころで原曲との違いを指摘されていた。上級生から後輩へ、口移しに伝えられる部歌はいつしか少しずつ変わって、長い年月の間には、すっかり元の歌とは似て非なるものになってしまっているようだ。それは原曲の楽譜がかなり早い時点でなくなってしまうことにもよる。

昭和59年4月、京大蹴球部60周年記念祝賀会での部歌斉唱。現役が大きな声で一斉に歌い始めたところで、安居 律先輩が苦笑されながら、「違う。これじゃ一緒に歌えんなア」と、小さい声でポツリと、つぶやかれた。それから暫くして、後輩への部歌指導のためにと、嫌がっておられる安居先輩にご無理をお願いし、部歌をテープに吹き込んでいただいた。70年史編集委員会で、これが話題となり、原曲により近く、そして現在の現役たちの歌い方も修正可能と思われるこのテープから、この機会に楽譜を起し、これが京都大学蹴球部の正しい部歌だ、というものを将来に残そう、ということになった。

幸い、編集委員の林 和俊氏のご令嬢、林 典子さんが神戸女学院大学音楽部ピアノ科に在学中であったので、このテープにより、部歌の作譜をお願いした。

実は、このテープには、昭和10年頃の歌い方と、昭和50年頃の歌い方とが吹き込まれて

いる。だから、楽譜は二つある。そこで、この楽譜とテープを朝比奈 隆先輩にお送りして、どちらが良いか、スコア（楽譜）に手を加えていただく必要はないか、その監修方をお願いしたところ、ご快諾いただいて出来上がったのが、部歌の“正式楽譜”である。

朝比奈 隆先輩から、このスコアに添えて、歌は昭和50年頃の方をもとにしたこと、そして、必ず手拍子を 1, 2, 3, と打って「知るや」と歌い出すこと、とご連絡をいただいた。

散逸した京都大学蹴球部部歌の原譜は新しい生命を得て、ここに再現された。これからはこの楽譜に基づいて、OBも現役も一緒に、機会あるごとに、雄叫びたち、満天の星を揺るがさんばかりに、部歌を歌い継ごうではないか。
(編)

IX. アンケートからみたOBの期待

アンケートの結果

本70年史を企画した当初から、この機会にぜひともアンケートを実施したいという留岡寛編集委員会リーダーの強い希望で、多項目にわたるアンケートを実施、昭和30年卒業（つまり昭和29年度）以降の各年度の主将またはマネジャーあるいはしかるべき人に答えてもらうことにした。

その結果、一部の年度について回答を得られなかったが、同学年複数回答もあり、44件の回答を得た。

思い出すことができ、分かる範囲内での回答でよいということと、数値化するなどまとめ方が難しい項目もあるため全項目についてまとめられず、また、回答を列記するだけにとどまっているものもあるが、ここに次のとおり報告する。アンケート回答にご協力いただいたOB各位に厚く御礼申し上げます。

なお、回答文中の（ ）内は、年度を示し、卒業年ではない。

1. 京都大学で何故サッカーをやったのでしょうか。

(1)あなた方（あなた自身及び同期のメンバー）が蹴球部に入った動機は何でしたか？

（回答）

- ・何かクラブ活動をしたかった。（昭和29～45年ぐらいに多い）
- ・サッカーが好きだから。真剣にサッカーをやりたいから。同好会では物足りないから。（大多数）
- ・高校でやっていたから、ごく自然に。
- ・関西学生サッカーリーグの1部だったから。
- ・勧誘されたから、友人を求めて。

(2)①あなた方がサッカーに求めていたものは？

（回答）

- ・生きがい。一生懸命打ち込める対象。生活の一部。無心。充実感。
- ・強くなること。うまくなること。勝利。
- ・仲間との交流。友人関係。チームワーク。

②学生生活の中で占めるサッカーの位置？

（回答）

- ・ほとんどの回答が、「学生生活のほとんど」「生活の中心」（合間に勉強）。

②-1. 個人の経済的負担？

a. アルバイトをしましたか？

（回答）

- ・第1位は圧倒的に家庭教師。
- ・オフに単発でいろいろなアルバイトをした。
- ・しなかった、やる暇がなかった。

b. 生活費の中でサッカー関係の費用は何割程度だったでしょうか？

（回答）

- ・ほとんどの回答が「2割程度」。

c. 負担になったとすればどのような面でしたか？

(回答)

- ・ほとんどの回答が「遠征費、合宿費」。
- ・実は「飲み代」という人も。

②-2. 交友関係は蹴球部が中心でしたか？ 学部、ゼミ、研究室でしたか？

(回答)

- ・蹴球部が80%くらい。
- ・残る20%ほどは蹴球部と他が半々。

③いま振り返って蹴球部生活をどう評価しますか？

(回答)

- ・充実していた。有意義だった。価値があった。
- ・青春の思い出。
- ・学業も、もう少しやれば良かった。
- ・もっとやれるはずだった。

2. 年間スケジュールと取り組み方

(1)部の最大の目標は何でしたか？

(回答)

- ・関西学生1部リーグの年の目標は、「1部での上位、または1部残留」。
- ・関西学生2部リーグの年の目標は、「1部復帰」。

(2)部の構成

①部の運営方法（部役員の役割）は？

(回答) 次のとおり、ほとんど同じであった。

- ・監督、コーチ：アドバイザー、部活動のサポーター、部の全体統括。
(ただし、瀬戸コーチの時は、練習および試合全般)
- ・主将、副将：練習計画の立案、戦術決定およびレギュラーの決定。
- ・主務、副務：学連関係。事務、会計、対外折衝など部活動の全般統括。

②戦法および試合のメンバーはだれが決定しましたか？

(回答) 次のとおり、ほとんど同じであった。

- ・原則として、主将、副将等。(ただし、瀬戸コーチの時はコーチ)

(3)戦法

①京大サッカーのフォーメーション

(回答)

- ・昭和30年ごろ、WMシステム
- ・昭和38, 39年ごろから、4-2-4システム
(日本で組織的に使った最初)
- ・昭和44年ごろから、4-3-3システム
- ・昭和62年ごろから、4-4-2システム

②京大サッカーの戦法とその戦法を採用した理由？

(回答)

(S.29)WM。試合当日にだれが参加できるかにより戦い方も変わった。戦法以前の苦しい年だった。

- (S.30) 一応WM。戦法という程のものはなかった。よく走ってしつこかった。
- (S.31) WMシステム。どこもかしこもWMの時代であった。CBを軸にした守備と、FWは両ウイングへの展開からの攻撃という基本的なものだった。
- (S.33) 守備に重点。ディフェンダーの「釣瓶の動き」と相手に対する強いプレッシャー。
- (S.35) マンツーマン。ウイングからのセンタリングで点をとる。守備中心で失点を0に抑え、一発にかける。1点差で勝つという戦法。
理由は、当時のレベルで勝つにはそれしかなく、1-0の勝利が最高。
- (S.36) センターフォワードへのロングパスによるカウンターアタック狙い。LHを下げて4FB制を採用。理由は、強豪相手の場合、どうしても押されがちで、守備を固めることに重点をおかざるを得なかった。
- (S.37) 真ん中の3人(センターとインナー2人)が回転するようにポジションを移しながら、相手の守備に穴をあける。
- (S.38) 関西学生リーグで初めて4-2-4を採用。守って勝つ。
- (S.39) 変則的な4-2-4。守備体制を固め数少ない得点チャンスを活かす。
- (S.40) 4バックにした。コーチの戦術の発見と京大生のシステムの理解力がうまくマッチした。
- (S.41) 守りを固める。マンツーマンとワンサイドカット。スーパースーパーのカバーリング。ウイング攻撃。運動量としつようなマークの徹底。
- (S.43) マンツーマンとスーパースーパー。オープンスペースへのロングパスでカウンターアタック。
- (S.44) 4-3-3でマンツーマンとスーパースーパー。攻撃は中盤のショートとパスからウイングのセンタリング。
- (S.45) 4-3-3でセンタリングと中央突破。
- (S.47) 4-2-4。当時のメンバーにマッチしたシステムだった。
- (S.48) ウイングからのセンタリング。中盤からのサイドチェンジ。オープンスペースの利用。
- (S.49) 4-3-3。マンツーマンとカバーリング。
- (S.51) 1部時代は守りを固めカウンター。2部時代は中盤の組み立てによる攻撃
- (S.52) 守ってカウンター。ワンサイドカット。
- (S.53) 中盤はショートとパスでウイングからセンタリング攻撃。ディフェンスはマンツーマン。
- (S.54) 4-3-3で守備を固める。
- (S.55) WM(3-5-3に近い)。得点力のアップ。中盤の支配力。
- (S.56) マンツーマンディフェンスとセンタリング攻撃。
- (S.57) 守備はワンサイドカットとカバーリング。ロングパスによるサイドからの攻撃。
- (S.59) ワンサイドカットにより数的優位を作る守備。右ウイングからの攻撃が特徴的。
- (S.61) ツートップ。中盤に人数を多くする。
- (S.63) トップと左ウイングの変則ツートップ。ゾーンマーキング。サイドバック

クの攻撃参加。

- (H. 1) ゾーンプレスからの速攻。
- (H. 2) ゾーンディフェンス。ダブルディフェンシブハーフ。
- (H. 3) ラインディフェンス。
- (H. 4) ツートップ。守備の組織力。
- (H. 6) ゾーンプレス。ワンタッチコントロールによる速い攻撃。

③相手の戦法の研究方法

(回答)

- ・昭和40年代の前半にトレースをやっていた。
- ・試合を見ることが多い。
- ・昭和62年からはビデオ。

(4)練習方法

①使用器具等

(回答)

- ・昭和36年ごろから、シューティングボード。
- ・昭和40年ごろから、タックルボール。
- ・昭和56年ごろから、ノーチラス。

3. 京大サッカーについて

(1)他大学と比べて京大サッカーの特質は何だったと思いますか？

(回答)

- ・自由と自主性。
- ・経験者が少ない。
- ・技術では劣るが、スタミナでは負けない。
- ・基礎技術を重視。
- ・粘り強さ。集中力。
- ・チームプレー。戦術の徹底。
- ・頭脳的プレーと守備の強さ。

(2)自分の時代と比べて現在の京大サッカーをどう評価しますか？

(回答)

- ・人数、技術すべて向上している。
- ・部の運営も進歩している。
- ・よく頑張っている。頑張ってもらいたい。
- ・昔とはレベルが違うが強さがない。
- ・低迷しているのは残念。
- ・技術は上がったが、スピードやしつこさがない。
- ・難しいサッカーをしすぎている。もっと単純でよいのでは？
- ・チームカラーがなくなった。
- ・体育会の厳しさが乏しくなった。部員が淘汰されない。
- ・迫力がなくなった。おとなしくなった。

(3)今後京大サッカーはどのような方向に進んでほしいと思いますか？

(回答)

- ・健全な学生スポーツ。学生チームとして全力投球する。
- ・与えられた条件下でベストを尽くす。
- ・4年間でのレベルアップ。勝つ。
- ・アマチュアの手本となる。
- ・上を目指し、1部で戦えるチームになる。
- ・Jリーグを目指すチームに勝つ。
- ・自主性、組織的なサッカー等の伝統を引き継ぐ。
- ・卒業後は、後進の指導や育成に取り組んでほしい。

(編)

アンケート結果を読む

昭和39年卒業 留岡 博

以上のような一般的なまとめとは別に、このアンケートを企画した私の目で、寄せられた回答を読み取ると、次のようになる。併せてご参考に供したい。

1. 京都大学で何故サッカーをやったのか？

昭和30年代当時も京大入学は難しかった。入学して開放感を味わう一方、勉強以外に「何かに集中して打ち込める」対象を求めた。経験者も比較的少なく、その時これまでの環境からサッカーは身近にあった。40年代半ばになると経験者も増えてきて、全体的に余裕ができ、「好きだから」「自分自身への挑戦」といった気分が増え、50年代後半以降になると「打ち込める対象」という者もいるが、「ただ好きだから」「勝つことによる充実感」を求めるといった者が増えてくる。

学生生活におけるサッカーの占める位置は極めて大きく、人によって差はあるが、「表向き勉強中心・実質サッカー中心」の傾向は変わらない。30年代は生活が苦しく、奨学金をもらっている者も多くアルバイトは必須であった。40年代後半以降になると、アルバイトも生活を豊かにするためとなり、飲み代がかさんだという記述が増えてくる。

交友関係は、他の文化系サークルに入っていた者もいたが、ほとんど蹴球部と研究室(ゼミ)に限られている。

今振り返って「蹴球部生活の評価」については、30年から40年代初めの者はほとんどが「青春の華」「集中の充実感」を絶賛する。45年ごろ以降は「心の糧」「かけがえない経験」と評価する者、「自分はやかれと思ってやっただけ」と冷めている者、60年以降になると「学生生活の充実」を言うものの、古い人ほどの思いはない。これはその時代の戦績と卒業後の経過年数にもよるものだろう。

2. 部の目標と重点

1部の場合は1部上位を目標に、2部の場合は毎年度1部復帰を目標にしていた。

以前は秋のリーグ戦が全てであり、ここに主目標を置き東大戦はその中間目標という位置づけであった。

春は抜けた卒業生の穴を埋めるべく基礎からたたき直し、秋にピークに持っていく（そうせざるを得ない）のが通例であった。好例が38年。前年優勝の関学との練習試合に春には7-0で負け、9月に4-2で負け、秋のリーグ戦には1-0で勝ち、当年も優勝のチーム（前全日本監督の加茂周がいた）に唯一土をつけた。

スケジュールもすべてその目標で組まれた。

春秋2部制の現在、既成選手の技術レベルの高い私学に比べ環境は厳しい。半年先をにらんだ計画的な強化策をとるのは難しく、短期的な観点が優先されているのではないだろうか。

3. 部の運営方法について

基本的に学生の自主運営を貫いている。

監督は試合時のアドバイス・技術面より精神面のまとめ役などがその役割であったと部員は思っていたようだし、現在もそのようである。コーチについては「専任コーチ」として実質的な指導が行われた場合があるが、近年の若手OBによるコーチは練習・試合の補佐、アドバイザーに留まっているようだ。

主将の選任も原則的に部員によって行われている。部員全員の選挙・あるいは選挙結果に基づく4回生の指名など選出方法は年次により差はあるものの、部員全員の意思が何らかの形で反映されているのは昔も今も変わらない。ただ近年、4回生だけの相談で決めたという例も散見される。

スケジュール、練習、戦法などはコーチにゆだねた時以外、すべて主将が中心となり決定されてきている。しかし最近のように人数が増えると難しい面がでてきているようだ。

この「自主運営」は京大蹴球部の基本原則であり、部の「憲法」といえる。部発足以来蹴球部における変わらぬ流れである。これは「自分たちが納得したチーム作り」ができるが「長期的なチーム作りが困難」「絶対的指導者がいない」ため「チームの調子が落ちたとき」の指導力に、また当時の「学生レベル以上には抜けれない」問題があるという。「専任コーチが必要」「指導してもらえる人がいたら」と思ったこともあるという。

コーチを依頼して好成績を残せた場合も、「コーチ指導下の自主運営」と、部員の意思でコーチを専任し技術指導をゆだねたものと学生は理解していた。このバランスが崩れたとき1部から2部に落ちた。

4. 京大サッカーの特質について

三大キーワード（フレーズ）は ①「自主運営」 ②「自由」 ③「レベルは低い組織で補う」である。

この三つの特色はアンケートをとった各年代に共通している。うち③について、いま少しくわしく見ると、「スタミナでは負けない」「頭の使い方と頑張り」「耐えて勝つ」「頭脳的プレーと組織力」「がむしゃらさと集中力」などの回答がある。この集中力については「サッカーをするために大学に来たわけではないため、逆にサッカーする時には集中的に行うというメリハリがあったと思う」ということも潜在的要因であったかもしれない。同時に、「サッカーをするためだけに大学に来たのではない」ということが部を去っていく者の大きな理由でもあった。

5. 京大サッカーに期待する

5-1. 自分の時代に比べて現在の京大サッカーをどう評価するか。

「現在の方が昔より技術レベルは高い。よくやっている」と現状を高く評価する者がある一方、「技術レベルの向上」は認めつつも「相対的な技術格差（これは京大サッカーの特質の中で認めている）」や「3部降格への不満」をあげる者が多数いる。これは歴代全員1部をあるいは1部上位を目標として戦ってきた以上当然の帰結であろう。

また「スマートになったが、スピード・ねちこさに欠ける」「難しいサッカーをしすぎる、もっと単純でよい」「体育会の厳しさがなくなり同好会化している」「強くなろうとアメフト並に努力しているか」「小さくまとまっている」「軟弱」という意見もある。

5-2. 今後京大はどのような方向に進んで欲しいと思いますか。今関西学生蹴球界はJリーグを目標におき、その下部機構を目指しているように思われますが、京大は何を目指すべきでしょうか。

「何もプロの下部機構に組み込まれる必要はない。学生スポーツとして、英国におけるオックス・ブリッジのような存在の仕方もある。ただし高い目標は必要だ。蹴球界をリードできる人材育成の場であってほしい」というのが30年代から最近まで一貫した考えであるようだ。

ここに関連する意見をあげると以下のとおりである。

- ・プロはプロ、人材の養成に貢献の余地はある。
- ・卒業後は後進の育成や協会役員などの面で指導的役割を果たす人が出てきて欲しい。
- ・純粹の学生スポーツを目指せ。
- ・Jリーグを目指すのは現実的ではないが、高い目標は必要。
- ・あくまで学問の府としての京大の中のクラブとして、アマチュアスポーツの頭脳として活躍を期待。
- ・アマチュアであることを自覚し、社会人、学生を通しアマチュアの手本となることを目指す。
- ・私学の方とは異なると思うが、アマチュアスポーツの雄を追求し、より高いレベルを目指す。
- ・学生スポーツにふさわしい形で、関西リーグ1部入りを目指すよう努力すべし。
- ・学生リーグの方向はともかくKIUが常に1部で戦えることを目指すべし。
- ・どうせやるならできるだけ高い目標（1部復帰）を目指して欲しい。
- ・好きでやる学生のサッカーでよい。プロ予備軍に一泡吹かせられる1部リーグに名を連ねて欲しい。
- ・日本のサッカーがJリーグに一元化されるのはベストではない。
- ・下部機構を目指す必要はない。自分たちのサッカーを確立しレベルアップを図るべし。優秀なコーチ、審判員育成の場であってほしい。
- ・何をを目指すにもあまり弱くしては何も言えない。まず1部復帰を目指せ。
- ・プロ選手育成を目指す私大とも対等に戦える実力をつけ、サッカーしかできない選手ではなく、サッカーも学問も両立でき、真の社会的貢献のできる人材育成の一環としてのサッカーを目指すべし。

- ・学生スポーツの域を維持しながらも他大学と伍して戦う。

5-3. そのためには現在京大サッカーの課題と解決策は何でしょうか。

集約すると ①部員が強くなろうとする意気込みを持つこと、

②自ら知識・情報を集め自ら考えること、

③自主運営を尊重しつつも、技術面の指導陣の強化ということになる。

①②については部員自ら考えることである。「自主運営」が部の憲法であり、OBを含め皆が尊重している以上、OBがいくら強くなって欲しいと思っても、部員にその意志がなければどうにもならない。③についても①②が充足されて初めて意味を持つ。

もし現役が「強くなりたい、自らこういう対策をもっている」「やはり外部からコーチを招きたいと思う」と言ってきた時、我々OBはどう対処するか。これはOBに課せられた課題である。

各意見の主なものを記すと下記のとおりである。

- ・考えるサッカー、必要な技術をいかに効率よく取得するかに徹すべし。
- ・即効薬はない。
- ・1部存続が課題。練習あるのみ。
- ・そこそこの地位でなければ何も言えない。部員自ら考え、向上心を持って自らに厳しく当たれ。
- ・仲間だけでやっている则甘くもなるしそれ以上のレベルに行かない。限定された期間でも良いからコーチを外から招くべきだ。
- ・コーチ、監督などの指導陣の強化と、部員の勧誘に力を入れる。
- ・その時々部員が自分たちにとって最善と思う目標を立て、それに向かってやればそれでよい。ただし、勉強でも同じだと思いが、高いレベルの場に行けば行くほどそこで味わえる感激や満足感が高いものがある。また、自分たちのレベルを高めるためには自分たちだけでやるのはしんどい面があるので、適切な指導を与えてくれる人がいれば、それにこしたことはない。
- ・サッカーに必要な知識情報をより多く集め、京大サッカー理論を構築すること。自主運営を尊重しつつも、長期的な視野で判断できる指導者を置くこと。
- ・経験者を多く集めて、一軍のレベルをあげること。
- ・もっとサッカーに没頭すべきだ。
- ・課題は選手、部員の意識革命（同好会とは違う）。解決策は難しいが、相当の荒療治が必要。厳しさを知っている近い年代のOBによる指導ができれば良いのでは。
- ・学生サッカーの起爆剤となるように、強い意気込みを持つこと。

おわりに

皆様から寄せていただいたアンケート結果をもとに、思うところを書いてみた。現役の諸君にとって参考になったかどうか、はなはだ心もとない。

しかし、「古人の跡を求めずして 求めたところを求むべし」ともいう。歴史に学ぶとはそういうものだし、現役も含めて皆が求めている所はそう変わっていないのではないか。以上が次代への参考資料となるならば、望外の幸せである。

X. 公式戦等主要戦績記録

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
大正 14. 4.12. 10.18.	東大戦 東大戦	京大 2 - 1 東大 1 - 1 東大	京大運動場 小石川・高師G	
大正 15.10.31. 10.31. 11. 11.17. 11.19. 11.21.	関西学生リーグ 〃 〃 〃 〃 〃	2 - 0 大阪外語大 棄権勝 神高工 4 - 1 和高商 4 - 3 神高商 1 - 3 関学大 2 - 4 関大	神戸東遊園地	京大 4 位
昭和 2. 11. 6. 11. 4. 11.13.	関西学生リーグ 〃 〃 〃 九大定期戦	0 - 0 関学大 2 - 0 大阪外語大 7 - 4 神高商 4 - 1 関大 2 - 1 九大	神戸東遊園地 千里山(関大) 九大医学部G	京大、関学大優勝
昭和 3. 10. 7. 10.27. 10.28. 10.28. 9.30. 11.19. 11.25. 11.14. 11.15.	第8回全日本蹴球選手権大会 京阪予選決勝戦 全国大会 ① 〃 ② 〃 決勝戦 関西学生リーグ 〃 〃 〃 九大定期戦 〃	9 - 0 湯浅電池 5 - 0 神通中 5 - 0 東北大 1 - 6 早稲田WMW 15 - 0 大阪外語大 2 - 3 神高商 0 - 1 関学大 1 - 1 関大 4 - 0 九大 1 - 0 九大	京大運動場 神宮球技場 〃 〃 神戸東遊園地 〃 〃 〃 京大運動場 〃	京大準優勝 京大 3 位
昭和 4. 9.29. 9.29. 〃 10.28. 10. 2. 10.22. 11.16. 〃 11.24.	第9回全日本蹴球選手権大会 兼、明治神宮体育大会 京阪予選 ① 〃 ② 〃 ③ 全国大会 ① 関西学生リーグ 〃 〃 〃 〃	8 - 0 昭和サッカー 5 - 1 関大 6 - 0 都島エクラブ 0 - 2 慶応大 4 - 1 関大 6 - 1 大阪外語大 10 - 1 神高商 9 - 0 大工大 1 - 3 関学大	都島工 〃 〃 神宮球技場 関大 京大 甲子園南運動場 神戸東遊園地	京大 2 位
昭和 5. 5.24. 5.24. 10.26. 11. 8. 11.16. 11.30. 〃 12.14. 12.28.	京都学生リーグ 〃 関西学生リーグ 〃 〃 〃 〃 優勝決定戦 第2回東西学生優勝校対抗戦	11 - 0 同志社高商 11 - 0 高岡高商 12 - 0 大商大 18 - 0 大工大 9 - 0 神高商 1 - 1 関学大 8 - 2 関大 3 - 0 関学大 1 - 2 東大	京大 〃 京大 〃 神戸南遊園地 〃 神戸南遊園地 神戸南遊園地	京大優勝
昭和 6. 5.20.	京都学生リーグ	8 - 1 同志社高商	京大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 6. 6. 1.	京都学生リーグ	京大 30-0 大谷大	大谷大	
6.23.	〃	7-0 京医大	京大	
9.24.	関西学生リーグ	10-2 大工大	〃	
10.18.	〃	15-1 関大	甲子園南運動場	
10.24.	〃	11-1 大商大	大商大	
11. 7.	〃	12-1 神商高	甲子園南運動場	
11.29.	〃	3-4 関学大	〃	京大2位
昭和 7. 5. 7.	大学高専対抗 ①	14-1 京医大		
5.18.	〃 ②	13-0 同志社高商		
10.30.	〃 ③	2-1 広島高		
10.23.	関西学生リーグ	13-0 神商大	甲子園南運動場	
11. 3.	〃	5-4 神商高	〃	
11.19.	〃	2-2 関大	〃	
11.27.	〃	4-3 関学大	〃	
	〃	6-0 大商大	〃	京大優勝
12.12.	第4回東西学生優勝校対抗戦	1-2 慶応大	甲子園南運動場	
昭和 8.10.22.	関西学生リーグ	7-0 大外大	甲子園南運動場	
10.25.	〃	6-0 大商大	〃	
11.13.	〃	8-3 神商高	〃	
11.18.	〃	7-2 関大	〃	
11.26.	〃	3-2 関学大	〃	京大優勝
12.10.	第5回東西学生優勝校対抗戦	2-5 早稲田大	神宮球技場	
昭和 9. 9. 2.	国際試合	3-0 満州	甲子園南運動場	
10.21.	関西学生リーグ	9-0 大外大	甲子園南運動場	
10.27.	〃	5-1 阪大	〃	
11.17.	〃	2-1 関大	〃	
11.11.	〃	3-0 神商高	〃	
11.25.	〃	2-1 関学大	〃	京大優勝
12.16.	第6回東西学生優勝校対抗戦	0-6 早稲田大	甲子園南運動場	
昭和 10. 5.18.	全日本選手権予選	2-2 湯浅電池		
10.17.	関西学生リーグ	13-2 大外大	甲子園南運動場	
11.10.	〃	1-1 関大	〃	
11.17.	〃	8-2 神商高	〃	
11.24.	〃	0-4 関学大	〃	京大3位
昭和 11. 5.11.	春季関西学生リーグ	9-0 同志社高商	花園グラウンド	
5.18.	〃	5-1 関大	〃	
5.24.	〃	2-3 神商大	〃	
9.17.	関西学生リーグ	3-1 神商高	甲子園南運動場	
11. 3.	〃	3-5 神商大	〃	
11.15.	〃	2-7 関学大	〃	
11.23.	〃	3-1 関大	〃	京大3位
昭和 12. 5. 8.	春季関西学生サッカー大会 ①	5-0 和歌山高商	花園グラウンド	
~5.12.	②	0-3 神商大	〃	
9. 2.	第2回大学高専大会①	12-0 広島高工	広島文理大	
9. 3.	〃 決勝戦	1-7 関学大	〃	
11.28.	関西学生リーグ	4-1 神商高	甲子園南運動場	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 12.10.17.	関西学生リーグ	2 - 0 関大	甲子園南運動場	京大優勝
11.21.	〃	3 - 0 神商大	〃	
11. 3.	〃	2 - 0 関学大	〃	
	第9回東西学生優勝校対抗戦	0 - 3 慶応大	神宮球技場	
昭和 13. 1.10.	第2回朝日招待サッカー	5 - 2 東大	甲子園南運動場	京大2位
5. 7.	春季関西学生サッカー大会 ①	8 - 0 京医大	花園グラウンド	
	〃 ②	0 - 1 関学大	〃	
11.19.	関西学生リーグ	2 - 1 神商大	甲子園南運動場	
10.28.	〃	6 - 0 神高商	〃	
11. 3.	〃	2 - 0 関大	〃	
11.27.	〃	0 - 2 関学大	〃	
昭和 14. 1. 8.	第3回朝日招待サッカー	0 - 2 慶応大	甲子園南運動場	京大3位
10. 1.	関西学生リーグ	9 - 0 神商大	甲子園南運動場	
11. 3.	〃	6 - 0 関大	〃	
11.12.	〃	1 - 3 神高商	〃	
11.26.	〃	1 - 6 関学大	〃	
昭和 15. 4.21.	春季関西学生サッカー大会 ①	3 - 1 阪大	花園グラウンド	京大3位
4.25.	〃 ②	0 - 4 関大	〃	
11. 3.	関西学生リーグ	1 - 1 神高商	甲子園南運動場	
11.17.	〃	1 - 4 関学大	〃	
11.10.	〃	3 - 2 神商大	〃	
11.23.	〃	0 - 2 関大	〃	
昭和 16. 5. 4.	春季学生サッカー大会①	8 - 0 京都薬専	花園グラウンド	京都地区代表京大優勝
	〃 ②	6 - 1 神戸高工	〃	
6. 1.	〃 準決勝戦	3 - 5 関学大	〃	
	関西学生サッカーリーグ 京都地区予選 ①	2 - 1 同志社高商	甲子園南運動場	
	〃 ②	12 - 0 京都薬専		
	〃 決勝戦	2 - 0 京医大		
10.26.	決勝リーグ	3 - 2 関学大		
11. 3.	〃	4 - 4 昭和高商	〃	
昭和 17. 5.10.	関西学生リーグ	1 - 2 関大	京大3位	
	〃	1 - 3 昭和高商		
	〃	2 - 4 関学大		
	〃	7 - 0 神高商		
	〃 順位決定戦	2 - 1 関大		
昭和 18. 1. 3.	東西4大学対抗戦	4 - 0 慶応大	西宮球技場	京大3位
	関西学生サッカー 選手権トーナメント ①	2 - 1 神商大		
	〃 ②	5 - 0 大高医		
	〃 準決勝戦	2 - 3 関学大		
昭和 19.11.14.	京阪神学徒壮行蹴球大会	3 - 0 阪大(大阪代表) 3 - 3 神商大(神戸代表)	嵐山 〃	
昭和20年	公式戦、練習試合、一切なし			

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考	
昭和 21.	関西学生サッカー京都地区予選 ①	京大 10-0 京府医大			
	〃 ②	8-1 三高			
	〃 ③	8-1 京都師範			
	関西学生サッカー決勝リーグ	4-1 関大			
	〃	1-3 関学大			
	9.21.	京都選手権大会	3-0 三高	京大	
	9.22.	〃 決勝戦	4-0 京府医大	〃	
	10.17.	国民体育大会関西予選	3-4 富山	京大	
	10.13.	関西学生リーグ	2-4 関大	西宮球技場	
	10.27.	〃	0-3 神経大	〃	
	11.17.	〃	0-9 関学大	〃	
	11.23.	〃	2-5 神経専	〃	
11.24.	〃	5-2 阪大	〃	京大 5 位	
昭和 22.	1. 3.	東西大学対抗全	全京大 0-4 全慶応	西宮球技場	
	4.25.	春季関西サッカー大会	京大 9-0 大阪医大		
	4.27.	〃	0-1 神高商		
	5.	〃	4-0 三高		
	9.21.	京都選手権大会	全京大 9-0 京都師範	京都師範	
	〃	兼. 国民体育大会予選	〃 3-2 京都サッカー	〃	
	9.24.	京都学生リーグ	京大 7-1 同志社高商	京大	
	9.27.	〃	4-1 三高	〃	
	9.28.	〃	0-3 京都師範	〃	
	10. 5.	国民体育大会近畿地区予選 代表決定戦	5-2 藤(藤山代)	西宮球技場	
	10.31.	国民体育大会(金沢)①	全京大 1-0 茨城日立	四高	
	11. 1.	〃 ②	〃 3-4 全北海道	〃	
	11.15.	関西学生リーグ	京大(3-1)神経専	西宮球技場	日没試合 再試合
	11.18.	〃	3-1 〃	〃	
	11.20.	〃	1-8 関学大	〃	
	11.23.	〃	0-8 神経大	〃	
	11.27.	〃	6-2 阪大	〃	
	11.29.	〃	0-4 関大	〃	
昭和 23.	1.10.	第 6 回朝日招待サッカー	全京大 0-4 全東大	西宮球技場	
	5.15.	春季関西学生トーナメント ①	京大 8-0 姫路高	西宮球技場	
	5.21.	〃 ②	2-2 神商大	〃	
	5.29.	〃 ③	3-2 関大	〃	
	5.30.	〃 決勝戦	3-5 関学大	〃	(再延長戦)
	11. 7.	関西学生リーグ	0-1 神経大	西宮球技場	
	11.14.	〃	3-3 神商大	〃	
	11.21.	〃	1-6 関学大	〃	
	11.23.	〃	5-0 阪大	京大	
	11.28.	〃	2-5 関大	西宮球技場	京大 4 位
昭和 24.	1. 9.	第 7 回朝日招待サッカー	全京大 2-5 全文理大	西宮球技場	
	5.22.	第 1 回同志社大定期戦	京大 1-2 同志社大	京大	
		復活第 1 回東大定期戦	1-1 東大	東大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 24.10.30.	第 2 回同志社大定期戦	京大 10-0 同志社	京大	
11. 6.	関西学生リーグ	0-6 関大	西宮球技場	
11.12.	〃	0-2 関学大	〃	
11.24.	〃	0-3 神商大	〃	
11.20.	〃	2-2 阪大	〃	
11.27.	〃	0-1 神大	〃	
	〃 順位決定戦	5-1 阪大	〃	京大 5 位
昭和 25. 6.4.	第 3 回同志社大定期戦	3-1 同志社大	京大	
秋	第 4 回同志社大定期戦	1-0 同志社大		
11. 5.	関西学生リーグ	2-3 神大	西宮球技場	
11.12.	〃	3-8 関学大	〃	
11.17.	〃	0-3 関大	〃	
11.23.	〃	3-2 阪大	〃	
12. 3.	〃	3-9 神商大	〃	京大 5 位
昭和 26. 4.29.	春季関西学生サッカー大会 ①	7-1 阪大	西宮球技場	
5. 5.	〃 ②	0-6 関学大	〃	
7. 1.	第 5 回同志社大定期戦	1-4 同志社大	京大	
7. 9.	第 2 回東大定期戦新	制京大 1-1 東大教養	京大	
7.10.	〃	京大 1-4 東大	〃	
11. 3.	関西学生リーグ	0-12 関学大	西宮球技場	
11.11.	〃	0-8 神商大	〃	
11.17.	〃	0-11 関大	〃	
11.23.	〃	1-3 同志社大	〃	
12. 2.	〃	0-7 神大	〃	京大 6 位
	〃 1,2部入替戦	0-1 大経大		2部降格
昭和 27. 7.10.	第 3 回東大定期戦	3-1 東大	京大	
9.14.	第 6 回同志社大定期戦	2-0 同志社大	〃	
	関西学生リーグ(2部)	4-0 浪速大		
	〃	3-0 和歌山大		
	〃	3-0 神戸外大		
	〃	0-1 阪大		
	〃	0-1 京都学芸大		京大 2部 2位
昭和 28. 5. 9.	第 1 回京都学生リーグ	14-0 京工大		
5.10.	〃	4-1 立命館大		
5.16.	〃	1-1 同志社大	京都学芸大	
5.17.	〃	京学大		
5.24.	〃	5-1 京薬大		
5.31.	第 7 回同志社大定期戦	1-5 同志社大		
6. 7.	第 4 回東大定期戦	2-8 東大		
10.11.	関西学生リーグ(2部)	9-0 和歌山大	西宮第2グラウンド	
10.24.	〃	6-1 神外大	〃	
11. 2.	〃	2-3 大学大	〃	
11.15.	〃	4-0 阪大	〃	
11.23.	〃	4-2 浪速大	〃	
11.31.	〃	0-6 大経大	〃	京大 2部 3位
昭和 29. 6.	第 8 回同志社大定期戦	1-8 同志社大	京大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 29. 7.11.	第 5 回東大定期戦	京大 0 - 13 東大	京大	
9. 2.	第 1 回近畿地区体育大会	0 - 4 甲南大	〃	
11. 3.	関西学生リーグ(2部)	1 - 1 浪速大	京大	
11. 6.	〃	1 - 2 甲南大	西宮第3グラウンド	
11.17.	〃	1 - 1 阪大	〃	
11.18.	〃	0 - 6 神戸大	〃	
11.20.	〃	3 - 0 神外大	〃	
	〃	1 - 5 大学大	韮グラウンド	京大 2 部 6 位
昭和 30. 4.29.	京都学生リーグ	棄権勝京薬大	京都学芸大	
5. 1.	〃	2 - 4 立命館大	〃	
5. 3.	〃	0 - 4 同志社大	〃	
5. 7.	〃	1 - 0 龍谷大	〃	
5. 8.	〃	1 - 0 西京大	京大	
5.14.	〃	1 - 7 京学大	京都学芸大	
5.15.	〃	0 - 0 京工大	〃	
6. 5.	第 9 回同志社大定期戦	2 - 5 同志社大京大		
7.10.	第 6 回東大定期戦	0 - 6 東大東大		
9. 4.	第 2 回近畿地区体育大会 ①	6 - 1 和歌山大	韮グラウンド	
9. 6.	〃 ②	0 - 8 京学大	〃	
10.16.	関西学生リーグ(2部)	0 - 2 甲南大	韮グラウンド	
10.23.	〃	0 - 4 浪速大	〃	
10.30.	〃	4 - 1 阪大	西宮第3グラウンド	
11. 7.	〃	2 - 0 神商大	韮グラウンド	
11.13.	〃	1 - 1 立命館大	京大	
11.20.	〃	0 - 1 大学大	西宮第3グラウンド	京大 2 部 4 位
昭和 31. 6.10.	第10回同志社大定期戦	1 - 1 同志社大	京大	
7. 8.	第 7 回東大定期戦	3 - 3 東大	京大	
10.21.	関西学生リーグ(2部)	1 - 1 神商大	京大	
11. 3.	〃	3 - 1 大学大	西宮第3グラウンド	
11. 7.	〃	2 - 1 立命館大	京大	
11.11.	〃	1 - 2 甲南大	西宮第3グラウンド	
11.18.	〃	6 - 1 大府大	〃	
11.23.	〃	1 - 0 近畿大	〃	京大2部同率1位
11.24.	〃 1 位決定戦	0 - 3 甲南大	〃	京大 2 部 残留
昭和 32. 4.28.	京都学生リーグ	棄権勝龍谷大	京都学芸大	
4.29.	〃	3 - 0 府医大	〃	
5. 3.	〃	12 - 0 京織大	〃	
5. 4.	〃	8 - 0 西京大	〃	
5. 5.	〃	10 - 0 京薬大	〃	
5.12.	〃	4 - 5 同志社大	〃	
5.21.	〃	4 - 1 京学大	西京大	
5.25.	〃	0 - 6 立命館大	〃	
6. 9.	第11回同志社大定期戦	3 - 3 同志社大	京大	
6.23.	第 8 回東大定期戦	0 - 0 東大	東大御殿下	
10.20.	関西学生リーグ(2部)	4 - 2 神商大	西宮第3グラウンド	
10.26.	〃	1 - 0 近畿大	〃	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 32.11. 3.	関西学生リーグ(2部)	京大 1-2 大学大	西宮第3グラウンド	京大 2部 2位
11.20.	〃	1-0 立命館大	西京極	
11.24.	〃	2-1 甲南大	西宮第2グラウンド	
11.30.	〃	1-1 大商大	西宮第3グラウンド	
昭和 33. 4.27.	京都学生リーグ	3-0 府医大	薬大	京大 2部優勝 京大 1部昇格
4.29.	〃	4-1 西京大	京都学芸大	
5. 3.	〃	9-0 龍谷大	〃	
5.10.	〃	3-0 薬大	薬大	
5.11.	〃	1-3 同志社大	〃	
5.17.	〃	9-0 京織大	〃	
5.18.	〃	0-4 立命館大	京都学芸大	
5.25.	〃	0-2 京学大	薬大	
6. 8.	第12回同志社大定期戦	2-1 同志社大	京大	
7. 6.	第9回東大定期戦	4-3 東大	〃	
10.25.	関西学生リーグ(2部)	3-1 大府大	西宮第3グラウンド	京大 2部優勝 京大 1部昇格
11. 3.	〃	0-1 甲南大	韮グラウンド	
11. 8.	〃	2-0 大学大	西宮第3グラウンド	
11.16.	〃	1-0 大商大	〃	
11.23.	〃	3-0 同志社大	〃	
11.29.	〃	3-2 神商大	〃	
12. 7.	〃 1,2部入替戦	1-0 立命館大	〃	
昭和 34. 4.26.	京都学生リーグ	棄権勝 西京大	京都学芸大	(京大、同大 同率位)
5. 3.	〃	15-0 府医大	〃	
5.10.	〃	5-0 京薬大	〃	
5.10.	〃	4-1 京織大	〃	
5.16.	〃	2-2 立命館大	京大	
5.20.	〃	1-1 同志社大	京都学芸大	
5.23.	〃	3-0 京学大	京大	
6.14.	第13回同志社大定期戦	3-0 同志社大	京大	
7. 5.	第10回東大定期戦	1-4 東大	東大御殿下	
9. 4.	近畿地区大学総合体育祭 ①	4-0 京府大	京都学芸大	
9. 5.	〃 ②	3-2 大外大	〃	
9. 6.	〃 ③	1-0 同志社大	〃	
	〃 決勝戦	4-3 神大	〃	
10.25.	関西学生リーグ(1部)	1-6 関学大	西宮球技場	
11. 8.	〃	0-3 大経大	〃	
11.15.	〃	1-2 神大	〃	
11.22.	〃	0-5 関大	〃	
11.29.	〃	2-2 京学大	〃	
12. 4.	〃 5,6位決定戦	1-2 京学大	〃	
12. 6.	〃 1,2部入替戦	3-2 同志社大	韮グラウンド	
昭和 35.	日本天皇杯選手権			京大 1部 6位 京大 1部 残留
4.10.	関西予選(Aブロック) ①	4-1 同志社大	西京高校	
4.16.	〃 ②	5-0 南海電鉄	西宮第3グラウンド	
4.17.	〃 決勝戦	1-4 紫光クラブ	西宮第2グラウンド	
	京都学生リーグ	4-0 立命館大	京大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 35.	京都学生リーグ 〃	京大 2-2 同志社大 1-2 京学大	京大 〃	(京大 3 位)
5.29.	第14回同志社大定期戦	1-2 同志社大	〃	
7. 3.	第11回東大定期戦	2-2 東大	〃	
9. 4.	近畿地区大学総合体育祭 ①	8-0 神船大	奈良航空自衛隊	
9. 5.	〃 ②	4-2 甲南大	〃	
9. 6.	〃 Aブロック決勝戦	1-2 京学大	〃	
10.31.	関西学生リーグ(1部)	1-4 関学大	西京極競技場	
11.13.	〃	0-5 大経大	韮グラウンド	
11.20.	〃	3-6 神大	〃	
11.23.	〃	0-5 関大	〃	
12. 4.	〃	1-2 京学大	〃	京大1部6位
12.11.	〃 1,2部入替戦	4-0 同志社大	西宮市民グラウンド	京大1部残留
昭和 36.	4. 8. 全日本天皇杯選手権関西予選	10-0 藤沢薬品		
4. 9.	〃 ②	4-0 東洋ゴム		
4.15.	〃 ③	1-3 ドッドウェル		
	京都学生リーグ 〃 〃	1-0 京学大 0-1 立命館大 1-3 同志社大	京都学芸大学 〃 〃	(京大 4 位)
5.28.	第15回同志社大定期戦	2-1 同志社大	京大	
7. 2.	第12回東大定期戦	1-2 東大	東大御殿下G	
9. 5.	近畿地区大学総合体育祭 ①	1-0 大商大	大阪大学	
9. 6.	〃 ②	3-1 滋賀大	〃	
9. 7.	〃 決勝戦	2-1 神大	大阪学芸大	京大優勝
10.29.	関西学生リーグ(1部)	0-4 関学大	韮グラウンド	
11. 3.	〃	0-2 京学大	西京極競技場	
11.18.	〃	0-0 神大	韮グラウンド	
11.23.	〃	0-4 関大	〃	
11.26.	〃	1-0 大経大	〃	京大1部4位
昭和 37.	京都学生リーグ 〃 〃	2-1 同志社大 0-0 京学大 1-0 立命館大		(京大 1 位)
	全日本天皇杯選手権関西予選 〃 Cブロック ① 〃 ② 〃 ③ 〃 ④	2-0 新三菱神戸 2-0 積水化学 1-0 電々近畿 0-2 関大	川崎製鉄グラウンド	
6.10.	第16回同志社大定期戦	1-2 同志社	吉祥院グラウンド	
7. 1.	第13回東大定期戦	1-0 東大	京大	
9. 3.	近畿地区大学総合体育祭 ①	5-3 甲南大	甲南大学	
9. 4.	〃 ②	5-2 大工大		
9. 5.	〃 ③	2-0 神外大		
9. 6.	〃 決勝戦	4-0 大府大		京大優勝
10.28.	関西学生リーグ(1部)	2-6 関学大	西京極競技場	
11. 4.	〃	1-1 京学大	韮グラウンド	
11.11.	〃	1-0 同志社大	西宮球場	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 37.11.28. 11.25.	関西学生リーグ(1部) 〃	京大 0-1 関大 2-2 大経大	西宮球技場 西京極競技場	京大1部3位
昭和 38. 4.27. 4.29. 5. 5. 5.12. 5.19.	京都学生リーグ 〃 〃 〃 〃	2-1 京医大 6-0 京薬大 1-1 同志社大 0-4 京学大 0-1 立命館大		(京大4位)
5.26.	第17回同志社大定期戦	0-3 同志社大	京大	
6. 2. 6. 9. 6.16.	全日本天皇杯選手権京都予選 〃 ② 〃 ③	5-0 黒川電機 0-0 立命館大 1-1 京学大		(抽選勝ち) (抽選負け)
7. 7.	第14回東大定期戦	0-0 東大	東大御殿下G	
8.31. 9. 1. 9. 2.	近畿地区国立大学体育大会 ① 〃 ② 〃 決勝戦	8-0 滋賀大 3-1 阪大 0-2 京学大	京都学芸大学 〃 〃	
10.27. 11. 3. 11. 9. 11.17. 11.24.	関西学生リーグ 〃 〃 〃 〃	1-0 京学大 0-3 関大 0-1 甲南大 1-0 関学大 1-1 大経大	西京極競技場 韮グラウンド 西京極競技場 〃 〃	京大1部3位
昭和 39. 4.19. 4.25. 4.26. 4.29. 5.10. 5.17. 5.24.	京都学生リーグ 〃 〃 〃 〃 〃 〃	2-0 京工大 5-2 京薬大 3-0 京府大 2-1 京医大 0-0 同志社大 0-1 京学大 3-1 立命館大		(京大3位)
6. 7.	第18回同志社大定期戦	1-5 同志社大	同志社香里G	
7. 5. 7. 6. 7. 8. 7. 9.	第15回東大定期戦 国立7大学体育大会① 〃 ② 〃 ③	0-0 東大 1-1 阪大 4-1 九州大 1-3 東北大	京大 京大 〃 〃	
8.28. 8.29. 8.30.	近畿地区国立大学体育大会 ① 〃 ② 〃 決勝戦	4-0 京工大 1-0 神大 3-1 京学大	阪大石橋G 〃 〃	(延長戦)
11. 1. 11. 7. 11.15. 11.22. 11.29.	関西学生リーグ(1部) 〃 〃 〃 〃	3-0 甲南大 1-1 関大 0-1 大経大 1-0 関学大 0-1 京学大	神戸王子G 西京極競技場 韮グラウンド 西京極競技場 神戸王子G	京大1部3位
昭和 40. 5.15. 5.16. 5.23. 5.30.	京都学生リーグ(1部) 〃 〃 〃	1-0 京工大 0-1 京学大 0-3 同志社大 1-0 立命館大	京府大 京薬大 京府大 〃	(昭和40年度より1,2部制) (1部3位)
6.27. 7. 4.	第19回同志社定期戦 第16回東大定期戦	0-0 同志社大 0-1 東大	京大 東大検見川G	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 40. 9. 4.	近畿地区国立大学体育大会 ①	京大 1-0 大外大	神戸大	
9. 5.	〃 ②	3-0 神船大	〃	
9. 6.	〃 ③	1-3 京学大	〃	
10.31.	関西学生リーグ(1部)	2-0 京学大	神戸王子G	
11. 7.	〃	0-6 関学大	〃	
11.14.	〃	1-0 甲南大	〃	
11.21.	〃	0-0 関大	〃	
11.28.	〃	0-3 大経大	〃	京大1部3位
昭和 41. 4.24.	京都学生リーグ(1部)	8-0 京医大		
4.29.	〃	0-5 同志社大		
5. 5.	〃	2-2 京都教育大		
5. 8.	〃	1-0 立命館大		(1部2位)
6.26.	第20回同志社大定期戦	2-2 同志社大		
7. 3.	第17回東大定期戦	1-1 東大	京大	
8.10.	国立7大学体育大会①	2-0 北大	東大検見川G	
8.11.	〃 ②	2-1 東北大	〃	
8.13.	〃 決勝戦	1-0 東大	〃	京大優勝
9. 4.	近畿地区国立大学体育大会 ①	4-0 商船大	和歌山桐陰高	
9. 5.	〃 ②	3-1 滋賀大	〃	
9. 6.	〃 決勝戦	1-1 神大	〃	京大・神大、同率優勝
10.30.	関西学生リーグ(1部)	0-4 大経大	王子競技場	
11. 6.	〃	1-1 大商大		
11.20.	〃	1-7 関学大	王子競技場	
11.27.	〃	0-2 京教大		
12.11.	〃	0-2 関大	西宮球技場	京大1部6位
12.18.	〃 1,2部入替戦	1-4 神大	大阪府立大	京大2部降格
昭和 42. 4.23.	京都学生リーグ(1部)	4-1 京府大		
4.27.	〃	4-3 京教大		
5. 7.	〃	0-5 同志社大		
5.14.	〃	2-0 立命館大		(1部2位)
6.18.	第21回同志社大定期戦	1-6 同志社大		
7. 2.	第18回東大定期戦	0-3 東大	東大	
9. 3.	近畿地区国立大学体育大会 ①	0-3 阪大		
10.28.	関西学生リーグ(2部)	3-0 大工大	西宮市民グラウンド	
11. 5.	〃	1-0 阪大	韮グラウンド	
11.12.	〃	2-2 立命館大	〃	
11.19.	〃	1-2 同志社大	〃	
11.26.	〃	2-1 甲南大	服部競技場	京大2部2位
昭和 43. 4.14.	京都学生リーグ(1部)	0-3 京教大		
4.21.	〃	3-1 京工大	京府大	
4.28.	〃	4-0 京薬大	〃	
5. 5.	〃	1-0 立命館大	〃	
5.12.	〃	0-1 同志社大	〃	(1部3位)
6.16.	第22回同志社大定期戦	0-3 同志社大		
7. 7.	第19回東大定期戦	0-3 東大	京大	
8.31.	近畿地区国立大学体育大会	6-0 大外大	京教大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 43. 9. 2.	近畿地区国立大学体育大会 ②	京大 0-1 京教大	京都教育大学	
10.27.	関西学生リーグ(2部)	0-0 立命館大		
11. 8.	〃	3-1 甲南大		
11.10.	〃	2-2 大工大	西宮厚生年金G	
11.17.	〃	2-2 阪大		
11.24.	〃	2-6 神大		京大2部4位
昭和 44. 4.12.	京都学生リーグ(1部)	2-5 同志社大	京都府立大学	
4.27.	〃	5-0 京府大	〃	
5. 3.	〃	4-1 京工大	〃	
5. 8.	〃	0-4 京教大	〃	
5.11.	〃	0-1 立命館大	〃	(1部4位)
6.15.	第23回同志社大定期戦	0-4 同志社大	京大	
7. 6.	第20回東大定期戦	1-1 東大	東大検見川G	
8.30.	近畿地区国立大学体育大会	1-0 和歌山大	大教大池田G	
8.31.	〃	0-3 京教大	〃	
9. 1.	〃 3位決定戦	2-1 京工大	〃	
10.19.	関西学生リーグ(2部)	0-0 大府大	大阪府立大学	
10.30.	〃	7-2 大市大	京大宇治	
11. 3.	〃	1-0 天理大	鞠グラウンド	
11. 5.	〃	3-0 京工大	浜甲子園厚生G	
11.16.	〃	2-2 甲南大	京大宇治	
11.22.	〃	0-2 大工大	西宮市民グラウンド	
11.29.	〃	1-0 立命館大	服部緑地グラウンド	京大2部2位
12. 4.	〃 1,2部入替戦	1-2 阪大	〃	京大2部残留
昭和 45. 4.18.	京都学生リーグ(1部)	0-3 同志社大		
4.25.	〃	0-2 京産大		
4.29.	〃	2-3 京教大		
5. 3.	〃	2-3 京工大		
5.10.	〃	1-4 立命館大		(1部6位)
	〃 入替戦	2-1 龍谷大		(1部残留)
6. 7.	第24回同志社大定期戦	1-1 同志社大		
6.13.	四者リーグ戦	2-1 京教大		
6.14.	〃	3-0 阪大		
6.21.	〃	3-1 神大		
7.12.	第21回東大定期戦	2-3 東大	京大	
8.25.	近畿地区国立大学体育大会 ①	3-2 滋賀大	京都教育大学	
8.26.	〃 ②	2-3 京教大	〃	
10.18.	関西学生リーグ(2部)	1-0 天理大	京大宇治	
10.25.	〃	4-1 神商大	京大	
10.31.	〃	2-0 大府大		
11. 8.	〃	2-1 京工大	京大宇治	
11.15.	〃	5-0 大工大	〃	
11.21.	〃	4-0 甲南大	〃	
11.29.	〃	0-0 立命館大		京大2部1位
12. 6.	〃 1,2部入替戦	3-0 阪大	京大宇治	京大1部昇格
昭和 46. 4.11.	京都学生リーグ(1部)	0-0 同志社大学		

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考	
昭和 46. 4.18.	京都学生リーグ(1部)	京大 0-0 京教大		(1部4位)	
4.25.	〃	2-3 立命館大			
4.29.	〃	1-2 京産大			
5. 2.	〃	3-0 龍谷大			
5.15.	〃	2-2 京工大			
6.20.	第25回同志社大定期戦	1-1 同志社大			
7.11.	第22回東大定期戦	1-1 東大	東大		
11. 3.	関西学生リーグ(1部)	1-3 関学大	西宮球技場	京大1部6位	
11. 6.	〃	1-0 京教大	西京極競技場		
11.13.	〃	1-1 大商大	〃		
11.17.	〃	1-4 関大	神戸中央球技場		
11.20.	〃	3-2 立命館大	〃		
11.23.	〃	1-0 大経大	〃		
11.30.	〃	0-3 同志社大	西京極競技場		
昭和 47. 4. 9.	京都学生リーグ(1部)	4-0 立命館大			(1部5位)
4.23.	〃	4-1 京工大			
4.29.	〃	0-2 天理大			
5. 3.	〃	0-3 京産大			
5. 7.	〃	2-3 京教大			
5.14.	〃	1-2 同志社大			
5.21.	〃	5-0 龍谷大			
6.25.	第26回同志社大定期戦	0-4 同志社大			
7. 2.	第23回東大定期戦	0-1 東大	京大		
	国立7大学体育大会	0-5 東大			
	〃	3-1 阪大			
	〃	4-3 名古屋大			
9.23.	関西学生リーグ(1部)	1-3 関学大	御崎グラウンド	京大1部6位	
9.30.	〃	0-1 大商大	西宮球技場		
10. 7.	〃	0-1 同志社大	〃		
10.14.	〃	0-0 大経大	尼崎		
10.22.	〃	3-0 関大	御崎グラウンド		
10.28.	〃	0-3 京産大	西京極競技場		
11. 3.	〃	1-2 京教大	彦根陸上競技場		
昭和 48. 4. 8.	京都学生リーグ(1部)	2-2 立命館大	京大		(1部5位)
4.14.	〃	5-2 滋賀大	大谷大		
4.15.	〃	1-3 天理大	京大宇治		
4.22.	〃	6-4 龍谷大			
5. 5.	〃	* 0-3 京産大	京産大二軒茶屋		
5.13.	〃	* 1-5 同志社大	同志社香里		
5.20.	〃	* 2-1 京教大	大谷大		
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]				
5. 3.	関西学生選手権予選リーグ	0-3 大経大	関学大		
5.12.	〃	1-3 関学大	京大宇治		
5.26.	〃	0-6 大商大	大商大		
5.27.	〃	2-1 関大	京大宇治		
	〃 敗者復活戦	0-1 関大			

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 48. 6.10.	第27回同志社大定期	京大 0-3 同志社大		
7. 1.	第24回東大定期戦	2-2 東大	東大御殿下G	
8.28.	近畿地区国立大学体育大会 ①	3-1 大外大		
	〃 ②	2-1 京教大		
	〃 決勝戦	2-1 神大		京大優勝(延長戦)
9.15.	関西学生リーグ(1部)	0-2 同志社大	西宮球技場	
9.24.	〃	1-4 京産大	西京極競技場	
9.30.	〃	1-3 大商大	西宮球技場	
10. 6.	〃	1-1 関学大	〃	
10.13.	〃	5-4 京教大	神戸中央競技場	
10.22.	〃	3-3 関大	御崎グラウンド	
10.27.	〃	0-4 大経大	西宮球技場	京大1部6位
昭和 49. 5. 3.	京大蹴球部創部50周年 記念試合	現役 1-0 若手OB		
	〃	OB(B) 2-2 OB(C)	京大	
	〃	超OB 3-0 神戸女学院中学部		
4. 6.	京都学生リーグ(1部)	京大 1-4 京教大	京府大	
4.14.	〃	4-2 立命館大	〃	
4.21.	〃	0-4 天理大	〃	
4.28.	〃	2-2 滋賀大	京大宇治	
5. 5.	〃	* 0-3 京産大	京工大	
5.12.	〃	1-4 龍谷大	京府大	
5.19.	〃	* 1-3 同志社大	大谷大	
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4.20.	関西学生選手権予選リーグ	0-3 大経大		
4.27.	〃	1-2 関学大		
5.11.	〃	0-4 大商大		
5.25.	〃	1-2 大体大		
5.26.	〃	3-1 関大		
6. 1.	〃 敗者復活戦	0-4 天理大		
6. 9.	第28回同志社大定期戦	1-3 同志社大	同志社香里	
7. 6.	第25回東大定期戦	0-1 東大	京大	
8.25.	近畿地区国立大学体育大会 ①	4-3 阪大		
8.26.	〃 ②	2-1 和歌山大		
	〃 決勝戦	3-1 大阪教育大	京都工芸繊維大	京大優勝(延長戦)
	天皇杯関西予選①	0-5 田辺FC		
9.16.	関西学生リーグ(1部)	0-1 関学大	西京極競技場	
9.22.	〃	0-4 大経大	神戸中央球技場	
9.30.	〃	0-3 大商大	韮グラウンド	
10. 8.	〃	0-0 京産大	伊丹	
10.12.	〃	0-3 大体大	〃	
10.19.	〃	2-3 関大	西京極競技場	
10.26.	〃	0-2 同志社大	韮グラウンド	京大1部8位
11.24.	〃 入替戦①	0-3 天理大	神戸中央球技場	
11.30.	〃 入替戦②	0-1 天理大	〃	京大2部降格
昭和 50. 3.22.	京都学生リーグ(1部)	2-1 龍谷大	京都府立大学	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 50. 3.30.	京都学生リーグ(1部)	京大 2 - 4 同志社大	京大宇治	(1部6位)
4. 5.	〃	1 - 3 京都学園大	〃	
4.12.	〃	0 - 2 天理大	〃	
4.13.	〃	0 - 3 京産大	〃	
4.20.	〃	* 1 - 3 京教大		
4.27.	〃	* 5 - 0 立命館大		
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4.19.	関西学生選手権予選リーグ	1 - 0 近畿大		
4.26.	〃	2 - 3 甲南大		
4.29.	〃	1 - 0 神大		
5. 3.	〃	4 - 0 神商大		
5.11.	〃	3 - 0 阪大		
5.17.	同、決勝トーナメント①	1 - 3 天理大		
6. 8.	第29回同志社大定期戦	2 - 2 同志社大	京大	
6.29.	第26回東大定期戦	1 - 2 東大	東大御殿下G	
	天皇杯京都府予選 ①	3 - 0 桃山クラブ		
7. 6.	〃 ②	2 - 1 京都府警		
7.13.	〃 ③	0 - 2 京教大		
7.20.	〃 3位決定戦	1 - 3 立命館大		
7.16.	国立7大学体育大会	1 - 0 阪大	トヨタ・スポーツセンター	京大優勝
7.17.	〃	5 - 0 東北大	〃	
7.18.	〃	1 - 0 名古屋大	〃	
7.19.	〃	4 - 0 九州大	〃	
8.29.	近畿地区国立大学体育大会①	1 - 2 京教大		
9.14.	関西学生リーグ(2部)	1 - 1 近畿大	阪大	京大2部1位
9.21.	〃	5 - 0 神商大	〃	
9.28.	〃	2 - 2 甲南大	〃	
10. 5.	〃	1 - 0 神大	京教大	
10.12.	〃	1 - 1 京教大	〃	
10.19.	〃	2 - 1 阪大	〃	
10.26.	〃	2 - 1 立命館大	〃	
11.22.	〃 1,2部入替戦①	0 - 3 関学大	韮グラウンド	
11.24.	〃 〃 ②	0 - 2 関学大	〃	
昭和 51. 3.27.	京都学生リーグ(1部)	6 - 0 龍谷大	京都教育大	
3.28.	〃	2 - 1 同志社大	京大宇治	
4. 3.	〃	2 - 3 京教大	京都工芸繊維大	
4.11.	〃	1 - 2 京産大	京大宇治	
4.17.	〃	6 - 2 京都学園大	〃	
4.24.	〃	2 - 0 立命館大	京都府立大	
4.30.	〃	0 - 3 天理大	京大宇治	
	関西学生選手権予選①	1 - 0 追手門大		
	〃 ②	3 - 0 阪大		
	〃 ③	3 - 0 甲南大		
5. 9.	〃 ④	1 - 1 近畿大	京大宇治	
5.16.	〃 ⑤	0 - 2 関大	関大	
	決勝トーナメント①	4 - 1 京産大		

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 51.	関西学生選手権予選(2部)			
	決勝トーナメント②	京大 2 - 1 大経大		
5.30.	// 準決勝戦	1 - 2 大体大	万博球技場	
6. 6.	// 3位決定戦	2 - 1 関学大	//	京大、関西選手権3位
6.13.	第30回同志社大定期戦	1 - 1 同志社大		
7. 4.	第27回東大定期戦	3 - 1 東大	京大	
	近畿地区国立大学体育大会 ②	0 - 2 大教大		
9.12.	関西学生リーグ(2部)	5 - 0 阪大	阪大	
9.19.	//	3 - 2 追手門大	京大宇治	
9.26.	//	5 - 1 神商大	阪大	
10. 3.	//	5 - 1 立命館大	京大宇治	
10.10.	//	3 - 0 甲南大	関大	
10.17.	//	4 - 0 近畿大	京大宇治	京大2部1位
10.24.	//	2 - 2 関大	関大	京大1部昇格
昭和 52.	京都学生リーグ(1部)	0 - 0 京教大	大谷大	
4. 3.	//	5 - 0 立命館大	京大宇治	
4. 9.	//	7 - 0 京工大	京教大	
4.10.	//	4 - 0 龍谷大	京大宇治	
4.29.	//	* 1 - 3 同志社大	関学大	
5. 3.	//	* 2 - 3 京産大	京大宇治	
5. 8.	//	* 3 - 1 天理大	大経大	
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4.17.	関西学生選手権予選(1部)	0 - 7 大商大	大商大	
4.24.	//	0 - 2 大経大	大谷大	
5. 1.	//	1 - 1 関学大	同志社香里	
5. 5.	//	0 - 4 大体大	大谷大	
5.14.	決勝トーナメント①	4 - 0 近畿大	大商大	
5.22.	// ②	0 - 4 大体大	//	
6.12.	第31回同志社大定期戦	1 - 3 同志社大	京大	
6.26.	第28回東大定期戦	0 - 1 東大	東大御殿下G	
8.27.	近畿地区国立大学体育大会	1 - 0 奈良教育大	神大	
8.28.	//	1 - 1 大教大	//	
8.29.	//	0 - 1 神大	//	
8.30.	//	0 - 1 京教大	//	
9.10.	関西学生リーグ(1部)	0 - 8 大商大	万博競技場	
9.17.	//	0 - 5 大体大	西京極競技場	
9.23.	//	1 - 2 同志社大	尼崎	
10. 1.	//	1 - 1 関学大	伊丹	
10. 8.	//	1 - 1 京産大	万博競技場	
10.10.	//	0 - 2 大経大	韮グラウンド	
10.22.	//	0 - 1 天理大	万博競技場	京大1部7位
11.23.	// 1,2部入替戦①	2 - 2 京教大	韮グラウンド	
12. 4.	// // ②	2 - 1 //	万博競技場	京大1部残留
11. 3.	天皇杯関西予選 ①	2 - 1 科研薬	万博競技場	
11. 6.	// ②	1 - 0 大阪ガス	彦根陸上競技場	
11.23.	// ③	1 - 4 ヤンマークラブ	韮グラウンド	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 53. 3.21.	京都学生リーグ(1部)	京大 1-2 立命館大	立命館大	
3.25.	〃	1-3 天理大	京大宇治	
4. 1.	〃	1-2 京教大	〃	
4. 9.	〃	1-1 京教大	立命館大	
4.23.	〃	* 1-2 同志社大	京大宇治	
5. 3.	〃	* 2-3 京産大	大商大	
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4. 5.	関西学生選手権予選(1部)	0-3 大体大	大商大	
4.16.	〃	1-3 大商大	大体大	
4.30.	〃	1-1 大経大	同志社大	
5. 5.	〃	1-1 関学大	関学大	
5. 9.	〃	2-0 阪大	〃	
6. 4.	第32回同志社大定期戦	2-2 同志社大	京大	
7. 9.	第29回東大定期戦	3-0 東大	〃	
9.10.	関西学生リーグ(1部)	0-2 大体大	尼崎	
9.30.	〃	2-4 大商大	西京極競技場	
10. 2.	〃	1-0 同志社大	韮グラウンド	
10. 7.	〃	0-3 関学大	万博球技場	
10.14.	〃	2-2 京産大	韮グラウンド	
10.21.	〃	1-1 大経大	〃	
10.24.	〃	1-0 阪大	万博球技場	京大1部6位
11.23.	〃 1,2部入替戦①	0-2 天理大	韮グラウンド	
11.26.	〃 〃 ②	1-0 〃	〃	京大2部降格
10.28.	天皇杯関西予選 ①	4-0 大教大クラブ		
11. 3.	〃 ②	5-1 京都府警	万博球技場	
11.12.	〃 ③	1-2 紫光クラブ	西京極競技場	
昭和 54. 3.11.	天皇杯京都予選①	0-1 ユニチカ宇治	吉祥院グラウンド	
3.17.	京都学生リーグ(1部)	16-0 京都学園大	大谷大	
3.18.	〃	2-2 京産大	京大	
3.24.	〃	0-0 同志社大	京大宇治	
3.25.	〃	2-0 京府大	京教大	
3.31.	〃	3-2 天理大	京大宇治	
4.14.	〃	* 3-1 龍谷大	〃	
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4. 7.	関西学生選手権予選(2部)	1-1 和歌山大	大府大	
4.15.	〃	1-0 大府大京	大宇治	
4.21.	〃	1-2 近畿大	京教大	
4.22.	〃	0-0 甲南大	京大宇治	
5. 3.	〃	1-1 大教大	大教大	
5. 5.	〃	1-3 京教大	京大宇治	
5.12.	決勝トーナメント①	1-2 大商大	大商大	
6.10.	第33回同志社大定期戦	1-3 同志社大	京大	
7. 8.	第30回東大定期戦	4-0 東大	東大御殿下G	
8.24.	近畿地区国立大学体育大会 ①	7-0 京工大	滋賀大石山G	
8.25.	〃 ②	1-1 大教大	〃	(抽選負け)
8.26.	〃 3位決定戦	4-2 阪大	〃	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 54. 9. 9.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	京大 7-0 和歌山大	京教大	
9.15.	〃	4-1 龍谷大	〃	
9.24.	〃	2-1 大府大	京大宇治	
9.30.	〃	3-0 甲南大	大教大	
10. 7.	〃	2-3 近畿大	京大宇治	
10.10.	〃	1-1 大教	京教大	
10.13.	〃	0-4 京教大	〃	京大2部Aブロック位
10.28.	〃 2部順位決定戦	2-0 関大	京大宇治	京大2部5位
昭和 55. 3. 2.	天皇杯京都府予選 ①	3-2 三菱電機	下鳥羽グラウンド	
3.16.	〃 ②	2-1 FC嵯峨野	吉祥院グラウンド	
7. 6.	〃 決勝トーナメント①	0-1 伏見蹴友会	吉祥院グラウンド	
3.17.	京都学生リーグ(1部)	0-0 京教大	京大宇治	
3.20.	〃	1-1 滋賀大	〃	
3.23.	〃	2-1 同志社大	京教大	
3.29.	〃	0-3 天理大	京大宇治	
3.30.	〃	0-1 仏教大	立命館大杉野G	
4. 5.	〃	6-0 龍谷大	京大宇治	
4.20.	〃	* 4-1 京産大	立命館大杉野G	
	[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]			
4. 1.	関西学生選手権予選(2部)	4-0 和歌山大	京大宇治	
4. 3.	〃	0-1 阪南大	〃	
4. 6.	〃	1-0 追手門大	〃	
4.13.	〃	4-0 甲南大	〃	
4.19.	〃	0-0 大教大	〃	
4.26.	〃	1-2 桃山大	〃	
6. 8.	第34回同志社大学定期戦	2-4 同志社大	同志社香里	
7.13.	第31回東大定期戦	3-1	東大京大	
8.24.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2-0 阪大	京大宇治	
8.25.	〃 ②	3-2 大教大	〃	
8.26.	〃 ③	1-0 滋賀大	〃	
8.27.	〃 決勝戦	1-2 京教大	〃	
9. 7.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	5-2 和歌山大	京大宇治	
9.14.	〃	4-1 阪南大	阪南大	
9.21.	〃	6-0 追手門大	京大宇治	
9.23.	〃	2-0 甲南大	阪南大	
9.28.	〃	1-1 大教大	京大宇治	
10. 5.	〃	3-3 京産大	〃	
10.12.	〃	3-0 桃山大	大教大	京大2部Aブロック2位
10.18.	〃 2部順位決定戦	3-0 関大	〃	京大2部3位
12.14.	〃 1,2部入替戦①	0-2 大経大	万博球技場	
12.21.	〃 〃 ②	0-3 〃	〃	京大2部残留
昭和 56. 3. 1.	天皇杯京都府予選①	4-1 大鉄局	吉祥院グラウンド	
3.21.	〃 ②	4-1 洛東クラブ	〃	
10.25.	〃 関西大会①	3-3 関大 (PK3-4)	彦根陸上競技場	
3.16.	京都学生リーグ(1部)	3-1 京教大	京大宇治	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 56. 3.22.	京都学生リーグ(1部)	京大 1-0 立命館大	京教大	
3.28.	〃	1-2 同志社大	京大宇治	
3.29.	〃	1-4 京産大	京教大	
4. 4.	〃	3-0 龍谷大	京大宇治	
4.26.	〃	* 2-2 滋賀大	〃	
4.29.	〃	* 0-1 天理大	〃	
[*印は、関西学生選手権予選リーグを兼ねた試合である]				
4. 3.	関西学生選手権予選(2部)	6-1 和歌山大	京大宇治	
4. 8.	〃	5-0 甲南大	〃	
4.12.	〃	1-1 大工大	〃	
4.19.	〃	3-0 大府大	〃	
5. 3.	〃	2-2 京外大	〃	
5.10.	〃 決勝トーナメント①	1-4 大体大	関学大	
6. 7.	第35回同志社大定期戦	0-3 同志社大	京大	
7. 5.	第32回東大定期戦	1-2 東大	東大御殿下G	
8.26.	近畿地区国立大学体育大会①	0-1 大教大	大教大池田	
9. 6.	関西学生リーグ(2部Bブロック)	2-0 大工大	京大宇治	
9.13.	〃	2-2 和歌山大	〃	
9.20.	〃	0-1 大府大	大工大	
9.23.	〃	4-2 甲南大	京大宇治	
9.27.	〃	3-2 京外大	〃	
10. 4.	〃	3-1 滋賀大	〃	
10.10.	〃	0-2 天理大	〃	京大2部Bブロック3位
10.24.	〃 2部順位決定戦	4-3 神戸学院大	〃	京大2部5位
昭和 57. 3.21.	天皇杯京都府予選 ①	3-1 日本電	下鳥羽グラウンド	
7.18.	〃 ②	0-2 紫光クラブB	太陽ヶ丘	
3.15.	京都学生リーグ(1部)	3-0 京教大	京教大	
3.20.	〃	2-1 大谷大	京大宇治	
3.27.	〃	0-1 同志社大	〃	
3.28.	〃	0-2 京産大	大谷大	
3.31.	〃	1-1 立命館大	京大宇治	
4. 3.	〃	1-1 天理大	〃	
4. 9.	関西学生春季リーグ(2部)	2-0 龍谷大	〃	
4.18.	〃	1-2 阪南大	〃	
4.25.	〃	1-2 近畿大	〃	
4.29.	〃	3-4 滋賀大	〃	
5. 2.	〃	1-0 関学大	関学大	
5. 5.	〃	0-1 関大	関大	
6.20.	第36回同志社大定期戦	0-2 同志社大	同志社香里	
7.11.	第33回東大定期戦	0-1 東大	京大	
	近畿地区国立大学体育大会 ①	3-0 奈良大	京教大	
	〃 ②	1-3 阪大	〃	
	〃 3位決定戦	2-2 滋賀大	〃	
9. 5.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	1-1 阪南大	阪南大	
9.12.	〃	4-1 近畿大	京大宇治	
9.15.	〃	5-0 龍谷大	〃	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 57. 9.23.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	京大 2 - 3 神大	大教大	京大2部Aブロック5位
9.26.	〃	0 - 3 関学大	京大宇治	
10. 3.	〃	0 - 2 滋賀大	〃	
10.11.	〃	1 - 1 関大	関大	
10.24.	〃	3 - 1 大工大		
昭和 58. 3.13.	天皇杯京都府予選 ①	0 - 0 ゼックストーン	太陽ヶ丘	(抽選勝ち)
3.27.	〃 ②	3 - 0 紫光クラブB	京大宇治	
7.17	〃 ③	3 - 4 紫光教員	〃	
3.17.	京都学生リーグ(1部)	3 - 3 大谷大	大谷大	(京大1部残留)
3.20.	〃	0 - 5 天理大京	大宇治	
3.25.	〃	0 - 4 京教大	京教大	
3.29.	〃	0 - 2 京産大	京大宇治	
4. 2.	〃	0 - 2 同志社大	〃	
4. 9.	〃	0 - 1 立命館大	〃	
4.28.	〃(1,2部入替戦)	2 - 1 京都学園大	大谷大	
4.10.	関西学生春季リーグ(2部)	4 - 2 甲南大	京大宇治	
4.17.	〃	0 - 1 滋賀大	〃	
4.24.	〃	0 - 2 関学大	関学大	
4.29.	〃	1 - 1 大経大	大経大	
5. 3.	〃	3 - 2 大市大	京大宇治	
5. 7.	〃	1 - 0 和歌山大	〃	
5.15	〃	2 - 2 阪南大	〃	
6.19.	第37回同志社大定期戦	1 - 5 同志社大	京大	
7.10.	第34回東大定期戦	1 - 4 東大	東大御殿下G	
8.23.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2 - 2 奈良大	神戸商船大	(抽選勝ち)
8.24.	〃 ②	0 - 5 京教大	〃	
9.11.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	2 - 0 甲南大	京大宇治	京大2部Aブロック1位 京大2部2位 京大2部残留
9.15.	〃	3 - 1 滋賀大	大経大	
9.18.	〃	1 - 0 関学大	京大宇治	
9.23.	〃	2 - 1 大経大	大経大	
10. 2.	〃	2 - 1 大市大	京大宇治	
10.10.	〃	2 - 1 和歌山大	阪大	
10.16.	〃	2 - 0 阪南大	関大	
10.30.	〃2部順位決定戦	1 - 2 関大	阪大	
11.13.	〃1,2部入替戦	2 - 2 立命館大	万博球技場	
11.19.	〃 〃	0 - 2 〃	〃	
昭和 59. 3.11.	天皇杯京都府予選 ①	2 - 3 松下高槻	太陽ヶ丘	
3.17.	京都学生リーグ(1部)	3 - 2 大谷大	大谷大	(京大2部降格)
3.20.	〃	1 - 5 京教大	京教大	
3.23.	〃	2 - 6 立命館大	京大宇治	
3.26.	〃	1 - 6 京産大	京教大	
3.29.	〃	1 - 1 天理大	京大宇治	
4. 2.	〃	1 - 3 同志社大	〃	
4. 3.	〃	1 - 1 滋賀大	〃	
6. 2.	〃1,2部入替戦	0 - 1 京工大	〃	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 59. 4. 8.	京大蹴球部創部60周年 記 念 試 合 〃 〃	超OB 1-2 西山高校 OB(B) 0-1 同大OB 現役 4-0 OB(A)	京大 〃 〃	
4. 7.	関西学生春季リーグ(2部)	京大 1-1 京都学園大	京大宇治	
4.15.	〃	1-2 近畿大	〃	
4.21.	〃	4-0 大市大	大市大	
4.28.	〃	4-1 阪大	阪大	
5. 3.	〃	0-6 大経大	大経大	
5. 5.	〃	2-0 京外大	関学大	
5.12.	〃	2-2 関学大	京大宇治	
6.17.	第38回同志社大定期戦	2-6 同志社大	同志社香里	
7. 8.	第35回東大定期戦	0-2 東大	京大	
8.21.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2-1 京工大	大外大	
8.22.	〃 ②	3-1 神大	〃	
8.23.	〃 ③	3-0 奈良教大	〃	
8.24.	〃 決勝戦	1-2 京教大	〃	
9. 9.	関西学生リーグ(2部Aブロック)	4-1 京都学園大	京大宇治	
9.15.	〃	3-0 京外大	〃	
9.23.	〃	3-1 大市大	関学大	
9.30.	〃	4-0 近畿大	京大宇治	
10. 7.	〃	2-0 大経大	大経大	
10.14.	〃	2-3 関学大	関学大	
10.21.	〃	2-0 阪大	阪大	京大2部Aブロック2位
11. 4.	〃 2部順位決定戦	0-0 大工大 (PK5-4)	万博球技場	京大2部3位
11.17.	〃 1,2部入替戦①	0-4 同志社大	太陽ヶ丘	
12. 1.	〃 〃 ②	1-7 〃	〃	京大2部残留
昭和 60. 2.24.	天皇杯京都府予選 ①	2-0 衣笠クラブ	下鳥羽グラウンド	
3.24.	〃 ②	1-3 紫光クラブB	〃	
3.20.	京都学生リーグ(2部)	2-2 京薬大	京大宇治	
3.23.	〃	1-1 京医大	〃	
3.26.	〃	2-1 京府大	〃	
3.29.	〃	1-3 仏教大	〃	
4. 3.	〃	2-1 京都学園大	〃	
4. 5.	〃	4-1 大谷大	〃	
4. 6.	関西学生春季リーグ(2部)	1-2 追手門大	京大宇治	
4.14.	〃	0-1 神院大	〃	
4.21.	〃	0-0 大教大	大教大	
4.28.	〃	0-1 京外大	〃	
5. 3.	〃	2-2 龍谷大	京大宇治	
5.11.	〃	2-2 阪大	阪大	
5.19.	〃	1-1 神大	京大宇治	
6.16.	第39回同志社大定期戦	1-4 同志社大	京大	
7.14.	第36回東大定期戦	2-4 東大	東大検見川G	
8. 5.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2-1 滋賀大	奈良教大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 60. 8. 6.	近畿地区国立大学体育大会 ②	京大 0 - 1 大教大	奈良教大	
8. 7.	〃 3位決定戦	0 - 2 京教大	〃	
9.15.	関西学生リーグ(2部)	1 - 1 追手門大	京大宇治	
9.22.	〃	1 - 1 神院大	〃	
9.29.	〃	1 - 1 大教大	大教大	
10. 6.	〃	2 - 1 京外大	京大宇治	
10.10.	〃	1 - 2 龍谷大	〃	
10.13.	〃	0 - 1 阪大	〃	京大2部Bブロック8位
10.20.	〃	0 - 4 神大	神大	3部降格
昭和 61. 2.16.	天皇杯京都府予選 ①	7 - 0 三菱電機	吉祥院グラウンド	
3. 9.	〃 ②	2 - 0 京阪電車	〃	
3.16.	〃 ③	2 - 4 紫光教員	下鳥羽グラウンド	
	京都学生選手権			
3.19.	1次リーグ(Dブロック)	3 - 1 龍谷大	京教大	
3.22.	〃	3 - 1 京教大	〃	
3.25.	〃	4 - 0 京外大	〃	
3.27.	決勝トーナメント	0 - 1 仏教大	〃	
3.29.	〃	4 - 5 京産大	京工大	
3.31.	〃	0 - 0 京工大	〃	(抽選勝、京大7位)
4. 5.	関西学生春季リーグ(3部Aブロック)	6 - 0 奈良教大	大谷大	
4.13.	〃	2 - 0 奈良大	京大宇治	
4.20.	〃	9 - 0 京府大	大谷大	
4.27.	〃	6 - 0 滋賀医大	〃	
4.29.	〃	4 - 1 京工大	〃	
5. 4.	〃	4 - 0 滋賀大	〃	
5.11.	〃	1 - 0 大谷大	京大宇治	(京大3部Aブロック1位)
5.17.	関西学生選手権 ①	0 - 3 同志社大	松下田辺G	
6.15.	第40回同志社大定期戦	1 - 2 同志社大	同志社田辺	
7.13.	第37回東大定期戦	2 - 4 東大	京工大G	
8.21.	近畿地区国立大学体育大会 ①	4 - 1 滋賀大	教工大	
8.22.	〃 ②	2 - 0 大教大	〃	
8.23.	〃 決勝戦	1 - 3 京教大	〃	
9.15.	関西学生秋季リーグ(3部Aブロック)	4 - 0 奈良教大	京大宇治	
9.21.	〃	4 - 0 奈良大	〃	
9.28.	〃	9 - 0 京府大	〃	
10. 4.	〃	7 - 0 滋賀医大	大谷大	
10.12.	〃	8 - 0 京工大	〃	
10.19.	〃	2 - 0 滋賀大	京工大	
10.25.	〃	0 - 1 大谷大	〃	京大3部Aブロック1位
11. 8.	〃 3部順位決定戦①	1 - 0 奈良産大	京大宇治	
11.16.	〃 〃 ②	2 - 0 大産大	神商大	京大3部1位2部昇格
昭和 62. 3. 1.	天皇杯京都府予選 ①	3 - 0 FCサガノ		
3.15.	〃 ②	4 - 1 府庁クラブ		
3.22.	〃 ③	1 - 0 伏見蹴友会		
7. 5.	〃 ④	2 - 2 FC比叡 (PK3-4)		

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
昭和 62.	京都学生選手権			
3.24.	1次リーグ(ブロック)	京大 6-0 京府大	京工大	
3.25.	〃	2-0 滋賀大	京大宇治	
3.26.	〃	0-1 立命館大	立命館大	
3.28.	決勝トーナメント	1-2 同志社大	同志社大	
3.30.	〃	0-0 仏教大	京工大	
3.31.	〃	(PK3-2) 0-1 立命館大	〃	
4. 4.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	1-2 京都学園大	大経大	
4.11.	〃	0-0 大経大	〃	
4.18.	〃	2-0 電通大	京大宇治	
4.25.	〃	1-1 桃山大	〃	
4.29.	〃	1-0 龍谷大	〃	
5. 5.	〃	0-1 阪大	桃山大	
5. 9.	〃	0-0 摂南大	摂南大	(京大2部Aブロック4位)
3.21.	第1回阪大定期戦	2-1 阪大関	電箕面G	
6.14.	第41回同志社大定期戦	1-4 同志社大	京大	
6.28.	第38回東大定期戦	0-1 東大	東大検見川G	
8.25.	近畿地区国立大学体育大会 ①	0-0 大教大	京大	
8.26.	〃 ②	3-1 和歌山大	〃	
8.27.	〃 決勝戦	3-1 京教大	〃	京大優勝
9.13.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	1-1 京都学園大	桃山大	
9.20.	〃	1-3 大経大	大経大	
9.27.	〃	1-0 電通大	京大宇治	
10. 3.	〃	2-1 桃山大	希望ヶ丘	
10.10.	〃	4-0 龍谷大	京大宇治	
10.18.	〃	0-0 阪大	京都学園大	
10.24.	〃	3-2 摂南大	桃山大	京大2部Aブロック2位
11.14.	〃 2部順位決定戦	0-2 京教大	亀岡総合運動公園	京大2部4位
昭和 63.	天皇杯京都府予選①	2-1 京セラ	吉祥院グラウンド	
3.13.	〃 ②	2-1 青城クラブA	太陽ヶ丘第2G	
5.22.	〃 ブロック決勝戦	4-0 FC比叡	久御山球技場	
10.30.	関西大会 ①	2-0 大市大	太陽ヶ丘	
11. 3.	〃 ②	1-2 大商大インクラブ	水口スポーツの森	
3.22.	京都学生選手権			
3.22.	1次リーグ(ブロック)	1-5 京産大	京大宇治	
3.23.	〃	2-0 京教大	〃	
3.24.	〃	7-0 京外大	〃	
3.28.	決勝トーナメント	3-1 天理大	京都学園大	
3.30.	〃	0-1 立命館大	亀岡総合運動公園	
4. 1.	〃	1-1 京産大	西京極競技場	京大3位
4. 1.	〃	(PK4-2)		
4. 9.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	2-1 大経法大	大谷大	
4.10.	〃	0-2 大教大〃		
4.17.	〃	4-0 神院大	大同酸素G	
4.24.	〃	3-0 阪大	大谷大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考	
昭和 63. 4.29.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	京大 1 - 2 近畿大	大谷大	京大2部Aブロック3位	
5. 3.	〃	1 - 0 大谷大	大教大池田G		
5. 5.	〃	1 - 0 関学大	大同酸素		
3.21.	第2回阪大定期戦	0 - 1 阪大	関電箕面G		
6.12.	第42回同志社大定期戦	4 - 1 同志社大	同志社田辺		
7.10.	第39回東大定期戦	0 - 0 東大	京大		
8.24.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2 - 0 京工大	阪大吹田G		
8.25.	〃 ②	0 - 1 阪大	〃		
9.11.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	3 - 0 大経法大	近大長瀬G		
9.18.	〃	2 - 2 大教大	阪大石橋G		
9.25.	〃	2 - 1 神院大	大谷大		
10. 2.	〃	4 - 1 阪大	京大宇治		
10. 9.	〃	2 - 0 近畿大	〃		
10.16.	〃	0 - 0 大谷大	阪大石橋G		
10.22.	〃	1 - 0 関学大	大同酸素		
11.12.	〃 2部順位決定戦	0 - 1 桃山大	太陽ヶ丘		京大2部Aブロック2位 京大2部4位
平成 1. 2.26.	天皇杯京都府予選 ①	2 - 1 関電京都	太陽ヶ丘第2G		京大3位
3.19.	〃 ②	1 - 0 FC比叡	下鳥羽グラウンド		
6.25.	〃 ③	0 - 3 網野クラブ	太陽ヶ丘第2G		
3.20.	京都学生選手権 1次リーグ(ブロック)	3 - 0 京外大	京大宇治	(京大3位)	
3.22.	〃	6 - 0 京工大	京工大		
3.24.	〃	0 - 2 天理大	京大宇治		
3.27.	決勝トーナメント	3 - 2 立命館大	宝ヶ池競技場		
3.29.	〃	1 - 2 京産大	亀岡総合運動公園		
4. 1.	〃	2 - 1 大谷大	西京極競技場		
4. 9.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	2 - 2 近畿大	近畿大		
4.15.	〃	2 - 0 京外大	京大宇治		
4.22.	〃	1 - 2 大経法大	〃		
4.29.	〃	0 - 1 神院大	神院大		
5. 3.	〃	2 - 1 大谷大	京教大		
5. 5.	〃	0 - 3 京教大	〃		
5. 6.	〃	0 - 1 関大	大谷大		
3.21.	第3回阪大定期戦	2 - 0 阪大	阪大		
6.17.	第43回同志社大定期戦	1 - 5 同志社大	京大		
7. 9.	第40回東大定期戦	1 - 1 東大	東大		
8.22.	近畿地区国立大学体育大会 ①	2 - 0 奈良教大			
8.23.	〃 ②	3 - 0 阪大			
8.24.	〃 ③	0 - 0 神大 (PK4-2)			
8.25.	〃 決勝戦	1 - 0 大教大		京大優勝	
9.10.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	0 - 2 近畿大	神院大第6G	京大優勝	
9.15.	〃	6 - 2 大経法大	〃		
9.17.	〃	2 - 0 大谷大	京教大		
9.24.	〃	4 - 0 京外大	大谷大		
10. 1.	〃	1 - 3 神院大	神院大第5G		

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
平成 1.10. 8.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	京大 0-0 京教大	京教大	京大2部Aブロック2位 京大2部3位 京大1部昇格
10.15.	〃	2-1 関大	関大	
10.21.	〃 2部順位決定戦	2-0 大産大	松下田辺G	
11.18.	〃 1,2部入替戦①	0-0 天理大	神院大第6G	
11.25.	〃 〃 ②	3-1 〃	ヤンマー瀬田G	
平成 2. 3.19.	京都学生選手権 1次リーグ	3-0	花園大	京大宇治
3.22.	〃 〃	4-0 京外大	〃	
3.23.	〃 〃	1-2 天理大	〃	
3.28.	〃 2次リーグ	2-0 仏教大	亀岡総合運動公園	
3.30.	〃 〃	2-1 京産大	〃	
4. 1.	〃 〃	2-6 同志社大	宝ヶ池競技場	
4.22.	関西学生1部スーパーリーグ福井大会 スペシャルリーグA組	0-4 大体大	紀三井寺競技場	
4.29.	〃	0-2 立命館大	福井県宮窪上競技場	
4.30.	〃	2-3 大経大	〃	
5. 3.	関西学生選手権(第3ラウンドB組)	3-1 仏教大	久御山球技場	京大
5. 5.	〃	1-2 桃山大	神院大	
5. 6.	〃	0-3 関大	京教大	京大
3.21.	第4回阪大定期戦	0-2 阪大	京大	
6.24.	第44回同志社大定期戦	1-4 同志社大	同志社田辺	京大
7. 8.	第41回東大定期戦	1-0 東大	京大	
8.12.	天皇杯関西大会 ①	1-1 三洋電機本 (延長PK 4-3)	紀三井寺競技場	京大、京教大優勝
10.28.	〃 ②	2-1 関学大	甲西町町民G	
11. 4.	〃 ③	0-4 紫光クラブ	宝ヶ池競技場	
8.21.	近畿地区国立大学体育大会 ①	5-0 神戸商船大	京大、京教大優勝	
8.22.	〃 ②	4-0 和歌山大		
8.23.	〃 ③	0-0 京教大		
9. 9.	関西学生リーグ(1部)	0-3 大体大	神戸中央球技場	京大1部8位 京大2部降格
9.15.	〃	0-3 同志社大	水ロススポーツの森	
9.22.	〃	0-6 大商大	神戸中央球技場	
9.29.	〃	0-1 立命館大	高槻スポーツセンター	
10. 7.	〃	2-3 大経大	甲西町町民G	
10.14.	〃	3-2 京産大	高槻スポーツセンター	
10.20.	〃	0-0 京教大	神戸中央球技場	
平成 3. 3.19.	京都学生選手権 1次リーグ(ブロック)	5-0 京薬大	京大宇治	
3.22.	〃	1-0 京都学園大	京都学園大	
3.23.	〃	3-1 仏教大	仏教大岩倉G	
3.28.	決勝トーナメント	1-0 同志社大	亀岡総合運動公園	
3.30.	〃	0-1 天理大	〃	
4. 1.	〃	1-0 京教大	西京極競技場	
4. 6.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	5-0 神院大	関学大	
4. 7.	〃	1-2 関西外大	神院大	
4.13.	〃	2-2 桃山大	関学大	
4.14.	〃	0-1 奈良産大	〃	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
平成 3. 4.21.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	1 - 0 大産大	大産大	
4.28.	〃	0 - 1 天理大	天理大	
4.29.	〃	3 - 2 関学大	大産大	
3.21.	第 5 回阪大定期戦	0 - 2 阪大	京大	
6.22.	第45回同志社大定期戦	3 - 1 同志社大	京大	
7. 7.	第42回東大定期戦	0 - 0 東大	東大	
8.20.	近畿地区国立大学体育大会 ①	1 - 0 滋賀大	滋賀大	
8.21.	〃 ②	1 - 0 神大	〃	
8.23.	〃 決勝戦	1 - 0 阪大	〃	京大優勝
9.15.	関西学生秋季リーグ(2部Bブロック)	0 - 1 関大	関大	
9.22.	〃	4 - 1 阪南大	〃	
9.29.	〃	3 - 1 大谷大	桃山大	
10. 5.	〃	0 - 1 桃山大	〃	
10.10.	〃	0 - 0 大教大	関学大	
10.13.	〃	2 - 0 京都学	大教大	
10.19.	〃	1 - 1 関学大	関学大	京大2部 ブロック2位
10.26.	〃 2部順位決定戦①	2 - 1 龍谷大	神戸ユニバー・サブG	
11. 2.	〃 〃 ②	1 - 3 関大(延長戦)	高槻総合運動場	京大2部2位
11.16.	〃 1,2部入替戦①	1 - 1 神大	万博記念球技場	
11.24.	〃 〃 ②	3 - 4 〃	太陽ヶ丘	京大2部残留
平成 4.	京都学生選手権			
3.16.	1次リーグ(ブロック)	5 - 1 大谷大	大谷大	
3.19.	〃	3 - 0 滋賀大	京大宇治	
3.20.	〃	4 - 1 仏教大	仏教大	
3.27.	同、決勝トーナメント	0 - 1 龍谷大(延長戦)	西京極競技場	
3.29.	〃	2 - 1 天理大(延長戦)	大谷大	
3.31.	〃	3 - 2 立命館大	大谷大	(京大5位)
4.11.	関西学生春季リーグ(2部Bブロック)	1 - 1 大谷大	阪南大	
4.18.	〃	1 - 2 大産大	京大	
4.25.	〃	0 - 2 関学大	関学大	
4.26.	〃	1 - 1 大教大	〃	
4.29.	〃	0 - 0 阪南大	京大	
5. 2.	〃	2 - 1 帝塚山大	阪南大	(京大2部Bブロック2位)
3.15.	第 6 回阪大定期戦	4 - 0 阪大	京大	
6.14.	第46回同志社大定期戦	2 - 1 同志社大	同志社田辺	
7. 9.	第43回東大定期戦	1 - 1	東大	京大
8.20.	近畿地区国立大学体育大会① (PK 3 - 1)	1 - 1 京教大	京教大	
8.21.	〃 ②	6 - 0 兵教大	〃	
8.22.	〃 決勝戦	1 - 0 神大	〃	京大優勝
9.20.	関西学生秋季リーグ(2部Bブロック)	4 - 0 京教大	大教大	
9.27.	〃	0 - 0 大教大	〃	
10. 4.	〃	3 - 1 大産大	帝塚山大	
10.11.	〃	2 - 2 大経大	〃	
10.18.	〃	1 - 1 関西外大	京大	
10.25.	〃	1 - 0 阪大	阪大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大ー相手)	場 所	備 考
平成 4.10.31.	関西学生秋季リーグ(2部Bブロック)	京大 2 - 0	帝塚山大	阪大京大2部Bブロック 優勝
11.15.	〃 順位決定戦①	0 - 1 大市大	神戸ユニバーサブG	
11.21.	〃 〃 ②	0 - 1 桃山大	〃	京大2部4位
平成 5. 2.11.	天皇杯京都府予選 ①	京大B 7 - 0 FCサカノ	西京極サブG	
2.21.	〃 ②	2 - 0 FCサガノ	太陽ヶ丘Aグラウンド	
3.7.	〃 ③	0 - 4 日本写真印刷	〃 第2グラウンド	
9. 5.	同、関西大会 ①	1 - 2 甲賀SC	〃 Bグラウンド	

全国社会人選手権				
4.29.	京都大会(Cブロック) ②	京大B 3 - 0 FFC	下鳥羽グラウンド	
5. 2.	〃 ③	3 - 0 比叡蹴球団	太陽ヶ丘第2グラウンド	(抽選勝ち)
5. 3.	〃 ④	1 - 1 FC零	吉祥院グラウンド	
5. 4.	〃 ⑤	1 - 0 松下電子工業	太陽ヶ丘第2グラウンド	
5. 5.	〃 (決勝戦)	0 - 1 東舞鶴クラブ	〃 陸上競技場	(延長戦)

京都学生選手権				
3.15.	1次リーグ(Dブロック)	京大 1 - 3 龍谷大	龍谷大	
3.20.	〃	3 - 0 京外大	京工大	
3.23.	〃	1 - 1 京工大	京大宇治	
3.25.	決勝トーナメント	0 - 6	立命館大	〃
3.29.	〃	0 - 3 同志社大	立命館大	(京大7位)

関西学生春季リーグ(2部Aブロック)				
4.10.	〃	1 - 0 大経法大	龍谷大	
4.11.	〃	0 - 1 近畿大	〃	
4.17.	〃	2 - 1 奈良産大	〃	
4.18.	〃	2 - 0 関学大	関学大	
4.25.	〃	1 - 0 大教大	京大	
4.29.	〃	1 - 1 龍谷大	関学大	
5. 1.	〃	4 - 0 神大	神大	京大2部Aブロック2位
5. 3.	〃 2部順位決定戦①	0 - 1 桃山大	同志社田辺	
5. 4.	〃 〃 ②	2 - 1 阪南大	御所グラウンド	京大2部3位

関西学生選手権決勝トーナメント①				
5. 8.	〃	3 - 0 仏教大	大和新庄新町G	
5.15.	〃 ②	1 - 0 大市大	新金岡グラウンド	(ベスト8進出)
5.23.	〃 ③	0 - 4 同志社大	甲西町町民G	

関西学生春季リーグ				
6.12.	〃 1,2部入替戦 ①	0 - 4 立命館大	三木山運動公園	
6.19.	〃 〃 ②	2 - 0 〃	〃	京大2部残留

3.13.	第7回阪大定期戦	1 - 0 阪大	阪大	

7. 4.	第44回東大定期戦	3 - 0 東大東大		

8. 1.	第47回同志社大定期戦	4 - 0 同志社大	京大	
8.19.	近畿地区国立大学体育大会①	2 - 1 京工大	大外大	
8.20.	〃 ②	0 - 1 大教大	〃	
8.21.	〃 3位決定戦	3 - 1 大外大	〃	

関西学生秋季リーグ(Cブロック)				
9.19.	〃	2 - 0 仏教大	大谷大	・本年度より2部3ブロック制
9.26.	〃	3 - 0 追手門大	〃	・1部へのチャレンジ権は各ブロックの1位のみ
10. 3.	〃	4 - 1 阪大	阪大	
10.10.	〃	2 - 0 神大	阪南大	
10.17.	〃	1 - 1 大谷大	〃	
10.24.	〃	2 - 0 大教大	大教大	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
平成 5.10.30.	関西学生秋季リーグ(Cブロック)	京大 0 - 2 阪南大	阪南大	京大2部Cブロック2位
平成 6.	京都学生選手権			
3.14.	1次リーグ(ブロック)	2 - 0 天理大	立命館大	
3.18.	〃	3 - 0 京府大	京府大	
3.22.	〃	0 - 0 立命館大	京大宇治	
3.27.	決勝トーナメント①	1 - 2 京教大	大谷大	
3.28.	〃 ②	0 - 1 龍谷大	〃	京大7位
4. 9.	関西学生春季リーグ(2部Bブロック)	0 - 3 関外大	京大宇治	
4.10.	〃	4 - 0 大院大	龍谷大瀬田	
4.16.	〃	4 - 0 大市大	帝塚山大	
4.17.	〃	1 - 0 帝塚山大	大市大	
4.23.	〃	1 - 3 京教大	京教大	
4.24.	〃	0 - 0 大経法大	龍谷大瀬田	
5. 1.	〃	0 - 2 龍谷大	〃	京大2部Bブロック2位
3.13.	第8回阪大定期戦	1 - 1 阪大	京大	
7. 3.	第45回東大定期戦	1 - 0 東大	〃	
7.10.	京大蹴球部創部70周年 記念試合OB戦	[TOP] 関西 2 - 0 関東	京大	
	〃 〃	[MIDDLE] 関西 4 - 1 関東	〃	
	〃 〃	[YOUNG] 関西 2 - 1 関東	〃	
	〃 現役戦	[対超若手OB] 現役 2 - 1 超若手OB	〃	
7.30.	第48回同志社大定期戦	京大 0 - 6 同志社大	同志社田辺	
8.19.	近畿地区国立大学体育大会①	2 - 2 和歌山大学 (PK 1 - 4)	阪大吹田G	
9.18.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	0 - 2 流通大	大教大	
9.25.	〃	0 - 0 大教大	〃	
10. 2.	〃	2 - 2 阪大	阪大吹田	
10.10.	〃	0 - 1	追手門大	大谷大
10.16.	〃	1 - 2 大体大	大体大	
10.23.	〃	0 - 1 甲南大	甲南大	京大2部Aブロック8位
10.29.	〃	0 - 0 大谷大	大体大	京大3部降格
平成 7. 3.11.	天皇杯京都府予選 ①	1 - 3	東舞鶴クラブ	吉祥院G
3.16.	京都学生選手権1次リーグ	0 - 8 立命館大	京府大	
3.19.	〃	6 - 0 京府大	京工大	
3.21.	〃	0 - 1 京工大	立命館大原谷G	
4. 8.	関西学生春季リーグ(3部Aブロック)	2 - 0 神戸商船大	京大宇治	
4. 9.	〃	7 - 1 英知大	英知大	
4.15.	〃	5 - 0 神戸国際大	京大宇治	
4.16.	〃	3 - 1 神外大	英知大	
4.23.	〃	6 - 0 大阪芸術大	京大宇治	
4.29.	〃	6 - 0 精華大	〃	
5. 3.	〃	3 - 0 奈教大	奈教大	
5. 5.	〃	3 - 0 教外大	京大宇治	京大3部Aブロック1位
5. 7.	〃	1 - 2 大院大	英知大	京大2部昇格
5.13.	関西学生選手権 ①	0 - 1 甲南大	同志社田辺G	
3. 5.	第9回阪大定期戦	3 - 0 阪大	阪大吹田	

年 月 日	大会名、ゲーム名(回戦)	スコア(京大-相手)	場 所	備 考
平成 7. 7. 9.	第46回東大定期戦	京大 4 - 3 東大	東大	
7.30.	第49回同志社大定期戦	2 - 1 同志社大	京大	
9.10.	関西学生秋季リーグ(2部Aブロック)	1 - 1 大経大	大経大	
9.17.	〃	1 - 4 近畿大	〃	
9.24.	〃	2 - 1 大産大	桃山大	
10. 1.	〃	0 - 0 桃山大	桃山大	
10. 7.	〃	2 - 2	滋賀大	大市大
10.10.	〃	1 - 1 大市大	桃山大	
10.15.	〃	0 - 2 仏教大	大市大	京大2部Aブロック5位
平成 8. 3.18.	京都学生選手権1次リーグ	0 - 4 京教大	京教大	
	〃	0 - 3	立命館大	〃
	〃	京大B 0 - 3 精華大	〃	
	〃	京大 1 - 0 京外大	京産大	
	〃	0 - 4 龍谷大	龍谷大瀬田G	
4. 6.	関西学生春季リーグ(2部Bブロック)	1 - 2 関外大	大教大	
4. 7.	〃	1 - 1 大教大	〃	
4.14.	〃	3 - 4 大谷大	大谷大	
4.21.	〃	0 - 4 神大	神大	
4.27.	〃	0 - 2 和歌山大	大教大	
4.29.	〃	1 - 0 神院大	京大	
5. 3.	〃	1 - 1 追手門大	神大	京大2部Bブロック6位
6.23.	〃 2,3部入替戦①	4 - 1 四天王寺国際大	同志社田辺G	
6.30.	〃 〃 ②	3 - 1 〃	関大高槻G	京大2部残留
3. 3.	第10回阪大定期戦	0 - 2 阪大	京大	
7. 9.	第47回東大定期戦	0 - 1 東大	京大	
7.30.	第50回同志社大定期戦	0 - 5 同志社大	同志社田辺G	
8.20.	近畿地区国立大学体育大会①	1 - 3	奈良産大	大教大
9.16.	関西学生秋季リーグ(2部Cブロック)	2 - 1 京産大	京大	
9.22.	〃	1 - 0 大産大	阪南大	
9.29.	〃	0 - 1 大商大	京大	
10. 6.	〃	0 - 6 立命館大	京教大	
10.10.	〃	2 - 0 摂南大	摂南大枚方G	
10.13.	〃	0 - 0 大国大	京大	
10.20.	〃	1 - 1 京教大	摂南大枚方G	京大(2部Cブロック5位)
平成 9. 3.16.	第11回阪大定期戦	1 - 5 阪大	阪大	
4. 5.	関西学生春季リーグ(2部Aブロック)	0 - 2 大経大	流通大	
4. 6.	〃	2 - 2 京産大	京大	
4.13.	〃	0 - 2 大商大	大商	
4.19.	〃	1 - 1 関外大	京大	
4.20.	〃	2 - 0 阪大	流通大	
4.26.	〃	2 - 0 和歌山大	阪大	
4.29.	〃	2 - 3 流通大	京大	京大(2部Aブロック4位)

XI. 新聞記事、「大社サッカー」寄稿文より

(S.7.11.28.大阪毎日新聞)

京大覇権を握る

關學後半の猛襲及ばず

4-3 サッカーの快戦

關西學生蹴球リーグ戦の最終を飾る關學對京大戦は廿七日二時四十分から甲子園南運動場で舉行、結局4-3で京大勝ち關西學生蹴球リーグ戦の覇権を獲得來月十一日南甲子園で行はれる東西學生蹴球リーグ決勝戦に關西の代表として早慶の何れかのチームと全日本學生蹴球界の覇を争ふことになった、

主審 杉村、線審 結城、大谷 關學 先蹴

京大 4-1 0-2 關學

京大はゲーム開始直後幸運なる2点を先取して意氣揚り關學は出足をくじかれた形で押され氣味の試合をつゞけ後半關學の攻撃に見るべきものはあったが前半の得點がこの伯仲せる兩チームにとっては大きな差で關學は最後まで幸運に見棄てられたゲームで終始した、この日グラウンドは濕潤でコンディション悪く京大はキックアンドラッシュに敵失味方の走力を考へた戦法は妙を得たもので勝因の一つである、關學の敗因の一つは個人的な大きなミスと今一つは個人的な働きの不足にC F三崎の働きは位置的にすべての味方のハーフ線のポジションを亂してゐたのは考ふべきだ、ハーフの位置の不揃ひほど味方全體の働きに大きな弱點をもたらすものはない、前半京大に與へた四點の中丹羽のミスジャッジによるポイントとRH福井のバックチャージによるペナルチに得點された等は關學にとって拭ふべからざる痛手であった、後半關學があれだけのチャンスを持ちながら2點にとゞまり今一息の押しの足りなかつたのはシュートの不正確と如何なる時シュートすべきかといふ最も大切な頭腦的判斷力に大きな誤りがあつたからで、試合全體を通じても

と變化あるボールの動き體力の正當な利用法を兩軍ともに考へねばならぬ、かくて京大は幸運なる戦勝に恵まれたが試合中京大側にCKの際この蹴るべき人がむざ／＼大切な時間をわざと空費したことはこの大試合進行上にとって遺憾なこと今後かやうなことは全然やらないやう心掛くべきである(以下試合経過記録省略)

京大		關學	
西村	FW	島	
一藤		西邑	
松江		東浦	
中野		山藤	
山口		武井	
田邊	HB	河西	
山本		三崎	
高木		福井	
植木	FB	万代	
野澤		伊藤	
金澤	GK	丹羽	
22	GK	14	
4	CK	6	
1	PK	0	
4	FK	7	

(S.8.11.27.大阪毎日新聞)

東西學生蹴球リーグ戦争覇 京大再び制覇

關學後半の逆襲及ばず 3 - 2 雨中の大快戦

關西學生蹴球リーグ戦王座を決定する京都大學對關西學院サッカー戦は廿六日二時半から南甲子園で關學先蹴で開始された、雨中戦で競技場のコンディション悪く各選手のプレーを妨げてゐた、風上に陣した京大は盛んに海岸側の關學ゴールをおびやかして前半早くも三點を先取した後半の關學必死の追撃は徐々に功を奏したがおよばず3 - 2で京大二年連勝した(主審 杉村、線審 市橋、大谷)

京 大 3 - 0 0 - 2 關 學

[前半] 關學は負傷のいえた野澤をRIに配置して万全の策に出づれば京大のFWは中野を中心として強者で堅め兩軍堂々の配陣である、戦開始されるや關學直ちに中央を割って進み出たが京大FBの防戦に球はかへる、5分京大逆襲を利用してセント・スリのトライアングル・パスに關學ゴール前に攻め入り關學キーパ丹羽の手許に落ちた球を京大CF眞田すかさず飛び込んで先づ一點先取、關學キックオフ後いまだバックスの調子整はずマークに缺けてゐたのが思わぬ失點となり京大にとって幸先よき一點だ、その後、京大CH山本の好送球にRI中野CF眞田LI伊藤と各人がスルウ・パスに数度の好機があつたが無爲、關學は最近好調をつづけてゐたFB松井足をいためてゐるので、レフトサイドに大きな穴が出来てしばしば危機をまねいてゐた、16分京大中央陣でフリキックを得ればLH田邊ゴール前に好送球しCF眞田のプッシュで一點を加へるナンバーワン決勝の試合であつたが雨中戦で制球意の如くならずしばしば反則を重ねてゐた關學

はディフェンスからオフェンスに際してHB線とFW線との連絡悪く無爲になり勝ちであつて29分京大はLW長岡ライン際大きなクロスパスでRI中野に送れば中野軽くシュートして得點、この京大の得點は關學プレーヤが球にのみつられて京大FWを十分マークしてゐなかつたことを物語る、京大バックスは比較的弱い關學FWを完全におさへて送球に防御配陣に甘味を見せて京大FW、HBを楽に働かしてゐた

[後半] 風上を利した關學は前半の消極的な戦法を一新して前方へキックアンドランを利して深い縦のパスに京大陣に突入したが最後の決め手がなく、またシューティングの判断が悪く多くの好機を失つてゐた、5分中央陣からCF朝田の見事なスパートとドリブルで単身ゴールに迫りシューとすれば京大GK金澤ファンブル關學LW武井すかさずプッシュに一點を返すこの得點は京大CH山本の出足が遅れたことにもよるが關學朝田のスパートの巧みさとシューティングがタイムリーになされたことによつたものである、12分前半の不調を漸く取り戻し、攻勢に出た關學はCH三崎のゴール前40ヤード邊りからの見事なシュート

關學		京大	
武井	FW	長岡	
山藤		伊藤	
朝田		眞田	
西邑		中野	
野澤		高田	
川西	HB	田邊	
三崎		山本	
清水		福安	
松井	FB	持地	
伊藤		植木	
丹羽	GK	金澤	
10	GK	35	
6	FK	6	
6	CK	7	

にまたも一点を奪取す京大は後半に入ってから前半の元氣なく動き鈍くなりバックスからの送球も不正確で關學バックスに押へられてゐた後半戦はほとんど關學のワンサイドゲームの觀があり前半戦に引かへて關學FWはLW武井CF朝田RI西村と大きな巧みなオーブンパスでチャンスを作ったがRW野澤のミス多くまた京大GK金澤バックス持地植木のトリオワークは固く今一步でゴールを破るに至らなかった、戦前から豫想されてゐた如く全く文字通りの激戦であつたが京大この日の勝因は前半の滑り出し好く關學の調子が整はない間に3点をリードし焦り氣味の關學エレブンをよく押へて後半確実な防御陣を布いた事によるものである京大GK金澤は雨中戦に起り勝ちの補球に苦心をしながらも實によく働いた奮戦ぶりは鮮やかであつた、關學は後半に入つて前半京大のリードを返さんと元氣一杯戦つて相當な當りを見せてゐたが今少し早くからあの當りが出てゐたならば或は試合は今一層興味多いものとなつてゐたであらう

(S.9.11.26.大阪毎日新聞)

京大遂に優勝

後半HB線疲れて 2-1 關學追撃空し

關西學生蹴球界のナンバー・ワン争ひの京大對關學の蹴球試合は廿五日午後零時半から南甲子園運動場で舉行、京大の先蹴で試合が開始されたが幸運に恵まれた京大は少いチャンスを巧みに擲んで結局2-1で勝ち本シーズンの覇權を握り來月九日に行はれる東西學生對抗に出場することゝなつた(主審杉村、線審上吉川、前川)。

京大 1-0 1-1 關學

概評 ナンバーワン決定の試合で両軍ともぜひ勝たねばならないといふので固くなつてゐた、關學は昨年、一昨年と續けて敗れてゐるのでなほさら勝ちたい氣持が強く却つて試合振りに余裕がなく對神戸高商戦にみせたようなFWの整備さは少しもなかつた、京大の勝因はGK金澤の確實な補球でゴールを死守したこと、京大バックが攻勢に出た關學のバックスを前へへと釣り出しては後陣から大きなスピーディーな深いパスを適宜に送り込んでチャンスをつくつてゐたことによつてゐた、關學はGK西川の判断わるく、またLB川西が平常の當り全然なく左サイドに大きな隙ができて自然バックスの配陣が亂れる結果をきたしてゐた關學は試合をリードしながら勝負に負けたといふ觀があつた(以下試合経過記録省略)

京大		關學
長岡	FW	梅園
眞田		田邊
小出		野澤
山中		山藤
高田		田中
奥田	HB	笠井
福安		三崎
瀬野		前田
持地	FB	川西
栗原		宮部
金澤	GK	西川
19	GK	11
3	CK	11
9	FK	4
0	PK	0

京大蹴球部OB一行 38年ぶりに合宿

「大社サッカー」編集後記より

◆京大蹴球部OB一行が来町、昭和25年夏、昭和29年夏2回にわたり合宿をされた当時のメンバーが、昨年9月、青春の思い出多い大社の地に、実に38年ぶりに来訪された。

母校グラウンドで、県立松江商業女子サッカーチームと対戦、往年の名プレーヤーぶりを発揮されて善戦、楽しい時を過ごされた。参加された諸氏より、写真と共に玉稿を頂いた。厚くお礼申しあげます。

[寄稿文の一部を、以下に転載する]

40年前の合宿

昭和23年度主将 恒 藤 武

京大蹴球部は、昭和23年夏、阪急電鉄に勤務しておられた先輩のお世話で、西宮球場内の一室を借り、戦後初の合宿を致しました。当時は食糧事情の厳しい時代でしたから、米は松山出身の先輩を頼って愛媛県に買い出しに行き、副食は西宮北口の市場で調達する自炊生活でありました。

これに懲りたこともあり、翌24年夏は食糧問題を気にせず済む処を探すことになり、伊賀上野出身の部員の紹介で三重県名張で、次いで25年夏は河村君が記しているような経緯で出雲大社で行いました。私はこの年3月に京大を卒業して定職に就いていなかったこともあり、コーチを務めておりましたので「日の出館」での合宿に参加致しましたが、合宿終了後、丁度合宿中であった大社高校（中学？）の臨時コーチをお引き受けすることになり、そのご縁で当時キャプテンであった小川峰夫さんにご懇意になり、今日に至るまでご交誼を戴いております。

昨年9月、大社での合宿の思い出をたぐり寄せようということで、有志集まって遠征することになり、小川さんに相談致しました処、岡本君の記事の通り何から何まで至れり盡せりのお世話になり、参加者全員言葉につくせない感謝の念と、大社へ出掛けて良かったという気持ちで一杯でありました。

小川さんから「大社高校サッカー部OB会報」に、私たちの大社訪問記を寄稿するようにご依頼を受け、私が窓口として有志の感想文をとりまとめお届けすることと致しました。各人の文章の行間から、40年前の合宿の回想の中に、大社への愛着の念が滲み出ていることをお汲み取り戴ければ幸いに存じます。

思い出の「日の出館」

昭和27年卒業 河村 篤彦

私が京大の二回生になった春(昭和25年)、夏に松江で合宿しようということになって、事前に調べに行くことになりました。私は旧制の松江高等学校(現島根大学のある川津にありました)の出身で、サッカー部には、先輩に大谷さんとか、同期に山田君とか、旧制の大社中学の出身者がいました。22, 23年頃大社中学のOBのチームと試合をしたこともあります。クリアしたボールが、大社の選手にあたって自殺点となり、情けない思いをしたこともありました。23年に日本蹴球協会から、島根蹴球協会をつくるように指示が来て、大社のOBの方にも集まって頂いて島根蹴球協会を作りました。会長は、松江高校の先輩で、松江大橋のそばの日本貯蓄銀行の支店長だった日置高雄さん(後、協和銀行副頭取 健在)でした。

そんな事で、松江合宿の交渉を私がすることになったのですが、松江に行ってみると、学制改革で松江高校は無くなり、島根大学も出来たところでサッカー部もない有様。それに協会長の日置さんも転勤。困って、日置さんの後に協会長になられた大社の石見さん(お名前の記憶があぶないのですが)をお訪ねして相談しました。石見さんは、松江なんかでなく、大社で合宿をやるといい、大社中学のOBが面倒をみるからと快く引き受けて頂きました。

25年8月末、大社で合宿をしました。グラウンドは大社高校。合宿は大社中学OBの小川さんの「日の出館」でした。前の年の合宿が、伊賀名張のスポーツ会館のただっ広い大広間でろくな食べ物も、サービスもなかっただけに、「日の出館」の合宿は皆大喜びでした。炎熱の猛練習にシゴかれても、旅館に帰ると、腹一杯飯を食べることが出来(当時京都ではまだ食糧不足でした)、それにご主人の綺麗な妹さんや、かわいい女中さん達が皆の人気的でした。

昨年9月、約40年ぶりに当時のメンバーが、揃って大社に行きました。「日の出館」では合宿した当時と同じ部屋に泊まりました。そしてあの当時のことを、まざまざと思い出したことでした。あの時、大社中学のOBの方々にお世話になったように、今回も当時大社高校のサッカー部のキャプテンだった小川峰夫さんにお世話になったことを深く感謝しております。有難度うございました。

過ぎし青春を偲んで

昭和25年卒業 岡本彰郎

3年前(1986年)、年頃でいうと60歳前後になった京大蹴球部のOBが集まって、学生時代の夏の合宿地を訪れて、サッカーの試合をし、夜は夜で大いに飲んで、過ぎし青春を偲ぼうではないかという話もちあがり、早速、実行に移されることになった。

第3回目の1988年は出雲大社でと衆議一決、むかし合宿した時、試合をした大社中の当時の主将小川峰夫さん(当方の恒藤と以後ずっと交流が続いている)に相談することになった。最初はごく軽い気持ちで連絡させていただいた処、なんと結局は何から何まで、丸抱えみたいな形でお世話になった。

大社高グラウンドでの松江商業女子チームとの試合から、懐かしい合宿旅館の日の出館での宿泊の世話、果てはJRやら航空機の予約まで、更には観光からゴルフのお世話まで、地元の小川さんでなければ到底及びもつかない肌目細かいスケジュールで、出雲の初秋を楽しませていただいた。本当にお礼の言葉もないくらいだが、過去の合宿での繋がりが40年近く経っても生きつづけていようとは、これまた、まさに感激ものと言わざるをえない。小川さんとグラウンドを提供して下さった大社高の皆さんに心からお礼を申し上げて小文を終わる。

京大合宿思い出の大社を訪ねて

昭和28年卒業 片山栄三

『日の出館』が30数年間を経た今、昔の俣のたたずまいをそっくり留めていたのは驚きであった。これなら浦島太郎も玉手箱の蓋を開けずに済んだものを。あの頃泥靴を脱いで、泥靴下の俣で登った階段もその俣、二階の合宿部屋もその俣、いやあ、本当に懐かしい『日の出館』だった。

昔の思い出に耽り乍ら『日の出館』の玄関でシューズを履き、大社高校のグラウンドへ。女子チームとの親善マッチだ。どうも私は昔から女の子が苦手だ。ましてサッカーの試合となると、若しも女の子に怪我でもさせたらえらいこっちゃと思うと、恒藤先輩の様に大きなお尻で女の子をはねとばす様なことは、とても私には出来そうにない。それでもサッカーはこの年になっても本当に楽しい。心から楽しんで2-0で勝った2点を私が入れさせてもらったのも、望外の倅せだった。

(S. 37.11.12. 新聞記事)

関西学生サッカー

関学と関大がトップ

京大は同大を倒し一勝

関西学生サッカー一部リーグ第三日は、十一日午前十一時から西宮球技場で同大ー京大、関大ー京学大、関学ー大経大の試合が行われた。第一試合は、京大が後半17分貴重なゴールをあげ、1-0で同大をくだし、第二試合は、関大の先行点を追って京学大が一度は1-1と迫ったが、そのあと関大は2ゴールを奪い、結局3-1で関大が勝った。第三試合は関学が順当に7点をあげ、7-0と大経大に楽勝した。この結果、関学、関大は3戦全勝で、いぜん土つかず、以下京大1勝1敗1分、大経大1勝2敗、京学大0勝2敗1分、同大0勝3敗で、リーグ戦は後半戦へはいることになった。

$$\text{京大} \ 1 \left\{ \begin{array}{l} 0 - 0 \\ 1 - 0 \end{array} \right\} 0 \ \text{同大}$$

[評] 後半17分、京大は川野がシュートした。この一発はなかなかいいねらいのシュートで、キーパー寺田は思わずつかみそこね、こぼれたところを伊藤が右スミに決め込んだ。必死に攻めながら、点にならなかった同大だから、この一点ですっかりアタマにきたようだ。

しかし同大が点をとれなかったのはそれが理由ではない。せっかく自分のボールになっても攻め方がズサンで、どこをどうしようというのか、意図がはっきりしない。なるほど、前半あたりは大きくタテに送って、中央突破を試み、見た目には確かに優勢だったかも知れないが、それ以上のくふうがみられず、ただ荒っぽい試合運びが感じられるだけ。得点に結びつけるはっきりとした根拠を見せてほしかった。

その点、京大は非力とはいっても、攻めのねらいだけはついていたといえる。それはともかく、時間を追うにしたがって出てきた不見識なプレーは両校ともよく考えてほしいものだ。

京大		同大	▽
榊	GK	寺田	交
岩城	FB	藤井	
樋口		安達	C
時森	HB	岡平	H
水谷		岩田	小
川野		浅見	田
根本	FW	三木	G
東		古川	K
唐津		池上	難
浅野		磯部	波
伊藤		戒	(京)
1	CK	7	
13	GK	20	
16	FK	13	

(S. 38.11.18. 京都新聞記事)

京大、みごと関学倒す

関西学生サッカー

22年ぶりの快勝

関西学生サッカー・リーグ第四節は11月17日午前11時から西京極競技場で京学大一大経大、関学一京大、関大一甲南大の三試合を行なったが、第二試合で優勝候補の関学が京大に破れる波乱があった。関学は攻守に精彩がなく後半26分京大RW井坪にシュートを決められた。京大が関学に勝ったのは昭和16年（この年京大は優勝）いらい22年ぶりのこと。関大は甲南大に快勝して4戦全勝でトップに立った。

$$\text{京大 } 1 \left\{ \begin{array}{l} 0-0 \\ \\ 1-0 \end{array} \right\} 0 \text{ 関学}$$

【評】京大が全勝の関学を見事に破った。この勝ち点は、京大が昭和16年、リーグ優勝以来のもの。それにしても関学はあっさり敗れた。関学らしい攻めを見せたのは半終了間際の一、二分だけ。選手個人のプレーは京大よりも数段まさるのだが、コンビネーションをすっかり欠いた。つなぎタマがでず、また京大ボックスの早い返しに得点のきっかけすらなかった。“いつでも得点できる……”という安易の気持ちがあったのではないか。これが京大に完敗した原因であろう。

それにしても京大はすばらしい出足だった。前半ほとんど関学陣に深く入り、ゴールをおびやかした。ただ残念なのは決め手を欠くために得点はものにできなかったわけ。しかし京大はよく動いた。そして後半26分、ゲームメーカー唐津が左からセンターリング、RW井坪がきれいに決めて勝利のきっかけをつかんだ。「唐津がきり抜いたタマをFWが決めるかどうか、それしか勝つ手はない」と皆木監督はいていたが、それがみごとに的中したわけ。もっとも関学の攻めをかわしたボックスのできもよかったわけだが、なんといっても唐津一井坪のコンビをほめたい。京大の快勝といえる。

京大		関学
難波	GK	関村
大家	FB	木居
西		小原
水谷	HB	井谷
時森		塩田
川野		前田
井坪	FW	友利
小田		宇野
唐津		加茂周
今井		天池
林		加茂健
1	CK	7
4	FK	13
17	GK	8

(S. 51.5.31.新聞記事)

関西学生サッカー

京大、大体大に惜敗

関西学生サッカー選手権大会決勝トーナメント第三日は、三十日午後零時から吹田市・万国博グラウンドで準決勝2試合を行い、大対大、同大が順当勝ちした。

第1試合は大体大が京大後半の反撃を1点におさえて勝ち、第2試合は、同大が後半地力を発揮、健闘の関学を2-0で破って、それぞれ決勝にコマを進めた。

▽ 準決勝

$$\text{大体大 } 2 \left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ \\ 1-1 \end{array} \right\} 1 \text{ 京大}$$

〔評〕後半はむしろ京大の動きが大体大を上回った。1点差に詰め寄り、さらに大体大ゴールを再三脅かしたが、バーに当たって同点機を逃すなどアト一步及ばなかった。

大体大は前半26分、高間のセンタリングを大角が頭で合わせまず1点。後半15分にも梅田が右タッチラインぞいにドリブルで持ち込んだあと絶好のセンタリング、走り込んだ山本欣がヘディングで決め2点目。

しかし京大も後半17分、石原のコーナーキックをゴール前で待ち構えた塩見が空中戦でせり勝ちゲット、1点差とした。このあと32分、40分と谷野がいい形からシュートを放ったが、バーに当たるなど惜しい得点機を逃し、押し気味のままタイムアップとなった。

敗れたとはいえ、1回戦で京教大、2回戦で大経大を破って準決勝に進出、大体大を苦しめた京大の善戦は、秋のリーグで1部復活へ大きな可能性をのぞかせた。

(S 51.6.7. 新聞記事)

関西学生サッカー

決勝トーナメント 関学を破り京大3位

関西学生サッカー選手権大会決勝トーナメント最終日は六日、吹田市・万国博グラウンドで3位決定戦に続き、同大-大体大の決勝を行った。同大は前半、牛居、久保田のゴールで優位に立ち、大体大の反撃を1点に抑え初優勝を飾った。3位決定戦は、京大が関学に2-1で完勝した。

▽3位決定戦

京大 2 $\left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ \\ 1-1 \end{array} \right\}$ 1 関学

○…第一回以来、大商大が王座を独占してきたこの大会で初めてつかんだ栄冠だけに勝利の瞬間、同大の応援席から用意のテープが飛びかい選手たちも肩をたたき合って大はしゃぎ。「チームのムードがいいので、そこそこやれると思っていたが…」という古川監督も感激の面持ち。しかし胸上げは「秋のリーグが終わってから」ということで秋まで“延期”一。

一方、関学を破り始めて3位になった京大イレブンも「これで昨年の入れ替え戦での雪辱が果たせた」とうれしさいっぱい。梅田主将は「今年こそなんとか一部復帰を」と早くも秋のリーグ戦に闘志をのぞかせていた。

京大		関学	
松岡	GK	岡田	
塩見	FB	小島	
北原		室中	
梅田		湯浅	
藤多		赤沢	
宮本	HB	江見	
藤原		畑	
谷野		宇多田	
石原	FW	福田	
杉田		豊島	
田中哲		村司	
4	GK	10	
5	CK	4	
16	FK	27	
9	SH	12	

(S.58.10.18. 新大阪新聞記事)

サッカー特集 関西学生リーグ

誰もが予想しなかった

京大イレブン快進撃の秘密

大詰めを迎えた関西学生リーグ。1部は16日、第6節を追い、大商大、大体大、同大が勝ち点1の差でほぼ横一線。三強のV争いは最終節に持ち越された。一方2部は一足先に全日程を終え、京大(Aブロック)関大(Bブロック)が優勝。30日の順位決定戦で勝っ

たチームが1部へ自動昇格することになる。ブロック全勝優勝を果たした京大は戦前に7度もリーグを制した往年の名門チームだ。54年に3度目の2部落ちをして以来、5年ぶりに巡ってきた1部復活のチャンスに京大イレブン燃えている。

「どこが飛び出してくるか、わからない」。短期戦に加えて実力が伯仲している2部リーグは混戦があたり前の状態になっている。しかし、今季、Aブロックで京大が全勝街道を突っ走ると予想した関係者は少ない。

「昨年のメンバーのほうが実力的には上だった」と長井博監督自らが認めるほど。

春先からの低迷ぶりは目を覆うばかりだった。秋季リーグ4位はまずまずとしても、京都学生リーグ(8チーム)では最下位に終わり、2部転落寸前にまで追い込まれてしまった。加えて同じブロックには1部復活をめざして強化に懸命の関学大、大経大がいた。

4年生がわずか3人で、3年生が主体。「今年はこのんものか」と同監督が考えたのも無理からぬところ。が、初戦の甲南大戦に勝って以来、あれよあれよという間に京大イレブンは勝利の波に乗ってしまった。

“波乗り”のキッカケは意外なところにあった。

月末の総理大臣杯決勝、筑波大―順天大を全員で観戦した。大方の予想は日本代表風間を中心にした筑波大の圧勝だった。が、結果は順天大が1―0で初勝利。

「相手より多く動き、走り回った順天が実力では圧倒されていた筑波を制した。うちも順天のようなサッカーを展開すれば勝てる、と選手たちは確信をもったようです」と長井監督。

数少ない4年生が前線(CF・大塚)、中盤(MF・小村主将)、バック(DF・松本)と軸になって3年生を盛り上げた。思い切って起用した1年生GK・中村の堅実な守りも見逃せないが「守り切って、少ないチャンスをもものにする」サッカーに徹したところに全勝街道の秘密があった。

30日の関大戦に勝てば1部への自動昇格が決まる京大。「胸を借りる謙虚な気持ちでのぞみたい」と長井監督は控えめだが、今年19年目で、来春に定年退官を迎える竹山幹夫部長の“歓送プレゼント”にぜひとも勝ち抜きたいところだ。

第	京	京大	阪南
七	大節	中村	GK 石川▽
2	得点	根岸	DF 大島交
1	大益	松本	田中代
0	塚小	洲崎	松山
2	瀬川	大益	岡本(働)
阪(働)	南室	小村	MF 安田奥
大	大塚	松村	野上
	木下	田	瀬川安
		大塚	山下田
		木下	鈴木
			曾根

(S.59.4.9. 新聞記事)

60周年記念試合

[朝日新聞、青鉛筆]

▽京大サッカー部の創部60周年を祝う記念行事が8日、京都市左京区の京大農学部グラウンドであり、最大のイベントとして50歳以上のOBが私立西山高校(京都府向日市)女子サッカー部と対戦した。

▽10年前の50周年では神戸女学院中等部と戦い、3―0で勝った実績のOBチーム。全日本女子選手権2年連続ベスト8の西山との対戦とあって、入念な練習を重ねて試合に臨み、大声をあげてプレーするなど大ハッスル。

▽自由に交代できるというルールに助けられ20人を繰り出しながら、1-2で敗戦。ゲーム後、最年長選手の今井董さん(68)は「70周年でもやる」と強弁。西山の速い動きについていけなかったのは、脚だけのよう。

[読売新聞、いずみ]

▽京大サッカー部の創部60周年を記念した試合が8日、京都市左京区の京大農学部グラウンドで行われ、平均58才の「超OB」と女子サッカーの「西山高クラブ」が対戦するなどして還暦を祝った。

▽同部は現在、関西学生リーグの2部だが、戦前の大学選手権ではよく優勝戦線に加わる強豪だった。OBは300人を超え、この日は各地から大勢の先輩が駆けつけた。

▽女子チームと対戦したかつての名選手も若さに押されて1-2で惜敗し、「年には勝てん」と苦笑していた。



60周年記念試合 西山高校チームと
京大超OBチーム



京大蹴球部60周年記念
昭和59年4月8日
(農学部グラウンド)

(H.1.11.26.毎日新聞記事)

京大、11年ぶりの一部昇格

関西学生サッカーリーグ1, 2部入れ替え戦最終日は11月25日、大津市のヤンマー瀬田グラウンドで京大(2部3位)-天理大(1部6位)、京産大(1部7位)-桃山大(2部2位)の各二回戦を行った。一回戦で天理大と0-0で引き分けた京大は前半39分、PKで先制。後半16分には混戦からの中小路のパスを受けた村橋がシュートを決めて2点目。同23分にも柘植のシュートで1点を追加。天理大懸命の反撃を河野のシュートによる1点だけに抑えて3-1で勝ち、昭和53年以来、11年ぶりの一部昇格を決めた。一回戦で桃山大を3-2で降している京産大はこの日0-0の引き分け、一部残留を決めた。

▽京大1勝1分け

京大	3	{	$\begin{matrix} 1-0 \\ \\ 2-1 \end{matrix}$	}	1	天理大
(2部3位)						(1部6位)

(平成2年秋季リーグ、朝日新聞記事)

京大が12年ぶり白星

初V目指す京産大負かす

サッカーの関西学生リーグは10月13日、大阪・高槻総合SCで2試合があり、初Vに向かって好位置につけていた京産大が勝ち点のなかった京大に敗れる波乱があった。

12年ぶり一部復帰の京大は、先手を取られながらも二度追いつき、後半34分、ライナー性の左セントリングを岩田（1年、戸山高）がダイビングヘッドで決勝のゴール。その後の京産大の猛追を振り切った。これで、現時点で自力優勝の可能性を持つチームは、1敗の大商大一校となった。

$$\text{京大} 3 \left\{ \begin{array}{l} 0 - 1 \\ \\ 3 - 1 \end{array} \right\} 2 \text{京産大}$$

[得点者] (京) 岩田2、石田
(産) 土岐、亀井



平成2年10月13日、1部リーグで京産大を3-2で破って。(高槻総合スポーツセンター)

悲願達成にお祭り騒ぎ

終了間際、京産大の猛攻が続いた。左手の時計とグラウンドを交互に見る京大・長井監督。終了の笛がなり、京大の勝利が決まると、京大の選手たちは大喜び。互いに肩を抱き合い、なかには悲願の1勝に泣いている選手もいた。ベンチではガッツポーズをする控えの選手たち。まさにお祭り騒ぎだった。対照的に優勝争いのトップを走っていた京産大の選手は、がっくり肩を落としていた。

この日、京大は負けると最下位が決定だった。だが、京大の長井監督が「初優勝がかかった京産大のほうがプレッシャーがあったのでしょうか」と見ていたように、京産大は攻守ともミスが目立った。後半はむしろ、ボールに対する詰め、守備での激しいチェックなど、京大の方が動きがよかった。

一部での12年ぶりの勝利に長井監督は「最後まで守りに入らず、点を取りに行っただのがよかった。つきもあったが、とにかく勝ったことはうれしい」。次は二部への自動転落(最下位)か入れ替え戦出場(6, 7位)か、をかけて京教大と対戦する。

(平成2年秋季リーグ、朝日新聞記事)

わずか1年京大転落

二部への転落回避をかけた一戦は、八校中二校の国立大同士の争いに。勝たなければならぬ京大と、引き分けでもいい京教大のしのぎ合いは結局、京教大の守りを京大が崩せないまま終わった。12年ぶりの復帰が一年限りで途切れ、「後輩にも一部でやってほしかったのに…。責任を果たせずに残念」と京大の前田主将(4年)。「一部はディフェンスにしても、前線からプレッシャーをかけて、早め早めにつぶさないと守り切れない。こうした厳しさを忘れずに、後輩たちには、ぜひまた返り咲きをはかってほしい」

$$\text{京教大 } 0 \left\{ \begin{array}{l} 0-0 \\ \\ 0-0 \end{array} \right\} 0 \text{ 京大}$$

XII. 京都大学蹴球部OBクラブ規約と OBクラブ会費および後援基金規定

制定 昭和34年4月1日

改定 平成6年4月1日

改定 平成8年4月1日

京都大学蹴球部OBクラブ規約

第一章 総則

第1条 (名称・本部)

本クラブは京都大学蹴球部OBクラブと称し、本部を京都大学蹴球部に置く。

第2条 (目的)

本クラブは、OB相互の親睦・連絡・協調を図り、京都大学蹴球部の部活動を後援し、もってOBを含む全京都大学蹴球部の発展を期することを目的とする。

第3条 (事業)

本クラブは、第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 京都大学蹴球部に対する後援費の拠出。
2. 京都大学蹴球部が行う各定期戦に対する支援。
3. 総会で承認された本クラブ会員による社会人チームの活動後援。
4. 本クラブ会員の結婚および死亡に対する慶弔。(詳細は別に定める。)
5. その他、本クラブの目的を達成するために必要な事業。

第4条 (事業・会計年度)

本クラブの事業および会計年度は、3月1日より翌年2月末日までとする。

第二章 組織・役員

第5条 (OBクラブ会員)

本クラブの会員は、京都大学蹴球部OBおよび本クラブ会員の推薦により総会で承認を得た者とする。

京都大学蹴球部OBとは、京都大学の学生である蹴球部員で学部を卒業した者または5回生以上の学生をいい、当該者は原則として自動的にOBクラブ会員になるものとする。

第6条 (支部および地区会)

本クラブの活動を円滑に行うため、総会の決議により必要に応じて地区別に支部または地区会を置くことができる。

第7条 (本部役員)

本クラブには次の役員を置く。

1. 会 長 1名
2. 副会長 1名
3. 代表幹事 1名
4. 幹 事 原則として各年度1名
5. 会計幹事 1名
6. 監 事 2名

7. 評議員 若干名

第8条 (会長)

総会で推薦し、本クラブを代表する。

第9条 (副会長)

副会長は総会で推薦し、会長を補佐すると共に、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

第10条 (代表幹事)

代表幹事は幹事会の推挙により会長が委嘱し、本クラブの会務を総括する。

第11条 (幹事)

幹事は会長が委嘱し、本クラブの実務を必要に応じて分担する。

第12条 (会計幹事)

会計幹事は会長が委嘱し、本クラブの会計を総括する。

第13条 (監事)

監事は会長が委嘱し、本クラブの会計を監査する。

第14条 (評議員)

評議員は会長が委嘱し、本クラブに重要な事項が生じた場合、会長の諮問に応ずる。

第15条 (任期)

本部役員の任期は2年とし、重任を妨げない。

第三章 総会・会議

第16条 (総会)

総会は、毎年1回、原則として、4月上旬に、会長が招集して開催する。

第17条 (総会審議事項)

総会は次の事項を審議し、決議する。

1. 新年度の事業計画および予算。
2. 前年度の事業報告および決算。
3. 規約改定。
4. その他、必要な事項。

第18条 (幹事会)

幹事会は代表幹事が招集して開催し、総会付議事項を審議する。

また、本クラブの事業運営に関して必要ある場合、幹事会は代表幹事が招集して随時開催することができる。

第四章 会計

第19条 (収入)

本クラブの経費は、OBクラブ会費、寄付金およびその他の収入をもって、これに充てる。

OB会費は「京都大学蹴球部OBクラブ会費および後援基金規定」の定めるところによる。

第20条 (会計報告)

本クラブの決算および予算は、幹事会で審議し、総会において承認を受けなければならない。決算については幹事会に先立ち監事の監査を受けなければならない。

第五章 付則

第21条（施行期日）

本規約は平成8年4月1日より施行する。

制定 昭和34年4月1日

改定 平成6年4月1日

改定 平成8年4月1日

京都大学蹴球部OBクラブ会費 および 後援基金規定

第1条（OBクラブ会費）

京都大学蹴球部OBクラブ会員（以下会員という）は、京都大学蹴球部OBクラブ規約第3条に定める事業を推進するため、年間1口1万円以上のOB会費を納入しなければならない。OB会費は分割納入することができる。

第2条（OBクラブ会費の免除）

次の者については、OB会費を免除することができる。

1. 高齢者。ただし、免除対象年次は毎年総会において決定する。
2. 学籍をもつOBクラブ会員（大学院生を含む。）
3. 会員の推薦により総会で承認を得たOBクラブ会員。

第3条（後援基金とOBクラブ会費）

第4条に定める後援基金（以下 基金という）を拠出した者は、第5条に定めるところより、翌年以降OBクラブ会費（以下会費という）の納入を免除する。但し、基金の拠出時期が4月以降8月までの場合は、その年度の会費も免除する。

第4条（基金とその目的）

会員は基金を拠出することができる。基金は永久基金とし、1口1万円とする。基金の運用により得られた果実は、京都大学蹴球部の後援費に充てる。

第5条（基金による会費の免除）

基金を拠出した会員に、基金1口について会費年額1000円を免除する。但し、免除額は、基金5口分5000円を限度とする。

第6条（基金の管理と運用）

本基金の管理のため京都大学蹴球部後援基金管理委員会（以下 管理委員会という）を置き、別に定めるところにより、安全にして有利な運用を図る。管理委員会について別に定める。

また、本基金を担保に融資を受けることはできない。但し、万一その必要が生じた場合は、OBクラブ総会の決議を経なければならない。

第7条（基金の受け入れと例外規程）

本基金の受け入れ時に管理委員会は「永久基金受領証」を発行する。

基金は第4条により永久基金であるが、止むを得ない事情により本人または遺族

に対し基金の返還が必要であると認められる場合は、管理委員会の決定により、その拠出金を本人または遺族に返還することができる。

第8条（旧規定による基金の取り扱い）

旧規定により基金を拠出した会員について、本人または遺族が返還を求めない意思表示をした場合は、これを永久基金に切り替えることができる。

この場合には、改めて前条に定める「永久基金受領証」を発行する。

第9条（会計年度）

本基金の会計年度は3月1日より翌年2月末日までとする。

第10条（会計報告）

管理委員会は、毎年度末、幹事会に会計報告するとともに、総会において承認を得なければならない。

第11条（規定の改定）

本規定はOBクラブ総会の決議により改定することができる。

第12条（施行期日）

本規定は平成8年4月1日より実施する。

XIII. 70周年記念行事あれこれ

祝賀会と紅白試合のことなど

恒 藤 武

1. 平成6年度総会から創部70周年記念行事へ

京大サッカー部OB総会は、毎年4月の第1日曜日に農学部グラウンド内の「スポーツ会館」で行うのが長年の習わしとなっていた。場所柄参加者は関係者数人で、会員の総意を反映したものとは言い難い総会であったが、創部70周年記念の事業を実施する平成6年度の総会は、OB会事務局の仕事で唐原先輩から引き継ぐことになった長井 博君(昭32年卒)の配慮で、参加者を動員しやすい大阪に会場を移して開催することになり、塩路正信君(昭36年卒)のお世話で住友ビル会議室を使わせて貰った。

この総会には山口興一OBクラブ会長を始め30名のOB会員が出席、通常の付議事項の他、組織の再編成と役員を選任、70周年記念事業の実施事項がいずれも原案どおり承認され、ここに実質的に70周年記念行事がスタートした。この総会での組織変更により、戦前・戦後の継ぎ役の意味もあって私が副会長をとのご指名を受け山口会長を補佐させていただくことになった。また、長井 博君が代表幹事として新たに設けられた年次別幹事のまとめ役となり、OB会事務局の運営を担当することが決まった。

70周年記念行事の幕開けは親睦ゴルフ会であった。平成6年7月9日(土)、原田圭吾君(昭40年卒)のお世話で向井清之先輩(昭21年卒)はじめ13名が参加し、京都ゴルフクラブ東コース(上賀茂)で行われた。ダブルペリア方式で塩路正信君が優勝し、私は練習不足もあってショットがままならず、大叩きして最下位であった。この会のトピックスは何とんでも児玉利恒君(昭38年卒)がホールインワンしたこと、その児玉君がB. B. であったことであろう。

その晩「京大会館」で祝賀会が行われ、京都サッカー協会、関西学生サッカー連盟、定期戦関係大学の監督など来賓を含め160名参加のもとに盛大な催しとなったことは何よりであり、懐かしいOB会員の皆さんと共に、グラウンドでお世話になっている宇治の小野さんや、一時期部員が大変お世話になり今もつながりのある「紳婦留の奥田のおっちゃん」な



70周年記念試合(東西対抗形式)の総合優勝チームに贈られた優勝カップ。翌年からは、東大戦前日の京大OBオールスター東西対抗の優勝カップに転用された。

京大蹴球部70周年記念超OBの試合を終えて。
平成6年7月10日(農学部グラウンド)



京大蹴球部70周年記念祝賀会で歴代部長を代表して田中第8代部長があいさつ。(京大会館)
 右へ根本(第7代)、武居(第6代)、竹山(第5代)の各部長



どが姿を見せて下さったことはまことに嬉しいことであった。

2. ユニホームの魔力

翌10日(日)は想い出深い農学部グラウンドでの紅白試合である。この年の夏は記録的な猛暑が続き、全国各地で水不足問題が起こり話題となったが、この日も暑い陽射しの日であった。

試合は東西対抗の形式をとり、現役を含む180名の参加者を、年代別に壮年、中年、若手の三区分にわけ、東軍が白、西軍が濃紺のユニホームを着て対戦した。私が西軍で出場した壮年組では、試合前に整列した両軍の顔ぶれをみると、どうみても東軍の方が平均年齢が若く見え、西軍劣勢の感があったが、いざ試合となると両軍互角の展開となり、西軍が長井博君の左コーナー付近からのミラクルシュートと、根本紀夫君(昭38年卒、前部長)の相手ファールを誘う巧技から得たペナルティーを林和俊君(昭42年卒)が決めて2点を挙げ、そのまま東軍を完封して2-0で西軍が快勝した。

続いて行われた中年組、若手組のいずれも戦力互角の中で、西軍がチャンスをものにして優勢に立ち、西軍が勝利を取める結果となったが、メンバー編成を担当した田中徹也君(昭52年卒)が試合を見ながら「やはりユニホームの魔力かな」とつぶやいていたのが印象的であった。京大サッカー部の伝統的なカラーである濃紺のユニホームには、何か神秘的な魔力が潜んでいるのであろう。「ユニホームの魔力」が現役のリーグ戦でもその威力を発揮することを願わずにはいられない。

3. 仏滅が大吉に

記念行事の中で、農学部グラウンドの改修工事の関係で延びていた記念植樹セレモニーが、5月6日(土)12時30分から行われることになった。この日取りを決めるに当たって、長井代表幹事から、当日は仏滅だが現役の試合のスケジュールの都合上この日にせざるを得ない、との連絡があった。日柄をかつぐのは旧式の人間ということになるが、昔から良くないとされていることは避けた方が良いということもあり、やむを得ないとは思うものの心にかかるものがあった。

しかし当日は、前夜の雨も上がって好天気、これは仏滅どころかついているなと上機嫌で12時15分頃グラウンドに着く計算で京阪香里園駅11時10分発の急行に乗り込んだ。幸い席が空いていたので座ってスポーツ新聞を読みはじめた。ところが電車が動き出さない。しばらくして車内放送があり、香里園の次の駅の光善寺と枚方公園駅の間の踏切で事故が

あり、待機するとのことであった。新聞の夕刊記事によると、枚方公園横の踏切を大型トラックが渡るときに何かが遮断機に引っ掛かり、そのあおりで架線を切断したらしい。

1時間半後に開通したのだが、植樹セレモニーに間に合わず、正しくこれは仏滅だと心でつぶやいた。グラウンドに着くと紅白戦の最中で、山口会長もユニホーム姿になって観戦しておられた。事情を説明してお詫び申し上げた後、長井代表幹事に会って話を聞いた中で、現役が春季リーグ第8節まで全勝で最終戦を待たずに事実上二部復帰が決まったとの報告があり、先刻までの仏滅気分は消し飛んで、今日はまさに大吉であると思い直した。次は一部復帰が実現する大大吉の悦びにひたりたいものである。

記念植樹

70周年記念行事の一つとして、農学部グラウンド構内西北部に、記念植樹を行った。記念植樹は、平成7年5月6日(土)の昼過ぎ、山口興一蹴球部OBクラブ会長、竹山幹夫第5代蹴球部長をはじめ多数のOBおよび現役参加のもとに行われた。

70周年の記念樹は、常緑の「クスノキ」(植栽時の樹高：4m)である。

また、この機会に、惜しくも枯死した50周年記念樹の植え替えを計画し、元の場所に「アメリカハナミズキ(赤花)」(植栽時の樹高：3m)を植樹した。

記念植樹については、70周年記念事業検討委員会委員の一人である塩路正信氏(S.36.卒業)にすっかりお世話になった。当時、塩路氏は住友商事株式会社建設不動産本部の要職におられたので、氏のお世話により、住友林業株式会社様の専門的なアドバイスを受けると共に、現地調査から樹木の選定、さらに植栽に至るまでのすべてを住友林業株式会社様をお願いしたのである。さらに、当時は記念事業に関してはOB諸氏からの協賛総額の目途も全く立っていなかった時のことでもあり、記念植樹の総費用についても塩路氏と住友林業様の特別のご高配をいただいて、無事記念植樹を行うことが出来たのである。ここに記録にとどめるとともに、塩路氏と住友林業様にこの紙面を借りて、改めて厚く御礼申し上げる次第である。

平成7年の夏は酷暑で雨が少なく、東大定期戦後のオフの時期や農学部グラウンドを離れての夏合宿の時期などは現役による水やりも出来ないため、樹の根付きが心配されたが、以来2年猛暑厳寒の季節を乗り越えてきたので、これから順調に成育してくれるであろう。京大蹴球部のこれからのさらなる歩みとともに、大きく成育してくれることを期待するものである。

(注) それから、もう一つ書き留めたいことがある。それは、70周年記念碑のことである。

少しでも安く、ということで植樹の時点では、石碑にせずに木碑にしたが、これはいずれ折を見て石碑に代える必要があるだろう。しかし、これから先かなりの期間いまの木碑のまま差し支えがなさそうである。しかも、70周年の木碑の白ペンキの上に「蹴球部70周年記念」と墨痕鮮やかに書かれた達筆は、お世話になった塩路正信氏の令夫人の揮毫によるものなのだが、これもそのご好意に甘えてしまったことを思い出し、重ねて深謝申し上げる次第である。

(編)



京大蹴球部OB総会
平成7年4月10日（読売テレビホール）



70周年記念植樹 山口興一OBクラブ
会長によるクスノキ植樹。
平成7年5月6日（農学部グラウンド）



竹山幹夫先生（第5代部長）による50周年記念樹の植え
替え、アメリカハナミズキ植樹。
平成7年5月6日（農学部グラウンド）



塩路正信氏による記念樹への水遣り。
平成7年5月6日（農学部グラウンド）

編集後記

1. 70周年記念事業の話が出た最初は、根本部長が実質的に顔を出せるようになった平成4年度OB総会后、百万遍での飲み会の席においてであり、そのときのメンバーは根本紀夫部長 (S. 38)、長井 博 (S. 32)、川野真治 (S. 39)、留岡 寛 (S. 39)、小田晋作 (S. 40) の5人であった、と記憶してる。

50周年記念事業 (1974年、昭和49年) から起算すれば70周年は平成6年 (1994年) であり、70周年記念事業をやるとすれば早速その方向で準備を開始する必要があることをお互いに確認し、その事業を一つの契機として、現役に京大蹴球部の歴史とその伝統を知らしめると共に部の強化に繋ごうと、酒の勢いもあって話は一気に具体化した。そして、50周年記念時の事業内容と同様、試合、植樹、祝賀会に加えて年史を発行するという事で意見は纏まった。

これが元となって、平成5年度のOB総会に70周年記念事業案を提出することになった。

1. 年史に関しては、平成6年の秋に寄稿のお願いをした後、当初の原稿締め切りが来る前の平成7年1月17日に阪神淡路大震災が発生し、全ての活動は1年有余にわたって中断した。

祝辞等をお願いした諸先生方の原稿はいち早く届けられたが、大震災の影響を受けたとはいえ発行の時期が大幅に遅れることとなり、諸先生方には誠に申し訳なく、早々のご寄稿に対し、この紙面を借りて深謝申し上げる次第である。

また、平成8年の春、OB等からの寄稿を求め活動を再開したが、以来1年半を要した。50年史を手掛けられた唐原友三郎先輩から、OB原稿確保のご苦労談は聞いていたが、今回も同様の苦労があり、これが発行遅れに繋がったことも事実である。

1. 70年史を手掛けて思ったことは、よくぞ50年史を残していただいたということである。50年史には、唐原先輩の大変なご苦労のお陰で、創部以来の歴史、特に部創立前後の事情、第二次世界大戦時の部員・クラブおよび学生サッカー界の様子、戦後の学制改革による影響等の記録と、主要な試合の戦績記録が残り、その後は毎年「年報」という形でその年度の記録が残るようにルールを敷いていただいた。もし、50年史とその後の年報がなかったとすれば、今回のこの時期における70年史の発行はあり得なかったといえよう。

1. 70年史の発行にかかる費用をどうするかと思い巡らしていたとき、唐原先輩の「京大蹴球部は伝統的に企業のカネを当てにせずにやってきた。50年史も広告は一切取っていない」の一言で、70年史についても態度は決まった。

すなわち、出来るだけカネを掛けないで発行するために、印刷の版下まではワープロを用いて編集委員の手作りとする、と決めた。編集段階になって、編集機能を考慮しパソコンに変換して版下を作った。従って、楽譜等ごく一部の版下作成と印刷製本について業者発注とした外は、編集委員の手になる70年史である。

1. 70年史は、50年史との関係を考慮して、創部から終戦の年までを通史としてまとめ、記事としては戦前戦後から昭和20年代については大きな流れを抑え、昭和29年度以降は各年度ごとに記録することにした。したがって歴史・年度の記録と一般のOBの手記とが

年度ごとに連続して編集されていることを意に留めて御覧いただければ幸いです。

1. 当初予定した記事件数に達しなかったが、しかし、全体で200を超える記事を収録することが出来た。ただし、提供写真数が少なく全年度にわたって掲載することは出来なかった。
1. 編集企画でアンケートを実施することとし各年度の代表をお願いした。回答者には多項目にわたりご苦勞をお掛けしたが、その全てについてまとめることが出来なかった。「アンケートのまとめ」については本文をご覧いただき、諒とされたい。
1. 70年史編集委員会は、当初、総括責任者長井 博 (S. 32)、リーダー留岡 寛 (S. 39) 小田晋作 (S. 40)、サブリーダー林 和俊 (S. 42)、稲垣 始 (S. 46)、土岐忠文 (S. 62) でスタートしたが、その作業が具体化する過程で逐次メンバーを増やし、また必要に応じて委員以外の協力要請も行った。特に最終的な編集打ち合わせからパソコンへの変換、校正作業および実編集作業で多大の負担を強いることになった児玉利恒(S. 38)、岩城 元 (S. 38) および真田早敏 (S. 41)、北原有機夫 (S. 53)の各氏に心から感謝申し上げる。

上記の他の編集委員会委員および委員会への出席者ならびに委員に準ずる協力者は次のとおりである。伊藤康夫(S. 41)、梅田幹雄 (S. 43)、横内 茂 (S. 46)、丹羽 彰 (S. 47) 久松啓次 (S.49)、荒木 茂 (S. 50)、永井利明 (S. 51)、田路厚洋 (S. 51)、田中徹也 (S. 52) 中村英一 (S. 53)、田尻 守 (S. 54)、香川尚史 (S. 57)、前田 洋 (H. 1)。

中でも、会合の都度、会場手配から実作業の数々を分担してくれた香川、前田両君に謝意を表す。

1. この年史は当初「京都大学蹴球部70年史」と題して発行する予定であったが、その内容と構成をみると、部の歴史というよりもむしろOBの熱き思いの文集という方が似つかわしいという岩城 元氏の指摘を受け、タイトルは「満天の星ゆらぐ 京都大学蹴球部我が集い」のロゴを入れて「創部70周年記念誌」とした。
1. 平成4年の春の飲み会の席で、酒の勢いも得て将来の夢を語りあったところからスタートを切ったこの記念誌が、実に5年半の歳月を経て日の目を見ることになった。感慨も一入であるが、その間、山口興一OBクラブ会長、恒藤 武同副会長をはじめ諸先輩方からご激励を受け、また大学及びサッカー協会等関係ある方々や図書印刷さんのご協力をいただいた。そして何といても多数のOBのご協力をいただいて完成したことを思い、ここに編集委員会を代表して心からなる感謝の意を表し、編集後記の結びといたします。

(長井 博)

「創部70周年記念誌」の発行が大幅に遅れたため、早い段階で原稿を寄せていただいた方の中には、肩書が変わった方がかなりおられると思うが、肩書は原則、寄稿時のままとさせていただいた。用字用語については、寄稿者の表記を尊重する一方で、送り仮名は新聞での表記に準じるとともに、多くの原稿に頻繁に登場する言葉は、例えば「グラウンド」「入替戦」というように統一させていただいた。以上2点について、ご了解いただければ幸いです。また、表紙等の題字は留岡 寛氏によるものである。

(編)

京都大学蹴球部 創部70周年記念誌 (非売品)

1998年 (平成10年) 1月31日発行

発行者 京都大学蹴球部OBクラブ会長 山口興一

〒606-8317 京都市左京区吉田本町

京都大学体育会蹴球部気付

印刷・製本 図書印刷株式会社
